

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—33—

朝倉郡朝倉町所在上の原遺跡の調査 III

下巻

1995

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—33—

朝倉郡朝倉町所在上の原遺跡の調査 III

下巻

本文目次

[下巻]

V 古墳時代の遺構と遺物	179
1. 遺構の概要	179
2. 穴住居跡	179
3. 捩立柱建物跡	227
4. 土 壇	233
5. 溝	236
6. その他の出土遺物	237
VI 奈良時代の遺構と遺物	239
1. 遺構の概要	239
2. 穴住居跡	239
3. 捩立柱建物跡	311
4. 土 壇	322
5. その他の出土遺物	333
VII まとめ	341
—上の原遺跡の集落変遷について—	

図版目次

本文対象頁

図版 62	西側住居跡群（南上空から）	
図版 63 (1)	103号住居跡（南から）	181
(2)	105号住居跡（南東から）	184
図版 64 (1)	106号住居跡（南から）	186
(2)	106号住居跡カマド（南から）	182

図 版 65 (1)	107号住居跡（南から）	188
(2)	107号住居跡カマド（南から）	189
図 版 66 (1)	108号住居跡（南から）	196
(2)	109号住居跡（東から）	197
図 版 67 (1)	110号住居跡（南西から）	199
(2)	111号住居跡（南から）	199
図 版 68 (1)	112号住居跡（南から）	201
(2)	113号住居跡（南から）	204
図 版 69 (1)	114号住居跡（南西から）	206
(2)	115号住居跡（南から）	207
図 版 70 (1)	120号住居跡（南から）	212
(2)	122号住居跡（東から）	217
図 版 71 (1)	126~127号住居跡（南東から）	220
(2)	141号住居跡（西から）	239
図 版 72 (1)	142号住居跡（南から）	241
(2)	143号住居跡（南から）	241
図 版 73 (1)	144~145号住居跡（南から）	244
(2)	146~150号住居跡（東から）	247
図 版 74 (1)	146号住居跡カマド（東から）	246
(2)	148号住居跡カマド（東から）	246
図 版 75 (1)	151~153号住居跡（南から）	249
(2)	154号住居跡（南東から）	251
図 版 76 (1)	155号住居跡（東から）	252
(2)	158号住居跡（南から）	254
図 版 77 (1)	161~166号住居跡（南西から）	257,259
(2)	175~178号住居跡（南西から）	267,269
図 版 78 (1)	175~176号住居跡（南から）	267
(2)	177号住居跡（南から）	269
図 版 79 (1)	180号住居跡, 17号建物跡（南から）	273
(2)	181~183号住居跡, 135~137号土壙（南東から）	274
図 版 80 (1)	186~187号住居跡（東から）	279
(2)	193号住居跡（東から）	282
図 版 81 (1)	194号住居跡（東から）	282
(2)	194号住居跡カマド（南から）	283

図 版 82 (1)	195~202号住居跡（東から）	286,288
(2)	195~202号住居跡下層（北東から）	286,288
図 版 83 (1)	196号住居跡（南から）	286
(2)	199号住居跡カマド（西から）	289
図 版 84 (1)	203号住居跡（西から）	293
(2)	203号住居跡カマド（西から）	294
図 版 85 (1)	204号住居跡（北から）	293
(2)	204号住居跡カマド（東から）	295
図 版 86 (1)	207号住居跡（南から）	298
(2)	207号住居跡カマド（南から）	297
図 版 87 (1)	209号住居跡, 37号建物跡（南から）	300,316
(2)	209号住居跡カマド（南から）	299
図 版 88 (1)	210号住居跡, 35・36号建物跡（南から）	301,314
(2)	210号住居跡カマド（南から）	301
図 版 89 (1)	212~216号住居跡（南から）	303~309
(2)	同貼床下層（南から）	212
図 版 90 (1)	212号住居跡カマド（南から）	304
(2)	214号住居跡カマド（南から）	308
図 版 91 (1)	30~32号建物跡（西から）	312,313
(2)	33号建物跡（北から）	313
図 版 92 (1)	11~13・34・37号建物跡（東から）	228,314
(2)	11~13号建物跡（北から）	228
図 版 93 (1)	131~134号土壙（南西から）	323
(2)	104号土壙（南から）	323
(3)	138~143号土壙（北から）	323
図 版 94	105~107号住居跡出土土器	185~190
図 版 95	107号住居跡出土土器①	190~195
図 版 96	107号住居跡出土土器②	190~195
図 版 97	108~110・112・113号住居跡出土土器	198~205
図 版 98	112~114・116・118・121・122・136号住居跡出土土器	202~223
図 版 99	141・144~146・148・153・155~157号住居跡出土土器	240~252
図 版 100	158・160・166・167・170・175・176号住居跡出土土器	255~268
図 版 101	177・180・194・195・198・199号住居跡出土土器	269~290
図 版 102	201・202・204・205・207・210・212・215号住居跡出土土器	292~310

図 版 103	104・105・107・138号土壙出土土器	235～236
図 版 104	139・142号土壙出土土器	327～330
図 版 105	焼塙土器①(1.内面, 2.外側)	334
図 版 106	焼塙土器②(1.内面, 2.外側)	334
図 版 107	焼塙土器③(1.内面, 2.外側)	334
図 版 108	焼塙土器④(1.内面, 2.外側)	335
図 版 109	1.砾石, 2.砾石, 3.その他の土器	336
図 版 110	1～3 住居跡出土鉄器	337
図 版 111	1・2 住居跡出土土器	338

挿 図 目 次

第 131 図	101号住居跡実測図 (1/60)	179
第 132 図	102号住居跡実測図 (1/60)	180
第 133 図	103号住居跡実測図 (1/60)	181
第 134 図	104号住居跡カマド実測図 (1/30)	182
第 135 図	101・103・104号住居跡出土土器実測図 (1/3)	183
第 136 図	105号住居跡実測図 (1/60)	184
第 137 図	105号住居跡出土土器実測図 (1/3)	185
第 138 図	106号住居跡実測図 (1/60)	186
第 139 図	106号住居跡出土土器実測図 (1/3)	187
第 140 図	107号住居跡実測図 (1/60)	188
第 141 図	107号住居跡カマド実測図 (1/30)	189
第 142 図	107号住居跡出土土器実測図① (1/3)	190
第 143 図	107号住居跡出土土器実測図② (1/3)	191
第 144 図	107号住居跡出土土器実測図③ (1/3)	192
第 145 図	107号住居跡出土土器実測図④ (1/3)	193
第 146 図	107号住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)	194
第 147 図	107号住居跡出土土器実測図⑥ (1/3)	195
第 148 図	108号住居跡実測図 (1/60)	196
第 149 図	109号住居跡実測図 (1/60)	197
第 150 図	108・109号住居跡出土土器実測図 (1/3)	198

第 151 図	110・111号住居跡実測図（1/60）	199
第 152 図	112号住居跡実測図（1/60）	201
第 153 図	110～112号住居跡出土土器実測図（1/3）	202
第 154 図	113号住居跡実測図（1/60）	204
第 155 図	113号住居跡出土土器実測図（1/3）	205
第 156 図	114号住居跡実測図（1/60）	206
第 157 図	115号住居跡実測図（1/60）	207
第 158 図	116号住居跡実測図（1/60）	208
第 159 図	114～116号住居跡出土土器実測図（1/3）	209
第 160 図	118・119・132号住居跡実測図（1/60）	210
第 161 図	120号住居跡実測図（1/60）	212
第 162 図	117～120号住居跡出土土器実測図（1/3）	213
第 163 図	121号住居跡実測図（1/60）	214
第 164 図	121号住居跡カマド実測図（1/30）	215
第 165 図	121号住居跡出土土器実測図（1/3）	216
第 166 図	122号住居跡実測図（1/60）	217
第 167 図	122号住居跡カマド実測図（1/30）	218
第 168 図	124・125・130号住居跡実測図（1/60）	219
第 169 図	126号住居跡実測図（1/60）	220
第 170 図	127号住居跡実測図（1/60）	221
第 171 図	122・125～127号住居跡出土土器実測図（1/3）	222
第 172 図	128・130・133～136号住居跡出土土器実測図（1/3）	223
第 173 図	135号住居跡実測図（1/60）	225
第 174 図	136号住居跡実測図（1/60）	226
第 175 図	136号住居跡カマド実測図（1/30）	227
第 176 図	11～13号建物跡実測図（1/80）	228
第 177 図	14・15号建物跡実測図（1/80）	229
第 178 図	16号建物跡実測図（1/80）	230
第 179 図	17・18号建物跡実測図（1/80）	231
第 180 図	建物跡、溝出土土器実測図（1/3）	232
第 181 図	101～110号土壤実測図（1/60）	234
第 182 図	103～105・107・110号土壤出土土器実測図（1/3）	235
第 183 図	鉄器実測図	237
第 184 図	141号住居跡実測図（1/60）	239

第 185 図	141号住居跡出土土器実測図（1/3）	240
第 186 図	142・143号住居跡実測図（1/60）	241
第 187 図	142・143号住居跡出土土器実測図（1/3）	243
第 188 図	144・145号住居跡実測図（1/60）	244
第 189 図	144・145号住居跡出土土器実測図（1/3）	245
第 190 図	146～150号住居跡実測図（1/60）	247
第 191 図	146～148号住居跡出土土器実測図（1/3）	248
第 192 図	151～153号住居跡実測図（1/60）	249
第 193 図	151～153号住居跡出土土器実測図（1/3）	250
第 194 図	154号住居跡実測図（1/60）	251
第 195 図	155号住居跡カマド実測図（1/30）	251
第 196 図	123・155～157号住居跡実測図（1/60）	252
第 197 図	155～157号住居跡出土土器実測図（1/3）	253
第 198 図	158～160号住居跡、62号竪穴実測図（1/60）	254
第 199 図	158・159号住居跡出土土器実測図（1/3）	255
第 200 図	160号住居跡出土土器実測図（1/3）	256
第 201 図	161～163号住居跡実測図（1/60）	257
第 202 図	161号住居跡出土土器実測図（1/3）	258
第 203 図	164～166号住居跡実測図（1/60）	259
第 204 図	164・166号住居跡出土土器実測図（1/3）	260
第 205 図	131・133・167～170号住居跡実測図（1/60）	261
第 206 図	167～170号住居跡出土土器実測図（1/3）	262
第 207 図	171～174号住居跡実測図（1/60）	263
第 208 図	171号住居跡カマド実測図（1/30）	264
第 209 図	171・172・174号住居跡出土土器実測図（1/3）	265
第 210 図	117・175・176号住居跡実測図（1/60）	267
第 211 図	175・176号住居跡出土土器実測図（1/3）	268
第 212 図	177・178号住居跡実測図（1/60）	269
第 213 図	177～180号住居跡出土土器実測図（1/3）	271
第 214 図	179号住居跡実測図（1/60）	272
第 215 図	180号住居跡実測図（1/60）	273
第 216 図	181～183号住居跡実測図（1/60）	274
第 217 図	181～183号住居跡出土土器実測図（1/3）	275
第 218 図	128・184号住居跡実測図（1/60）	276

第 219 図	185号住居跡実測図 (1/60)	277
第 220 図	184・185号住居跡出土土器実測図 (1/3)	278
第 221 図	129・186・187号住居跡実測図 (1/60)	279
第 222 図	186～188号住居跡出土土器実測図 (1/3)	280
第 223 図	188～192号住居跡実測図 (1/60)	281
第 224 図	193・194号住居跡実測図 (1/60)	282
第 225 図	194号住居跡カマド実測図 (1/30)	283
第 226 図	193・194号住居跡出土土器実測図① (1/3)	284
第 227 図	194号住居跡出土土器実測図② (1/3)	285
第 228 図	195～197号住居跡実測図 (1/60)	286
第 229 図	195・196号住居跡出土土器実測図 (1/3)	287
第 230 図	134・198～200号住居跡実測図 (1/60)	288
第 231 図	199号住居跡カマド実測図 (1/30)	289
第 232 図	198・199号住居跡出土土器実測図 (1/3)	290
第 233 図	201・202号住居跡実測図 (1/60)	291
第 234 図	201～203号住居跡出土土器実測図 (1/3)	292
第 235 図	203・204号住居跡実測図 (1/60)	293
第 236 図	204号住居跡カマド実測図 (1/30)	295
第 237 図	204・205号住居跡出土土器実測図 (1/3)	296
第 238 図	205・206号住居跡, 61号竪穴実測図 (1/60)	297
第 239 図	207号住居跡実測図 (1/60)	298
第 240 図	208号住居跡実測図 (1/60)	299
第 241 図	209号住居跡実測図 (1/60)	300
第 242 図	210号住居跡実測図 (1/60)	301
第 243 図	207～210号住居跡出土土器実測図 (1/3)	302
第 244 図	211・212号住居跡実測図 (1/60)	303
第 245 図	212号住居跡カマド実測図 (1/30)	304
第 246 図	211～213号住居跡出土土器実測図 (1/3)	305
第 247 図	213・214号住居跡実測図 (1/60)	306
第 248 図	213号住居跡カマド実測図 (1/30)	307
第 249 図	214号住居跡カマド実測図 (1/30)	308
第 250 図	215・216号住居跡実測図 (1/60)	309
第 251 図	214～216号住居跡出土土器実測図 (1/3)	310
第 252 図	30・31号建物跡実測図 (1/80)	312

第 253 図	32・33号建物跡実測図 (1/80)	313
第 254 図	34～36号建物跡実測図 (1/80)	314
第 255 図	37～39号建物跡実測図 (1/80)	316
第 256 図	40～42号建物跡実測図 (1/80)	317
第 257 図	43・44号建物跡実測図 (1/80)	318
第 258 図	45・46号建物跡実測図 (1/80)	319
第 259 図	47・48号建物跡実測図 (1/80)	320
第 260 図	建物跡出土土器実測図 (1/3)	321
第 261 図	131～146号土壤実測図 (1/120)	323
第 262 図	131・133・134号土壤出土土器実測図 (1/3)	324
第 263 図	135・137号土壤出土土器実測図 (1/3)	325
第 264 図	138号土壤出土土器実測図 (1/3)	326
第 265 図	139号土壤出土土器実測図① (1/3)	327
第 266 図	139号土壤出土土器実測図② (1/3)	328
第 267 図	140・143号土壤出土土器実測図 (1/3)	329
第 268 図	142号土壤出土土器実測図 (1/3)	330
第 269 図	144～146号土壤出土土器実測図 (1/3)	331
第 270 図	その他の出土土器実測図 (1/3)	332
第 271 図	焼塙土器実測図① (1/3)	334
第 272 図	焼塙土器実測図② (1/3)	335
第 273 図	砥石実測図 (1/2)	336
第 274 図	铁器実測図 (1/2)	337
第 275 図	墨書・ヘラ書き土器実測図 (1/3)	339
第 276 図	土鍤実測図 (1/2)	338
第 277 図	祭祀土器実測図 (1/3)	339
第 278 図	上の原遺跡造構変遷図 (1/900)	折込

表 目 次

表 3	住居跡・土壤新旧番号对照表.....	238
表 4	焼塙土器口径計測表.....	335
表 5	土鍤計測表.....	338
表 6	住居跡・土壤新旧番号对照表.....	340

V 古墳時代の遺構と遺物

1. 遺構の概要

広範囲の発掘調査であり、縄文時代から奈良時代にいたる遺構を検出した複合遺跡である。このうち古墳時代の主な遺構は、竪穴住居跡34軒、掘立柱建物跡8棟、土塹10基である。特に竪穴住居跡は奈良時代の住居跡と重複していたため、適宜番号を付したことから住居番号が散在してしまった。本報告では重複した住居跡を各住居ごとに掲載すべきであったが、重複を避けるため奈良時代の住居跡とともに掲載している遺構もある。

古墳時代の住居跡は奈良時代のそれに比べて一回り大きく、発掘区全体に分布している。土塙・掘立柱建物跡もそれほど密な検出状況ではなかった。

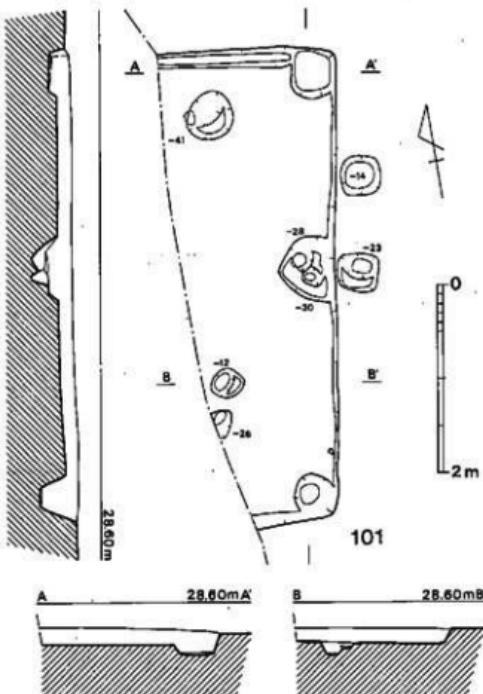
2. 竪穴住居跡

101号住居跡（第131図）

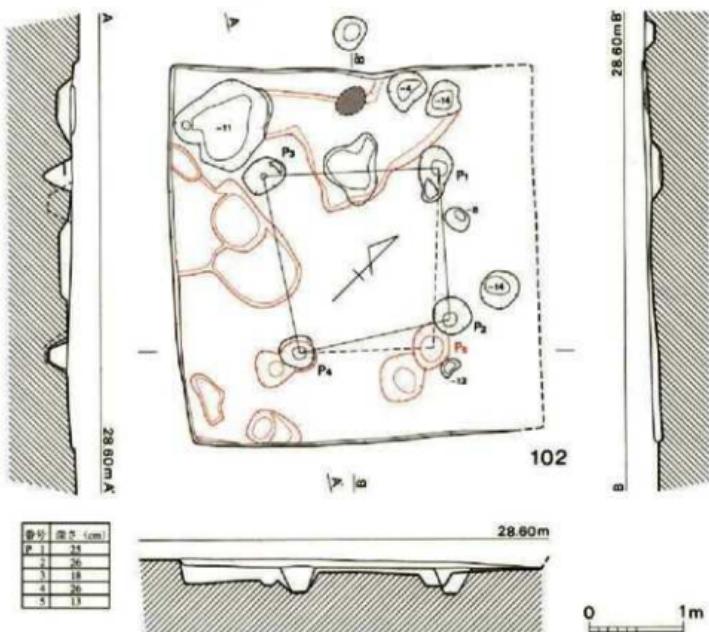
調査区の南端部に位置し、住居跡の1/3は調査区外にある。東側整長約5.05mを測り、平面形は方形を呈するものであろう。壁間に南から深さ28cm、32cm、18cmの柱穴が3ヶ所認められる。また、北壁寄りに幅20cm、深さ5cmの周溝がある。

出土遺物（第135図）

土師器（1・2） 1は壊身片で、内・外面上ともに磨き調整を施し、赤茶色を呈する。2は壺



第131図 101号住居跡実測図 (1/60)



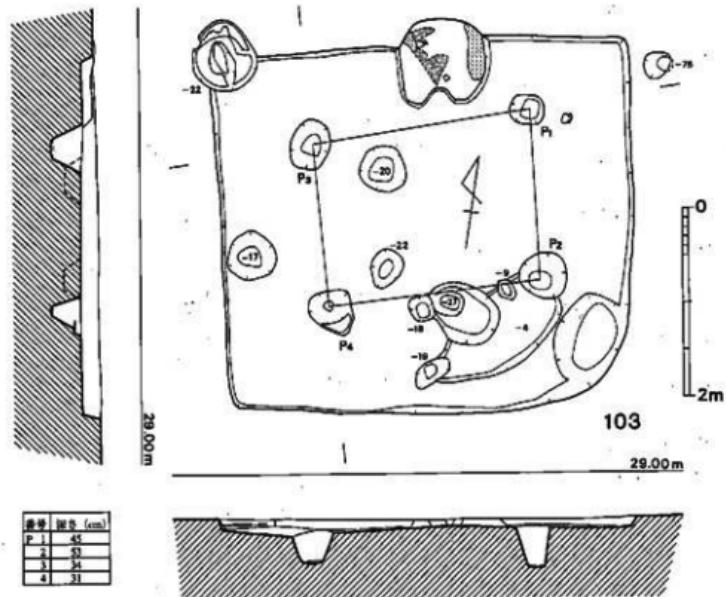
第132図 102号住居跡実測図(1/60)
の口縁部で、復原口径16.6cmを測る。口縁は「く」字状に強く外反する。

102号住居跡（第132図）

調査区の南端にあって、臺棺墓群の南に位置し、弥生住居と切り合い関係にある。遺構検出面が西から東に傾斜しており、東壁は検出されなかった。平面は一辺約4mの方形で、主柱穴は住居中央部に4本ある。20~30cmの深さを測り、柱間隔は約180cmである。西壁中央部にカマドと思われる焼土が確認された。

103号住居跡（図版63、第133図）

102号住居跡の西南15mに位置する。平面は東西辺4.4m、南北辺3.8mの長方形を呈し、北壁中央にカマドを配する。主柱穴は4本で、東西幅約2.3m、南北幅1.75mを測る。深さは20~30cmである。東南隅は丸く作られており、径80cm程の穴が確認された。



第133図 103号住居跡実測図 (1/60)

カマド

北壁中央に、奥壁がやや張り出したカマドである。右袖に粘土の固まりが認められたが、規模等については定かでない。

出土遺物（第135図）

土器部（1～4） 1は口径11.3cm、器高4.6cmの壊身で、口縁部は体部中位から真っ直ぐに立ち上がる。外底部はヘラ削り調整。2は復原口径14.2cmの壊身片である。3は高壊脚部。4は復原口径21.0cmの壊片である。

104号住居跡（第134図）

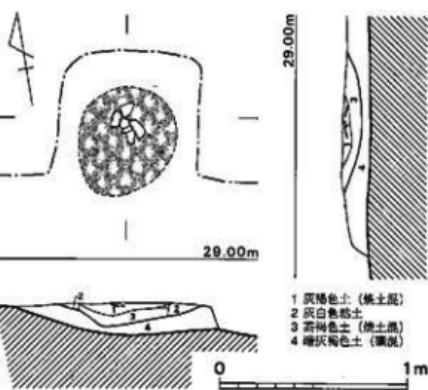
調査区の南端にあって、弥生住居跡12・16号と切り合い関係をもつ。住居の半分は調査区外である。北壁中央にカマドを配す。遺構検出面の削平が著しいため平面プランを確認することはできなかった。

カマド（第134図）

形態的には突出型のカマドで、住居の北壁に設けられている。規模は幅80cm、奥行き65cmで比較的奥行きがある。カマド中央に支脚と考えられる土器が出土。火床は赤褐色で、堅く焼けしまっていた。

出土遺物（第135図）

土師器（1） 復原口径20.0cmの鉢片である。口縁部はやや内弯し、底部下位はヘラ削り調整である。胎土は赤褐色を呈し、砂粒を若干含む。焼成は硬質である。



第134図 104号住居跡カマド実測図 (1/30)

105号住居跡（図版63、第136図）

調査区のほぼ中央部で検出した方形住居で、壁長東西3.5m、南北3.4mを測る。北壁に突出型のカマドを有する。カマドの両袖は削平が著しく、粘土がわずかに残っていた。中央には土器片が出土した。主柱穴はP1～P3の3本を検出したが、床面下層を探索できなかったため、P4となる北東部の柱は明らかにできなかった。南壁中央部で、カマドと対して貯蔵穴を検出した。住居全体の壁高は約10cmであり、削平が著しい。

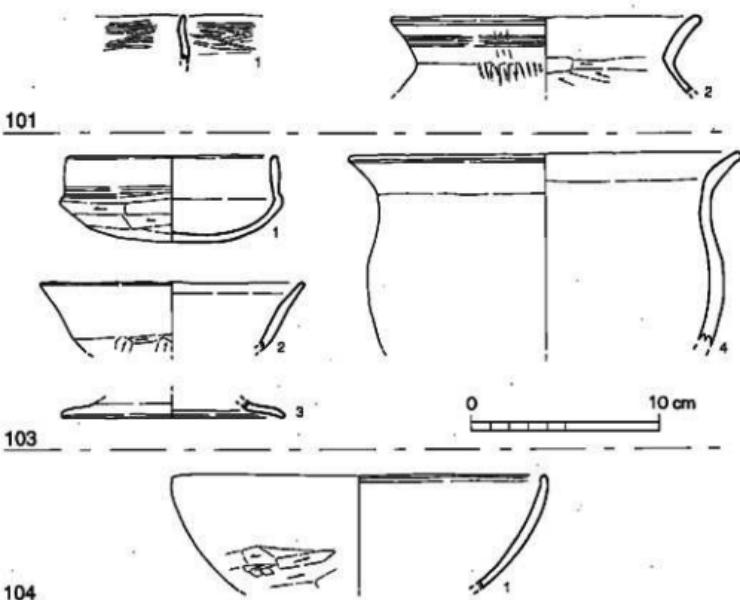
出土遺物（図版94、第137図）

須恵器（1・2） 1・2は壺身で、1は口径10.5cm、器高3.6cm、底径4.4cm。2は復原口径12.8cmを測る。

土師器（3～9） 3は皿で、復原口径20.4cmで、底部に線刻が見られる。4・5は比較的低い高环脚部で、外体部中位上は継のヘラ削り調整である。6は把手片。7・8は壺で、7は復原口径13.2cm。器肉は薄く、胎土に石英・砂粒を含む。焼成は硬質である。9は復原口径20.0cmの壺口縁部片である。

106号住居跡（図版64、第138図）

調査区のほぼ中央部で検出した方形住居で、壁長東西3.6m、南北約3.3mを測る。北壁に突出部がやや張り出すカマドを有する。主柱穴はP1～P4の4本を検出したが、東側柱列（P1～P2）と西側柱列（P3～P4）では58cmの開きがある。柱穴はさほど深くない。住居全体の壁高は約20cmである。弥生住居43号と切り合い関係をもつ。



第135図 101・103・104号住居跡出土土器実測図（1/3）

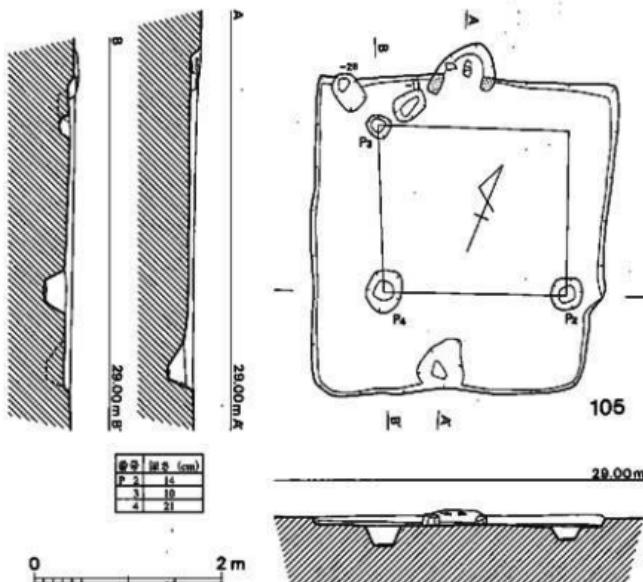
カマド

北壁中央で検出した作り付けのカマドである。右袖長68cm、幅26cm。左袖長44cm、幅30cmを測る。カマド内から土器・石等を検出した。

出土遺物（図版94、第139図）

須恵器（1～5） 1は復原口径12.5cmの蓋。2は高台付壊身で口径11.4cm、器高7.8cmを測り、脚部は中位で「く」字状に屈曲する。壊身の受部は浅い。3は体部上位が欠損しているため明らかでないが、高台付直口壺と思われる。体部には2本の沈線が巡り、下部にヘラ書きがある。脚部は2と同様「く」字状に屈曲する。4は壺の口縁部片。5は耳状の把手を付した壺底部片である。復原底径12.0cmを測り、内面ナデ、外側ヘラ削り調整を見る。

土器部（6～10） 6・7は高台脚部片である。6は脚部が短くハ字状に開くもので、内面に「井」のヘラ書きがある。7は6に比較して脚部が長く、体部は共に縱方向の強いヘラ削りである。

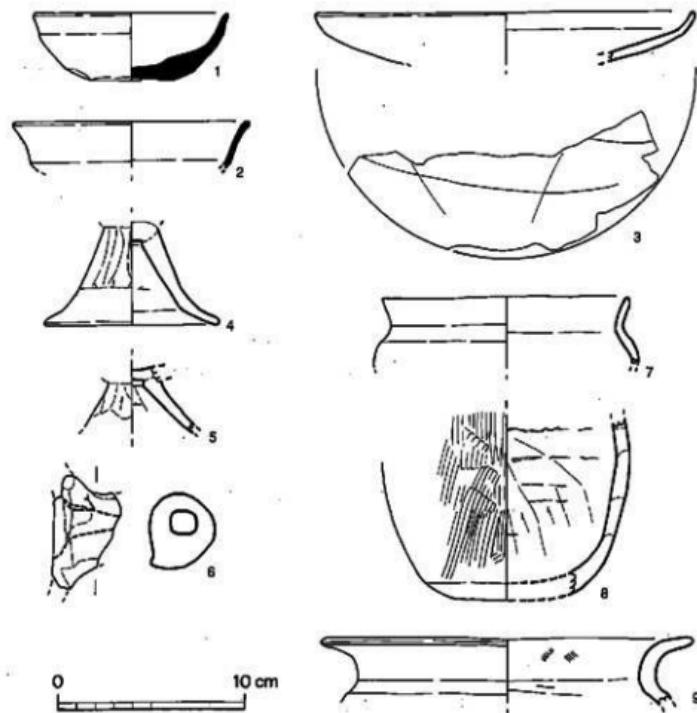


第136図 105号住居跡実測図 (1/60)

8・10は口縁部が強く外反した壺である。復原口径は8が17.6cm, 10が21.6cmで、外体部は刷毛目調整である。9はカマド内から出土したもので、復原口径13.4cmの小型広口壺である。焼成は硬質。

107号住居跡 (図版65, 第140図)

調査区のはば中央、北寄りで検出した方形住居で、壁長は東西5.6m、南北は中央部で4.9mを測る。北壁中央部にカマドを有する。主柱穴はP1-P4の4本を検出した。いずれも深いもので、住居コーナーを結ぶ対角線上に主柱穴はある。因みにP1-P2は2.14m, P1-P3は2.58mを測る。東壁と西壁列に小ピット数個を検出した。また、東壁北寄りに幅1.2mの出入口と考えられる張り出しが認められた。このことから、住居上部構造は東・西壁に重点を置き造られたものと考えられる。南壁寄りには径80cmの貯蔵穴と考えられる穴3個が発見されており、床面上部には多量の土器が出土した。



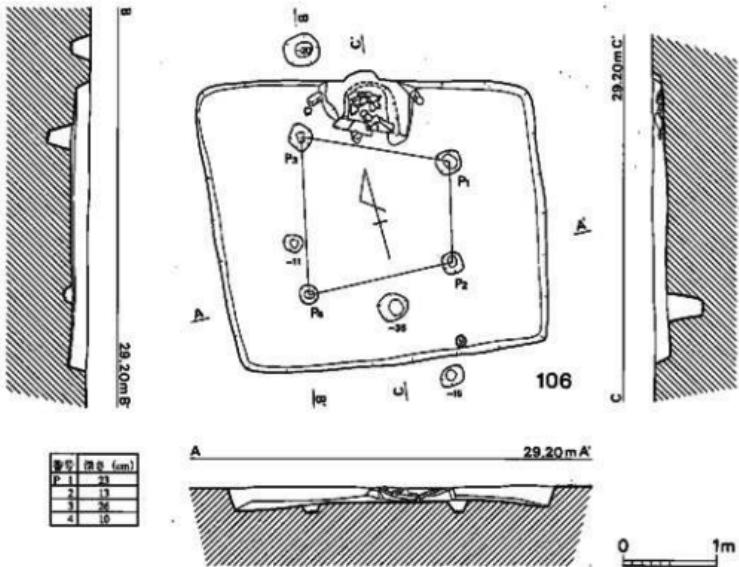
第137図 105号住居跡出土土器実測図 (1/3)

カマド (図版65、第141図)

北壁中央で検出した。作り付けのカマドで、煙道部が赤く焼けていた。右袖長92cm、幅30cm。左袖長80cm、幅32cmを測る。下層には径25cm、深さ7cmの支脚の穴が認められ、カマド付近には土器が多く散在していた。

出土遺物 (図版94~96、第142~147図)

須恵器 (1~28) 1~10は蓋である。1~4は浅い返りの付いた蓋で、1は復原口径12.4cm、2は13.8cm、4は12.6cm、器高2.8cmで、天井部にヘラ記号がある。3は平坦な撥みを有する。5~10は返りの無い蓋で、口径は5が15.0cm、他は11.8~12.6cm、器高3.4~4.0cmを計測する。また6・



第138図 106号住居跡実測図 (1/60)

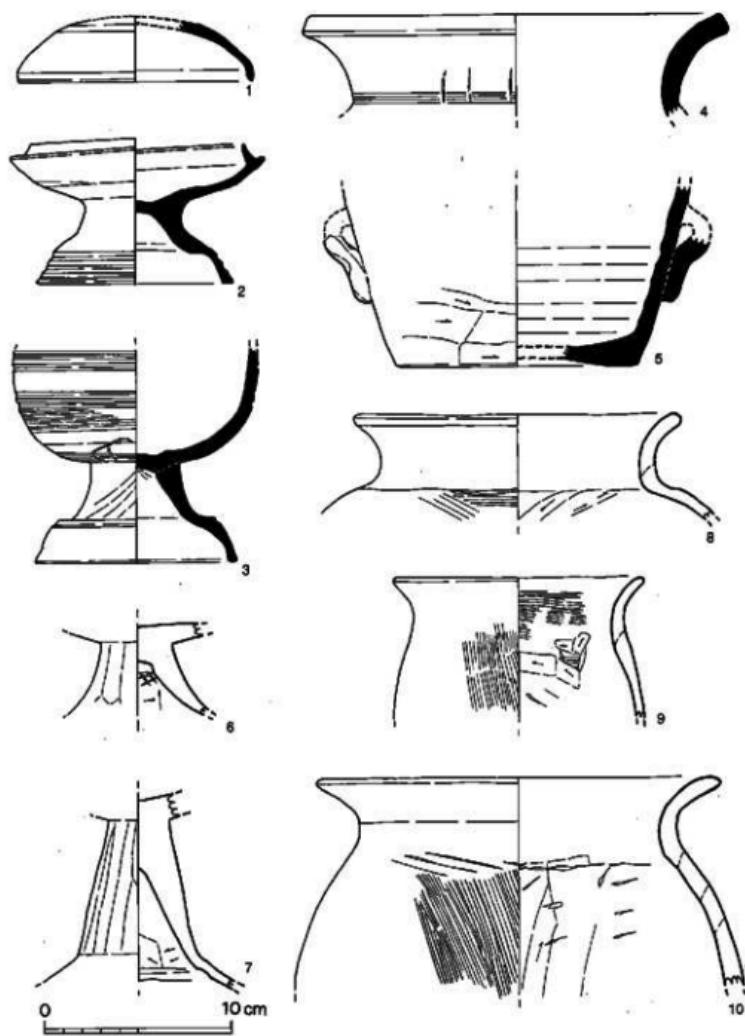
7・9・10には幾何学様のヘラ記号が、5には刷毛状工具による刺突文が巡る。

11~19は坏身である。そのうち18・19を除いた他は返りの付いた坏身である。口径は10.3~12.0cm、器高は3.5~4.1cmを測る。11~17の底部には蓋と同様幾何学様のヘラ記号が認められる。18は口径12.6cm、器高3.5cmで、底部に一条のヘラ記号がある。暗青灰色で、焼成は堅緻。19は低い高台を付けた坏身で、底部にヘラ記号を認む。口径13.0cm、器高4.6cm、底径9.3cmを測る。

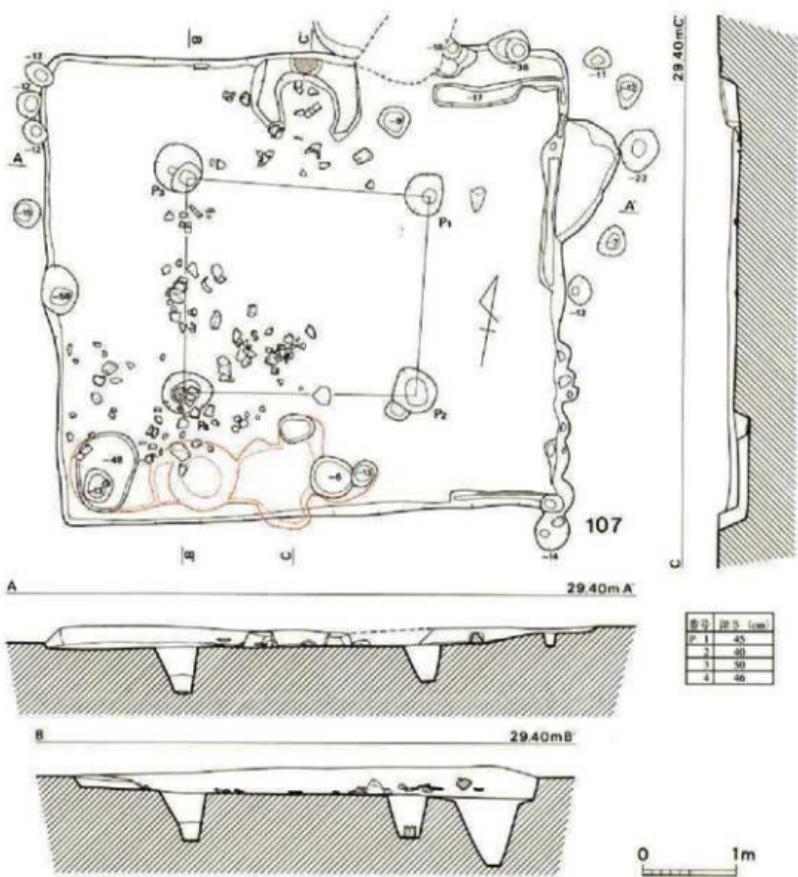
20は小型壺で復原口径4.4cm、器高4.7cmを測る。胴体部に粘土の付着がある。暗青灰色で、焼成は堅緻。21は小片のため明らかでないが、蓋の胴体部と思われる。体部上位にヘラによるカキ目、中位には一条の沈線を施す。

22~24は高坏脚部である。脚は8cm前後の低いもので、中央に沈線を有する23がある。22はカマド内出土。

25は壺の底部であろう。26・27は短頸壺で底部を欠く。頸部は直立に立ち上がり、復原口径8.2cmである。体部は強く張り出し中位に3本の沈線が巡り、最大径17.0cmを測る。27は体部か



第139圖 106號住居構造測圖 (1/3)



第140図 107号住居跡実測図 (1/60)

ら口縁部にかけての破片で、外体部は細格子、内面は強い同心円の叩きである。28は器形から平瓶の破片か。

土師器 (29~53) 29・30は壊身で、29は復原口径11.0cm、器高5.0cmで口縁は直立する。体部から底部にかけては丸く、強い削り調整である。30は底部を欠損し、器肉の薄い壊である。

31は復原口径18.6cmの皿である。32はカマド内から出土したもので、復原口径18.4cm、器高9.8cmである。内外面ともにヘラ削り調整で、口縁部は外反する。

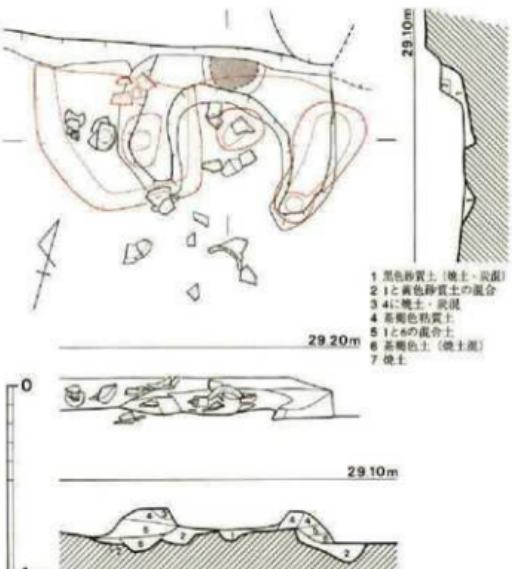
33~40は高坏である。33は坏部のみで、口径13.0cm、残存器高5.8cmを測る。胎土に石英・砂粒を含む。34~36・39・40は脚部片で脚部下位からハ字状に強く広がり、外体部は叢方向の削り調整である。中でも40は脚高が低い。胎土には石英・雲母を含み、焼成は硬質である。37は口径11.6cm、器高7.8cm、脚底径9.4cmを測る。脚はハ字形状に広がり、内面に「井」形のヘラ記号がある。38は口径13.6cm、器高11.2cm、脚底径9.6cmを測る。脚は37に比較してやや高く、脚部下位でハ字形状に強く広がる。外面は強いヘラ削り。

50・51は短頸壺である。50は口縁部を欠損し、肩部に横方向の削りが見える。残存高16.0cm、体部最大径18.6cmを測る。51は口縁部がやや歪み、口縁は内弯する。底部に径3.0cmの穿孔がある。外体部ヘラ削り、内面には工具痕がある。50・51ともに胎土に石英・長石を含む。

41~49は壺片である。41・42は器内が薄く、口辺端部をやや内側に摘む器形である。復原口径は41が12.0cm、42が17.0cmで、胎土・調整ともに良好である。43~46は小型の壺で、復原口径は43から順に11.8cm、13.0cm、14.0cm、12.0cmを測る。4個ともに赤褐色を呈し、焼成は良い。44・45はカマド下層出土。

47は口唇部を強く外反した壺片である。復原口径20.2cmで、カマド内出土。48・49は復原口径34.6cm、35.0cmの大型の広口壺である。二者ともに外体部は刷毛目、内面は削り調整である。48は瓶の可能性がある。

52・53は把手付の瓶である。52は把手下端を、53は口縁部を欠損する。52の復原口径24.2cm、



第141図 107号住居跡カマド実測図(1/30)

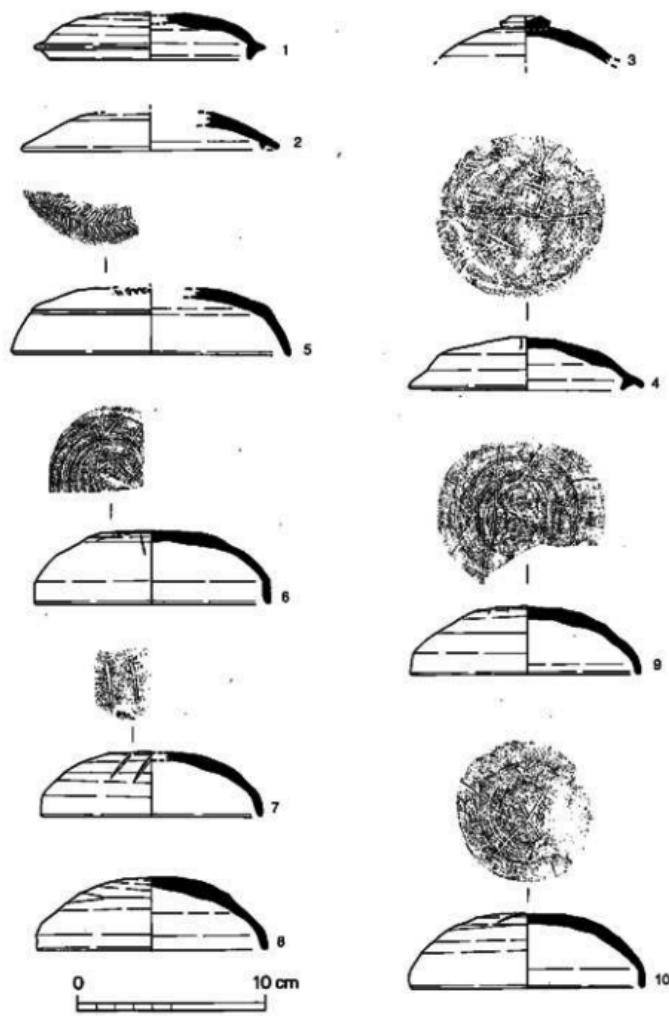
井形のヘラ記号がある。38は口径13.6cm、器高11.2cm、脚底径9.6cmを測る。脚は37に比較してやや高く、脚部下位でハ字形状に強く広がる。外面は強いヘラ削り。

50・51は短頸壺である。50は口縁部を欠損し、肩部に横方向の削りが見える。残存高16.0cm、体部最大径18.6cmを測る。51は口縁部がやや歪み、口縁は内弯する。底部に径3.0cmの穿孔がある。外体部ヘラ削り、内面には工具痕がある。50・51ともに胎土に石英・長石を含む。

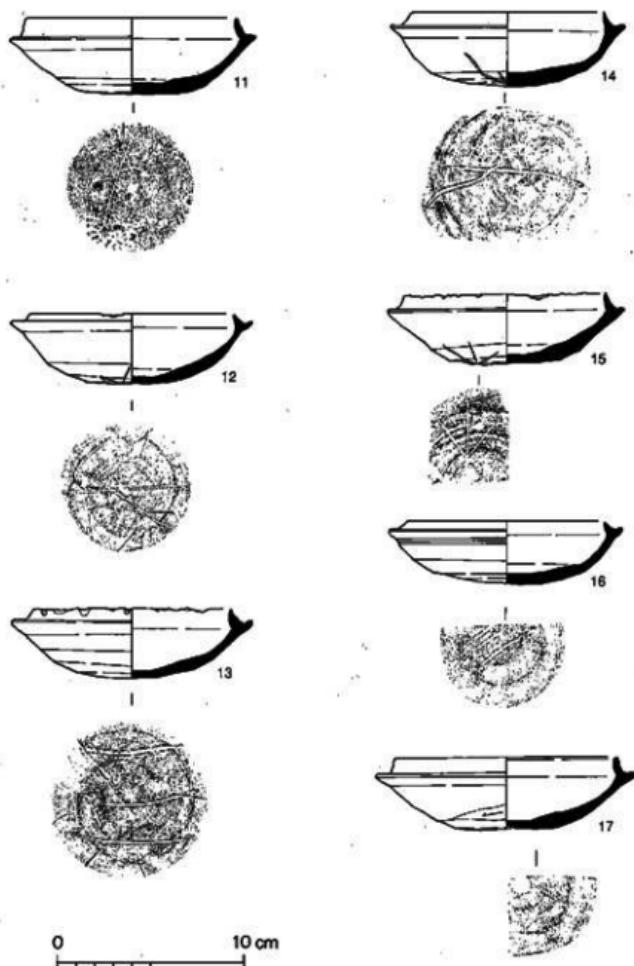
41~49は壺片である。41・42は器内が薄く、口辺端部をやや内側に摘む器形である。復原口径は41が12.0cm、42が17.0cmで、胎土・調整ともに良好である。43~46は小型の壺で、復原口径は43から順に11.8cm、13.0cm、14.0cm、12.0cmを測る。4個ともに赤褐色を呈し、焼成は良い。44・45はカマド下層出土。

47は口唇部を強く外反した壺片である。復原口径20.2cmで、カマド内出土。48・49は復原口径34.6cm、35.0cmの大型の広口壺である。二者ともに外体部は刷毛目、内面は削り調整である。48は瓶の可能性がある。

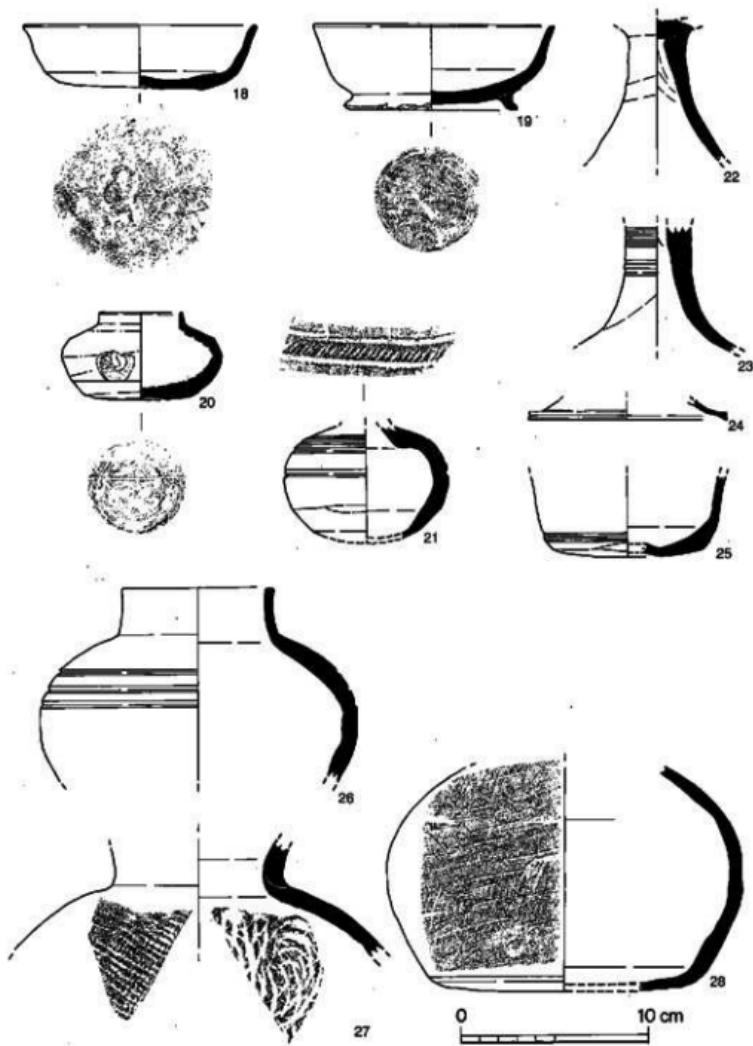
52・53は把手付の瓶である。52は把手下端を、53は口縁部を欠損する。52の復原口径24.2cm、



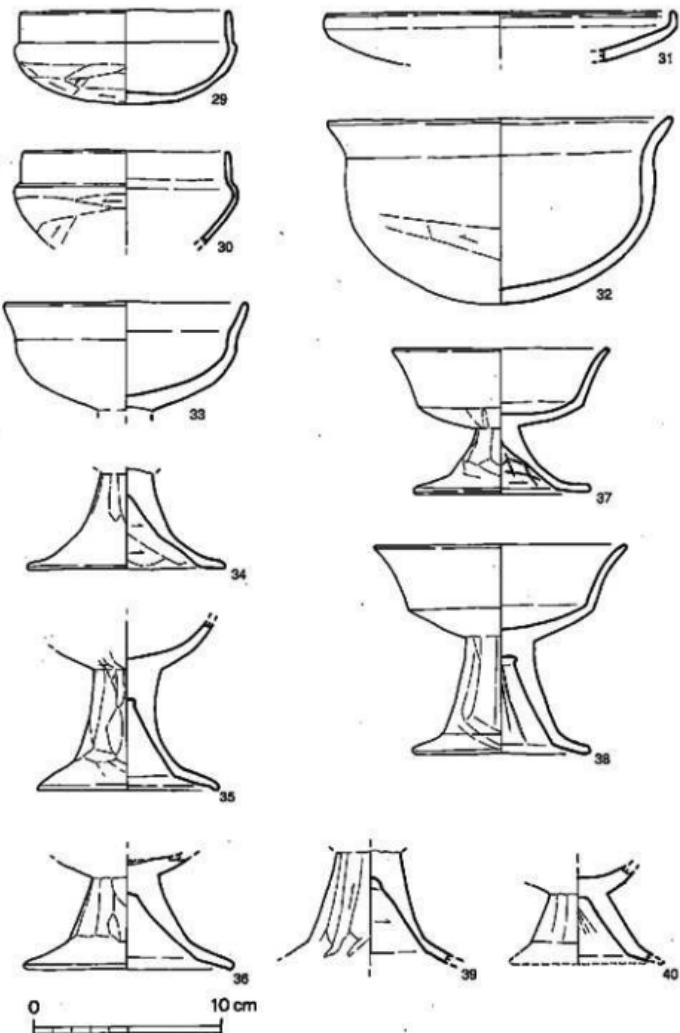
第142図 107号住居跡出土土器実測図① (1/60)



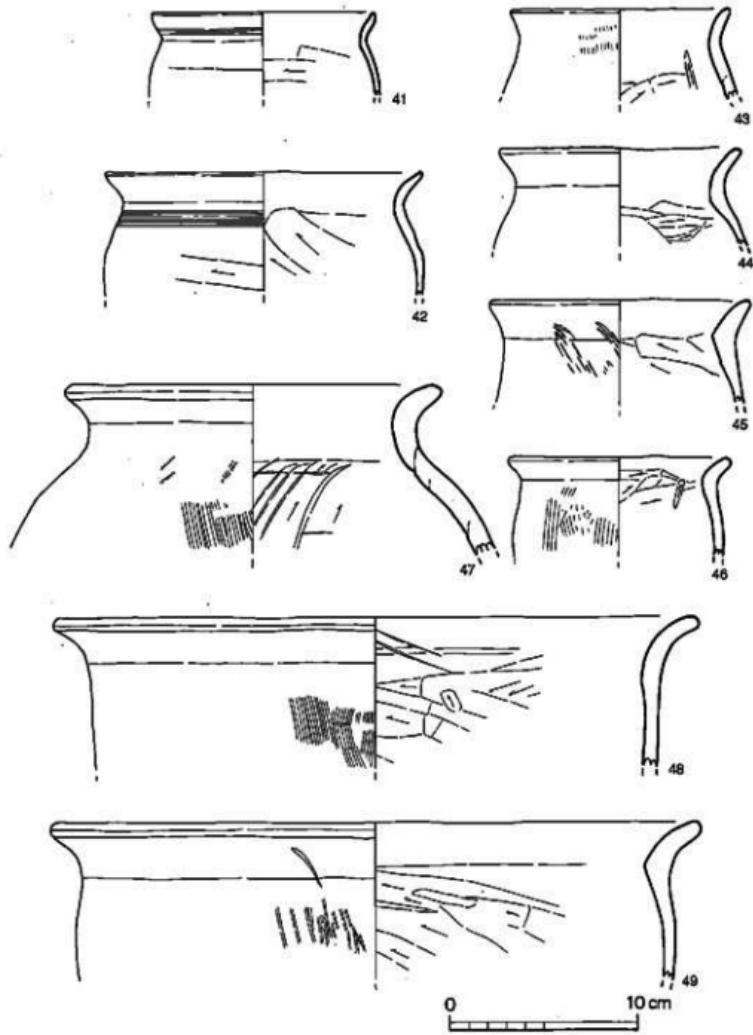
第143図 107号住居跡出土土器実測図② (1/3)



第144図 107号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

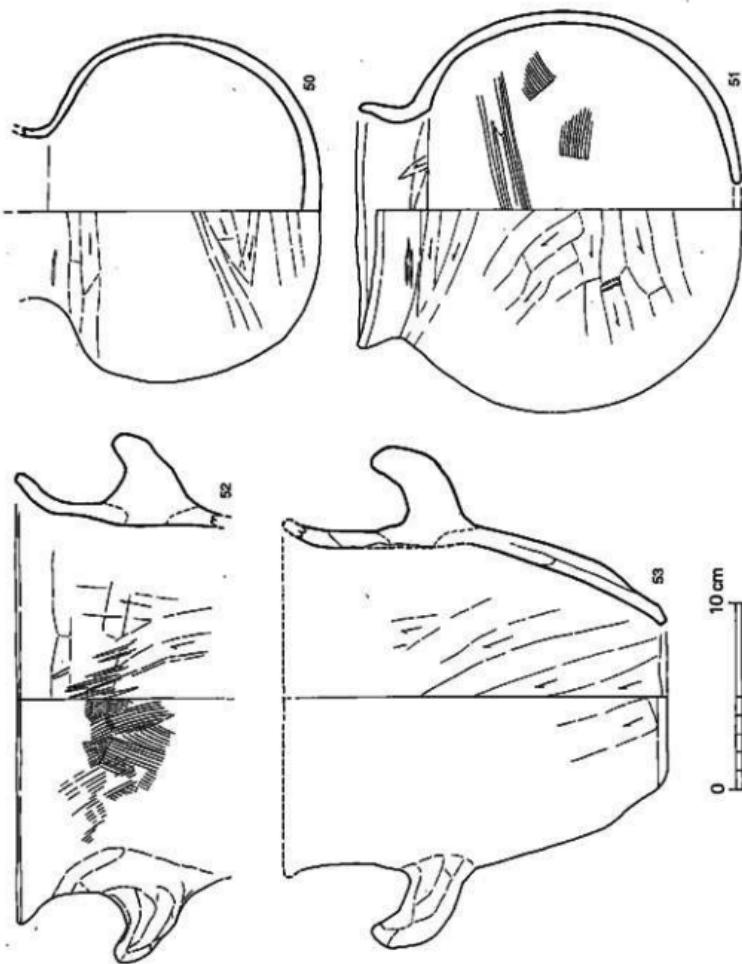


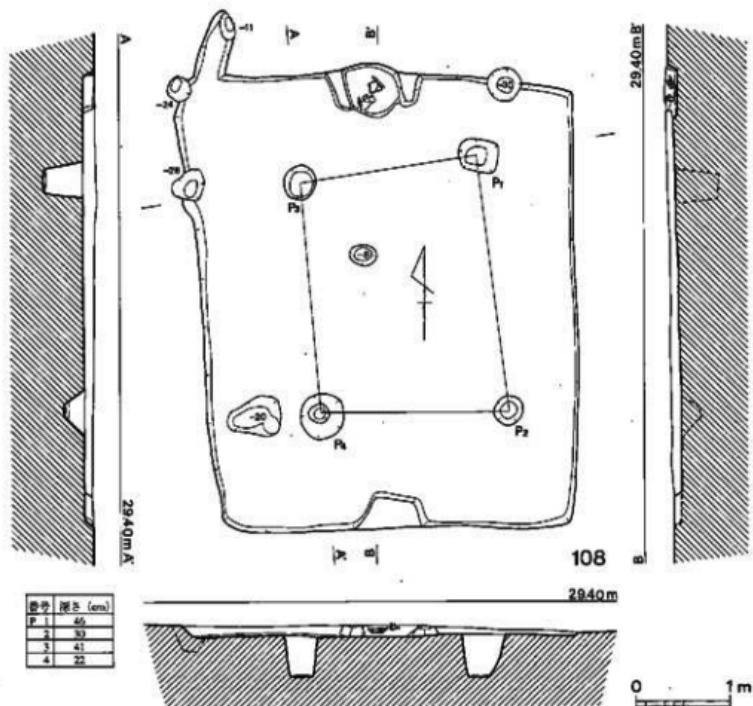
第145圖 107號住居跡出土土器實測圖④ (1/3)



第146図 107号住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)

第147圖 107号住居跡出土土器実測図⑥ (1/3)





第148図 108号住居跡実測図 (1/60)

53は20cm弱位と推定する。53は底径8.0cmで、共に把手はナデ、刷毛目調査。胎土には砂粒を多く含み、焼成は硬質である。

108号住居跡（図版66、第148図）

調査区のほぼ中央、北寄りで検出した方形住居で、107号住居跡の北側に位置する。壁長は東西約4.2m、南北は中央部で4.82mを測る。北壁中央部に壁を僅かに張り出したカマドを配す。主柱穴は深いP1～P4の4本を検出した。柱間間隔はP1～P2が2.74m、P1～P3が1.9mを測り、南北にやや長い長方形をしたプランである。南壁中央部、カマドの対面に幅56cm、長さ40cmの出入口と考えられる踏み台を検出した。住居は弥生住居56号と切りあっており、さらに近

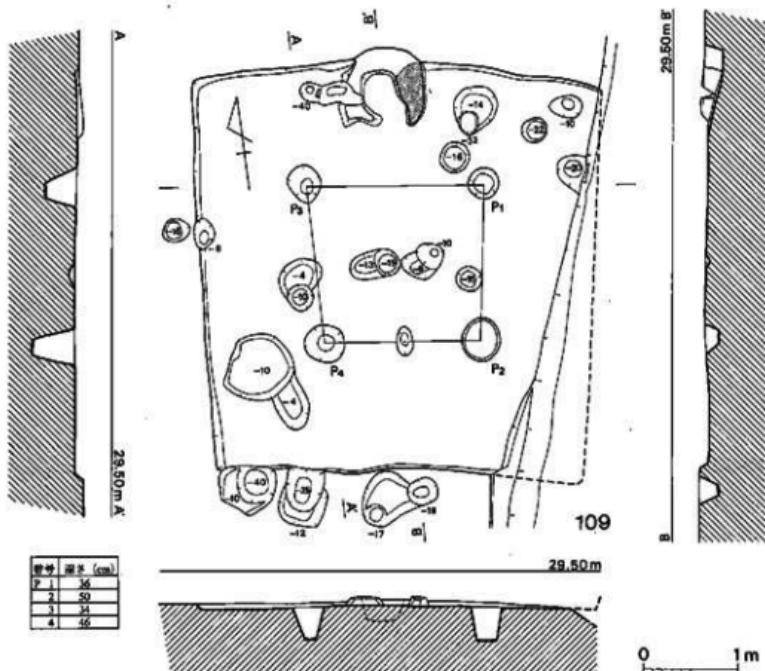
世の浅い南北溝に切られている。また北西隅に幅30cm、長さ70cmの張り出しを検出したが性格は明らかでない。

カマド

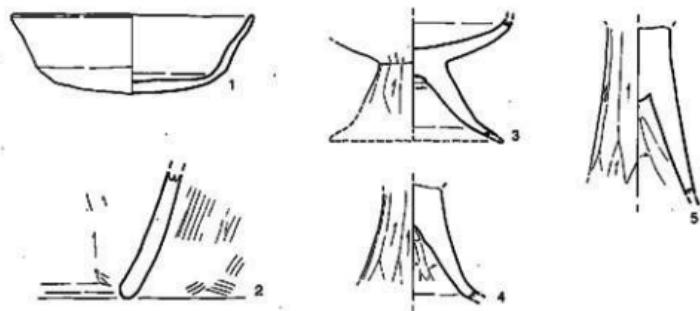
北壁中央で検出した作り付けのカマドである。両袖の残存は短く、右袖長35cm、左袖長43cmである。火床は若干盛み、土器が出土した。

出土遺物（図版97、第150図）

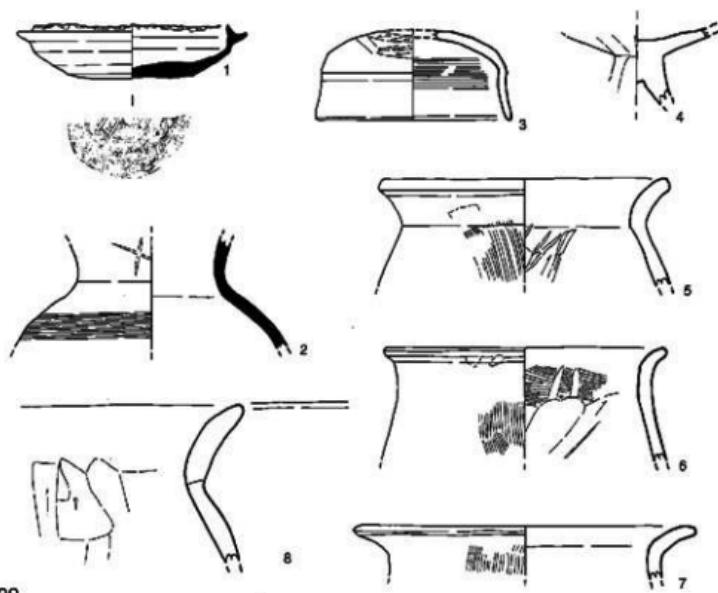
土器器（1~5） 1は復原口径13.0cm、器高4.2cmの壺身で、外底部はヘラ削り調整。2は瓶の破片であろう。3~5は高杯で、いずれも破片である。5は3・4に比較して脚部が長い。脚外体部は丁寧な削り調整である。胎土には石英・赤褐色の砂粒を含み、焼成は硬質である。



第149図 109号住居跡実測図 (1/60)



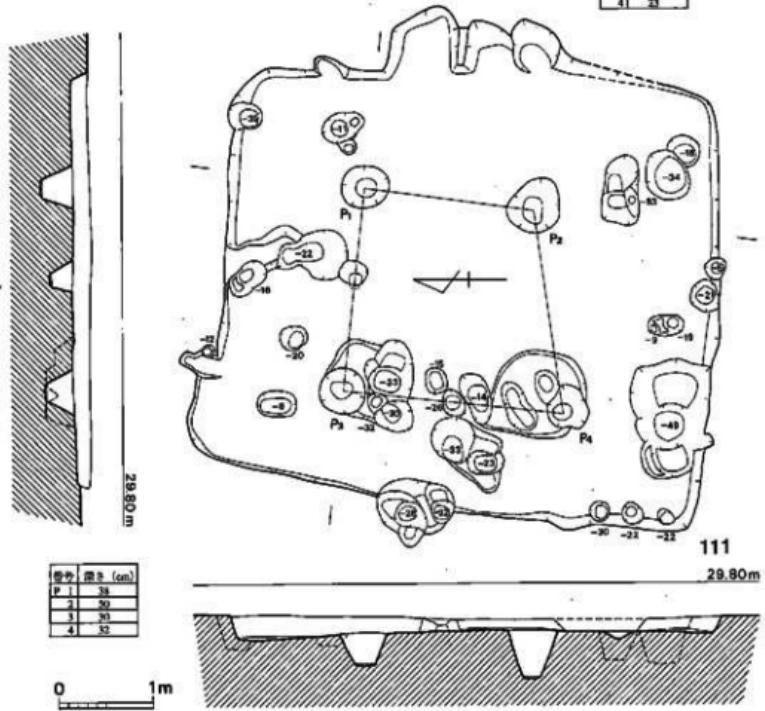
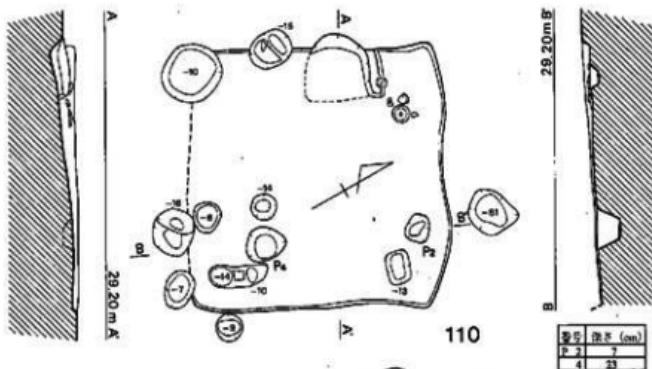
108



109

0 10 cm

第150図 108・109号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第151図 110・111号住居跡実測図 (1/60)

109号住居跡（図版66、第149図）

調査区のほぼ中央部で検出し、108号住居跡の南側に位置する。この住居も北側から続く近世の浅い溝に切られているため、東壁は明らかでない。平面形は壁長東西約4.4m、南北約4.4mの方形をなす。北壁に煙出し部がやや張り出すカマドを有する。主柱穴は住居コーナーを結んだ対角線上にあり、P1～P4の4本を検出した。柱間間隔はP1～P2が1.64m、P1～P3が1.9mを測り、その中央部に浅い柱穴2個を検出した。住居全体の壁高は約8cmで、全体的に削平が著しい。

カマド

北壁の中央部にあって、作り付け型のカマドである。全体的に削平が著しく、右袖長66cm、幅32cm、左袖長64cm、幅28cmを測る。袖中には赤褐色の焼土と灰が混入していた。火床は若干焼けていた。

出土遺物（図版97、第150図）

須恵器（1・2） 1は壺身で復原口径10.2cm、器高2.9cmを測り、底部に2本のヘラ記号がある。底部の器肉が厚く、口縁端部を細かく打ち欠いている。2は頸部から胴部の破片である。頸部に×印のヘラ記号がある。外体部は細かいカキ目調整。

土師器（3～8） 3は復原口径10.2cm、器高4.8cmの蓋で、外天井部は丁寧なヘラ削り調整。内面は細かいカキ目調整である。胎土には石英・赤褐色の砂粒を含み、焼成は硬質である。4は高壺脚部の破片である。5～7は小型の甕で、復原口径は5から順に15.6cm、15.2cm、18.4cmを測る。外体部は刷毛目、内面は削り及びナデ調整である。8は大型の甕片で、胎土には石英・赤褐色の砂粒を含む。

110号住居跡（図版67、第151図）

調査区のほぼ中央部で検出した。平面形は方形で、東西壁長約2.8m、南北約2.7mを測る。南壁は削平されて明らかでない。西壁に煙出し部がやや張り出すカマドを有する。主柱穴は東壁寄りにP2・P4の2本を検出し、柱間間隔はP2～P4が1.6mである。カマド右袖付近に須恵器・土師器を若干出土した。床面は南から北側へ深く傾斜している。

カマド

西壁の中央部にあって、作り付け型のカマドである。全体的に削平が著しく、右袖長50cm、幅20cmである。左袖は削平されていた。袖中には粘土に混じって赤褐色の焼土と灰が混入しており、火床は若干焼けていた。土器は右袖先端部にまとまって出土した。

出土遺物（図版97、第153図）

須恵器（1～3） 1・2は浅い返りのある蓋で、1は口径11.7cm、器高2.4cmを測り、天井部は削りの後ナデ調整。2は口径14.2cm、器高2.8cmを測り、器肉の厚い蓋である。3は高台付壺片で、

復原口径12.8cm、器高4.5cmを測る。1~3ともに胎土には石英を含み、焼成は堅緻である。

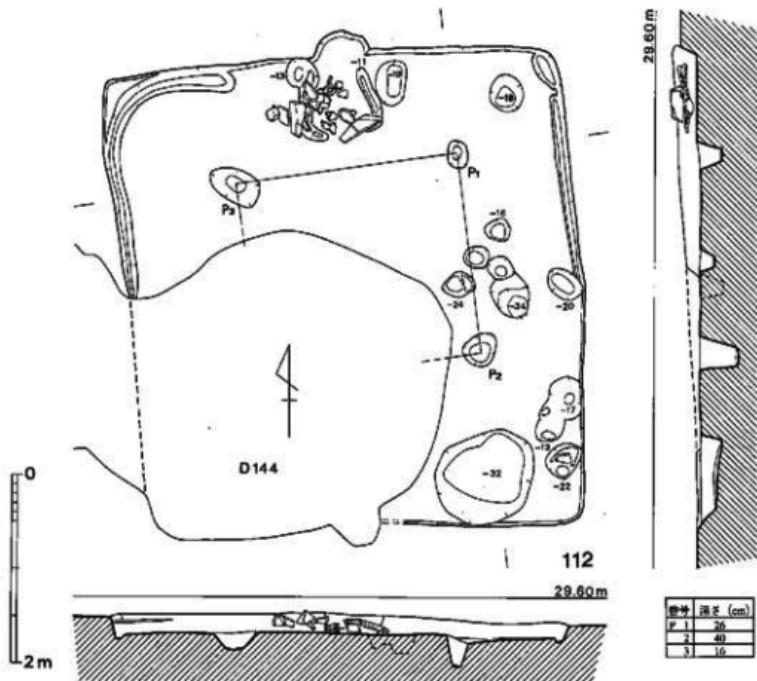
土師器 (4) 4は壺の底部で、外体部は刷毛目、内面はヘラ削り及びナデ調整である。

111号住居跡（図版67、第151図）

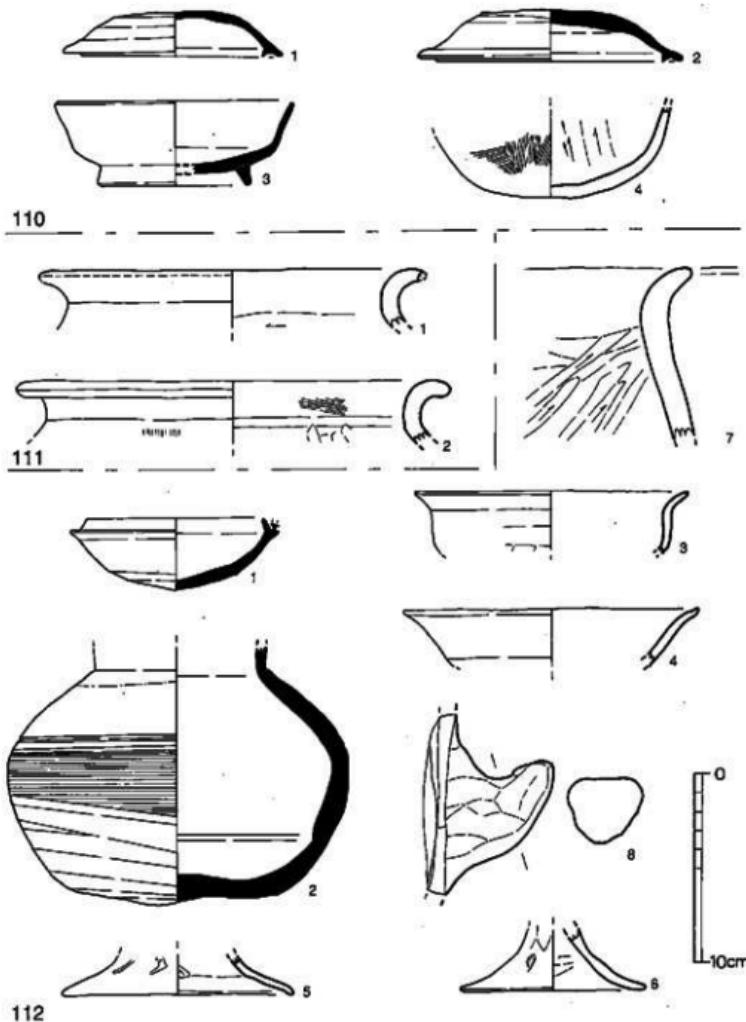
調査区の北側で検出した。平面形は方形で、東西壁長中央部で約5.0m、南北約5.3mを測る。北壁にカマドを有する。また、東壁中央部は壁の出入りがかなり著しく、突出型のカマドを作ったとみられる。主柱穴はP1~P4の4本を検出した。柱間隔はP1-P2が1.8m、P1-P3が2.1mを測り、P3・P4の柱穴は柱を据える時或いは抜く時に生じた穴と考えられる。径90cmの浅い掘方の中に2~3個の穴を検出した。西・南壁寄りに小ピットが見られる。

カマド

北壁の中央部にあって、作り付け型のカマドである。全体的に前平が著しく、右舷のみを検



第152図 112号住居跡実測図 (1/60)



第153図 110~112号住居跡出土土器実測図 (1/3)

出した。右袖長75cm、幅35cmである。左袖は削平されていた。袖中には粘土に混じって赤褐色の焼土と灰が混入していた。

出土遺物（第153図）

土器（1・2） 1・2は口縁部を強く外反する壺の破片である。1から復原口径20.8cm、23.2cmを測る。ともに胎土には石英・雲母・細砂粒を含み、焼成は硬質である。

112号住居跡（図版68、第152図）

調査区の北側中央寄りで検出し、弥生住居59号と奈良時代の144号土壙に切られている。よって南・西壁は明らかでない。平面形は方形で、東西壁長約5.0m、南北約5.2mを測る。北壁に煙出し部がやや突出するカマドを配す。主柱穴はP1～P3の3本を検出し、柱間隔はP1～P2が2.15m、P1～P3が2.38mである。P4は土壙に切られていて明らかでない。東壁と西壁に幅20cm、深さ5cmの排水溝が巡る。

カマド

北壁の中央部にあって、作り付け型のカマドである。全体に削平が著しく、両袖とも消失していた。火床は赤褐色に焼けて、周辺にはカマドに使用されたと思われる石が散在していた。

出土遺物（図版97・98、第153図）

須恵器（1・2） 1は口径9.4cm、器高3.8cmの壺身である。身の受部に壺片が付着する。2は口縁端部を欠く壺である。底径11.2cmを測り、体部中位はカキ目、中位から底部は削り調整である。

土器（3～8） 3は器肉の薄い浅鉢で、復原口径14.6cm。4は高壺の壺身片か。5・6は高壺脚部片で、5から12.4cm、10.0cmを測る。7は壺片、8は把手である。

113号住居跡（図版68、第154図）

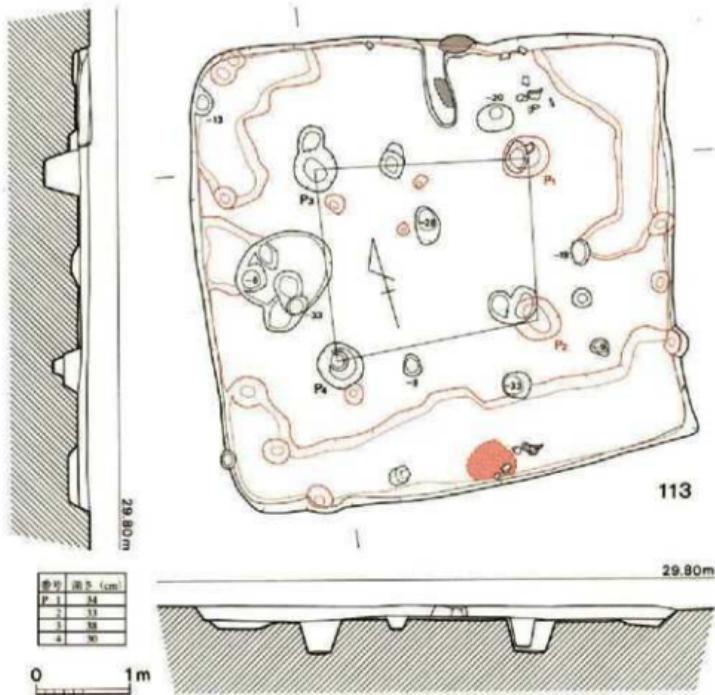
調査区の北側中央寄りで検出し、102号住居跡の北側にあたる。平面形は方形で、東西壁長約5.0m、南北約4.8mを測る。北壁東寄りにカマドを配す。主柱穴はP1～P4の4本を検出し、柱間隔はP1～P2が1.75m、P1～P3が2.28mである。主柱穴は深く、30～40cmである。残存壁は約20cm。また、住居下層において南壁中央部、カマドの対面に焼土を確認した。

カマド

北壁の中央部やや東寄りに左袖のみ検出した。左袖長95cm、幅28cmを測る。作り付け型のカマドである。火床は赤褐色に焼けて、周辺には煮沸に使用されたと思われる土器が散在していた。

出土遺物（図版97・98、第155図）

須恵器（1～3） 1～3は壺身である。1は口径10.9cm、器高3.7cmで、所々に灰被りが認めら



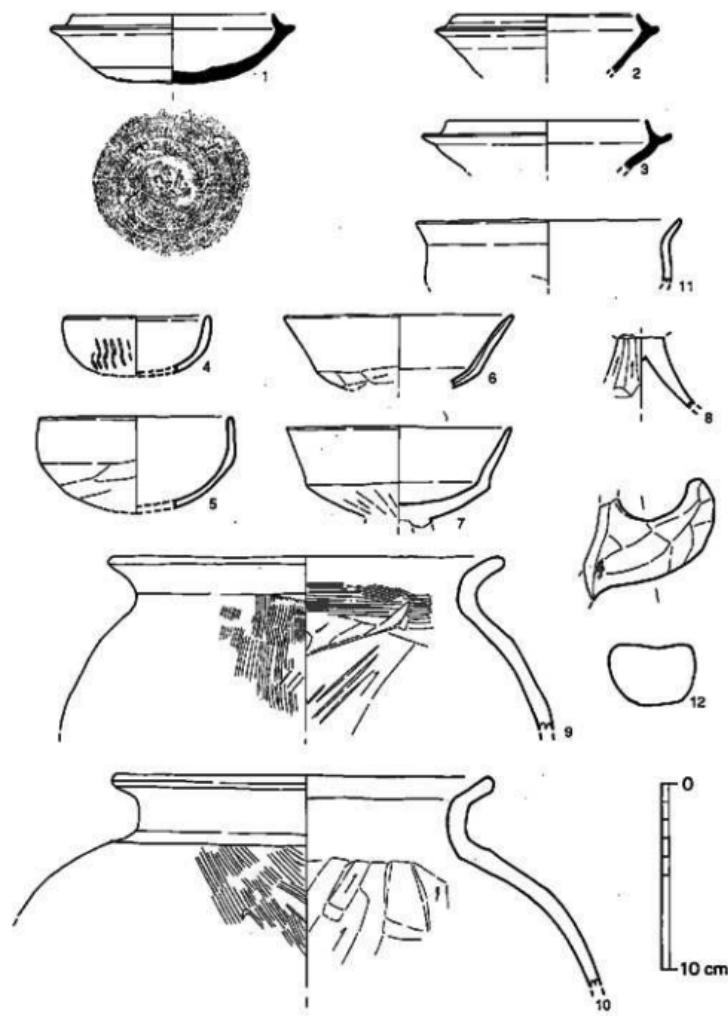
第154図 113号住居跡実測図（1/60）

れる。底部に2本のヘラ記号がある。2・3は復原口径10.0cm, 10.8cmである。

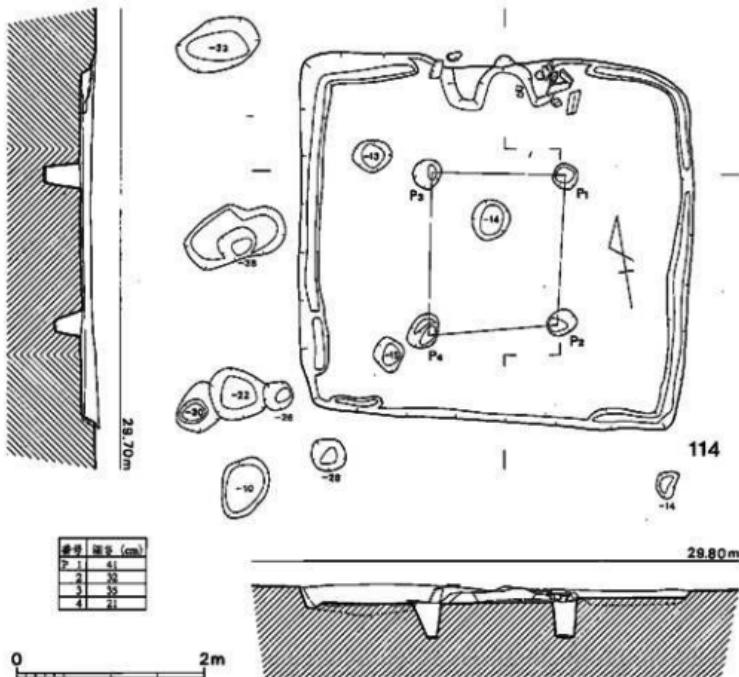
土師器（4～12） 4・5は小型の碗で、4は復原口径7.6cm, 5は10.4cm, 器高4.9cmを測る。特に4は体部に梯目状の工具痕が認められた。6～9は高杯で、復原口径は6が12.0cm, 7が12.05cmである。8は脚部片。9～11は甕片と思われるが、頸部が強く締まっており、9から復原口径21.2cm, 20.5cmを測る。外体部は刷毛目、内面は削り調整である。12は把手片である。

114号住居跡（図版69、第156図）

113号から約10m西で検出した。平面形は方形で、東西壁長約4.2m、南北約3.8mを測る。北壁に突出し部がやや突出するカマドを配する。主柱穴はP1～P4の4本を検出し、柱間間隔は



第155図 113号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第156図 114号住居跡実測図 (1/60)

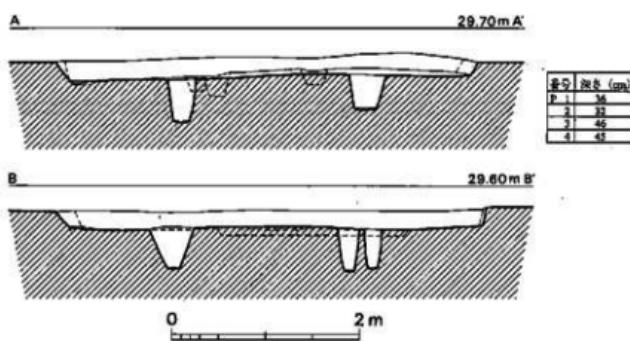
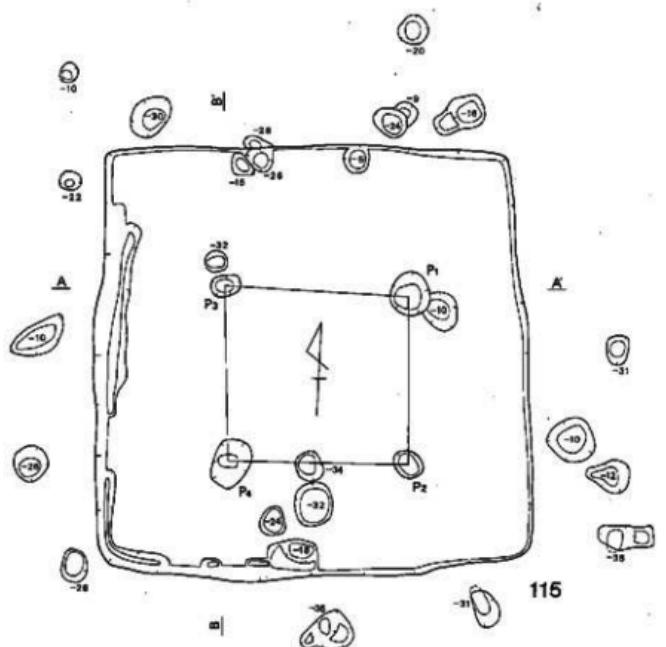
P1-P2が1.6m, P1-P3が1.43mである。P3・P4の西側にそれらを支える柱穴2本を検出した。北壁カマド部と南壁中央部を除いた他は、整周に幅約20cm, 深さ5cmの排水溝が巡る。カマド

北壁の中央部にあって、作り付け型のカマドである。全体に削平が著しく、両袖共わずかに残る。火床はあまり焼けておらず、両袖周辺にカマドに使用されたと思われる石材が残存していた。右袖長47cm, 幅35cm, 左袖長45cm, 幅50cmを測る。

出土遺物 (図版98, 第159図)

須恵器 (1・2) 1は復原口径11.6cm, 器高3.4cmの返りの無い蓋である。2は坏身片。

土師器 (3~5) 3・4は高坏の坏身片と脚部片である。3は復原口径13.3cmで、体部のカキ目



第157図 115号住居跡実測図 (1/60)

とヘラ削りの調整が明瞭である。4の脚部内面に「井」字状のヘラ書きを見る。5は11.6cmの小型甌である。

115号住居跡（図版69、第157図）

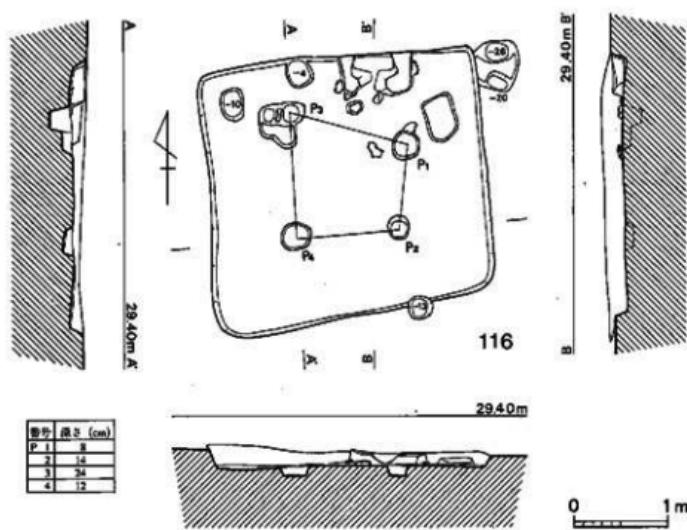
調査区の北寄り中央で検出した方形の住居で、東西壁長約4.65m、南北約5.7mを測る。この住居は、同時期の掘立柱建物に囲まれており、新旧関係は後者が新しいと判断した。北壁中央に2個の穴を検出したが、カマドの芯を作るためのものか。主柱穴はP1～P4の4本を検出し、柱間隔はP1～P2が1.8m、P1～P3が1.96mである。4本ともに30～40cmの深さである。西壁と南壁半部の壁周に沿って幅約20cm、深さ5cmの排水溝が巡る。

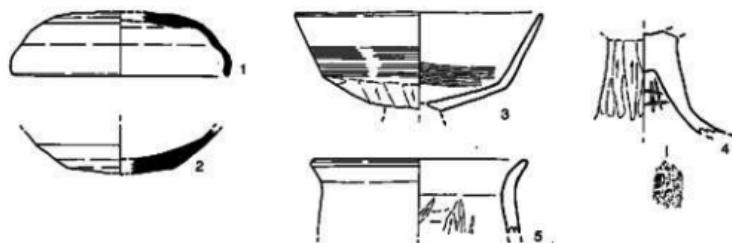
出土遺物（第159図）

須恵器（1） 1は返りの無い蓋である。胎土に石英が多く含まれている。

土師器（2・3） 3は壊身の底部片か。2は復原口径12.4cmの小型甌で、体部に煤の付着が見られる。

116号住居跡（第158図）

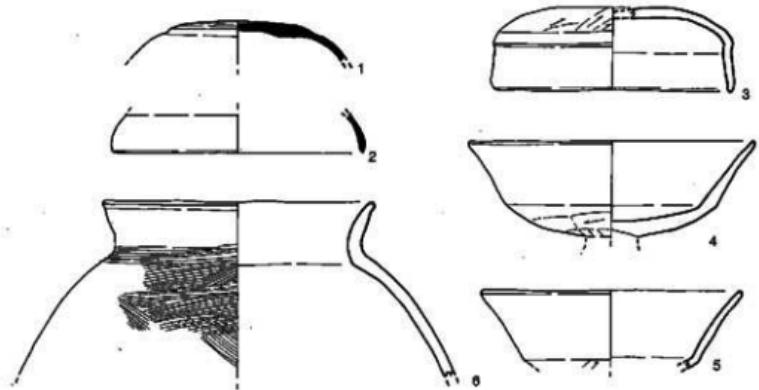




114



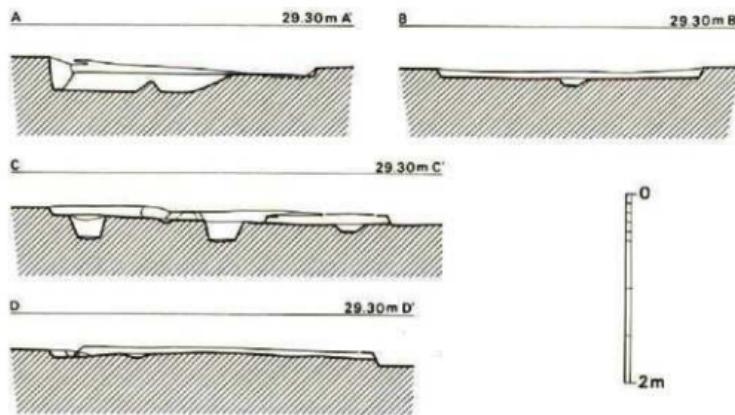
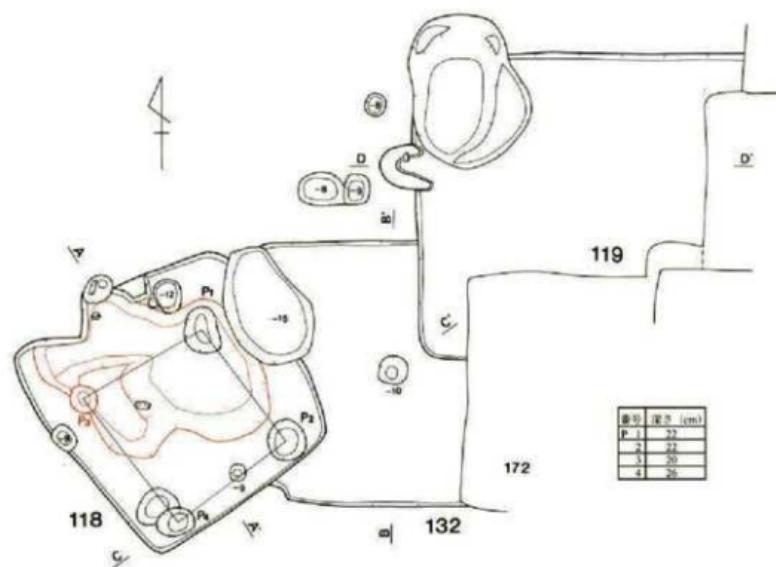
115



116

0 10 cm

第159図 114~116号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第160図 118・119・132号住居跡実測図 (1/60)

調査区のほぼ中央で検出した方形の住居で、東西壁長約3.0m、南北約2.8mを測り、他の住居に比較してやや小さい。北壁中央にカマドを配する。主柱穴はP1～P4の4本を検出し、柱間間隔はP1-P2が0.94m、P3-P4が1.37m、P1-P3が1.3m、P2-P4が1.1mである。柱の深さはP3が25cmの他は比較的深い。

カマド

北壁の中央部にあって、作り付け型のカマドである。全体に削平が著しく、火床はあまり焼けていない。右袖長47cm、幅22cm、左袖長44cm、幅15cmを測る。付近には焼けた石が散在していた。

出土遺物（図版98、第159図）

須恵器（1・2・7） 1・2は返りの無い蓋で、2は復原口径13.6cmである。7は蓋の頸部片で、外体部は格子、内面は同心円文の叩きである。

土師器（3～6） 3は復原口径12.6cm、器高4.4cmの蓋である。口縁は直立し、天井部はヘラ削り調整である。4・5は高壺の壊身片で、4から復原口径15.4cm、14.0cmを測る。6は復原口径14.6cmの甕片か。口縁部を外側にやや丸く彫み、横ナデ調整している。

117号住居跡（第210図）

調査区のほぼ中央、116号の西側で検出した方形の住居で、奈良時代の175号住居跡と切合っている。2辺の壁を見るのみで、そのほとんどは175号住居の下に隠れている。一辺の壁長約4.1mで、他は定かでない。

出土遺物（第162図）

須恵器（1） 1は復原口径10.4cm、残存高3.8cmである。体部に3本の沈線が認められることと器形から高壺の壊部と思われる。

土師器（2・3） 2は高壺胸部片で、3は把手片である。

118号住居跡（第160図）

調査区のほぼ中央で古墳時代の住居跡3軒が切合って検出した。本跡は132号と切合い、それを切っている。カマドの位置を船にすると、住居は西に約33°傾いている。従って、東西壁長約2.6m、南北約2.65mを測る。116号と同じく小型の住居である。北壁中央にカマドを配する。主柱穴はP1～P4の4本を検出し、柱間間隔はP1-P2が1.5m、P1-P3が1.45mである。柱の深さは25～30cmと比較的深い。

カマド

北壁の中央部にあって、作り付け型のカマドである。全体に削平が著しく、両袖共僅かに残る。左袖は地山削り出しで、火床はあまり焼けていない。右袖長25cm、幅32cm、左袖長約30cm、

幅は中央で約55cmを測る。

出土遺物（図版98、第162図）

須恵器（1・2） 1は高台付坏で、復原底径8.0cmを測る。2は長形壺の口縁片か。

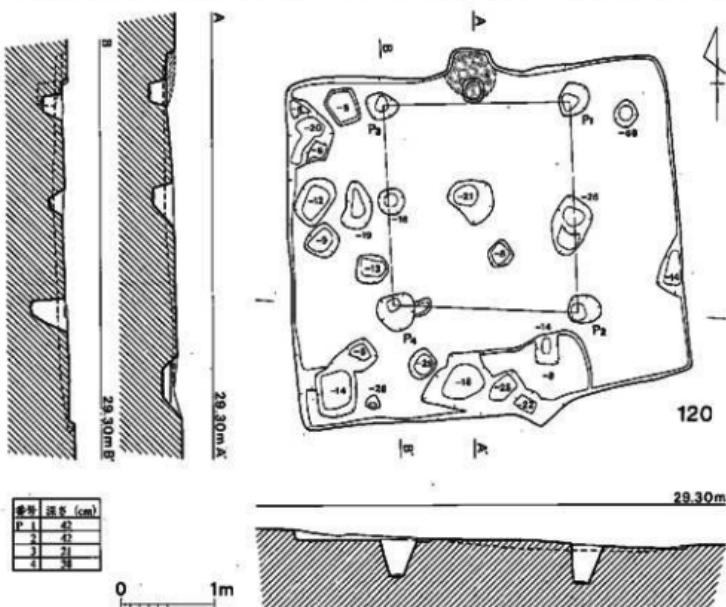
土師器（3～6） 3は復原口径17.4cm、器高4.1cmの壺である。底部は丸底に作り、口縁端部を内側に捲んでいる。4・5は壺片で、4は口縁が強く外反する。復原口径20.4cm、5は27.5cmを測る。外体部は刷毛目、内面は削り調整。6は把手片。

119号住居跡（第160図）

発掘区の中央で検出した。132号を切り171～174号住居跡に切られている。西壁中央部にカマドを配す。また北西コーナーの壁は土壘状造構によって切られている。主柱穴は検出されなかった。平面形は方形で、南北長3.3m、東西長3.6m以上である。

カマド

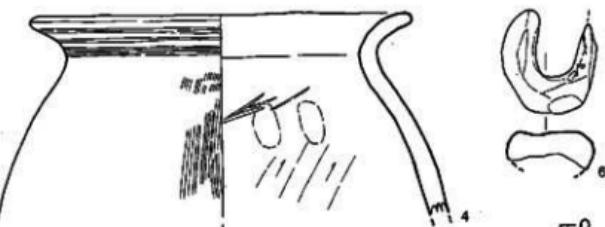
西壁中央北寄りで検出した突出型のカマドである。壁から幅48cm、奥行き38cmを測る。袖は



第161図 120号住居跡実測図 (1/60)

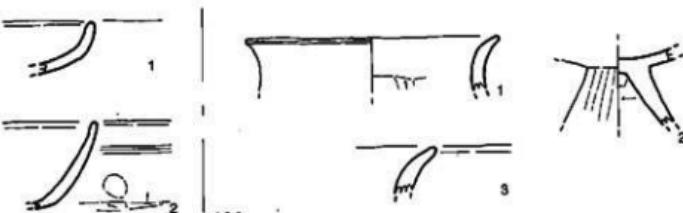


117



118

0
10 cm

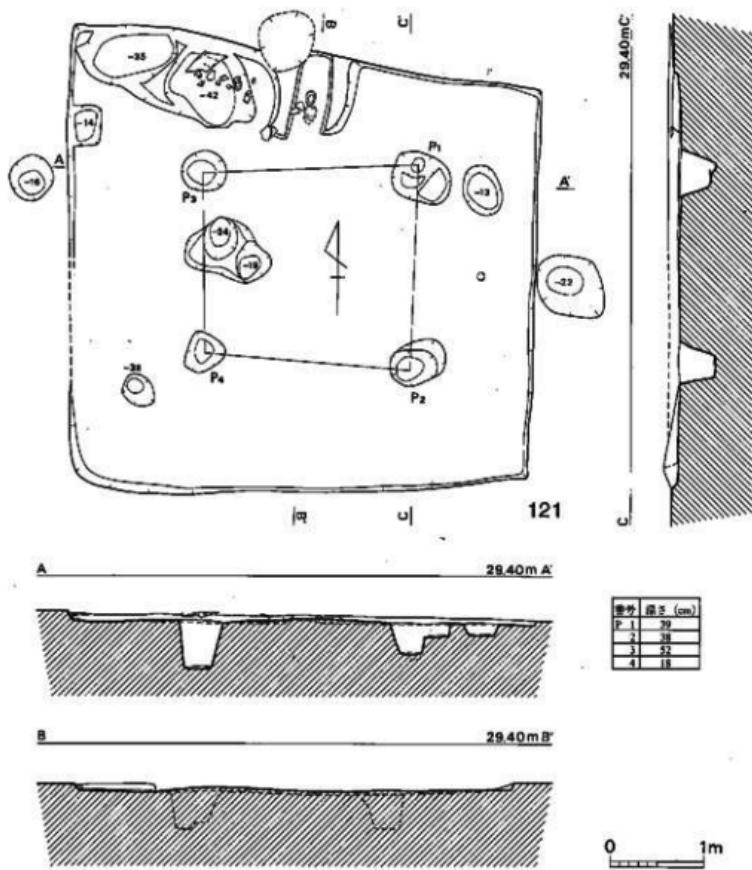


119

120

第162図 117~120号住居跡出土土器実測図 (1/3)

右袖長13cm、左袖長20cmを測る。火床の焼けはあまり。
出土遺物（第162図）



第163図 121号住居跡実測図 (1/60)

土師器 (1・2) 1は口縁部がやや立つ皿片, 2は坏身片である。

120号住居跡 (図版70, 第161図)

調査区のほぼ中央、西側発掘区寄りで検出した。平面形は方形で、東西壁長約4.1m、南北約3.8mを測る。北壁中央にカマドを配する。主柱穴はP1～P4の4本を検出し、柱間間隔はP1～P2が2.26m、P1～P3が2.0mのほぼ長方形を呈する柱間である。柱穴は深い。南壁寄りに幅70cm、長さ1.80m、深さ10～25cmの土壇を検出した。全体に削平が著しく、出土土器は少ない。カマド

北壁の中央部にあって、突出型のカマドである。全体に削平が著しく、火床は赤褐色に焼けしており、下から径25cm、深さ20cmの穴を検出した。支脚を添えるための穴か。両袖は削除され、北壁からの寸法幅約50cm、奥行き25cmを測る。

出土遺物 (第162図)

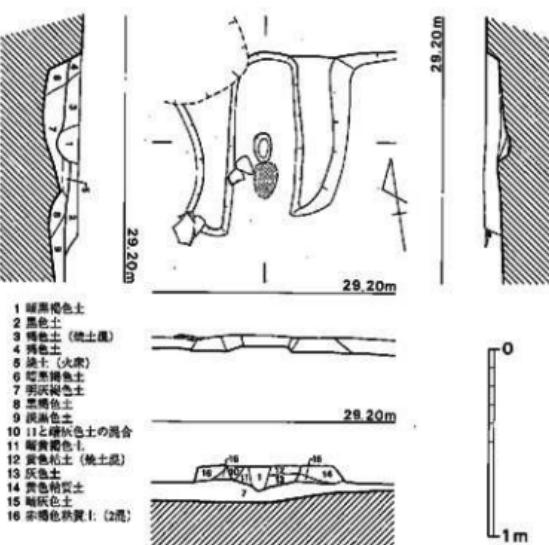
土師器 (1～3) 1・3は蓋片で、1は復原口径13.6cmで、口縁内部に漆が付着する。2は高环の脚部片で、胎土に石英・雲母を含み、焼成は硬質。

121号住居跡 (第163図)

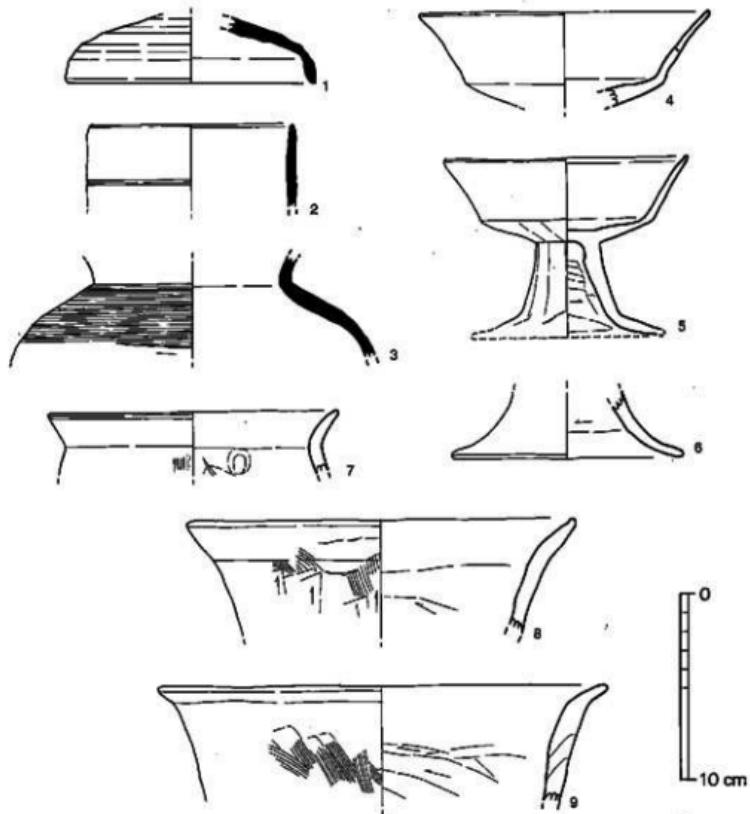
調査区のほぼ中央、西寄りで検出した方形の住居跡である。本跡は奈良時代の住居157号に切られている。平面形は方形で、東西壁長約5.05m、南北は中央部で約4.7mを測る。

北壁中央にカマドを配する。主柱穴はP1～P4の4本を検出し、柱間間隔はP1～P2が2.2m、P3～P4が1.93m、P1～P3が2.3m、P2～P4が2.2mである。柱の深さは30～50cmと他の住居に比べて深い。

カマドの左側に径約1.0



第164図 121号住居跡カマド実測図 (1/30)



第165図 121号住居跡出土土器実測図 (1/3)

m, 深さ42cmの貯蔵穴を検出した。

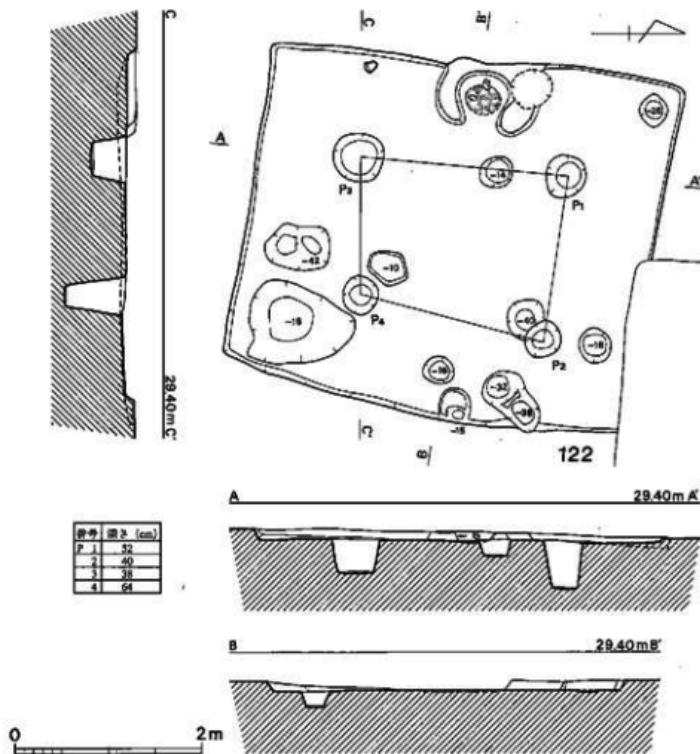
カマド (第164図)

北壁の中央部にあって、作り付け型のカマドである。造構面全体に削平が著しく、火床は焚口のみ赤褐色に焼けており、カマド中央部に支脚の穴が認められた。右袖長105m、幅35cm、左袖長118m、幅30cmを測る。付近には土器片が散在していた。

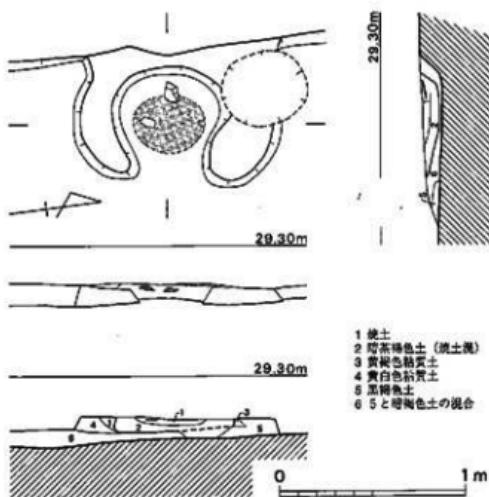
出土遺物 (図版98, 第165図)

須恵器（1～3） 1は返りの無い壺で、復原口径13.2cmである。2は復原口径10.8cmの体部が直立する壺である。体部中位に一条の沈線が巡る。3は壺片で、外体部は細かいカキ目調査である。

土師器（4～9） 4～6は高壺で、5は脚部底辺を欠く。復原口径13.0cm、器高は約9.5cmと推定する。4は15.6cm。6は脚部片である。7は復原口径15.6cmの壺口縁部片。8・9は壺の口縁部片で、瓶に復原口径20.8cm、24.0cmを測る。外体部は刷毛目、内面は削り調整である。胎土には石英、雲母等を含む。



第166図 122号住居跡実測図 (1/60)



第167図 122号住居跡カマド実測図 (1/30)

122号住居跡 (図版70,

第166図)

前記住居と同様の位置で検出した方形の住居跡である。本跡は奈良時代の住居160号に切られており、弥生住居51号・竪穴46号とも切り合っている。平面形は方形で東西壁長約3.9m、南北は中央部で約4.4mを測る。西壁中央にカマドを配する。主柱穴はP1~P4の4本を検出し、柱間間隔はP1~P2が1.8m、P3~P4が1.47m、P1~P3が2.23m、P2~P4が2.04mである。柱の深さは40~65cmと他の住居に比べて深く、しっかりした穴である。

東南隅に長径1.2m、短径0.8m、深さ0.18mの穴を検出した。

カマド (第167図)

北壁の中央部にあって、作り付け型のカマドである。遺構面全体に削平が著しく、壁高は約10cmで、火床は赤褐色で焼けていた。カマド袖は焚口にかけて丸く、右袖長78cm、幅35cm、左袖長70cm、幅25cmを測る。

出土遺物 (図版98、第171図)

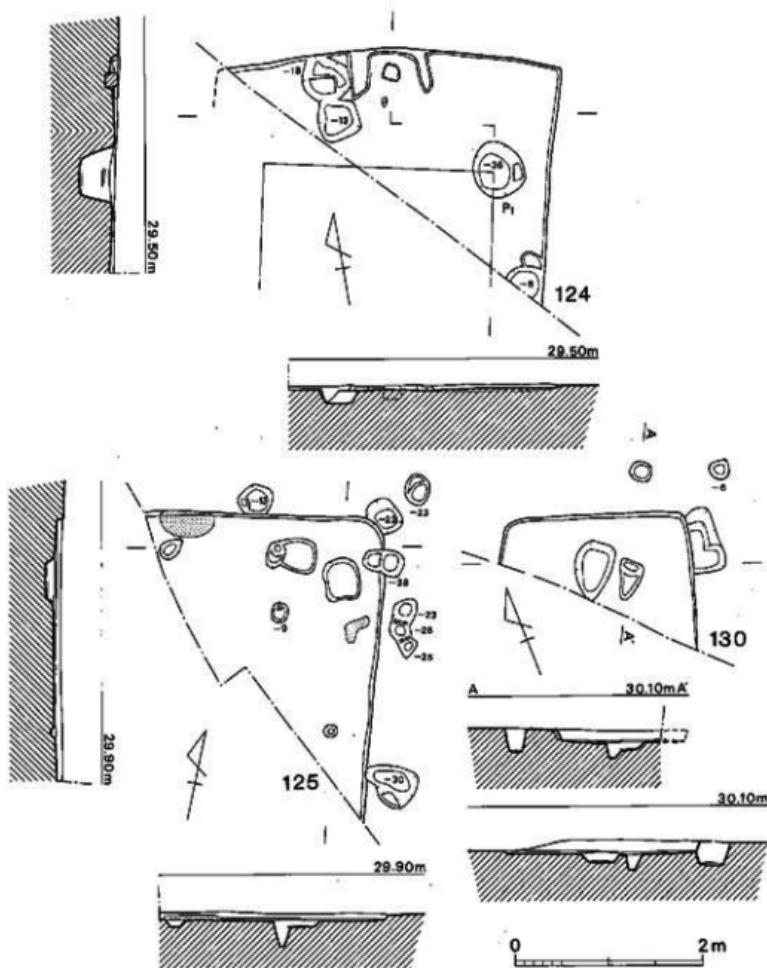
須恵器 (1~5) 1~3は返りの無い蓋である。1は復原口径14.6cm、器高5.3cmで、摘みが付き、天井部に刺突文が巡る。2は復原口径13.0cm、3は12.3cmで、3の天井部には砂が融着している。4は壊身片で、復原口径11.6cm。5は口縁部がやや内弯する広口の蓋で、復原口径9.8cmを測る。

土師器 (6~9) 6は壊身片で、復原口径11.8cmを測り；底部から体部にかけて直に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。7は高壊脚部。8は復原口径17.4cmの鉢である。

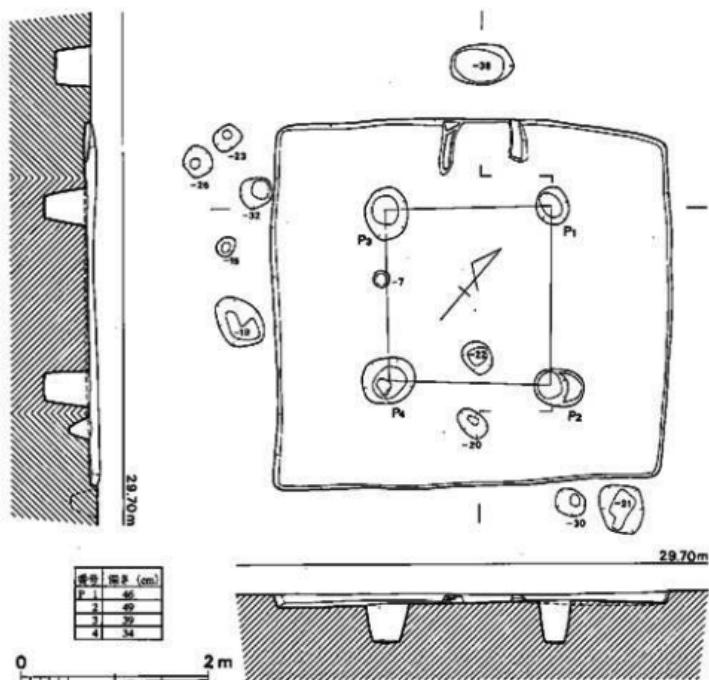
123号住居跡 (第196図)

発掘区の中央、西寄りで検出した。奈良時代住居155・158号に切られている。住居全体が西に偏している。主柱穴はP2~P4を検出した。P2~P4の柱間寸法は1.94m、P3~P4は1.22

mである。北東壁側は明らかでない。柱穴は約15cmの深さである。北西側壁と東南側壁長3.45mである。他は明らかでない。



第168図 124・125・130号住居跡実測図 (1/60)



第169図 126号住居跡実測図 (1/60)

124号住居跡（第168図）

発掘区域の西壁寄りで検出した。住居の1/2は調査区外にある。北壁中央にカマドを設け、東西壁長約3.6m、南北壁長2.5m以上である。側壁はほとんど残存しておらず、残りの良いところで約10cmである。

カマド

北壁の中央で検出した作り付けのカマドである。火床はそれほど焼けておらず、径約20cmの支脚の石を設けていた。両袖は住居の側壁から配されており、右袖長45cm、幅15cmである。左袖長52cm、幅22cmを測る。袖中には粘土と焼土の混在が認められ、土器がカマド付近から出土した。

125号住居跡（第168図）

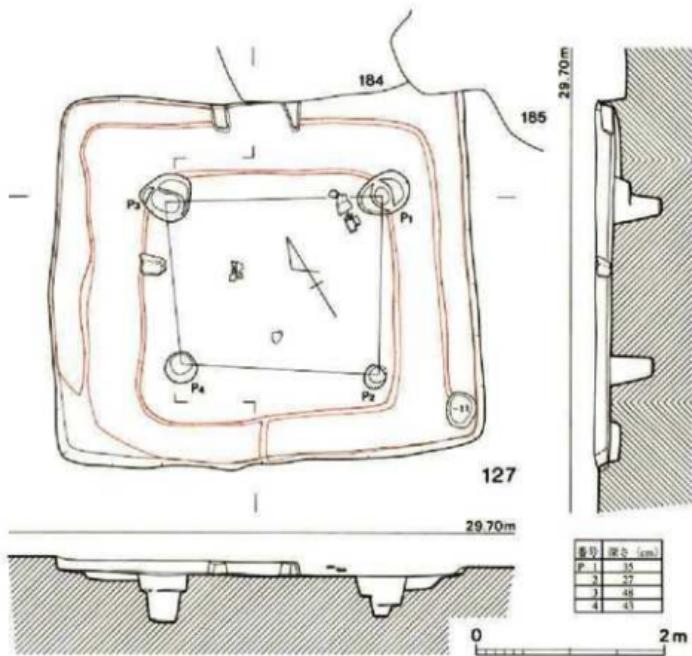
発掘区域の西壁寄りで検出し、124号の北側にある。住居の1/2は調査区外にある。北壁中央に黄灰色粘土の固まりを見る。残存東西壁長2.5m、南北壁長3.3m以上である。

出土遺物（第171図）

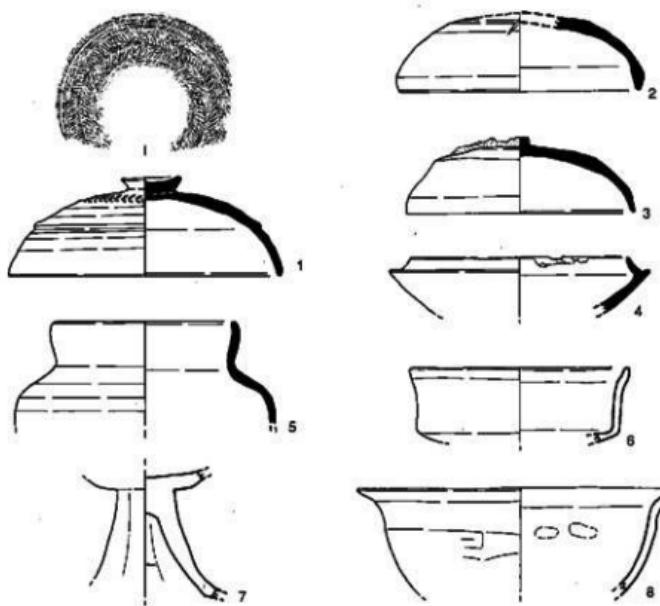
土器（1・2） 1・2とも壺の口縁部片で、胎土に石英・長石を含む。

126号住居跡（図版71、第169図）

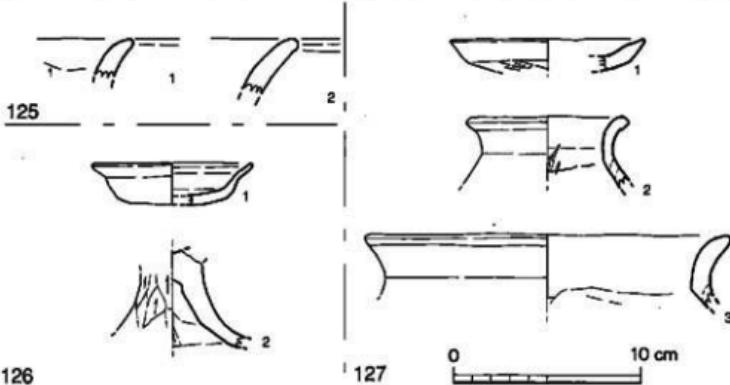
調査区の北側で検出した方形住居である。東西壁長約4.2m、南北は中央部で約3.95mを測る。北壁中央にカマドを配する。主柱穴はP1～P4の4本を検出し、柱間間隔はP1-P2が1.9m、P3-P4が1.82m、P1-P3が1.78m、P2-P4が1.73mである。柱の深さは45cmが平均値で、他の住居に比べて深くしっかりした穴である。



第170図 127号住居跡実測図(1/60)



122

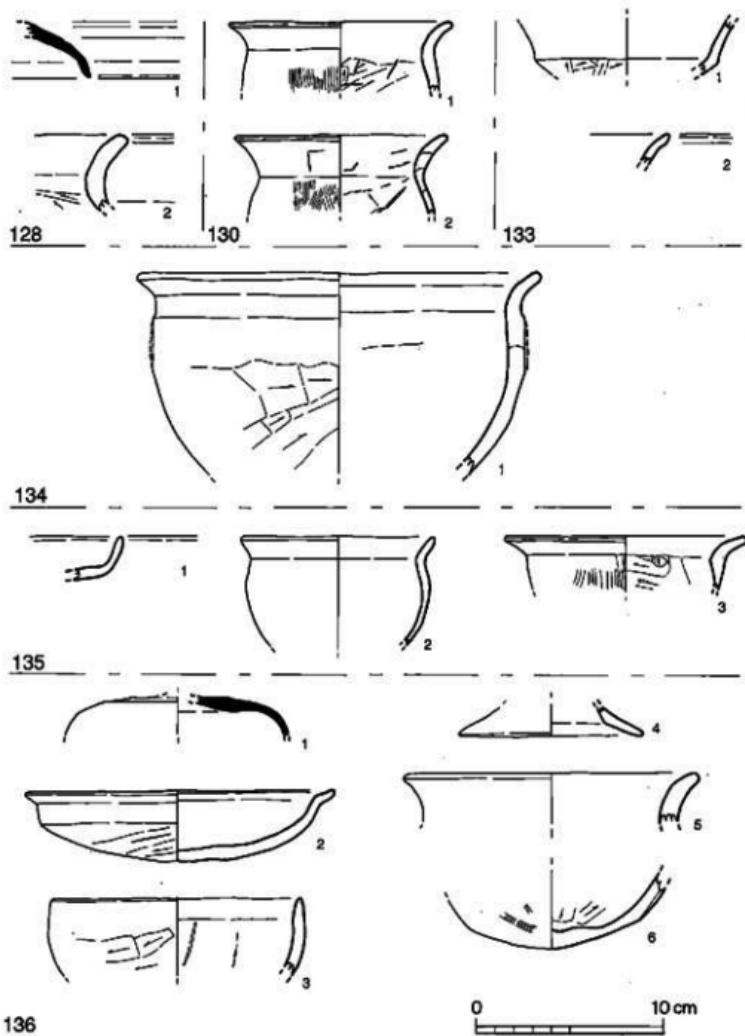


126

127

0 10 cm

第171図 122・125~127号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第172図 128・130・133~136号住居跡出土土器実測図 (1/3)

カマド

北壁の中央部にあって、作り付け型のカマドである。造構面全体に削平が著しく、壁高は約10cmで、火床は若干赤褐色に焼けていた。両袖がよく残存しており、右袖長45cm、幅17cm、左袖長60cm、幅14cmを測る。

出土遺物（第171図）

土師器（1・2） 1は復原口径8.6cm、器高2.2cmの小皿で、口縁端部が外反する。2は高坏脚部片である。

127号住居跡（図版71、第170図）

調査区の北側（126号の西）で検出した方形住居である。北壁と東壁の一部は184・185号住居跡に切られている。東西壁長約4.4m、南北は西寄りで約3.95mを測る。北壁中央にカマドを配する。主柱穴はP1～P4の4本を検出し、柱間間隔はP1～P2が1.9m、P3～P4が1.74m、P1～P3が2.33m、P2～P4が2.12mである。柱の深さは45～55cmで、P1・P3は2段に掘られている。また、下層において幅約60cm、深さ10cmの掘込みが住居内を方形に巡る。

カマド

北壁の中央部にあって、作り付け型のカマドである。火床は若干赤褐色に焼けていた。右袖長32cm、幅17cm、左袖長30cm、幅19cmを測る。袖には粘土と赤褐色土の焼土が混じっていたのが観察された。

出土遺物（第171図）

土師器（1～3） 1は口径10.4cmの小皿である。2は復原口径8.6cmの小皿で、口縁部内面に焼付着。3は復原口径19.6cmの壺片である。

128号住居跡（第218図）

発掘区の北側で検出し、127号住居跡と隣り合っている。奈良時代住居跡181～184号に切られている。西壁に突出型のカマドを配するが、規模等については明らかでない。西壁長3.1mを計測する。

出土遺物（第172図）

須恵器（1） 1は返りの無い蓋である。焼成は硬質。

土師器（2） 2は壺の口縁部片である。

129号住居跡（第221図）

発掘区の北側で検出し、奈良時代住居186・187号住居跡に切られており、規模は明らかでない。東西壁長1.82m、南北壁長2.5mを測る。

130号住居跡（第168図）

発掘区域の西壁に接して検出した。住居の1/2は調査区外である。東西壁長2.0m、南北壁長1.5m以上の小型の住居である。

出土遺物（第172図）

土師器（1・2） 1・2は小型壺の口縁部片で、1は復原口径12.0cm、2は11.4cmを測る。共に外体部は刷毛目、内面は削り調整である。

131・133号住居跡（第205図）

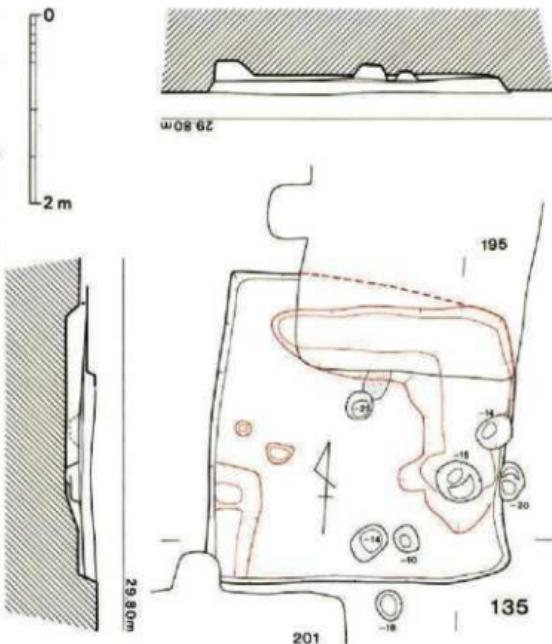
調査区の中央で検出した。共に奈良時代住居167～169号住居跡に切られてしまつた。131号は住居のコーナー部のみを検出したにすぎない。133号は南北壁長3.55m、東西壁長1.8m以上である。東壁中央部に約60cm、深さ10cmの穴を検出した。

出土遺物（第172図）

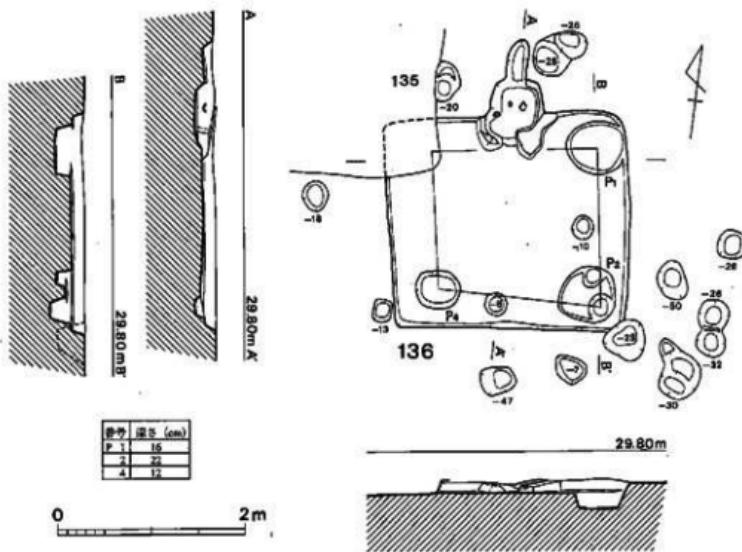
土師器（1・2） 1・2は高壺の身片である。
133号住居跡出土。

132号住居跡（第160図）

発掘区の中央で検出した。住居は118・119・172号住居に切られていて、従って北壁と南壁を検出したのみであり、他の規模等については定かでない。現存する南北長2.85mを測る。



第173図 135号住居跡実測図 (1/60)



134号住居跡（第230図）

発掘区の北側で検出した。住居は196～199号住居に切られている。従って、東壁のみを検出した。

出土遺物（第172図）

土師器 (1) 1は復原口径21.6cmの鍋である。口縁端部が強く外反する。

135号住居跡（第173図）

発掘区北側の壁寄りで検出した。住居は195・201号住居に切られている。カマドは検出されず、おそらく北壁に存在するものと思われる。平面形は方形で、東西壁長3.2m×南北3.32mを測る。主柱穴は明らかでない。

出土遺物（第172図）

土師器 (1～3) 1は壊身片。2は壊片で口径10.4cmで、体部はやや磨滅している。3は壊の口縁部片である。

136号住居跡（第174図）

発掘区北側の壁寄りにあり、135号の東側で検出した。住居は135号住居に切られている。カマドは北壁中央で検出した。平面形は方形で、東西壁長2.56m、南北壁長2.24mを測る。主柱穴は2本ありP1・P2を検出し、その長さ1.8mを測る。カマド（第175図）

北壁の中央部にあって、突出型のカマドである。火床は若干赤褐色に焼けている。両袖が僅かに残り、右袖長32cm、幅17cm、左袖長30cm、幅19cmを測る。突出し長43cmである。

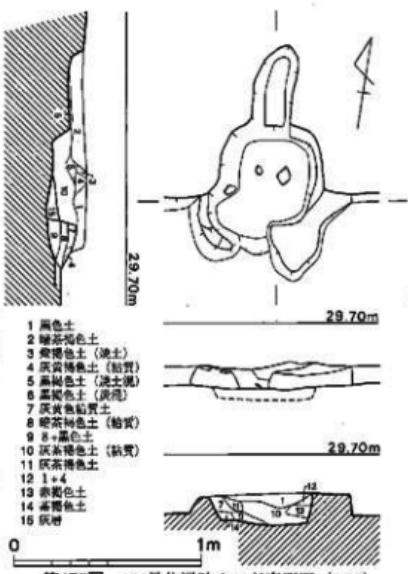
出土遺物（図版98、第172図）

須恵器（1） 盖の破片である。焼成は堅緻。

土師器（2～6） 2は壊身片で底部

は丸底にし、削り調整。口径16.4cm。3

は椀の破片で、口径13.4cm。4は高壊脚部片。5は甕片で、口径15.8cm。体部はやや磨滅している。6は甕の底部片である。



第175図 136号住居跡カマド実測図 (1/30)

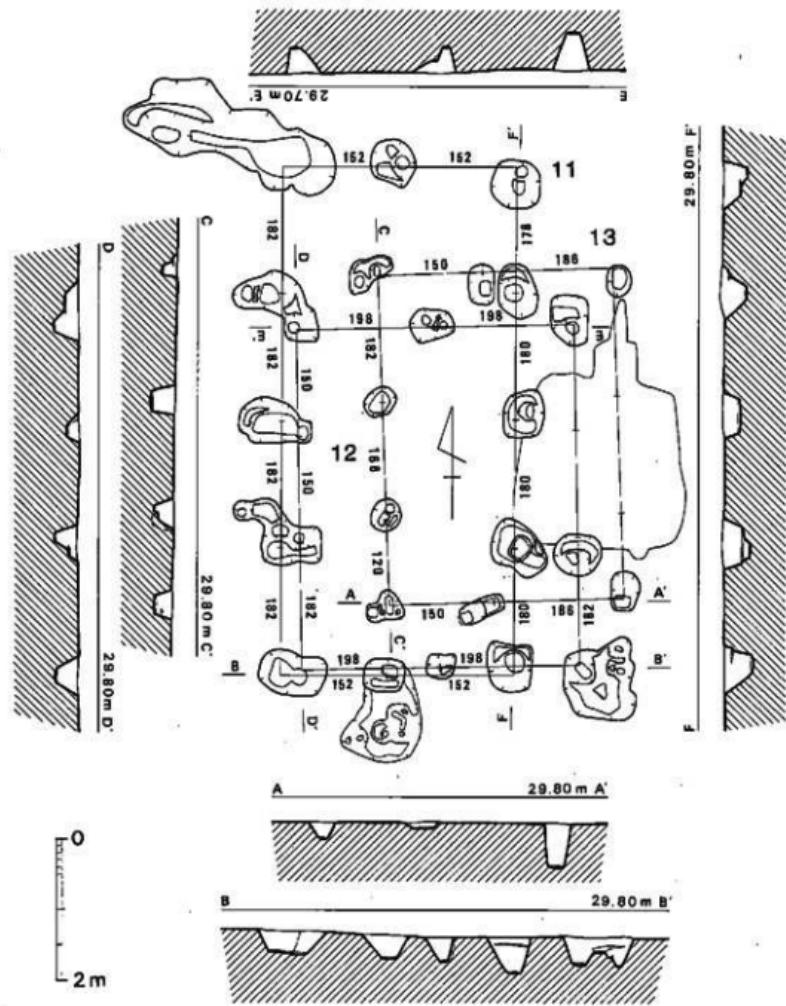
3. 挖立柱建物跡

11・12・13号建物跡（図版92、第176図）

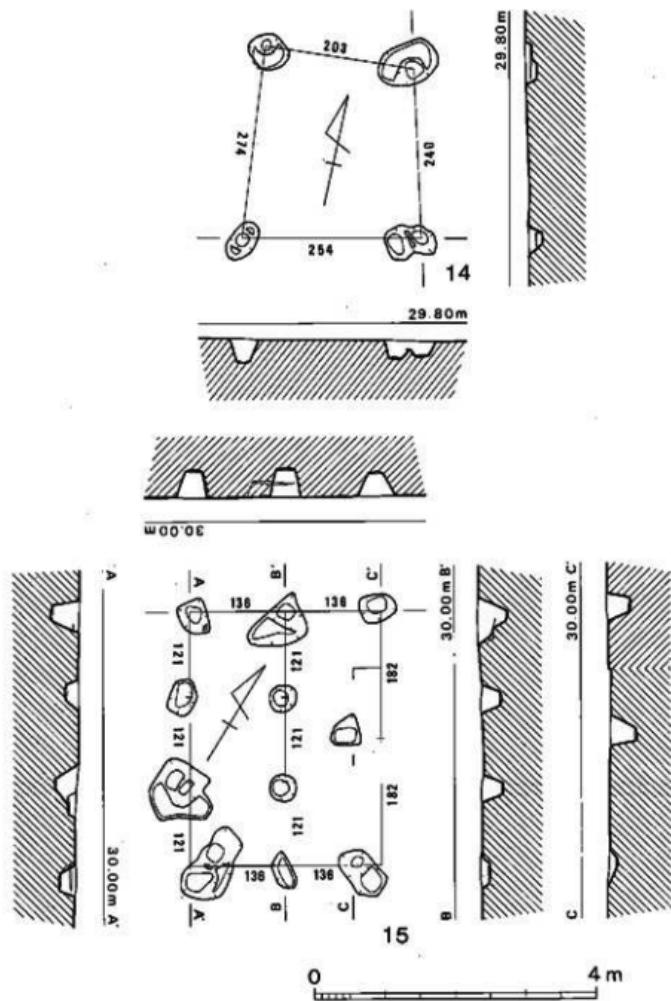
調査区の北側で検出した。掘立柱建物3棟と209号住居が切り合っている。切り合い関係は、古い順に11-12-13-207となる。11号の規模は梁行2間、桁行4間の南北棟で、柱間は梁が152cm、桁が182cm等間を測る。柱穴の掘方は円形で、径50cmである。12号は11号の掘方と重複し、梁行2間、桁行3間の南北棟である。柱間間隔は梁が198cm、桁が150cm2間と182cmの規模である。13号は梁行2間、桁行3間の南北棟で、柱間間隔は梁が150cm、186cm、桁は北から182cm、168cm、120cmを測る。柱掘方は小さく30～40cm、深さ約30cmである。

出土遺物（第180図）

土師器（1・2）1・2は甕の口縁端部で、2は復原口径28.0cm。共に胎土に砂粒を多く含む。2の口縁部は強く外反する。



第176図 11~13号建物跡実測図 (1/80)



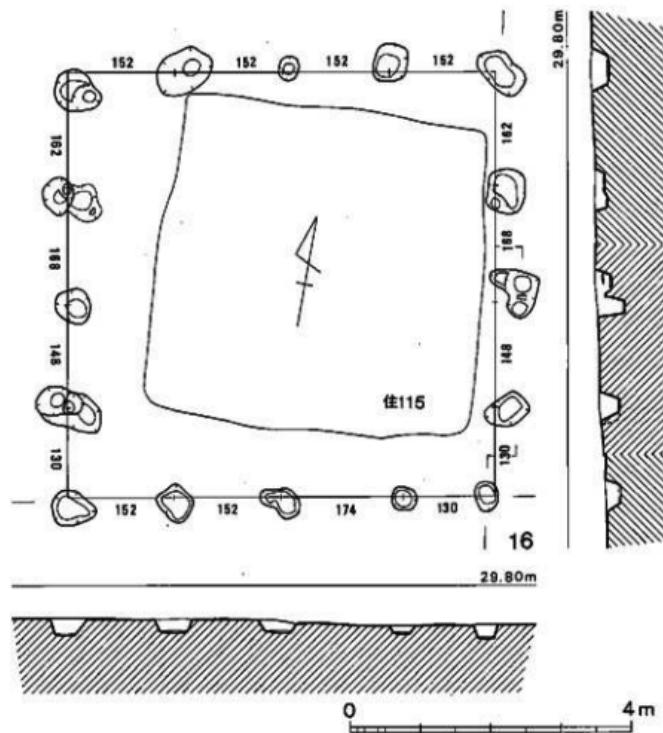
第177図 14・15号建物跡実測図 (1/80)

14号建物跡（第177図）

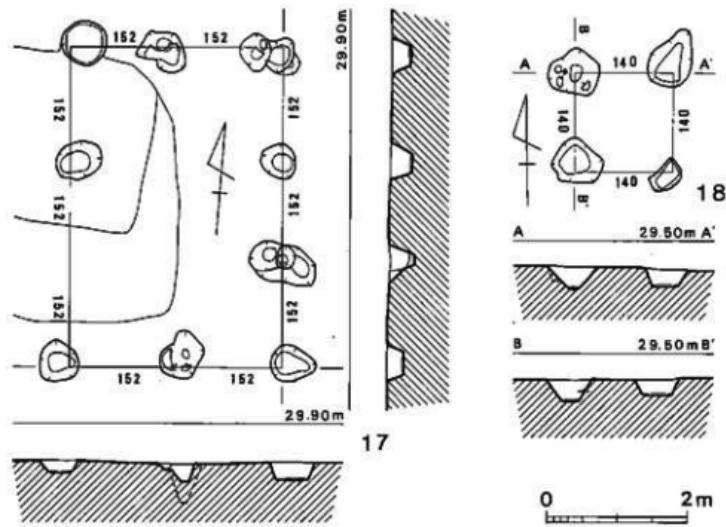
11号の南側で検出した1間×1間規模の建物である。柱間は東西203cm、南北274cmを測る。柱穴は浅く約20cm程で、柱穴の中央にある土壤状遺構を覆う施設かと考えられる。

15号建物跡（第177図）

調査区の北側で検出した2間×3間の南北棟で、純柱建物である。柱間間隔は梁行136cm、桁



第178図 16号建物跡実測図 (1/80)



第179図 17・18号建物跡実測図 (1/80)

行121cmの等間である。東側柱列中央2穴は検出されなかつたが、その列よりやや内側中央に柱穴1個を検出し、この穴が構造上何等意味するものと考えられる。

出土遺物（第180図）

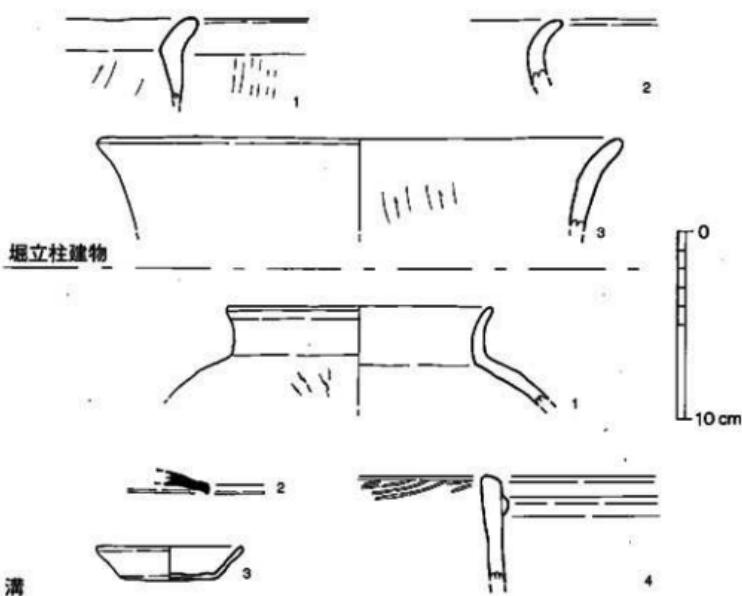
土師器 (3) 3は瓶の口縁端部片である。

16号建物跡（第178図）

調査区の北側中央に、115号住居を取り囲む状態で検出された。115号との前後関係は住居が先行する。規模は梁行4間、桁行4間のほぼ正方形をした建物で、柱間は北側梁行が152cm等間、南側梁行が東側2間のみ174cm、130cmである。桁行は描っておらず、北から順に162cm、168cm、148cm、130cmを測る。柱穴の掘方は不整円形で、径50cm前後のものが多い。深さは20~40cmである。

17号建物跡（第179図）

16号建物と並列して検出した。16号の西桁行列柱穴と重複しており、本建物を16号が切っている。また、209号住居と切り合っており、住居が新しい。規模は梁行2間、桁行3間の建物



第180図 建物跡、出土土器実測図 (1/3)

で、柱間は梁行・桁行とともに152cm等間を測る。柱穴の掘方は不整円形で、径50cm前後のものが多い。深さは20~40cmである。

18号建物跡（第179図）

調査区の中央南寄りに検出した1間×1間規模の建物である。柱間間隔は梁行・桁行ともに140cmを測る。柱穴は浅く約20~30cmである。

4. 土 壤

101号土壤 (第181図)

調査区の北域において検出した。平面は長円形で長径160cm、短径107cm、深さ32cmである。方位はN-83° 40' -E。

102号土壤 (第181図)

調査区の中央、北域において検出した。平面は長円形で長径196cm、短径112cm、深さ12cmである。方位はN-7° -W。

103号土壤 (第181図)

調査区の中央、西域において検出した。48号竪穴を切っている。平面は長円形で、2段に掘られていて長径206cm、短径94cm、深さ22cmである。方位はN-8° -W。

出土遺物 (第182図)

土師器 (1) 1は高壺の身部で、復原口径15.0cm。脚部は欠損している。

104号土壤 (図版93、第181図)

調査区の中央、西域において検出し、103号土壤の南側に位置する。弥生住居53号を切っている。長径238cm、短径200cm、深さ41cmである。方位はN-42° -E。

出土遺物 (第182図)

土師器 (1~9) 1は復原口径11.8cmの壺。2は口径17.2cm、器高3.2cmの皿か。3~4は高壺脚部。5は小型の広口壺で復原口径8.2cm。外体部は削り調整。6~8は壺片で、7は口径13.8cm、8は22.6cmを割る。9は把手片。

105号土壤 (第181図)

104号の西側において検出し、121号住居に伴うものか。また弥生住居53号を切っている。長径148cm、短径98cm、深さ20cmである。方位はN-90° -E。

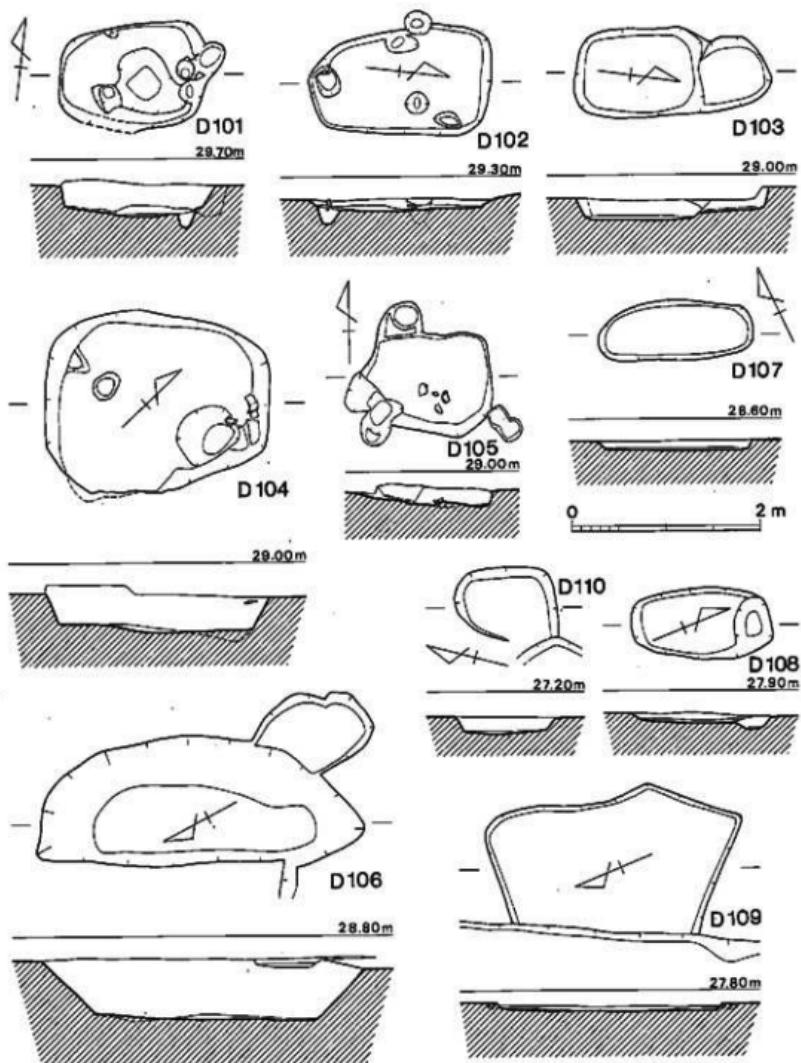
出土遺物 (第182図)

須恵器 (1・2) 1は壺身で復原口径10.4cm、器高3.4cm。2は壺の口縁片。

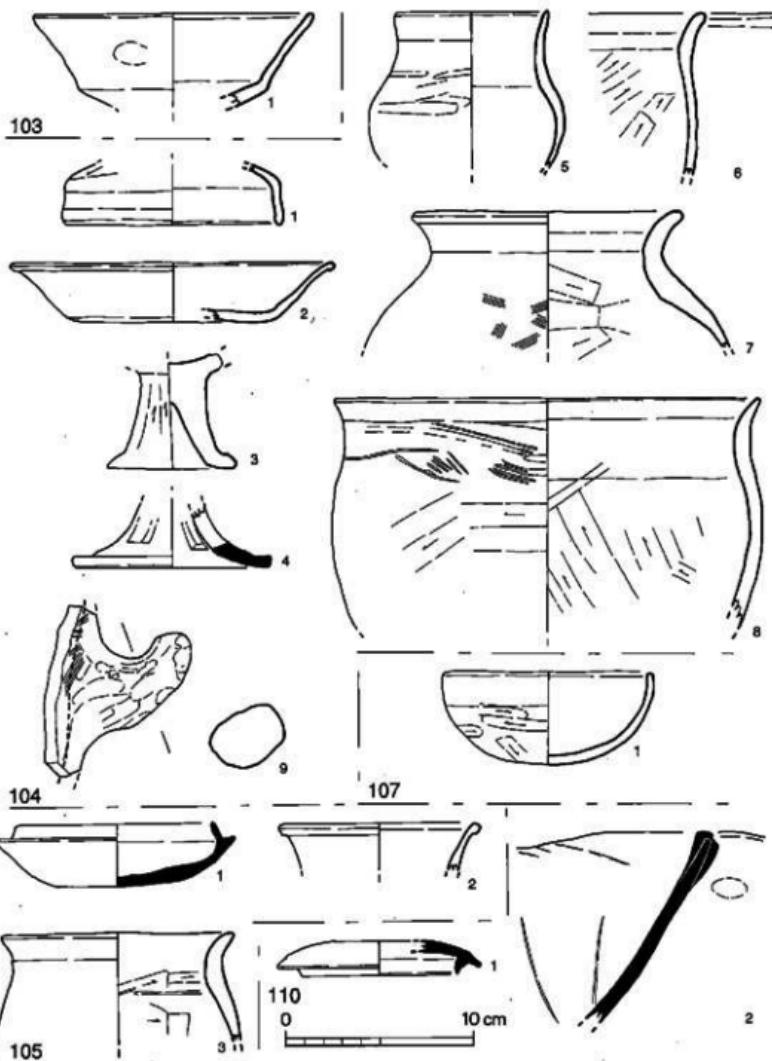
土師器 (3) 3は復原口径12.2cmの壺口縁部片。

106号土壤 (第181図)

調査区の南域において検出した。長径344cm、短径138cm、深さ64cmである。方位はN-28° -



第181図 101~110号土壤実測図 (1/60)



第182図 103~105・107・110土壤出土土器実測図 (1/3)

E。土層は単層で、出土遺物は少ない。

107号土壤（第181図）

調査区の南域において検出した。小さい土壤で長径164cm、短径63cm、深さ11cmである。方位はN-65° 30' -W。

108号土壤（第181図）

調査区の南域において検出した。小さい土壤で長径149cm、短径76cm、深さは最深部で14cmである。方位はN-24° -E。

109号土壤（第181図）

調査区の南域において検出した。プランは不整形で、規模は土壤中央で長径244cm、短径143cm、深さは最深部で4cmである。土壤という遺構か否か判断しがたい。

110号土壤（第181図）

調査区の南域、東区で検出した。プランは不整形で、規模は土壤中央で長径108cm、短径78cm、深さは最深部で20cmである。

出土遺物（第182図）

須恵器（1・2） 1は蓋で、復原口径8.6cm、器高1.8cmを測る。時期的に新しいものか。2は鉢の破片か。

5. 溝

1号溝 調査区の東端で検出した。検出長5m、幅0.4m、深さ0.3mである。

2号溝 調査区の南端で検出し、幅1.0~2.0m、長さ12.0m、深さ略0.4mを測る。

3号溝 溝2の東側で検出。幅略0.5m、長さ10.0m、深さ0.3~0.5mである。

出土遺物（第180図）

須恵器（2） 蓋の破片である。復原するに耐えない資料である。溝3出土。

土師器（1・3） 1は壺口縁片で、復原口径14.0cmを測る。3は口径7.8cm、器高1.8cmの特小皿で、底部は糸切り痕である。古墳・奈良時代の遺構に伴うものではなく、時期的には4と同じ16世紀頃の遺物と思われる。1は溝1出土。3は溝3出土。

瓦質土器 (4) 4は火合片か。口縁部に凸帯が巡る。溝3川土。

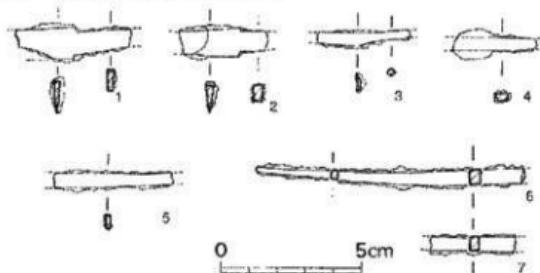
6. その他の出土遺物

鉄 器 (図版110, 第183図)

刀子 (1~4) 1は103号住居カマドから検出し、残存長4cmである。2は残存長2.9cmで、茎部のみ。105号住居出土。3・4は茎部で、残存長4cm。4は残りが悪く、ともに107号出土。

鎌 (6・7) 茎部で6から残存長9.4cm, 2.85cmを測る。

不明鉄製品 (5) 鉄錆が著しく明らかでない。



第183図 鉄器実図図 (1/2)



調査風景

表 3 住居跡・土壤新旧番号对照表

(住居跡)

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
101	185	111	36	121	160	131	182
102	8	112	19	122	155	132	173
103	62	113	18	123	147	133	179
104		114	39	124	123	134	96
105	70	115	38	125	101	135	97
106	51	116	24	126	113	136	99
107	47	117	34	127	109		
108	41	118	28	128	220		
109	43	119	174	129	116		
110	65	120	144	130	83		

(土壤)

新番号	旧番号	新番号	旧番号
101	41	106	22
102	44	107	100
103	123	108	110-A
104	90	109	28
105	120	110	7

VI 奈良時代の遺構と遺物

1. 遺構の概要

奈良時代の遺構は、発掘調査区の中央から北寄りに集中して検出した。その主な遺構は、竪穴住居跡76軒、掘立柱建物跡20棟、土壙16基である。住居、掘立柱建物の検出状態とそれらの方向性から東西方向に遺構は延びている。特に竪穴住居跡と掘立柱建物、土壙の配置状況は奈良時代の集落状況を考える上で重要と考えられ、同時代の住居の重複関係及び集落の変遷等については後述することとする。古墳時代の住居との重複が著しく、適宜番号を付したことから、住居番号が散在してしまった。なお、住居のカマドについては比較的残存状態の良好なものについて掲載し、住居の寸法については住居中央部で計測した。

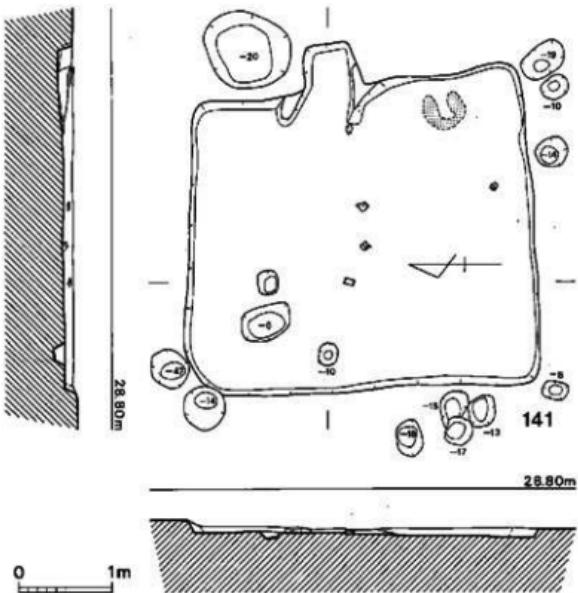
2. 竪穴住居跡

141号住居跡

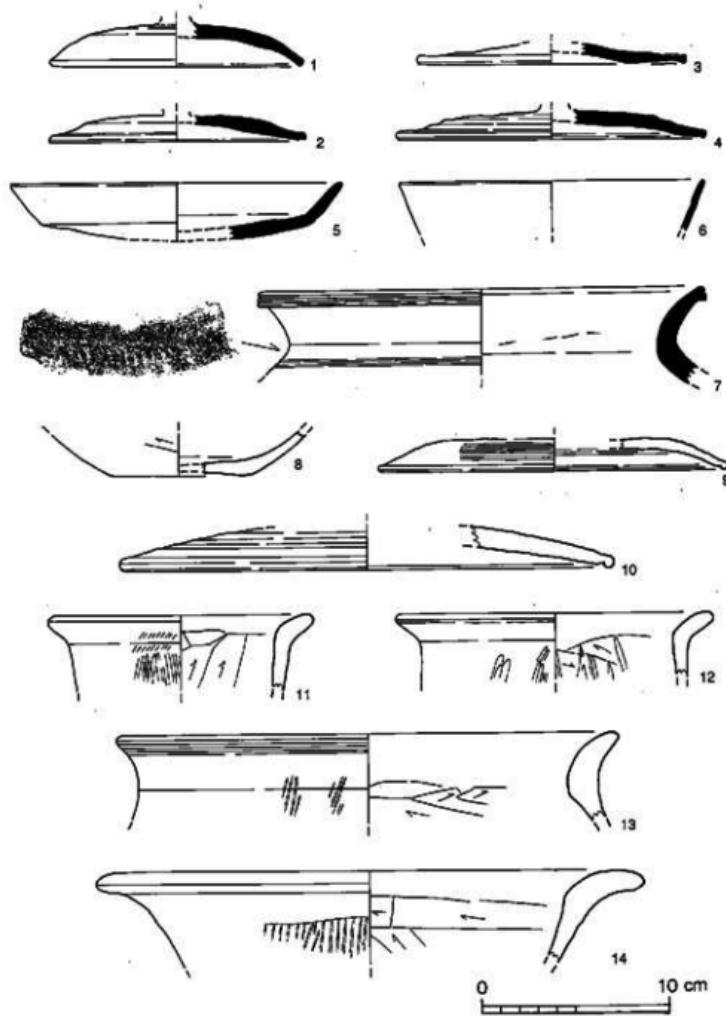
(図版71、第184図)

調査区の南端、東寄りに位置する。東西3.2m×南北3.7mを測る方形の住居である。東壁中央部にカマドを配し、右袖の右側には粘土と焼土の高まりがあった。柱穴は検出されなかった。削平が著しく、壁高約10cmである。カマド

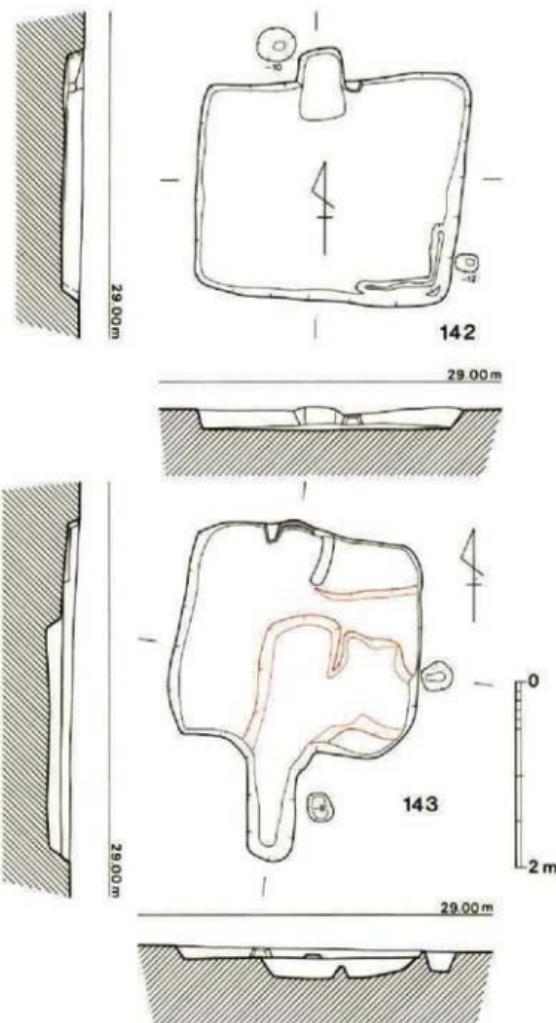
東壁北寄りに突出型のカマドを配



第184図 141号住居跡実測図 (1/60)



第185圖 141号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第186図 142・143号住居跡実測図 (1/60)

す。幅60cm、奥行き40cmで壁から両袖を設けている。右袖長44cm、幅18cm、左袖長32cm、幅26cmである。火床はかなり焼けていた。

出土遺物（図版99、第185図）

須恵器（1～7） 1から4は蓋で、4は復原口径16.4cmと大きい。他は13.2～14.4cmである。1は鏡に転用している。5は復原口径17.8cmの皿。6は口径15cmの坏身口縁部である。7は甕の口縁部片で、口径25.4cmを測る。

土師器（8～14） 9・10は蓋で、体部はミガキ調整を施し、返り端部に沈線をもつ。10は大型のもので復原口径26.4cmを測る。8は坏底部片。11・12は小型の甕片で、11から口径14.2cm、17.0cmである。11は口縁に煤付着。13は口径27.0cmの甕口縁部片。14は口唇部を厚くする鍋の破片で、復原口径29.4cmを測る。外体部は粗い刷毛目調整。

142号住居跡（図版72、第186図）

調査区の中央部付近にあって、豪墳墓群の北に位置し、竪穴42号と切り合い関係にある。東西2.86m×南北2.32mを測る方形の住居である。北壁中央部にカマドを配し、右袖のみ僅かに残る。柱穴は検出されなかった。削平が著しく、壁高約20cmである。

カマド

北壁寄りに突出型のカマドを配す。幅50cm、奥行き40cmで、側壁から右袖のみを検出した。右袖長14cm。火床の焼けはあまり。

出土遺物（第187図）

土師器（1～5） 1は蓋で体部にミガキ調整を施し、復原口径22.0cm。2は口縁部を内弯する椀で、口径12.4cmである。3は体部が大きく開く坏身である。復原口径19.2cm。4・5は甕の破片で、4から口径18.0cm、26.0cm。

143号住居跡（図版72、第186図）

142号住居跡の南側に位置する。東西2.6m×南北2.34mを測る方形の住居である。北壁中央部にカマドを配し、南壁中央、カマド対面に幅50cm、長さ1.2mの入口状の突出部がある。柱穴は検出されなかった。

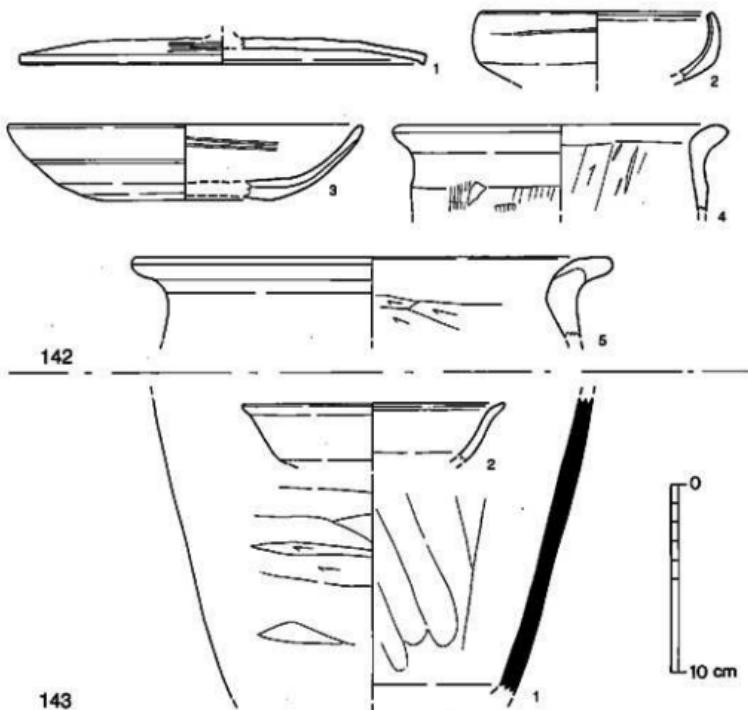
カマド

北壁中央に作り付けのカマドを配す。右袖長54cm、幅12cm、左袖長20cm、幅16cmである。火床の焼けはあまり。

出土遺物（第187図）

須恵器（1） 甕及び壺の体部片であろう。胎土に石英を多く含む。

土師器（2） 復原口径14.0cmの坏身。口縁端部をやや外弯する。



第187図 142・143号住居跡出土土器実測図 (1/3)

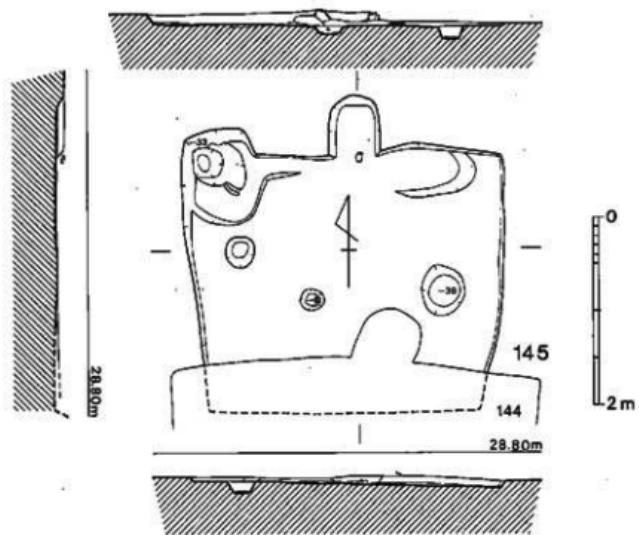
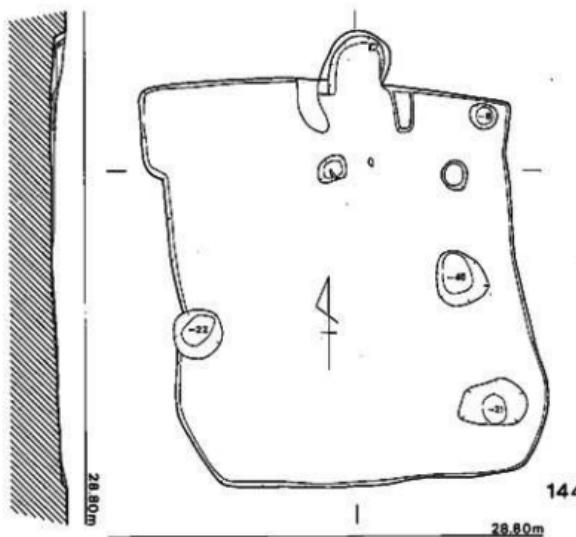
144号住居跡 (図版73, 第188図)

143号住居跡の南側に位置する。東西3.68m×南北4.34mを測る方形の住居である。北壁中央部にカマドを配す。主柱穴は定かでない。145号住居を切っている。

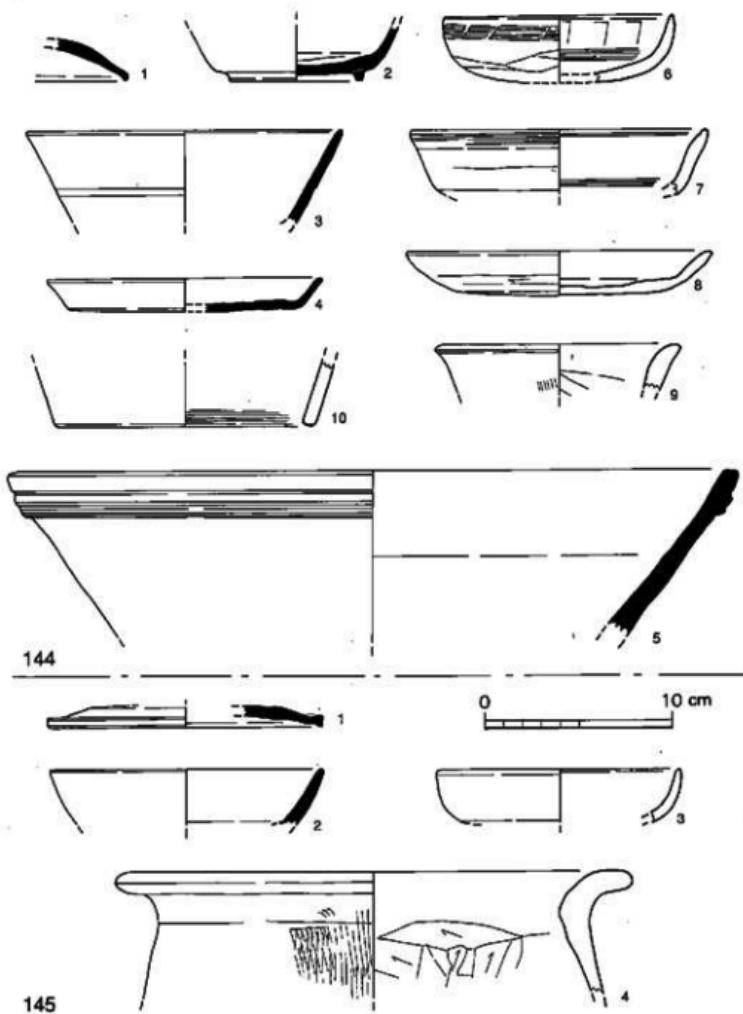
カマド

北壁中央にあって、突出型を呈するが壁から両袖を設けるカマドである。壁から幅58cm, 奥行き60cmを測り、右袖長50cm, 幅20cm, 左袖長55cm, 幅22cmである。火床の焼けはあまり。出土遺物 (図版99, 第189図)

須恵器 (1~5) 1は蓋の破片。2・3は高台付坏身片である。4は口径14.8cm, 器高1.8cmの皿



第188図 144・145号住居跡実測図 (1/60)



第189圖 144・145号住居跡出土土器実測図（1/3）

で、硯として利用している。5は大甕の口縁か。復原口径39.2cm。

土師器（6～10） 6・7は坏身で、6は復原口径12.2cm。体部上位及び内面に丁寧な刷毛目調整を見る。8は皿で口径16.4cm。9は甕底部片である。

145号住居跡（図版73、第188図）

144号住居から切られている。東西3.38m×南北2.14m以上を測る方形の住居である。北壁中央部にカマドを配す。主柱穴は定かでない。北西隅部で北壁のみ約30cm張り出し、深さ38.6cmの穴が穿たれていた。

カマド

北壁中央にあって、突出型を呈するカマドである。側壁から幅56cm、奥行き63cmを測る。火床の焼けはあまり。

出土遺物（図版99、第189図）

須恵器（1・2） 1は復原口径14.8cmの蓋破片。2は坏身片である。

土師器（3・4） 3は口径13.0cmの坏身で煤付着。4は甕口縁部破片。カマド内出土。

146号住居跡（図版73、第190図）

調査区西壁寄りで検出した。147～150号住居を切っている。東西3.32m×南北3.08mを測る方形の住居である。西壁中央部にカマドを配す。主柱穴は明らかでない。

カマド（図版74）

西壁中央にあって、突出型のカマドである。側壁から幅90cm、奥行き50cmで、さらに60cmの運出しが延びる。壁からは両袖が延び、左袖長70cm、幅38cmである。右袖は明らかでない。

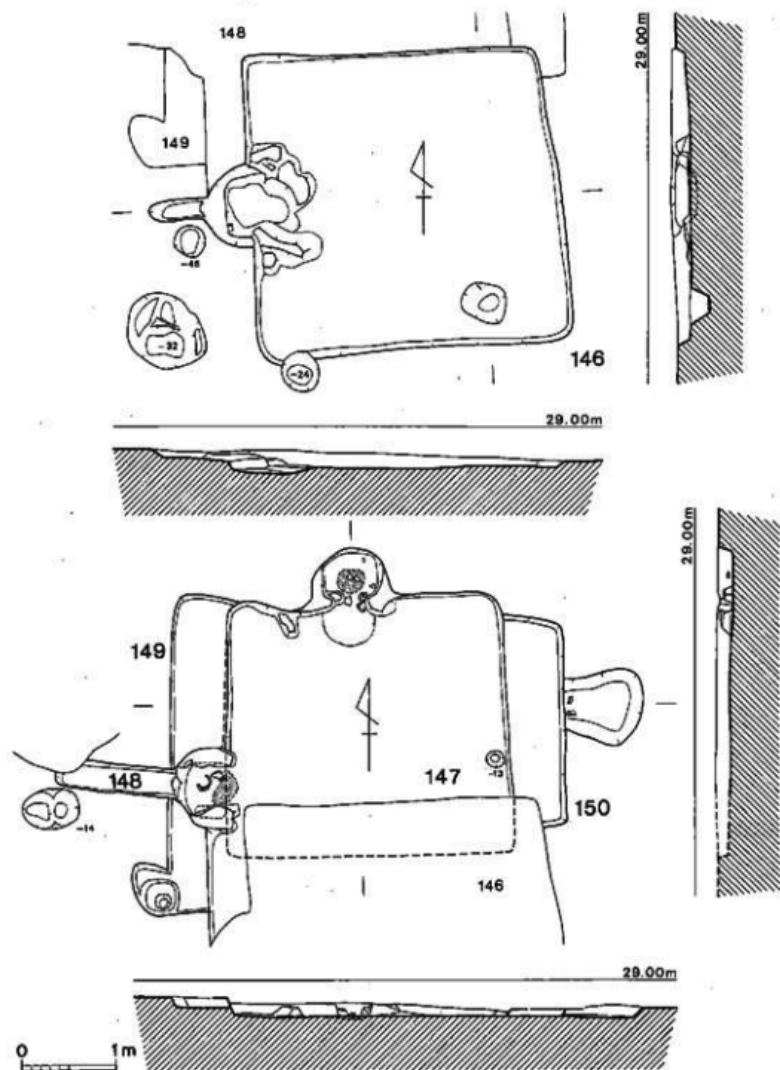
出土遺物（図版99、第191図）

須恵器（1・2） 復原口径13.2cm、12.6cmの坏身片である。

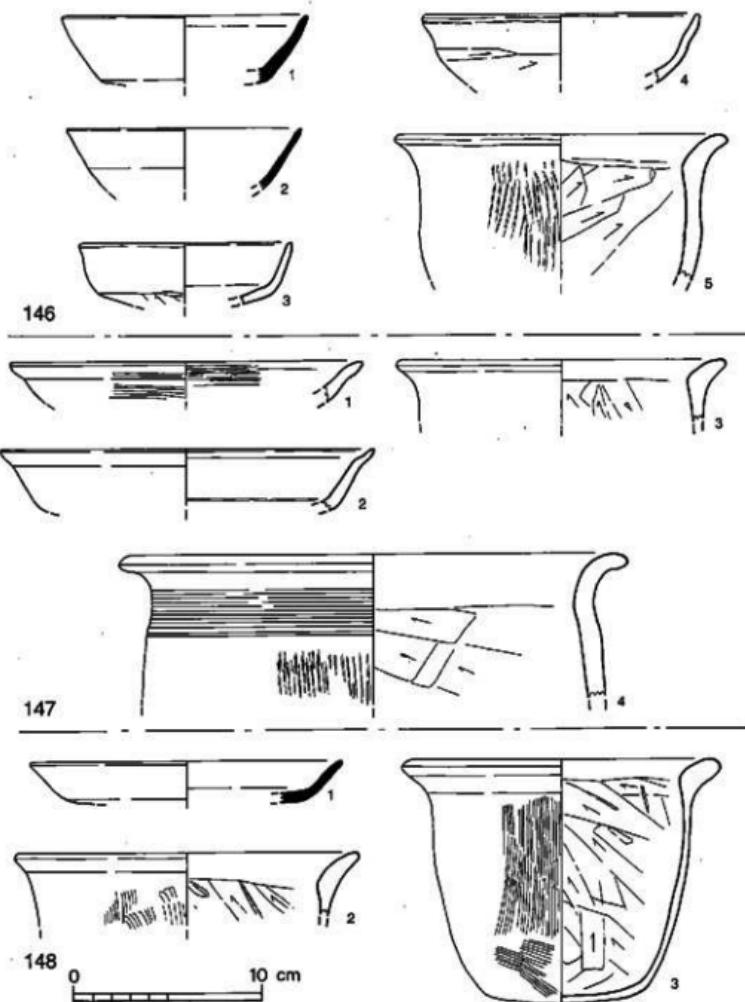
土師器（3・4） 3・4は坏身片で、3は口径11.3cm、4は14.8cmで口縁に煤付着。カマド内出土。5は甕破片で、外体部は粗い刷毛目調を見た。

147・148・149・150号住居跡（図版73・74、第190図）

すべて146号住居に切られた方形の住居である。切り合ひ関係は古い順に149・150・148・147号となる。147号は北壁に突出型のカマドを有し、両袖は手前で丸く閉じる形をとる。149号のカマドと合ひ重なる。148号住居は西壁と突出型のカマドを検出したのみである。残存壁長3.3m。カマドは幅86cm、奥行き50cmで、幅30cm、長さ125cmの煙道が延びる。両袖中に土器を含み、中央に土器の支脚を見る。149号は南北2.20m×東西0.6m以上である。150号は南北2.22m×東西0.60m以上の方形の住居である。いずれも主柱穴は検出されなかった。



第190図 146・150号住居跡実測図 (1/60)



第191図 146~148号住居跡出土土器実測図 (1/3)

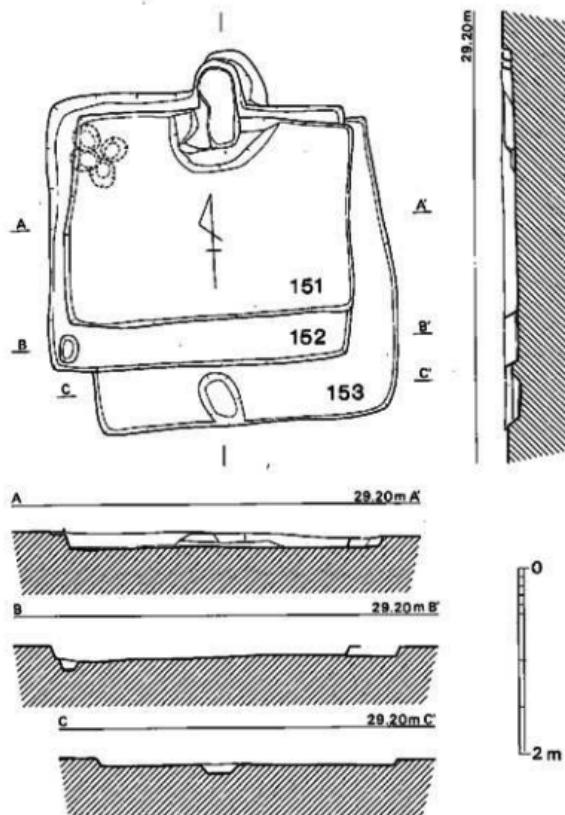
147号住居跡出土遺物（第191図）

土器器（1～4） 1・2は皿の破片で、1は内外面にミガキを見る。復原口径は順に18.8cm, 20.0cm。3は口径17.6cm, 4は27.2cmの甕口縁部である。4はカマド内出土。

148号住居跡出土遺物（図版99, 第191図）

須恵器（1） 復原口径16.8cmの皿片である。焼成は硬質。

土器器（2・3） 甕破片で2は復原口径18.4cm。3は口径17.0cm, 器高13.1cmの甕で口唇部は厚く、外体部は刷毛目、内面は削り調整である。胎土に石英・雲母片を含む。



第192図 151～153号住居跡実測図 (1/60)

151・152・153号住居跡（図版75, 第192図）

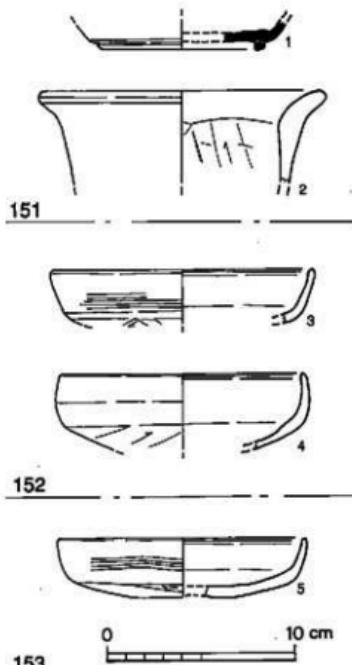
調査区西区域寄りに検出した。切り合ひ関係は古い順に153-152-151となる。151号の規模は東西3.0m×南北2.24mで北壁中央に突出型のカマドを有する。カマドは幅42cm、奥行き40cmで、左袖のみが残存する。左壁長46cm、幅22cmである。152号は東西3.24m×南北2.92m。153号は東西3.25m×南北3.2mを測る。カマドはすべて151号に切られて規模は明らかでない。いずれも主柱穴は検出されなかつた。

151・152・153号住居跡出土遺物

（図版99, 第193図）

須恵器（1）復原底径9.0cmの壺身片である。焼成は硬質。151号出土。

土師器（2～5）壺破片では2は復原口径15.4cm。151号出土。3～5は口径14.2cm, 13.2cm, 13.4cmの壺身で、3・5は外体部を工具状のもので丁寧にナデている。3・4は152号出土。5は153号出土。



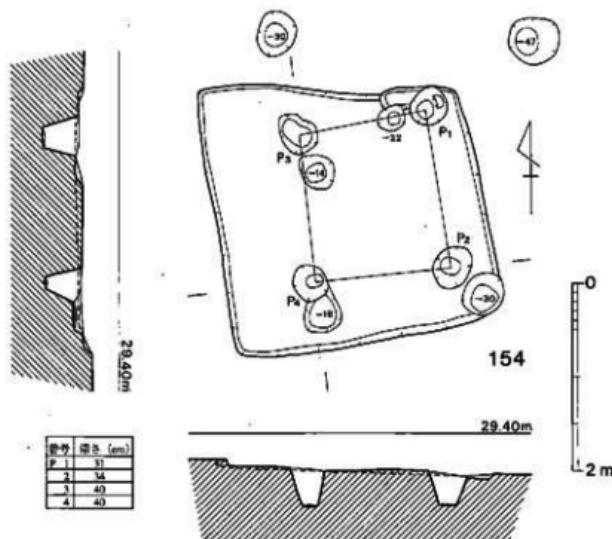
第193図 151～153号住居跡出土土器実測図（1/3）

154号住居跡（図版75, 第194図）

調査区域の西壁寄りで検出した。比較的小型の住居で、規模は東西2.84m×南北2.7mのやや亞んだ方形住居である。主柱穴はP1～P4を検出した。柱間間隔はP1-P2が1.7m, P1-P3が1.38mを測る。柱穴は30～40cmと深い。

155・156・157号住居跡（図版76, 第196図）

調査区域の西側寄りで検出した。切り合ひ関係は古い順に157-156-155となる。155号の規模は東西3.2m×南北3.1mの方形を呈し、北壁中央に突出型のカマドを有する。主柱穴はP1～P4を検出した。柱間間隔はP1-P2が1.46m, P1-P3が1.58mを測る。柱穴の深さは24～30cmである。156号は東西2.84m×南北1.8m以上を確認した。北壁中央に突出型のカマドを配す。



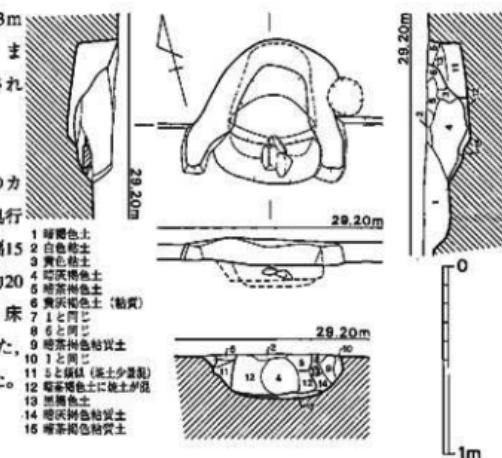
第194図 154号住居跡実測図 (1/60)

157号は東西1.5m以上×南北2.3mを測る。カマドは検出されず、また156・157号の主柱穴は検出されなかった。

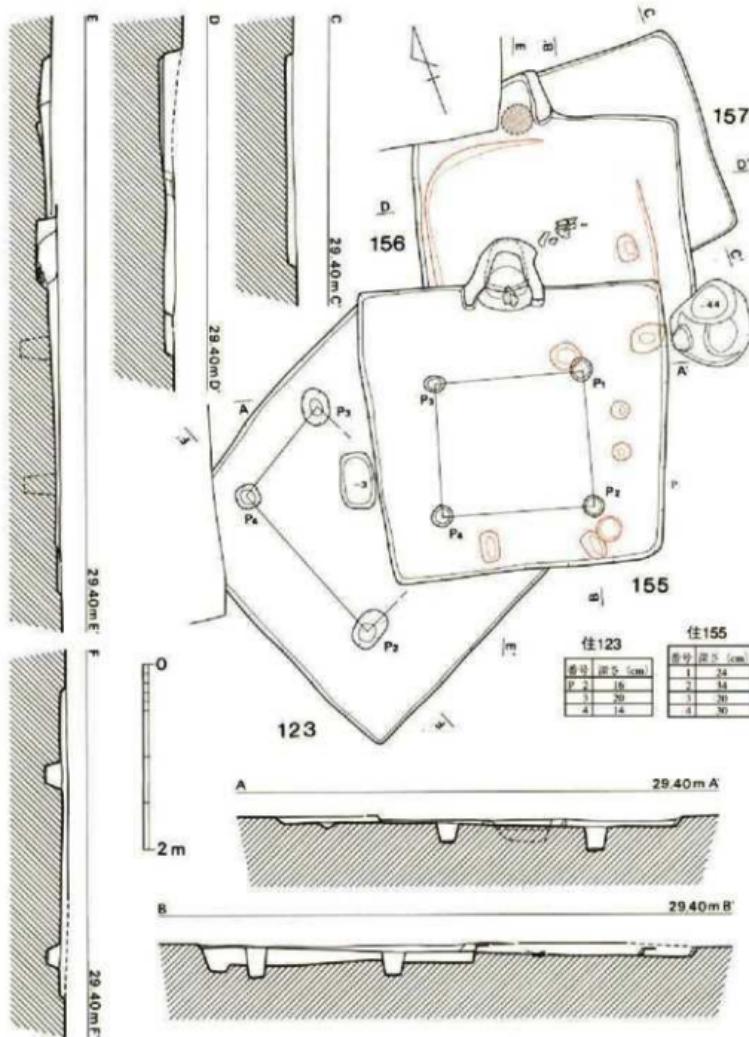
155号カマド (第195図)

北壁中央で検出した突出型のカマドである。規模は幅84cm、奥行き53cmを測り、右袖長35cm、幅15cm、左袖長25cm、幅中央部で約20cmを測る。火床を約10cm盛め、床面は赤褐色に焼けていた。また、カマド前面に拳大の石を検出した。

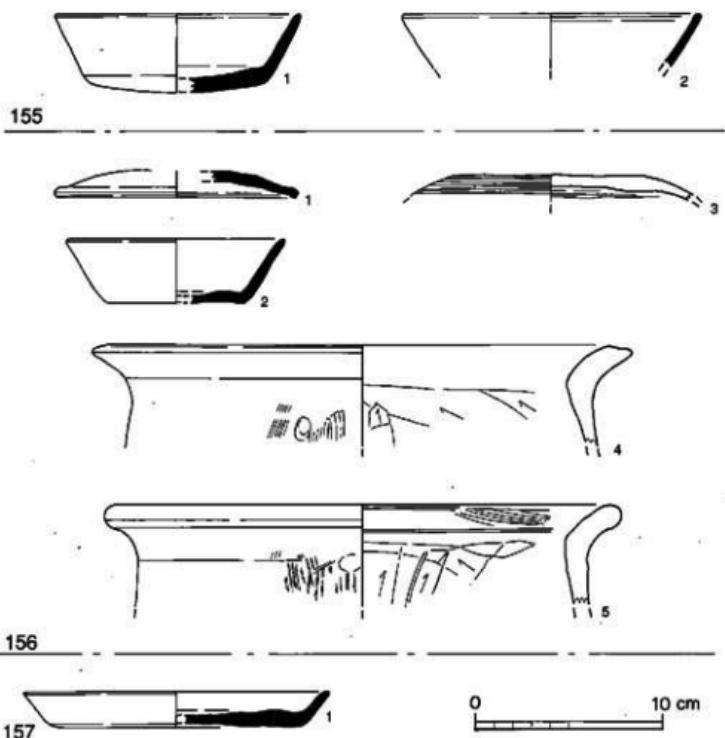
155号住居跡出土遺物
(図版99、第197図)



第195図 155号住居跡カマド実測図 (1/30)



第196図 123・155~157号住居跡実測図 (1/60)



第197図 155～157号住居跡出土土器実測図 (1/3)

須恵器 (1・2) 復原口径 13.2cm, 16.0cmの壊身である。

156号住居跡出土遺物 (図版99, 第197図)

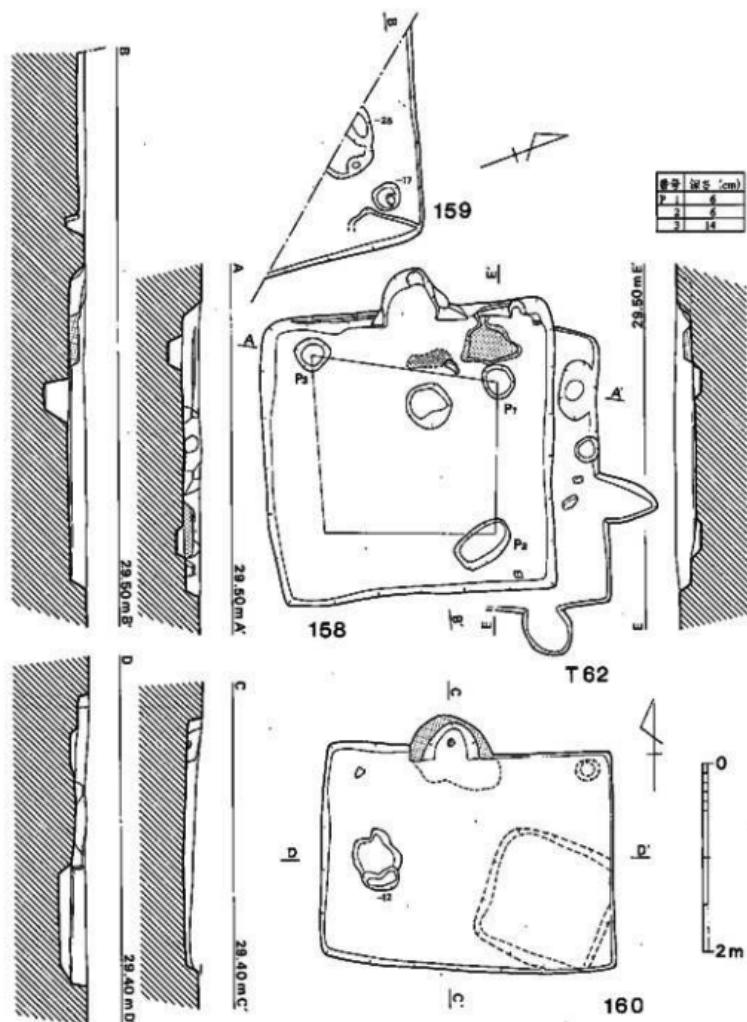
須恵器 (1・2) 1は壊蓋である。2は復原口径11.8cm, 器高3.4cmの壊身。

土師器 (3～5) 3は蓋の破片。4・5は復原口径29.0cm, 27.8cmの壊片である。胎土には細砂粒を含み、焼成は硬質である。

157号住居跡出土遺物 (図版99, 第197図)

須恵器 (1) 復原口径16.4cm, 器高1.9cmの皿である。胎土には細砂粒を含み、焼成は硬質である。

158・159号住居跡 (図版76, 第198図)



第196図 158~160号住居跡, 62号竪穴実測図 (1/60)

158・159号住居跡（図版76, 第198図）

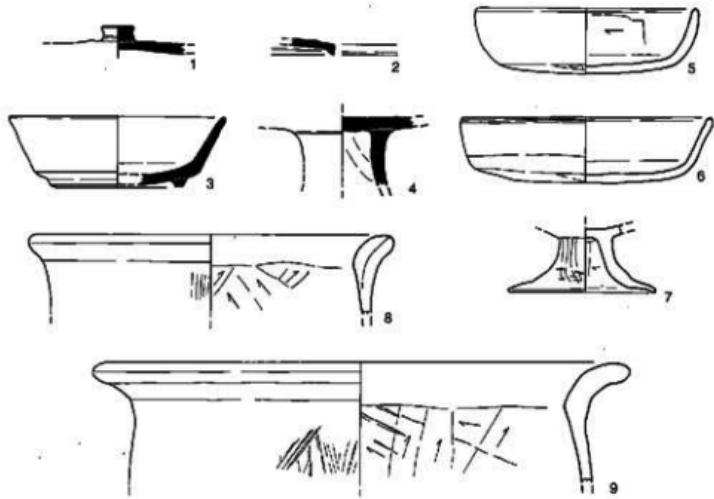
調査区域の西側寄りで検出した。158号の規模は東西3.04m×南北3.1mの方形プランを呈し、西壁中央にカマドを配し、右袖前に粘土の固まりがある。主柱穴はP1～P3を検出した。柱間間隔はP1-P2が1.6m, P1-P3が2.0mを測る。柱穴の深さは10～15cmと浅い。159号は2/3以上が調査区外で東西2.05m, 南北1.7mを検出した。

158号カマド

北壁中央で検出した突出型のカマドである。規模は幅53cm, 実行き44cmを測り、僅かな袖が付く。カマド前面に掻き出した焼土の面まりが認められた。

158号住居跡出土遺物（図版100, 第199図）

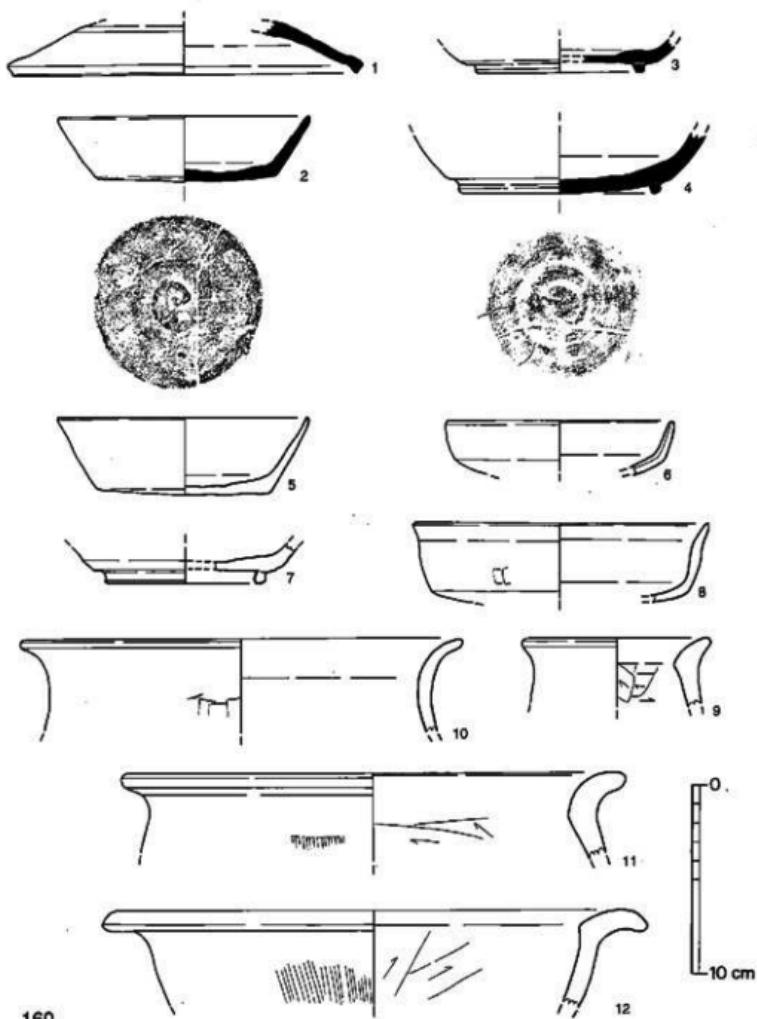
須恵器（1～4） 1・2は壺蓋である。3は復原口径11.6cm, 器高3.8cmの高台付壺身。4は高壺の脚部片である。



158

159

第199図 158・159号住居跡出土土器実測図（1/3）



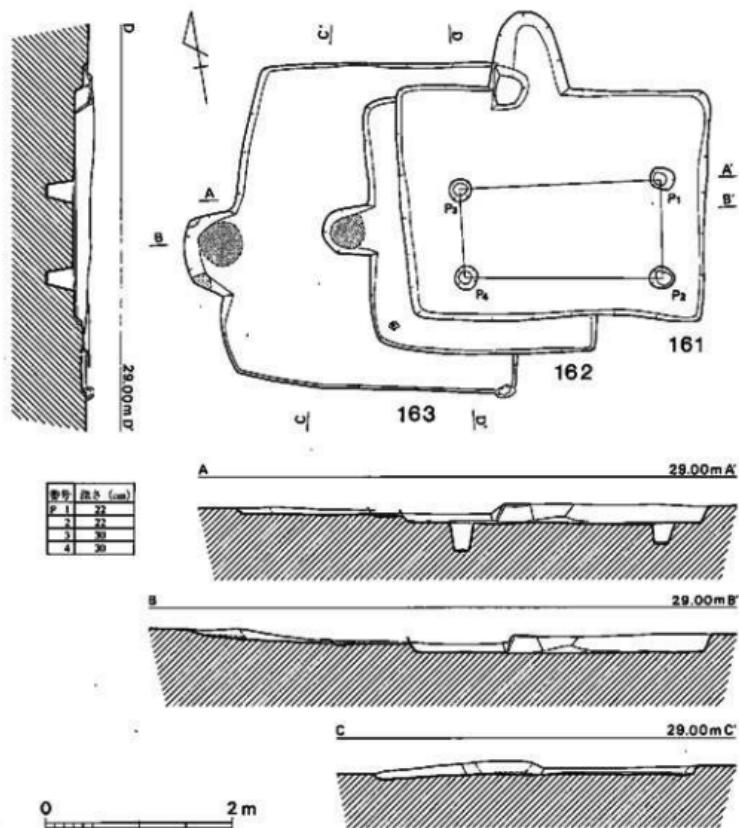
160

第200図 160号住居跡出土土器実測図 (1/3)

土師器 (5~9) 5・6は壺身で、口径は5から12.0cm, 13.2cmを測り、6の体部には煤が付着している。7は高壺脚部片。8・9は壺片で口径19.6cm, 28.8cmである。

159号住居跡出土遺物 (第199図)

土師器 (1) 比較的高台の高い壺身片である。底径8.6cmを測る。



第201図 161~163号住居実測図 (1/60)

160号住居跡（第198図）

調査区域の西側寄りで検出した。東西3.1m×南北2.32mを測る方形の住居である。北壁中央にカマドを配す。主柱穴は明らかでない。

カマド

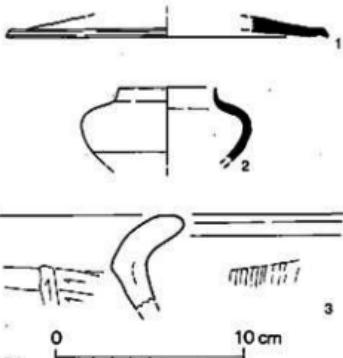
北壁中央にあって、突出型のカマドである。側壁から幅90cm、奥行き40cmで、カマド内から粘土を張り、両袖が僅かに延びている。火床は赤褐色に焼けていた。

出土遺物（図版100、第200図）

須恵器（1～4） 1は蓋で復原口径18.4cm。

2～4は坏身片で、3・4は低い高台付。2は口径13.5cm、器高3.4cmを測る。2と4の底部にヘラ記号が認められる。

土師器（5～12） 5～8は坏身で、7は高台付。5・6・8の口径は順に13.5cm、12.0cm、15.6cmである。9～11は臺口縁部片で、9は小型で口径10.2cmである。12は鍋の口縁部。



第202図 161号住居跡出土土器実測図（1/3）
161

161・162・163号住居跡（図版77、第201図）

調査区の中央部で検出した。この一帯には奈良・古墳の住居19軒が切り合っている。本跡の切り合い関係は古い順に163-162-161である。161号の規模は東西3.28m×南北2.41mを測る方形の住居である。北壁中央にカマドを配す。主柱穴はP1～P4を検出し、柱間間隔はP1-P2は1.4m、P1-P3が2.14mで、深さは20cm～30cmである。162号は南壁と西壁を検出した。西壁中央にカマドを配す。規模は東西2.4m×南北2.65mである。163号は東西3.2m×南北3.4m。西壁にカマドを配する。各遺構の主柱穴は明らかでない。

161・162・163号カマド

161号は北壁中央にあって、突出型のカマドである。側壁から幅86cm、奥行き84cmで左袖付近に粘土の面まりがある。162号は西壁中央にあり、突出型のカマドである。規模は幅52cm、奥行き50cm。163号も同様の突出型で、幅90cm、奥行き49cmを測る。火床はともに赤く焼けていた。

161号住居跡出土遺物（第202図）

須恵器（1・2） 1は蓋で復原口径17.2cm。2は小臺片で、口径5.2cmを測り、器内は薄く口縁は直立する。胎土には砂粒を多く含み、焼成は硬質である。

土師器（3） 臺口縁部片で、器内が厚い。

164・165・166号住居跡（図版77、第203図）

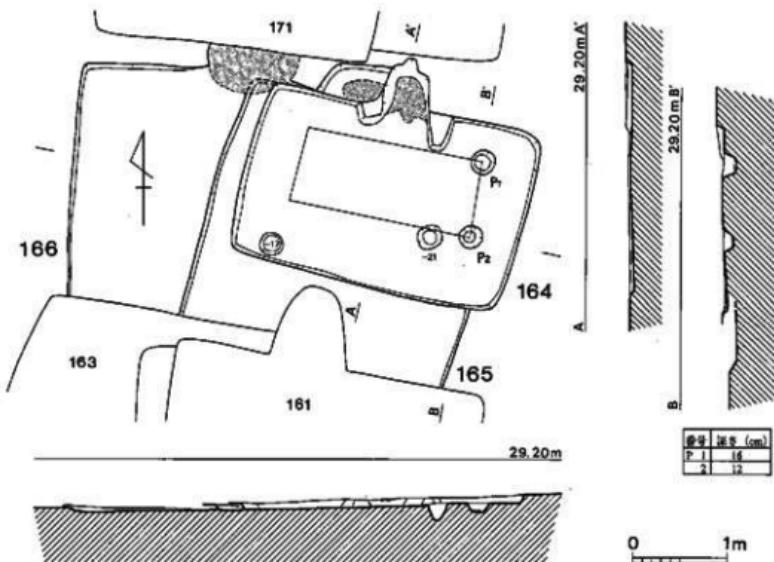
調査区の中央部で検出し、19軒が切り合っている一部である。切り合い関係は古い順に166-165-164であり、さらに165・166は161-163号住居に切られている。164号の規模は東西3.0m×南北2.0mを測る方形の住居である。北壁中央にカマドを配す。主柱穴はP1-P2を検出し、柱間間隔は0.8m、深さは20cm~25cmである。165号は東壁と西壁を検出した。北壁中央にカマドを配するが、164号に切られて定かでない。規模は東西2.96m×南北2.65m以上である。166号は残存長東西1.9m×南北2.6mを測り、北壁にカマドを配す。165・166号の主柱穴は明らかでない。

164号カマド

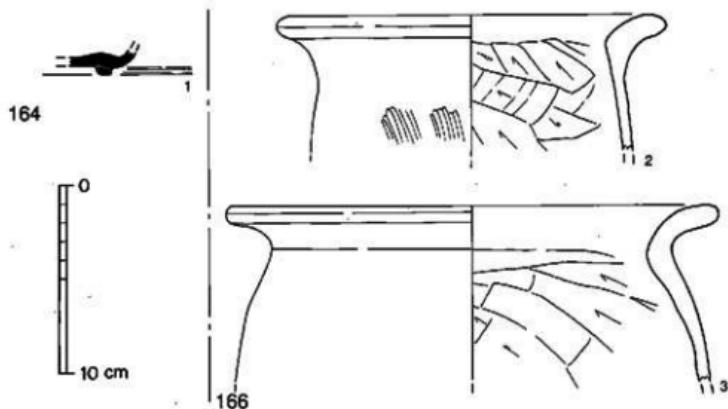
164号は北壁中央にあって、突出型のカマドである。側壁から幅60cm、奥行き40cmで両袖が付く。右袖長40cm、幅30cm、左袖長24cm、幅30cmである。165・166号カマドの規模は不明。3跡ともに火床は赤く焼けていた。

164・166号住居跡出土遺物（図版100、第204図）

須恵器（1）高台付坏身片、焼成は硬質である。164号出土。



第203図 164～166号住居跡実測図 (1/60)



第204図 164・166号住居跡出土土器実測図 (1/3)

土器器 (2・3) 麻口縁部片で、2から口径20.8cm, 26.4cmを測る。166号出土。

167号住居跡 (第205図)

調査区の中央部で検出し、131・133・168・169・171・173号と切り合い最も新しい。規模は東西3.3m×南北3.1mを測る方形の住居である。北壁中央にカマドを配す。主柱穴は検出されない。

カマド

北壁中央にあって、突出型のカマドである。側壁から幅50cm、奥行き50cmで、床を約15cm掘り下げている。

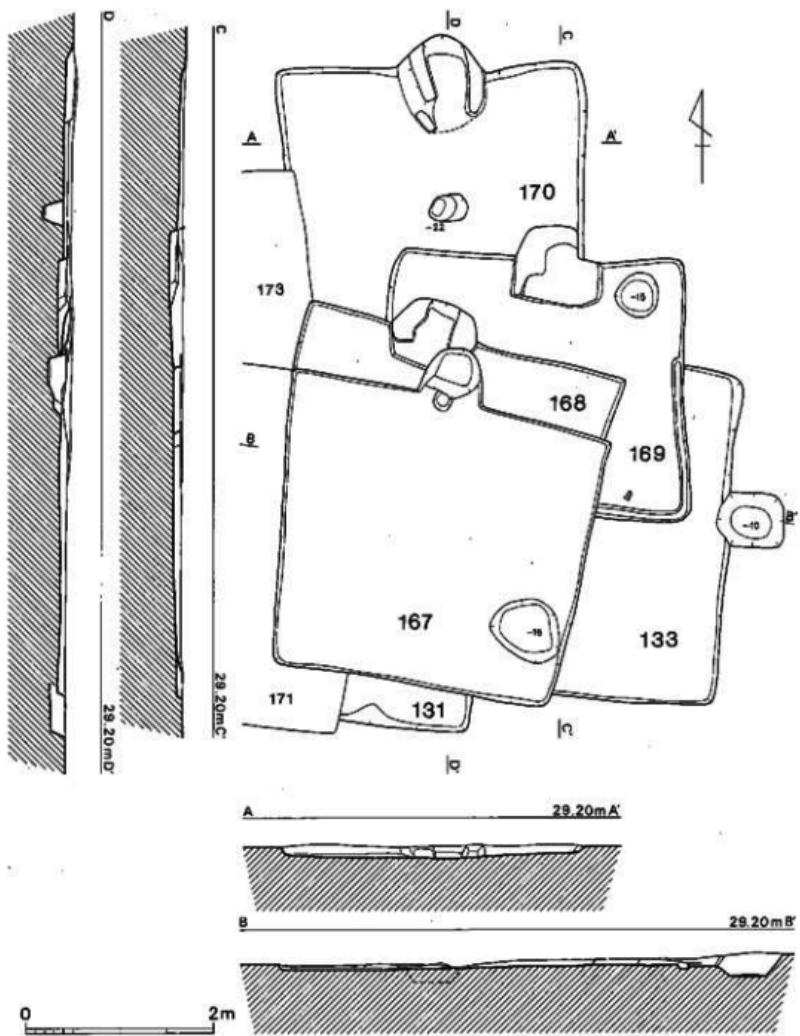
出土遺物 (図版100、第206図)

須恵器 (1) 宝珠形の摘みを持つ蓋で口径12.8cm、器高3.1cmである。焼成は硬質。転用視。

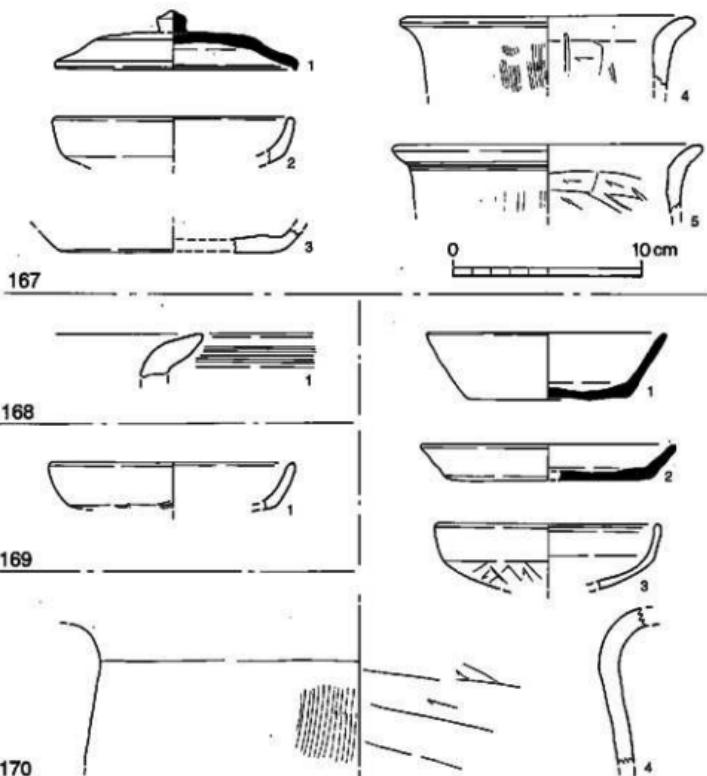
土器器 (2~5) 2・3は坏身片で、2は復原口径13.0cmである。4・5は壺片で、4から復原口径15.8cm、16.6cmを測る。

168・169号住居跡 (第205図)

ともに167号住居跡に切られている。切り合い関係は古い順に169-168であり、ともに北壁中央にカマドを配す。168号の規模は東西3.44m×南北0.6m以上の方形プランの住居である。169号は東西3.2m×南北2.7mを測る。削平が著しく、かつ重複関係が多いため、規模及び主柱



第205図 131・133・167~170号住居跡実測図 (1/60)



第206図 167~170号住居跡出土土器実測図 (1/3)

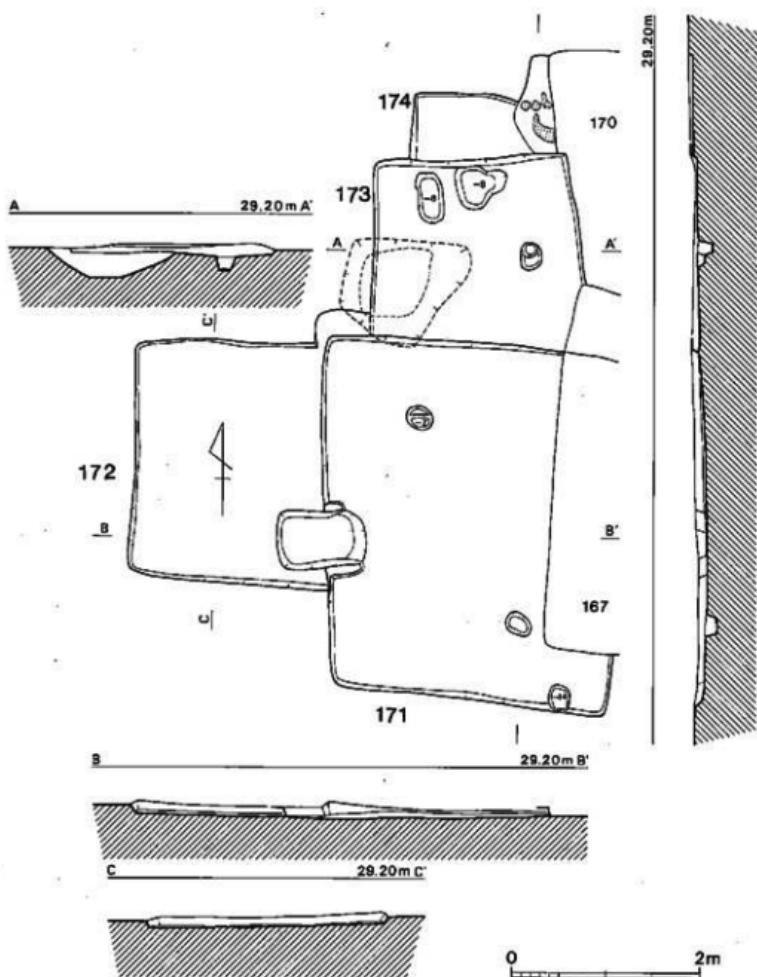
穴を検出するのは困難であった。

168・169号カマド

168・169号は北壁中央にある突出型のカマドである。側壁から幅74cm、奥行き36cmを測る。

168・169号住居跡出土遺物（第206図）

土器（1・2） 1は甕口縁部片で、168号出土。2は復原口径13.2cmの坯身で、169号出土。



第207図 171～174号住居跡実測図 (1/60)

170号住居跡（第205図）

他の住居との切り合い関係は、169・173・174号に切られる。規模は東西3.22m×南北2.6m以上を測る方形の住居である。北壁中央にカマドを配す。主柱穴は検出されない。

カマド

北壁中央にあって、カマド奥壁が若干突出する。側壁から幅94cm、奥行き40cmで、両袖が付く。右袖長46cm、幅22cm。左袖長70cm、幅36cmを測る。火床は赤く焼けている。

出土遺物（図版100、第206図）

須恵器（1・2） 1は口径12.8cm、器高3.55cmの壺身である。2は皿で口径13.6cm。

土師器（3・4） 3は壺身片で復原口径12.2cmである。体部下位はヘラ削り。4は壺片。

171・172・173・174号住居跡（第207図）

全体に造構面の削平が著しい。171号の規模は東西3.0m×南北3.8mで、西壁にカマドを配する。2個の柱穴を検出したが、主柱穴とは判断しがたい。172号は171・173号に切られている。規模は東西2.0m以上×南北2.6mである。北壁にカマドを配するが規模・形状は明らかでない。173号の切り合い関係は、古い順に174-170-172-（173）-171-167と判断した。規模は東西2.2m×南北1.9mである。174号は残存壁長南北0.7m、東西壁1.5mで、北壁にカマドを配す。

171号カマド（第208図）

西壁中央にあって、突出型のカマドである。規模は幅74cm、奥行き50cmを測る。火床はそれほど焼けていない。

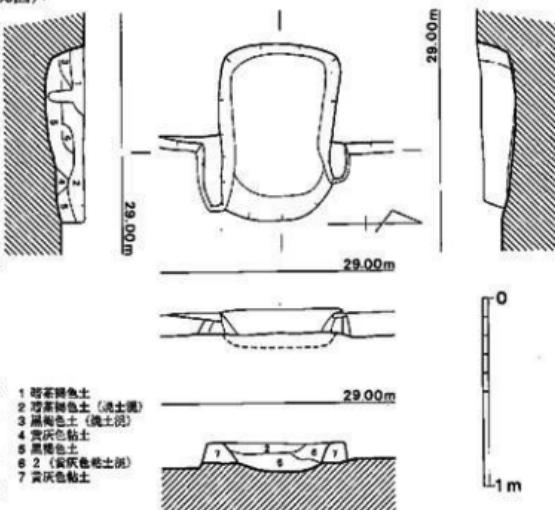
171号住居跡出土

遺物

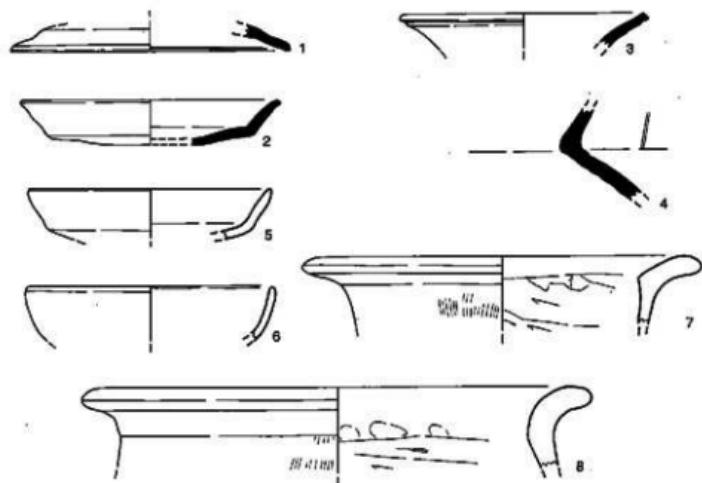
（第209図）

須恵器（1~4）

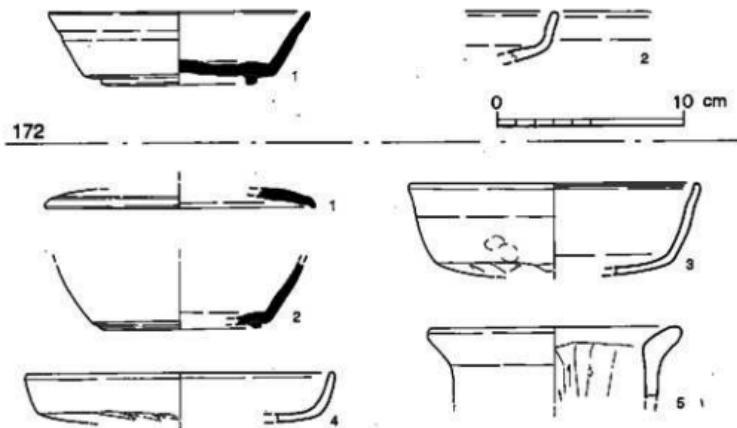
1は口径15.0cmの壺破片。2は復原口径14.0cmの皿。3は壺及び蓋の口縁部か。4は壺の破片。



第208図 171号住居跡カマド実測図（1/30）



171



172

第209図 171・172・174号住居跡出土土器実測図 (1/3)

土師器（5～8） 5・6は壺身片で、5は復原口径13.1cm、6は13.0cmである。7・8は壺の口縁部片であるが、7の口唇部の形態から鍋かとも思われる。復原口径は7が21.4cm、8は27.4cmである。

172号住居跡出土遺物（第209図）

須恵器（1） 1は壺身で復原口径14.0cm、蓋高3.9cmで胎土には石英を含む。

土師器（2） 壺身片である。

174号住居跡出土遺物（第209図）

須恵器（1・2） 1は口径14.6cmの蓋破片。2は低い高台付壺身で、胎土に石英を含む。

土師器（3～5） 3は壺身片で口径15.6cmを測り、残存高5.0cmと深い。4は16.6cmの皿。底部はヘラ削り。5は壺の口縁部片で、復原口径13.6cmである。

175号住居跡（図版77・78、第210図）

調査区のはば中央で検出し、弥生住居117号と奈良住居176号を切っている。規模は東西3.54m×南北3.7mを測り、北壁にカマド2ヶ所を配する。また南壁には住居の内側に、出入口と考えられる踏台状の高まりを検出した。

カマド

北壁中央部で検出した作り付けのカマドである。規模は右袖長22.0cm、左袖長38.0cmで幅は約20cmである。火床は赤褐色に焼けていた。またカマド左袖部にもう一つの突出型のカマドを検出した。幅34.0cm、奥行き43.0cmで、床は赤く焼けていた。

出土遺物（図版100、第211図）

須恵器（1～7） 1・2は蓋破片で、1は小さい拂みが付き口径15.0cmを測る。3～5は低い高台が付く壺身片で胎土・焼成とともに良好である。6・7は皿で、6から復原口径13.6cm、13.8cmである。

土師器（8～10） 8は壺身片で、口径11.4cmを測る。9・10は壺片で、9は口縁部を「く」字状に外反し、外体部に漆が付着する。10は復原口径28.0cm。

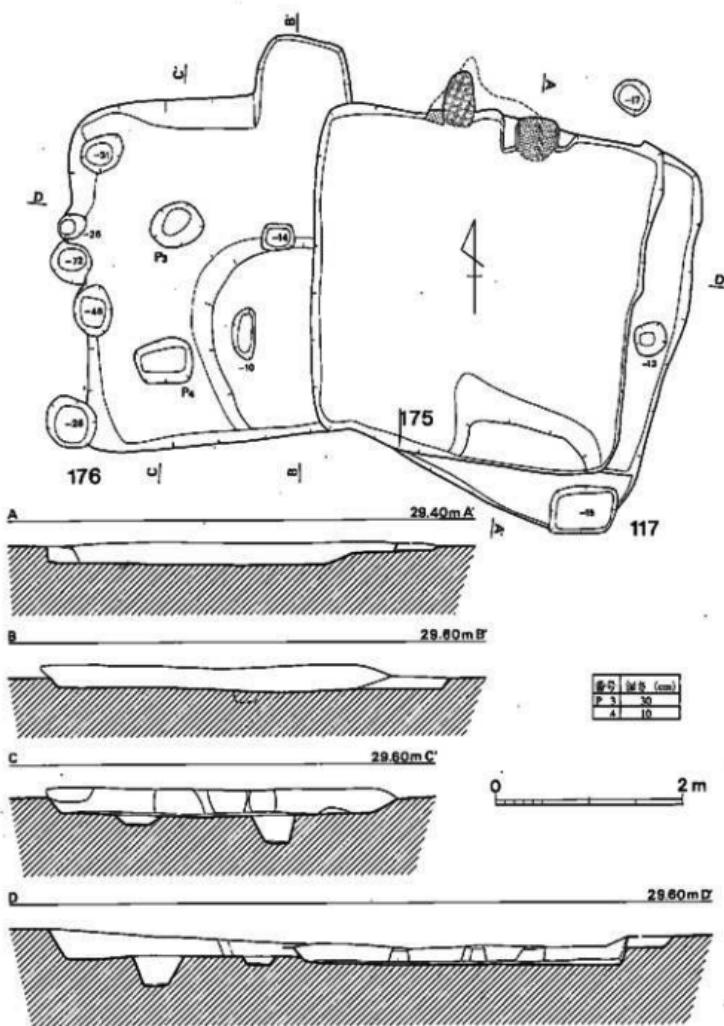
176号住居跡（図版77・78、第210図）

調査区のはば中央で検出し、176号に切られている。規模は東西2.5m以上×南北3.68mを測り、北壁にカマドを配する。主柱穴はP3・P4を検出し、柱間間隔は148cmを測る。南壁に接して台上遺構（ベットかもしれない）を検出した。

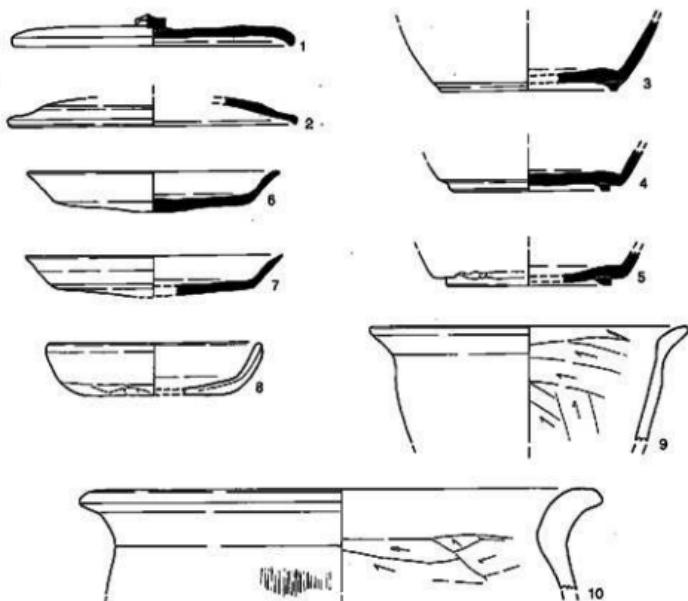
カマド

突出型のカマドで、幅104cm、奥行き62cmである。焼けていない。

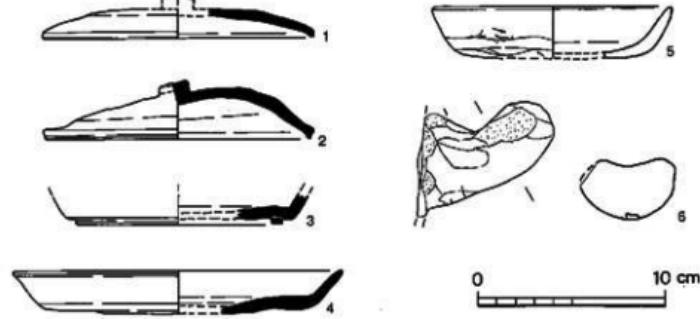
出土遺物（図版100、第211図）



第210図 117・175・176号住居跡実測図 (1/60)



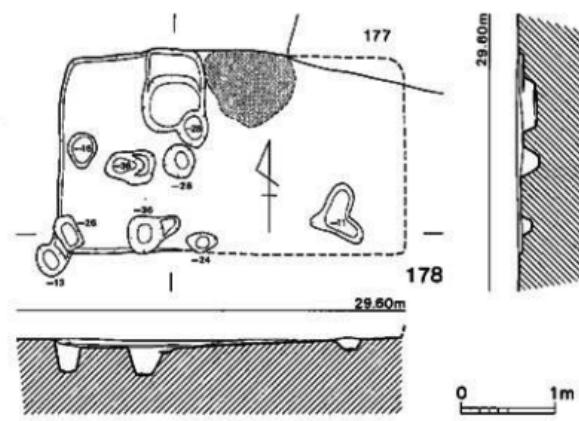
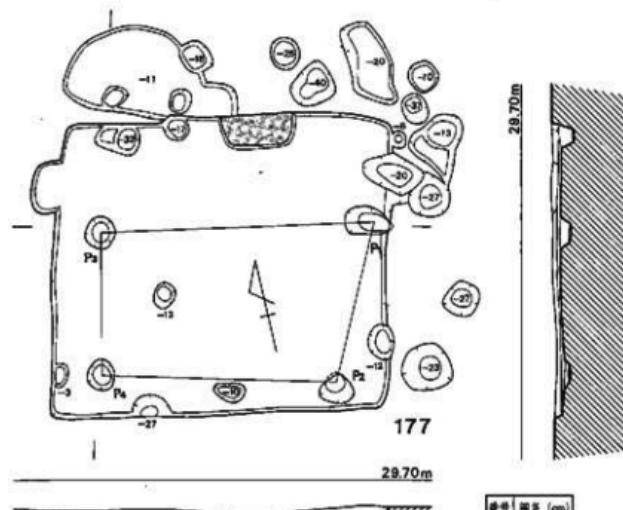
175



176

0 10 cm

第211図 175・176号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第212図 177・178号住居跡実測図 (1/60)

須恵器（1～4） 1・2は蓋で、1は復原口径14.6cm、2は口径14.2cm、器高3.1cmを測る。2は歪んでいる。3は高台付の坏身片。4はやや大きい皿で、復原口径17.8cm。

土師器（5・6） 5は坏身片で、口径12.8cmを測る。赤褐色を呈し焼成は良い。6は把手片。

177号住居跡（図版77・78、第212図）

調査区のほぼ中央で検出した。規模は東西3.56m×南北3.18mを測る方形の住居である。北壁中央にカマドを配す。削平が著しいため規模等については明らかでない。主柱穴はP1～P4を検出し、柱間間隔はP1-P2は1.75m、P1-P3が2.93mで、深さは30cmである。

出土遺物（図版101、第213図）

須恵器（1・2） 1は復原口径13.0cmの蓋である。2は高台付の坏身片。

土師器（3） 復原口径13.6cm、器高15.4cmの壺で、外体部は刷毛目、内面はヘラ削り調整を行っている。胎土には石英・雲母片を含み、焼成は硬質。

178号住居跡（図版77、第212図）

177号の南で検出したが、東半部は削平されて明らかでない。復原規模は東西3.7m×南北2.18mを測る長方形の住居である。北壁中央にカマドが存在したと思われ、焼土が残存していた。主柱穴は定かでない。

出土遺物（第213図）

土師器（1） 壺の口縁部片である。

179号住居跡（第214図）

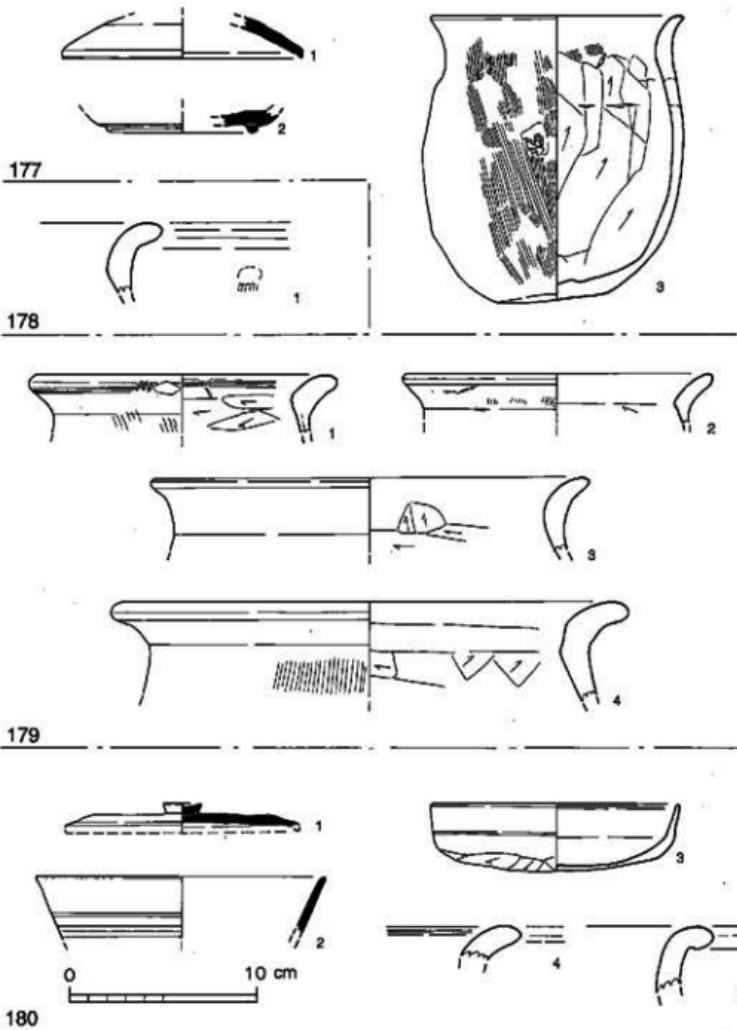
調査区の北域中央で検出した。規模は東西2.64m×南北2.68mを測るやや歪んだ方形の住居である。北壁中央に突出型のカマドを配しているが、火床が赤褐色に焼かれているのみで、規模等については明らかでない。壁から幅66cm、奥行き42cmである。主柱穴は判らない。

出土遺物（第213図）

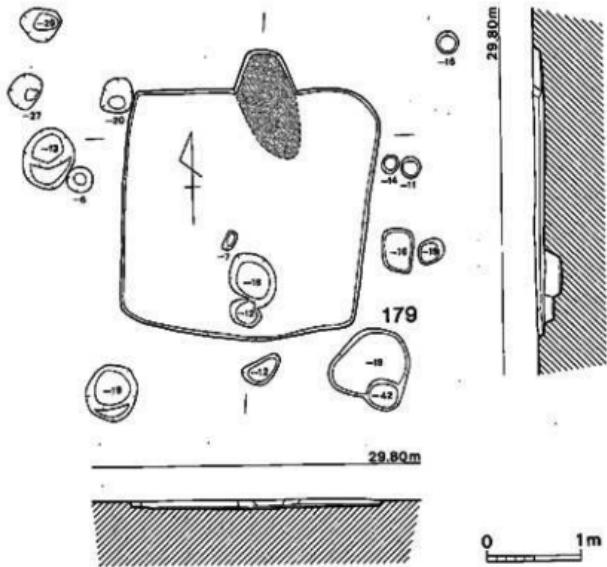
土師器（1～4） 全て壺の口縁部片である。1から復原口径16.6cm、16.6cm、23.6cm、27.8cmを測る。胎土には砂粒を若干含む。

180号住居跡（図版79、第215図）

調査区の北域中央で検出した。規模は東西2.70m×南北2.46mの方形の住居である。北壁中央にカマドを配している。主柱穴はP1～P4を検出し、柱間間隔はP1-P2は2.14m、P1-P3が1.96mの方形の柱間である。P1は北東隅で住居外に存す。柱の深さは16.0cmと浅い。57号竪穴及び17号建物跡と切り合っている。



第213図 177~180号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第214回 179号生唇跡実測図 (1/60)

カマド

北壁中央で検出した突出型のカマドである。規模は幅64cm、奥行き48cmを測り、さらに62cmの煙道が伸びる。火床中央に支柱穴が認められる。

出土遺物（圖版101、第213圖）

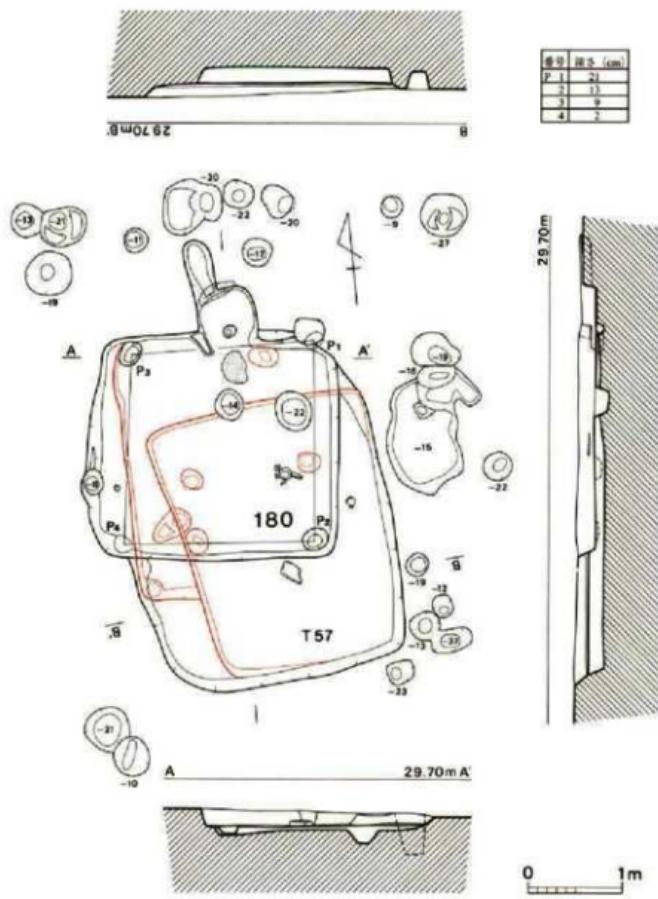
須恵器(1・2) 1は摘みの付いた蓋で、内面に墨痕が認められる転用硯である。口縁端部は欠損。2は杯身片で、復原口径15.6cm。

土師器(3~5) 3は口径13.4cm、器高3.9cmの壺身で、底部は手持ちのヘラ削りである。4・5は壺の口縁部片である。

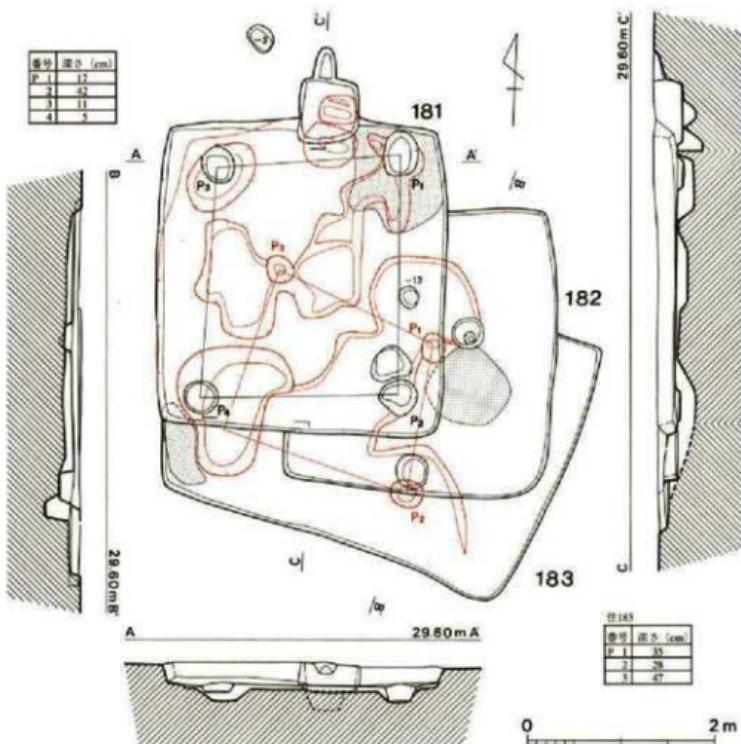
181・182・183号住居跡（図版79、第215図）

調査区の北域中央で検出し、3軒が重複して検出した。切り合い関係は古い順に183-182-181となる。181号の規模は東西3.08m×南北3.34mの方形を呈する住居である。北壁中央にカマドを配している。主柱穴はP1~P4を検出し、柱間間隔はP1-P2は2.56m、P1-P3が

1.96mの長方形の柱間である。4本の柱は住居のコーナー寄りにあって、深さは約12cmである。182号は東半部を検出し、規模は東西2.84m×南北3.04mで、中央部に粘土が認められた。183号は東壁と南壁を検出し、規模は東西4.10m×南北2.96mである。南西隅に粘土の固まりがある。主柱穴は下層検出時3本認められ、柱間間隔はP1-P2が1.62m、P1-P3が1.82mを測る。



第215図 180号住居跡実測図 (1/60)



第216図 181～183号住居跡実測図 (1/60)

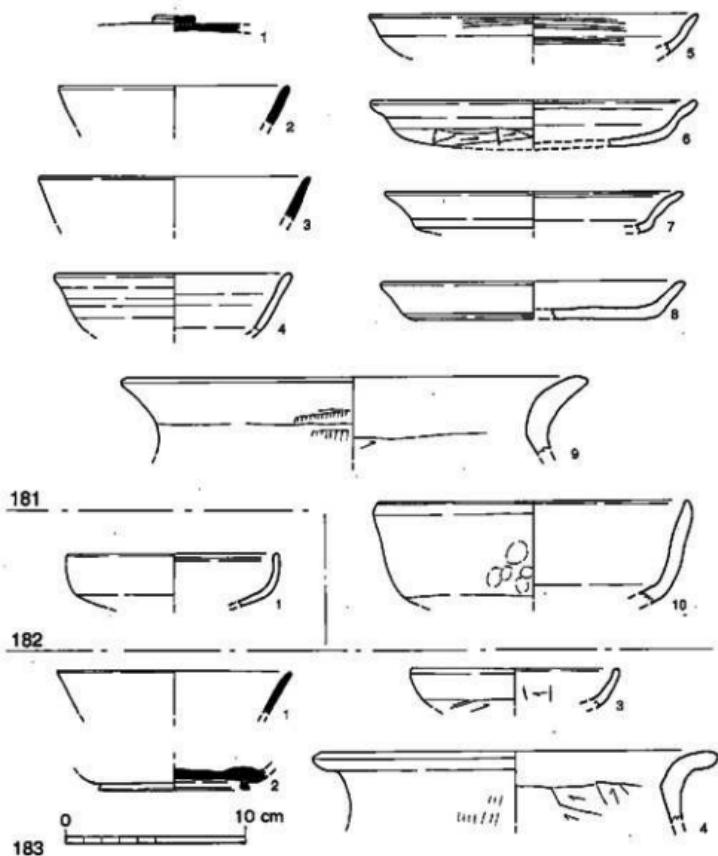
181号カマド

北壁にあり、突出型のカマドである。規模は幅62cm、奥行き44cmで、44cmの煙道が伸び、火床はそれほど焼けていない。

181号住居跡出土遺物 (第217図)

須恵器 (1～3) 1は摘みの付いた蓋。2・3は壺身片で、復原口径13.0cm, 15.2cmである。

土師器 (4～10) 4は復原口径13.4cmの壺身片。5～8は皿で、5は内面ミガキ調整。復原口径は順に18.4cm, 18.2cm, 16.6cm, 17.0cmを測る。9は甕の破片。10は椀で、口径17.2cm。胎土に石英、雲母片を含む。



第217図 181~183号住居跡出土土器実測図 (1/3)

182号住居跡出土遺物 (第217図)

須恵器 (1・2) 壁身片で、1は復原口径13.2cm、2は高台付である。

土師器 (3・4) 3は復原口径11.6cmの壁身片。4は壺の破片で、復原口径22.6cmを測り、内外面に煤が付着している。

183号住居跡出土遺物（第217図）

土器器（1）復原口径11.8cmの壺身片である。

184号住居跡（第218図）

183・185号住居跡と重複し、切られている。また、古墳住居128号を切っている。規模は東西3.28m×南北3.6m以上の住居で、北壁にカマドを設けている。

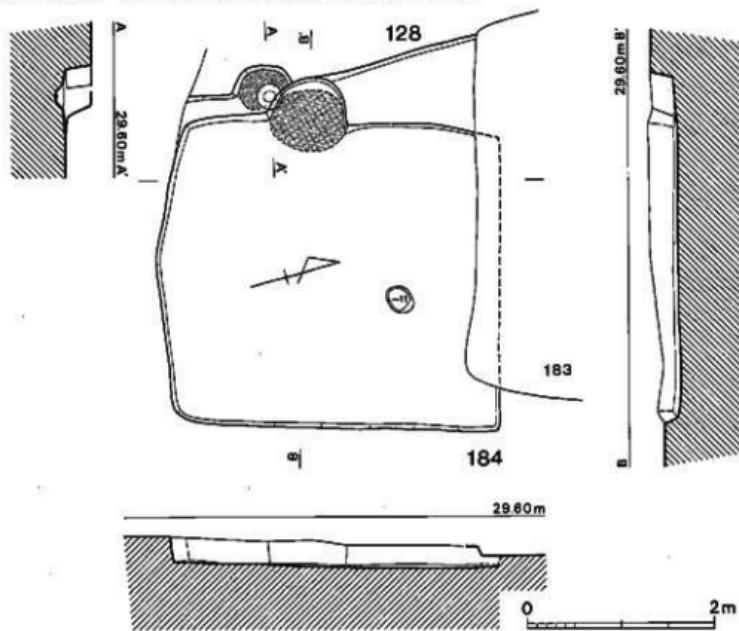
カマド

突出型のカマドで、規模は幅88cm、奥行き50cmを測り、火床はかなり火を受けている。

出土遺物（第220図）

須恵器（1）壺身片で、復原口径16.0cmを測り、胎土には石英を含む。

土器器（2～9）2～5は壺身片で、2・3は底部を手持ちヘラ削り調整したもので、復原口径12.4cm、12.6cmである。4・5は復原口径14.2cm、14.0cmを測る。6・7は皿で、口径はともに15.2cmである。8・9は壺の口縁部で、8は復原口径16.8cmである。



第218図 128～184号住居跡実測図 (1/60)

185号住居跡（第219図）

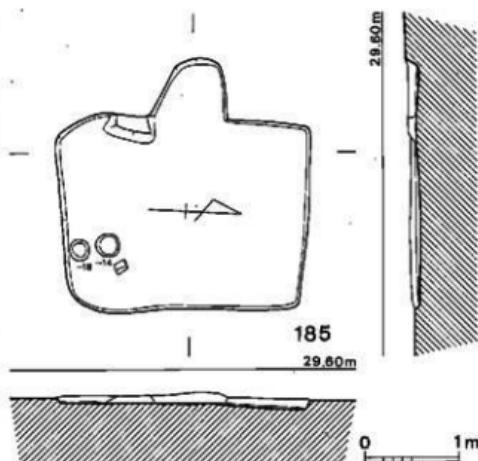
調査区の北域で検出した方形状の住居である。規模は東西2.0m×南北2.6mで、西壁中央にカマドを配している。比較的小型の住居であるが、出土土器は多い。主柱穴は検出されなかった。

カマド

西壁中央で検出した突出型のカマドである。規模は幅84cm、奥行き64cmを測り、左袖約26.0cmのみを残す。火床は焼けがあまい。

出土遺物（第220図）

土器（1・2） 1は復原口径19.2cmの壺である。2は壺の口縁部である。



第219図 185号住居跡実測図（1/60）

186・187号住居跡（図版80、第221図）

調査区の北域西寄りで検出した。切り合い関係は186号が187号を切っている。186号の規模は東西2.76m×南北2.2mの方形の住居である。北壁中央にカマドを配している。187号は東西2.9m×南北2.78mで、北壁中央にカマドを配す。主柱穴はP1・P3・P4を検出し、柱間間隔はP1-P3は2.06m、P3-P4が2.07mの方形の柱間である。柱穴は浅い。

カマド

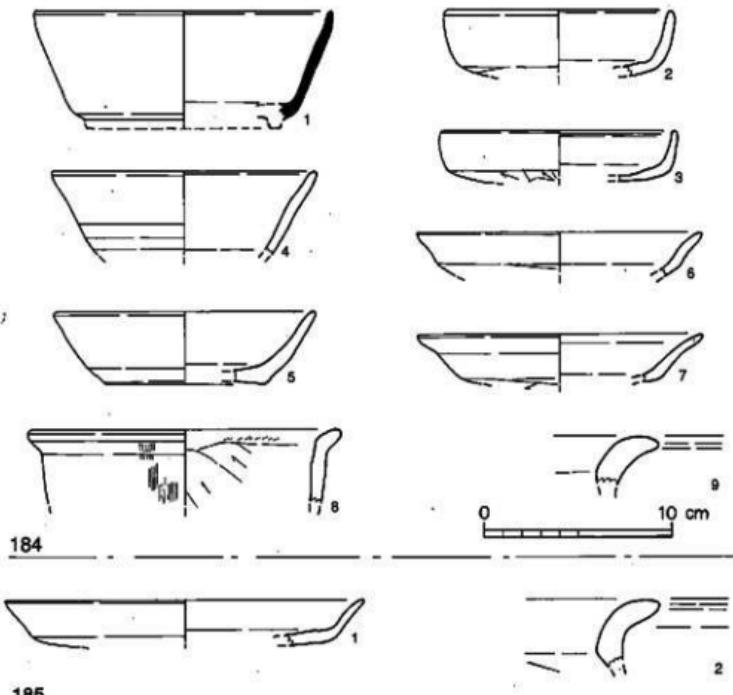
ともに北壁中央で検出した突出型のカマドである。186号の規模は幅86cm、奥行き73cmを測る。187号は幅94cm、奥行き50cmで、さらに22cmの煙道が伸びる。やや変形したカマドで両袖が付くが、左袖はカマドの奥から延びている。

186号住居跡出土遺物（第222図）

土器（1～3） 1・2は壺身片で、1は復原口径12.0cmで、胎土に石英・雲母を含む。3は壺の口縁部で、復原口径26.0cmである。

187号住居跡出土遺物（第222図）

土器（1～3） 1・2は壺身片で、順に復原口径12.4cm、12.9cmを測る。胎土、焼成とともに

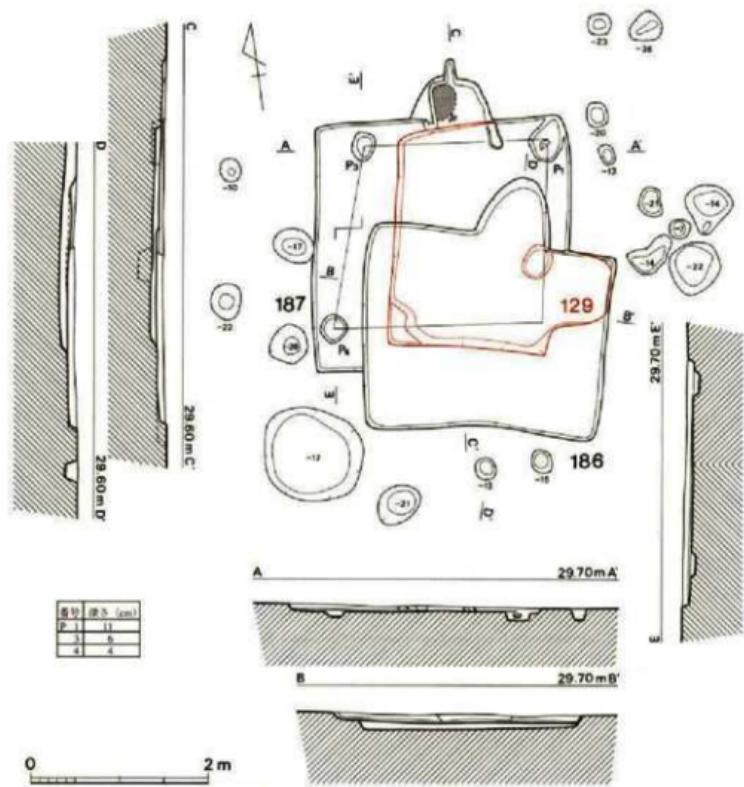


第220図 184・185号住居跡出土土器実測図 (1/3)

よい。3は壺の口縁部で復原口径15.6cmである。

188・189・190・191・192号住居跡 (第223図)

調査区の北域西端で検出し、192号住居の他は4軒が重複して検出した。切り合ひ関係は古い順に190・191-189-188となる。188号の規模は東西2.60m×南北2.74mの方形を呈する住居である。北壁中央にカマドを配している。主柱穴は定かでない。189号は東半部を検出した。規模は東西1.28m以上×南北2.20mである。190号の規模は東西1.96m×南北2.48mである。北壁中央に突出型のカマドを配する。寸法は幅56cm、奥行き34cmで、左袖長46cmのみを残す。191



第221図 129・186・187号住居跡実測図 (1/60)

号は南壁のみを検出した。東西残存長1.92mである。192号は4軒の重複住居の東側で検出した。規模は東西3.10m×南北2.70mの長方形プランの住居である。西壁中央に径約0.8mの浅い土壇があったが、土器等は出土しなかった。また、住居内に数個の穴を検出したが、主柱穴とするには判断しがたい。全体に削平が著しい。

188号カマド

北壁にあり、突出型のカマドである。規模は幅60cm、奥行き56cmで、火床はそれほど焼けていない。

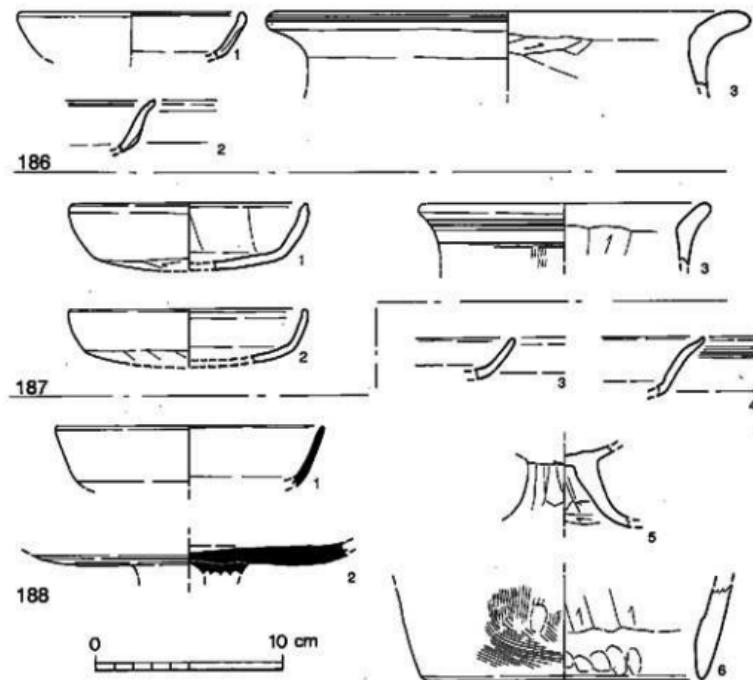
188号住居跡出土遺物 (第222図)

須恵器 (1・2) 1は壺身片で復原口径14.4cm。2は高壺底片である。

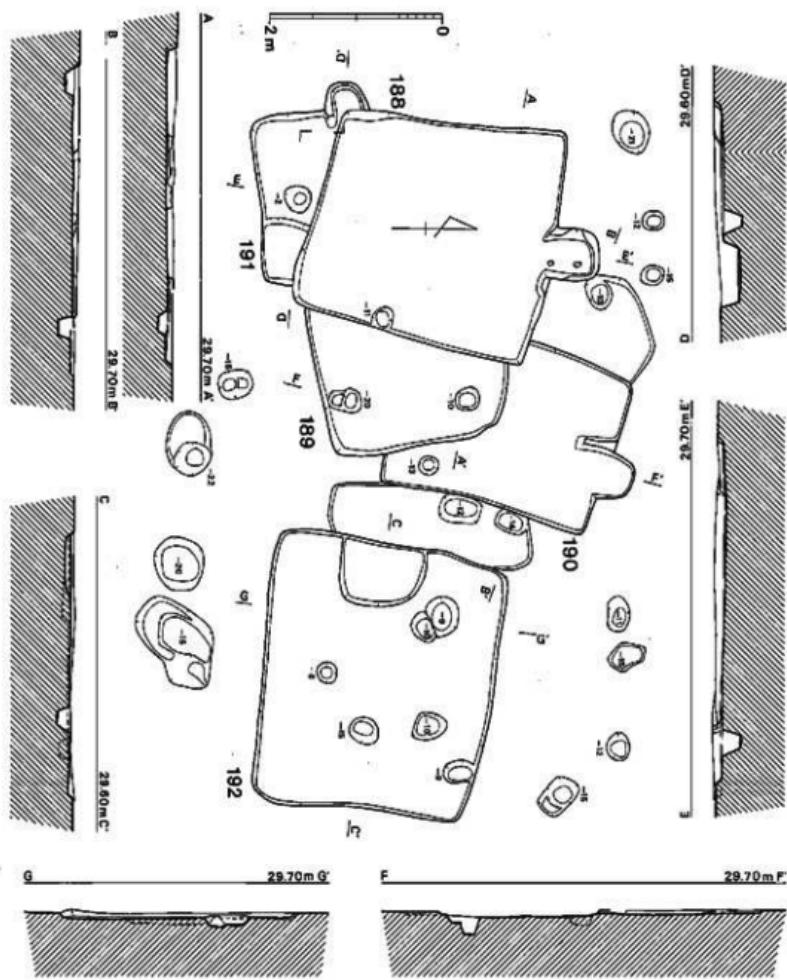
土師器 (3~6) 3・4は壺身片。5は高壺脚部片。6は瓶片の底部で、底径15.4cmを測る。外体部を刷毛目調整し、内面はヘラ削りである。

193号住居跡 (図版80、第224図)

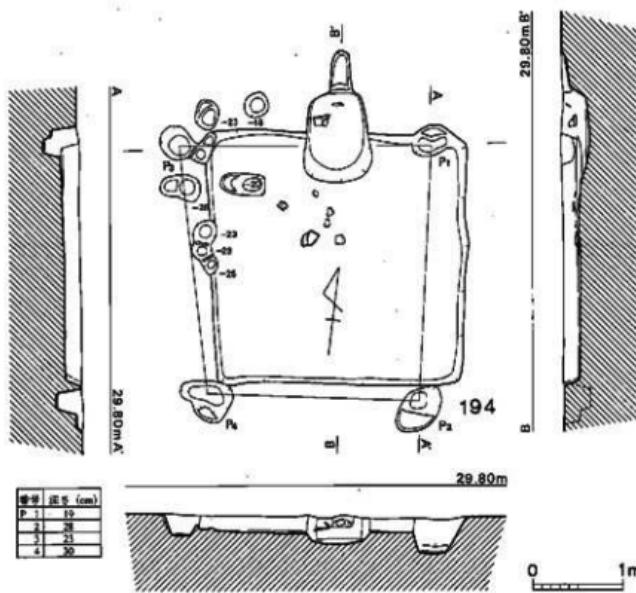
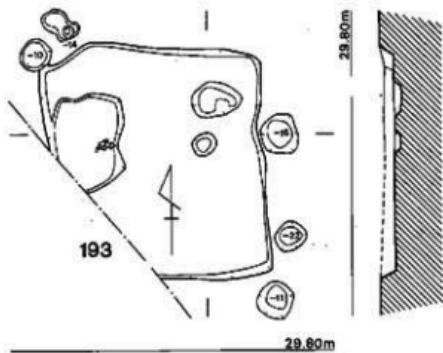
調査区の西区域に接して検出した方形の住居である。規模は東西2.34m×南北2.54mで、比較的小型の住居である。主柱穴は検出されなかった。西壁寄りに長径約1.0m×短径0.8mの土壙を検出した。



第222図 186~188号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第223図 188~192号住居跡実測図 (1/60)



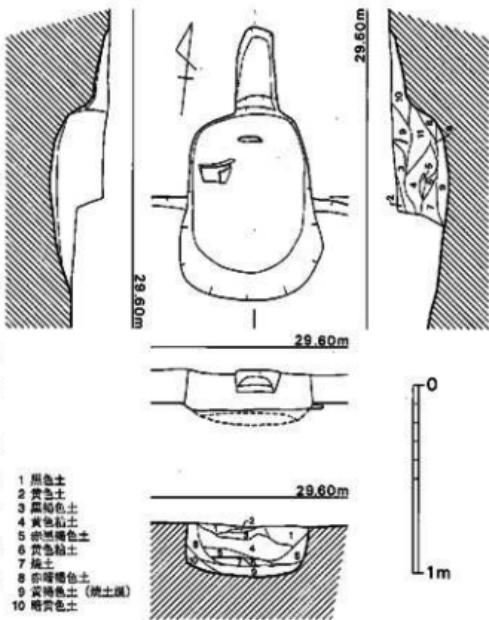
第224図 193・194号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物（第226図）

土師器（1～3） 1・2は
壺身で、1は復原口径11.2
cm、2は17.6cmを測るが、
直の可能性が強い。3は復
原口径29.0cmの壺の口縁部
片である。

194号住居跡（図版81、第
224図）

193号の北側で検出した
方形の住居である。規模は
東西2.82m×南北2.8mで、
北壁にカマドを配する。主
柱穴は4本検出し、柱間間
隔はP1-P2が2.86m、P
1-P3が2.8mのほぼ方形
の柱間間隔である。柱は住
居壁外にある。



第225図 194号住居跡カマド実測図（1/30）

北壁中央で検出した突出型のカマドで、幅70cm、奥行き46cm、さらに44cmの煙道が北へ延び
ている。

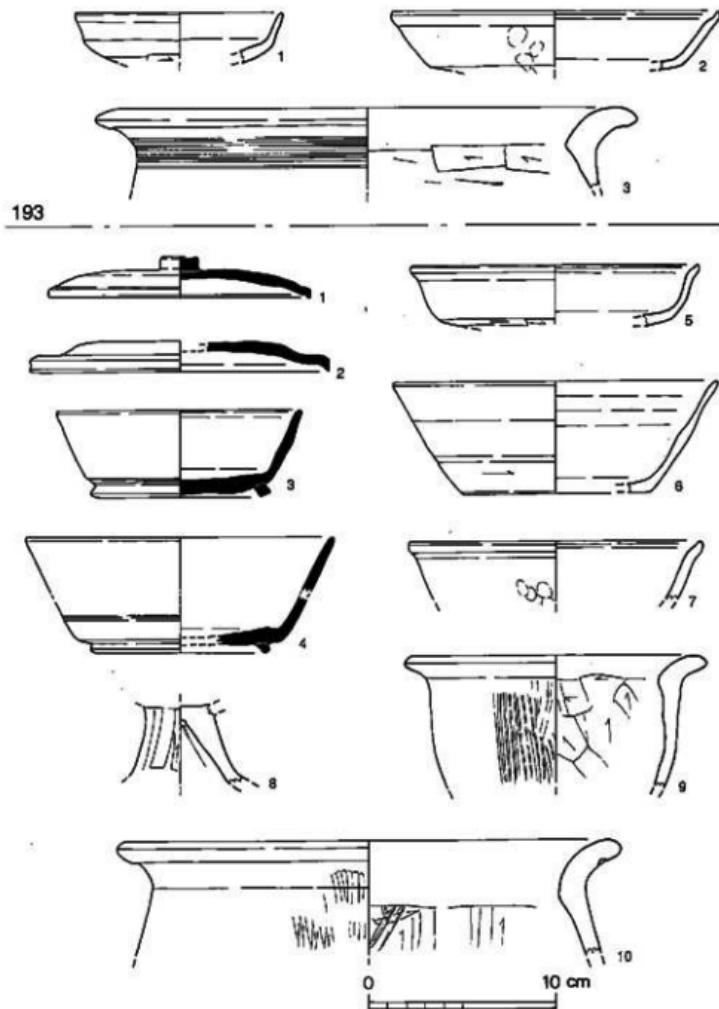
出土遺物（図版101、第226・227図）

須恵器（1～4） 1・2は蓋で攢みが付いている。1から口径14.0cm、16.0cmである。3・4は浅
い高台付の壺身で、3は口径13.2cmを測る。4は図上復原である。

土師器（5～12） 5～7は壺身片で、5は口縁部を外反する浅い壺身。5から復原口径15.4cm、
19.4cm、15.6cmを測る。8は高壺脚部片。9・11は壺の口縁部で、口径は9から16.2cm、27.0cm、
28.0cmである。外体部は刷毛目調整である。12は鍋の破片で、復原口径31.0cm、器高11.3cm。外
体部は刷毛目、内面はヘラ削り調整。

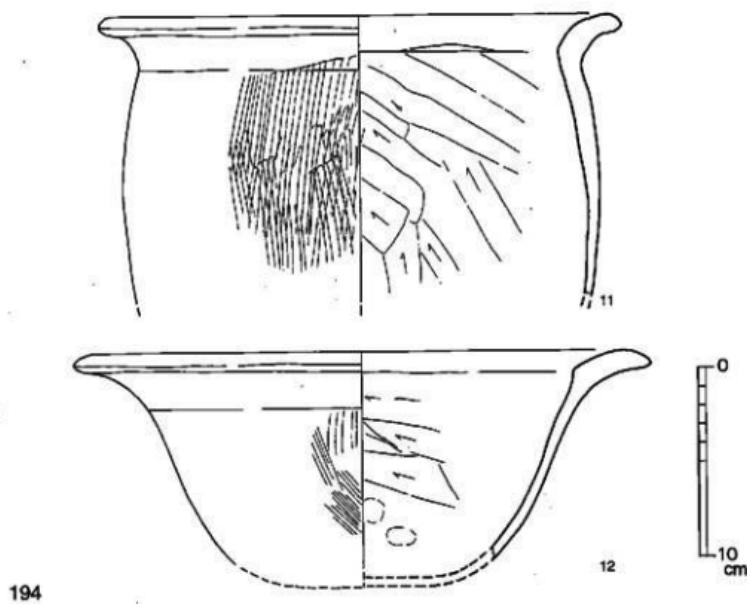
195号住居跡（図版82、第228図）

調査区域の北西隅にかなりの住居を重複して検出した。重複関係は古い順から134-135-
200-199-197-198-196-195となる。本跡の規模は東西3.06m×南北2.42mで、西壁にカマ



194

第226図 193・194号住居跡出土土器実測図① (1/3)



第227図 194号住居跡出土土器実測図② (1/3)

ドを配する。主柱穴は定かでない。

カマド

四壁中央で検出した突出型のカマドで、幅60cm、奥行き44cmを測る。カマド右袖付近には粘土の固まりが認められた。

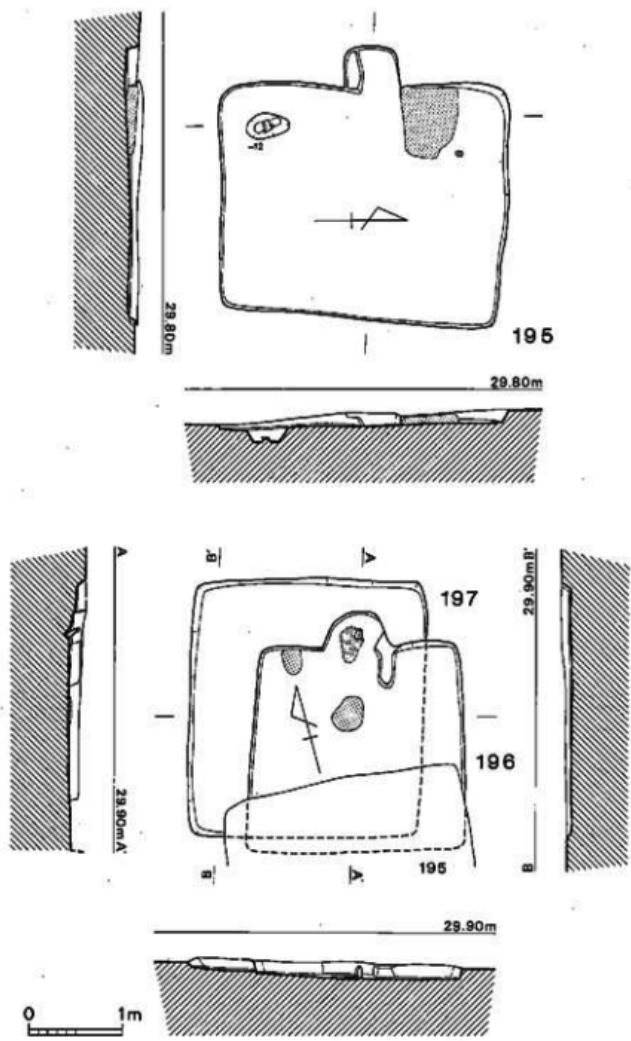
出土遺物 (図版101, 第229図)

須恵器 (1~3) 1は蓋の破片で口径20.4cmと大きい。転用梗。2は高台付の坏身で、口径16.8cm、器高5.15cmである。3は坏身口縁部片。

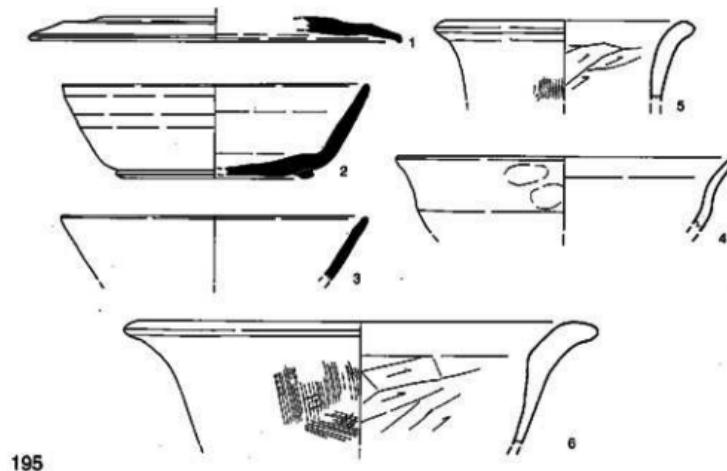
土師器 (4~6) 4は坏身片、5は壺の口縁部で口径は4から18.4cm、14.2cmである。6は鍋の破片で、口唇部は外反し器内は肥厚する。

196・197号住居跡 (図版82, 第228図)

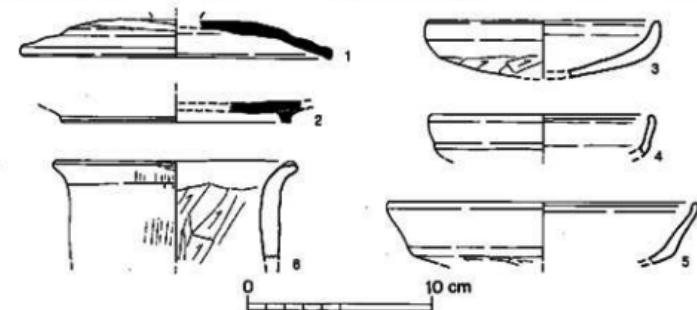
196号は195号から切られ、197・198号を切っている。196号の規模は東西2.24m×南北1.5m以上で、北壁にカマドを配する。主柱穴は定かでない。197号は東西2.5m×南北2.76mの規模である。



第228図 195~197号住居跡実測図 (1/60)



195



196

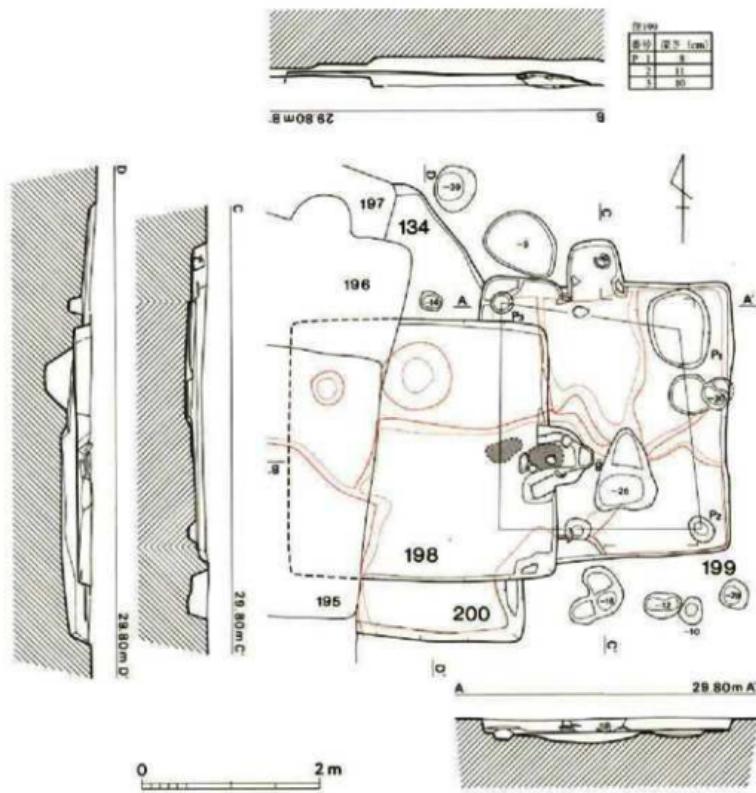
第229図 195・196号住居跡出土土器実測図 (1/3)

196号カマド (第83図)

北壁中央で発出した突出型のカマドである。規模は幅74cm、奥行き40cmを測る。カマド右袖が付されており残存長44cm、幅20cmである。カマドの火床中央には支脚の石が立っており、かなり加熱を受けていた。

196号住居跡出土遺物 (第229図)

須恵器 (1・2) 1は蓋の破片で口径17.0cm。2は高台付の坏身片。



第230図 134・198～200号住居跡実測図 (1/60)

土器（3～6） 3～5は壊身片。3は丸底で体部に煤付着。復原口径は順に12.5cm, 12.0cm, 16.8cmである。6は壺の口縁部で、口径は13.4cm。

198・199・200号住居跡（図版82, 第230図）

切り合ひ関係は198号が199・200号を切っている。198号は西半部を195号によって切られており、規模は東西2.10m以上×南北2.94mを測り、東壁にカマドを配する。主柱穴は定かでない。199号は東西2.86m×南北3.10mの規模で、北壁にカマドを配する。主柱穴はP1-P3を検出し、柱間隔はP1-P2が2.22m, P1-P3が2.02mである。200号は壁の一部を検出したのみである。

198・199号カマド（図版83, 第231図）

198号は東壁中央で検出した突出型のカマドで、屋内に両袖が伸びる。規模は幅66cm、奥行き48cmで煙出しが若干張り出す。火床は赤褐色で、支脚と思われる石がカマドの前に残存していた。199号も突出型で両袖が僅かに残っている。規模は幅64cm、奥行き50cmでカマド内中央に支脚に使用されたと考えられる土器が座っていた。

198号住居跡出土遺物（図版101, 第232図）

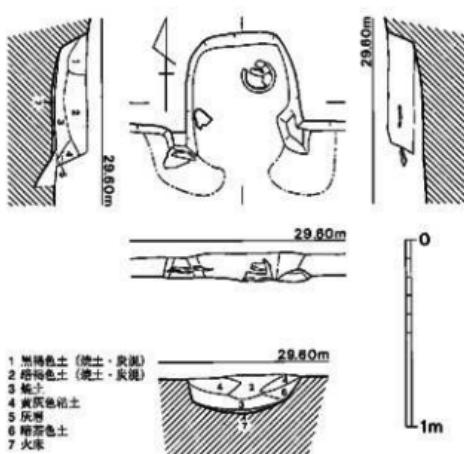
土器（1～5） 1～4は壊身片で、4を除く他は底部を丸底風に作っている。復原口径は順に16.6cm, 16.0cm, 13.8cm, 15.6cmである。5は壺口縁部片。

199号住居跡出土遺物（図版101, 第232図）

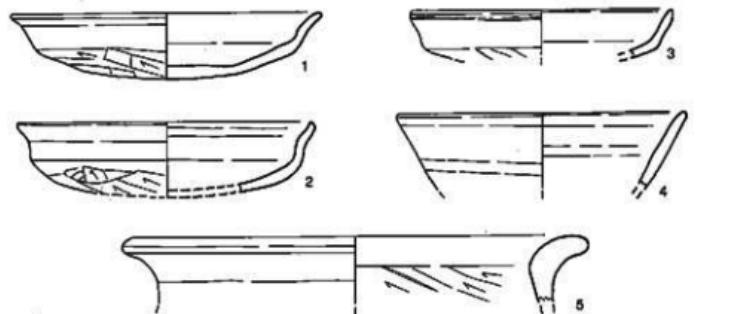
須恵器（1・2） 1は壊身片。

2は高壊脚部の底部。

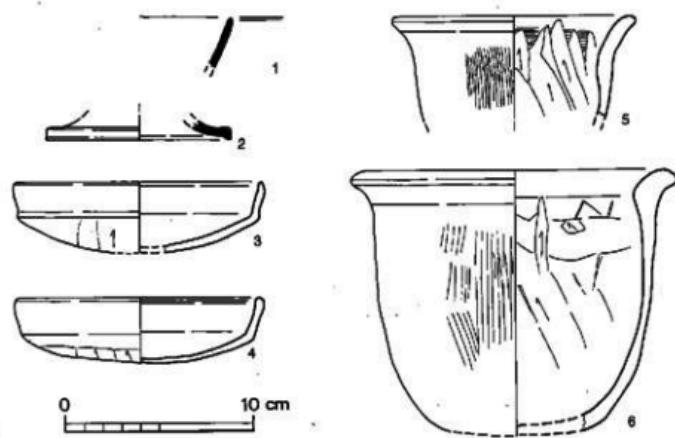
土器（3～6） 3・4は壊身片で体部がやや直立する。口径はともに13.4cmである。5は小型の壺片で、内面は強いヘラ削り、外側部は刷毛目である。6はカマドの支脚使用の壺で、口径17.4cm、器高14.5cmを測る。煤が付着しており、外側部は刷毛目、内面はヘラ削り調整である。



第231図 199号住居跡カマド実測図（1/30）



198

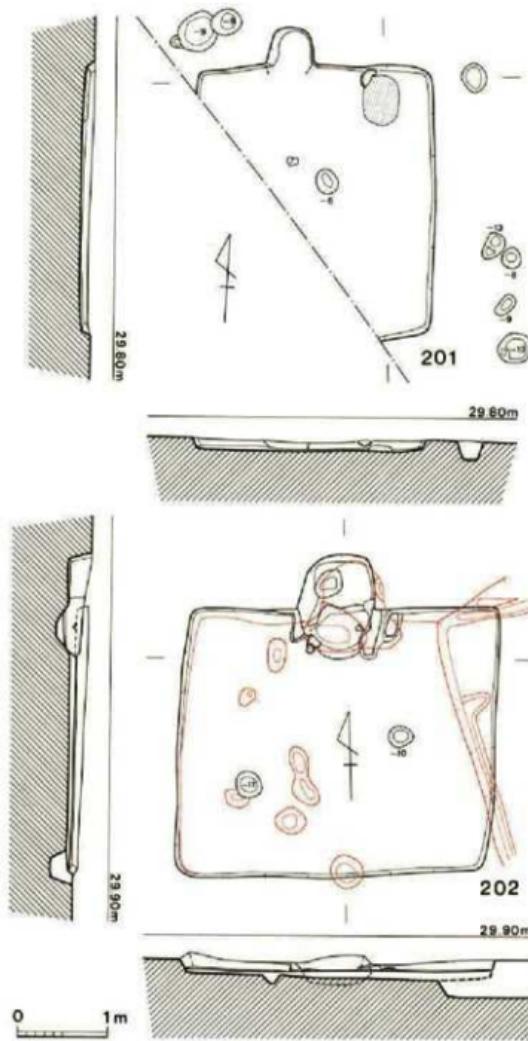


199

第232図 198・199号住居跡出土土器実測図 (1/3)

201号住居跡 (図版82, 第233図)

調査区の西区域に接して検出した方形の住居である。規模は東西2.66m×南北3.06mで、比較的小型の住居である。削平が著しいため主柱穴は確認できなかった。北壁中央にカマドを配し、カマド右側付近に粘土の固まりを検出した。小型の住居に限ってのことではないが、主柱穴の検出は困難である。



第233図 201・202号住居跡実測図 (1/60)



201



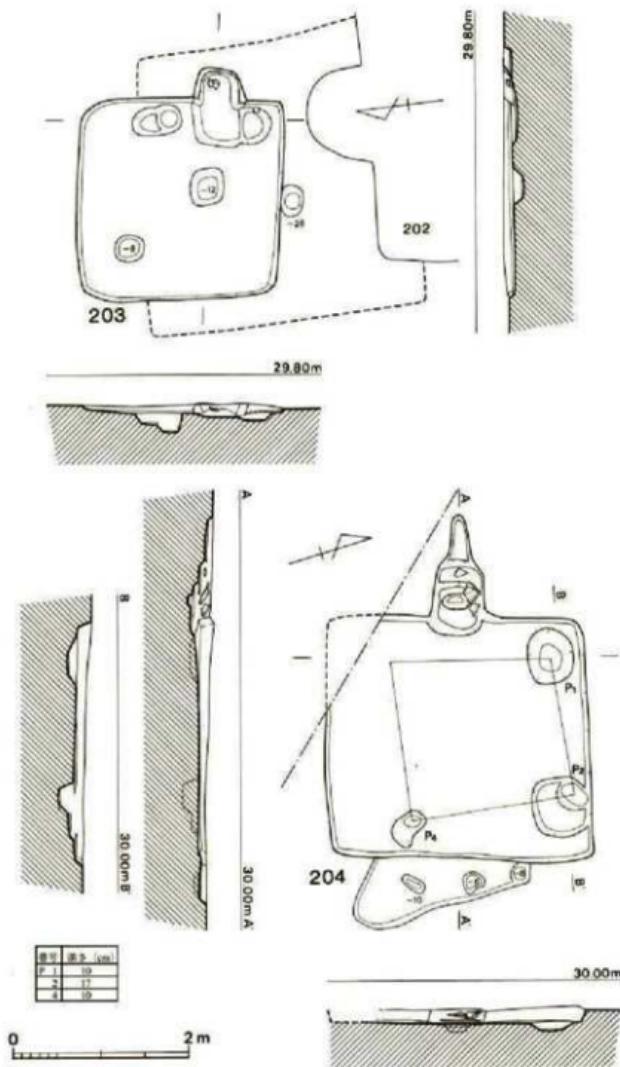
202



203



第234図 201・203号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第235図 203・204号住居跡実測図 (1/60)

カマド

突出型のカマドで、幅54cm、奥行き41cmを測る。火床はそれほど焼けていない。

出土遺物（図版201、第234図）

須恵器（1）復原口径22.0cmの高坏の身である。体部に縁付着。

土師器（2）坏身で復原口径11.8cmである。

202号住居跡（図版82、第233図）

調査区の西区域に接して検出した方形の住居である。規模は東西3.54m×南北3.0mで、造構検出面全体に削平が著しい。主柱穴は検出されなかった。北壁中央にカマドを配す。

カマド

北壁中央で検出し、突出型のカマドで、幅86cm、奥行き62cmを測る。住居の壁から柱が延び、右袖長54cm、左袖長34cmである。

出土遺物（図版102、第234図）

須恵器（1～3）1・2は高台付坏身で、復原口径は1が14.0cm、2は口縁部が欠損して不明。3は大皿で、口径23.6cmでやや軟質である。

土師器（4・5）4は坏身で、復原口径14.6cmで、底部は丸く作っている。5は甌で口径15.6cm、器高11.6cmを測り、外体部は刷毛目調査、内面はヘラ削りである。カマド内から出土。

203号住居跡（図版84、第235図）

調査区の西区域に接して検出し、竪穴状造構を切っている。小型の方形住居で、規模は東西2.3m×南北2.32mを測り、主柱穴は明らかでない。今回検出した住居跡の中では珍しく東壁にカマドを配している。

カマド（第84図）

東壁南寄りで検出した突出型のカマドで、幅60cm、奥行き32cmを測る。カマド壁に粘土を貼り付けており、若干焼けていた。

出土遺物（第234図）

土師器（1～3）1・2は坏身片で順に復原口径13.8cm、17.4cmを測る。ともにカマド内出土。3は底を丸くした皿であろう。復原口径17.4cmで、カマド内から出土。

204号住居跡（図版85、第235図）

住居の西南隅部が調査区域外である。規模は東西2.78m×南北3.0mを測り、主柱穴はP1・P2・P4を検出した。柱間間隔はP1-P2が1.6m、P2-P4が1.8mである。西壁にカマドを配している。

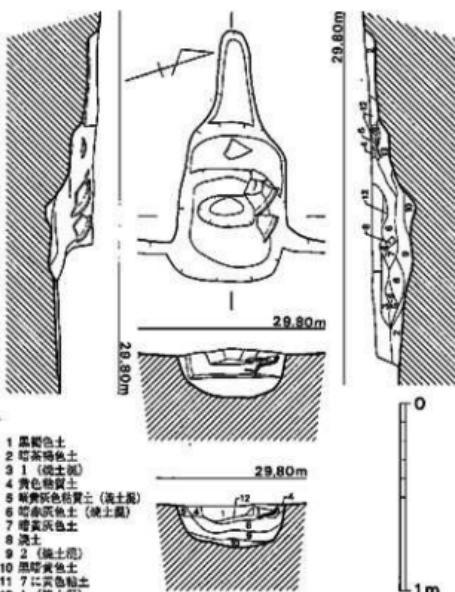
カマド（図版85、第236図）

西壁中央で検出した突出型のカマドで、幅68cm、奥行き58cmを測り、約50cmの煙道が延びる。カマド中央には支脚を設けた穴があり、土器が残存していた。

出土遺物（図版102、第236図）

須恵器（1） 口径13.6cm、器高3.9cmを測る壊身である。

土器（2~5） 2は壊身片、3は小型の壺口縁部で、口径13.4cm。4は体部を直にした広口の壺で、口径22.0cmを測り、胎土には石英・雲母粒を含んでおり。5は鉢状に口縁部を厚くした鍋で、復原口径33.8cmを測る。外体部は粗い刷毛目、内面はヘラ削り調整である。3~5とともにカマド内出土。



第236図 204号住居跡カマド実測図 (1/30)

205・206号住居跡（第238図）

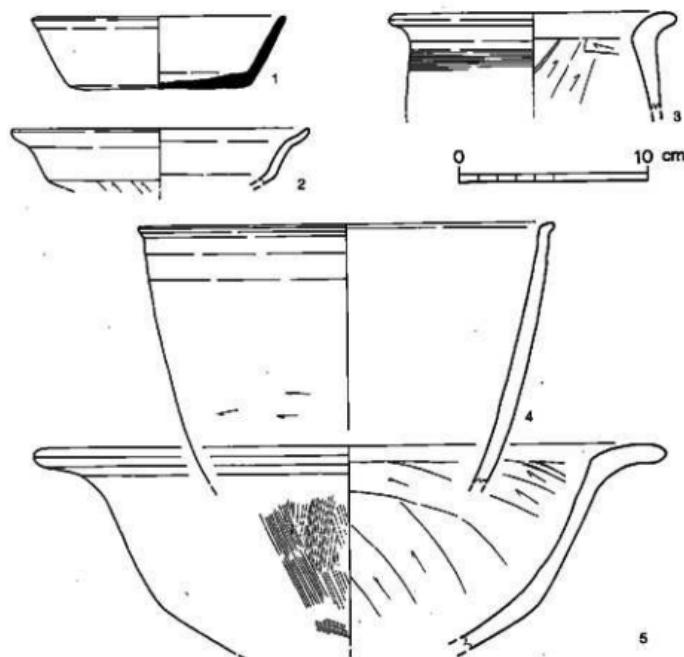
調査区北域の西側で検出。切り合い関係は古い順に竪穴61-206-205となる。205号の規模は東西2.1m×南北2.14mを測り、主住穴は検出されなかった。小型の方形住居で、北壁にカマドを配す。206号の規模は東西3.36m×南北3.38mを測る方形の住居である。出土遺物はない。

205号カマド

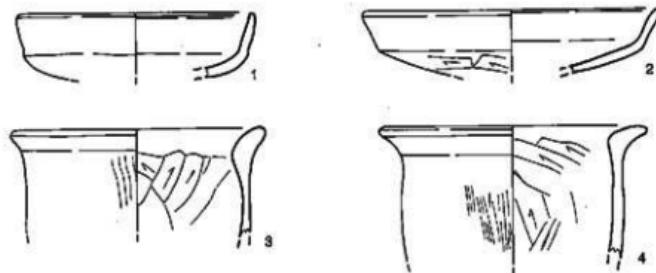
北壁中央で検出した突出型のカマドで、幅60cm、奥行き46cmを測り、カマド中央に径30cm程度の穴を検出した。火床は赤く焼けていた。

205号住居跡出土遺物（図版102、第237図）

土器（1~4） 1・2は壊身片で復原口径を順に12.4cm、16.0cm。3・4は小型の壺口縁部片で順に口径13.6cm、14.4cmを測り、外体部に煤が付着。1・4とともにカマド内出土。

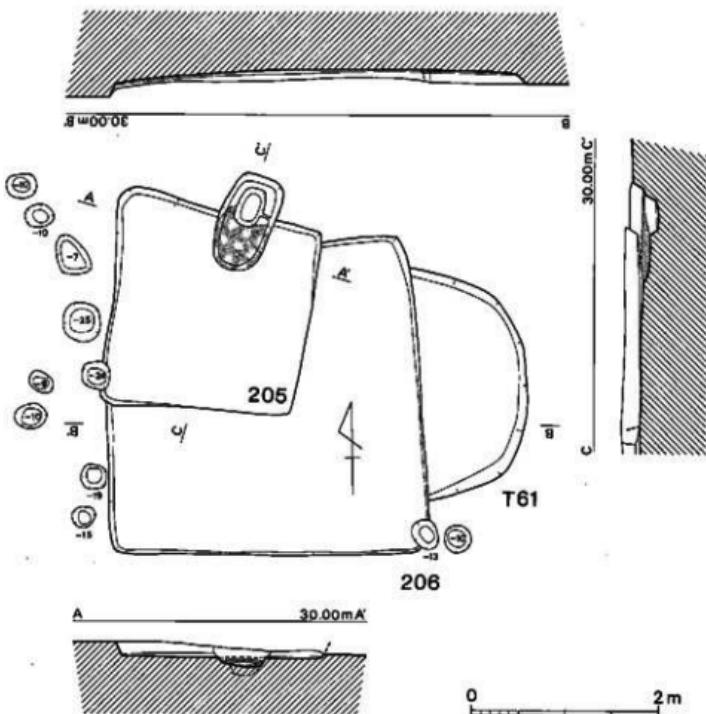


204



205

第237图 204·205号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第238図 205・206号住居跡、61号竪穴実測図 (1/60)

207号住居跡（図版86、第239図）

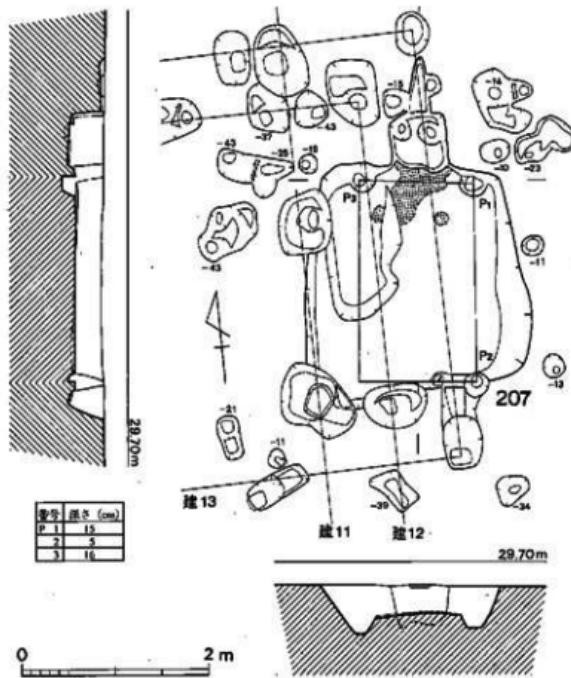
調査区の北域で検出した。古墳時代の掘立柱建物11～13号を切っている。規模は東西2.3m×南北2.5mを測り、小型の方形住居である。主柱穴は壁寄りにP1・P2・P3を検出した。柱間間隔はP1-P2が2.1m、P2-P3が1.24mである。北壁にカマドを配している。

カマド（第86図）

北壁中央で検出した突出型のカマドで、幅60cm、奥行き60cmを測り、約58cmの煙道が延びる。カマド前面には焼土が散在していた。

出土遺物（図版102、第243図）

須恵器（1・2） 1は蓋片。2は高台付坏身片である。



第239図 207号住居跡実測図 (1/60)

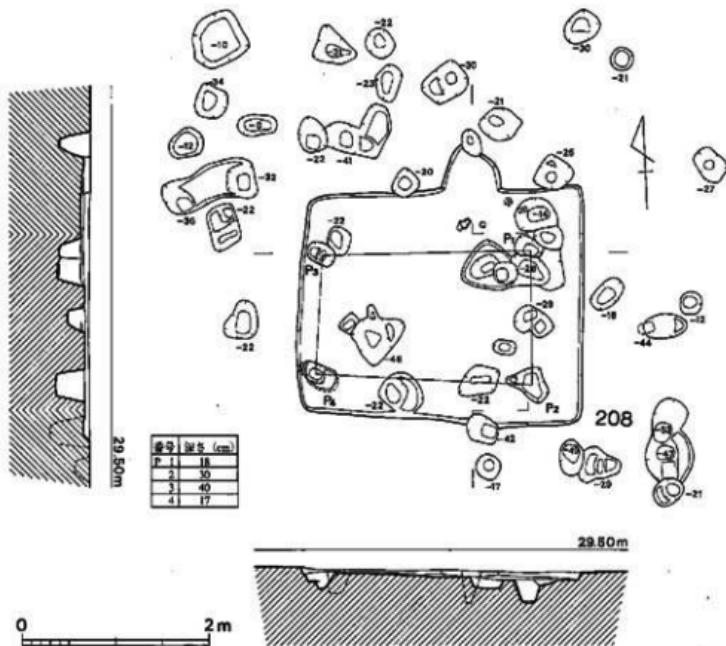
土師器 (3~5) 3~5は壊身片。順に復原口径13.7cm, 12.4cm, 12.8cmを測る。5以外はカマド内出土。

208号住居跡 (第240図)

調査区の北壁で検出したが削平が著しい。規模は東西3.06m×南北2.44mを測る。主柱穴は壁寄りにP1~P4を検出した。柱間間隔はP1~P2が1.44m, P1~P3が2.44mである。北壁にカマドを配している。

カマド

北壁中央で検出した突出型のカマドで、幅64cm, 窓行き48cmを測る。火床は焼けていない。



第240図 208号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (第243図)

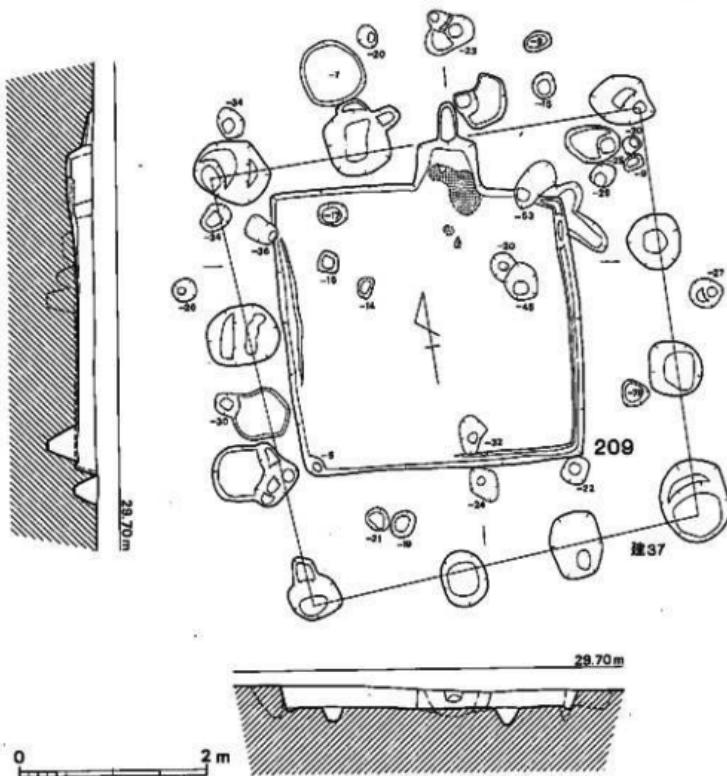
土器片 (1~3) 1は壊身片で口径14.2cm。2は小型の甌で口径10.6cmで、外体部に煤が付着。3は鍋の口縁部片である。

209号住居跡 (図版87, 第243図)

調査区の北域で検出した。掘立柱建物37号と切り合っており、掘立柱建物は本跡を取り囲んでいる。新旧関係は定かでない。住居の規模は東西3.2m×南北3.06mを測る。柱穴は数個検出されたが主柱穴とは判断できない。壁寄りに排水溝を確認した。北壁にカマドを配している。

カマド (図版87)

北壁中央で検出した突出型のカマドで、幅76cm、奥行き約50cmを測り、さらに奥へ40cmの煙道が延びている。火床は赤褐色に焼けていた。



第241図 209号住居跡実測図 (1/60)

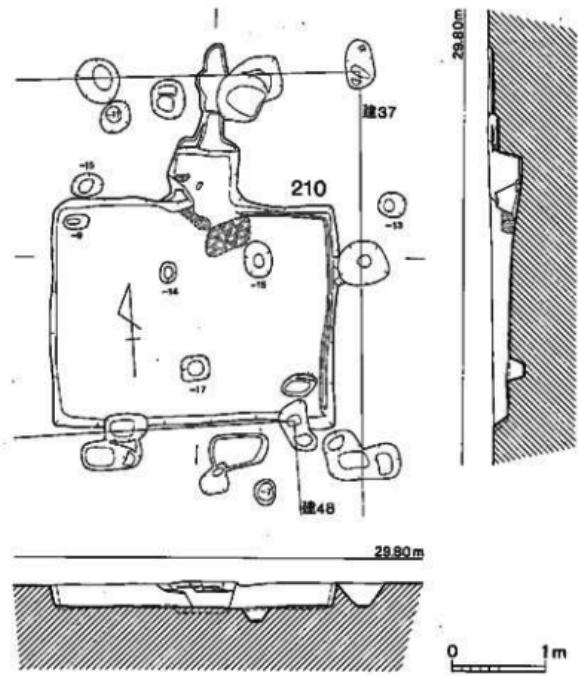
出土遺物 (第243図)

須恵器 (1) 蓋の破片である。

土師器 (2) 壊身片で復原口径16.8cm。内面は工具による丁寧なナデである。

210号住居跡 (図版88, 第242図)

調査区の北域で検出した。切り合いは掘立柱建物35・36・48号と切り合っており、住居が古い。規模は東西3.06m×南北2.4mを測る。柱穴は数個検出されたが主柱穴とは判断できない。



第242図 210号住居跡実測図 (1/60)

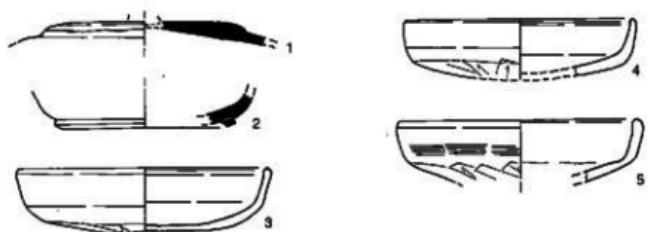
東壁寄りに排水溝を確認した。北壁にカマドを配している。

カマド(國版88)

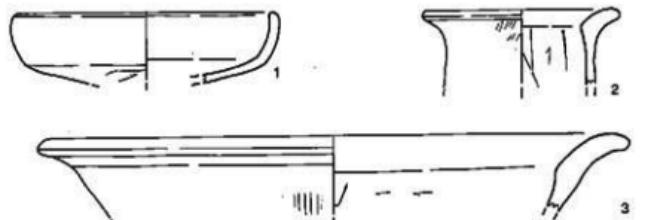
北壁中央で検出した突出型のカマドで幅約74cm、奥行き約54cmを測り、さらに奥へ114cmの煙道が伸びている。煙道は2段に掘られていた。火床は赤褐色に焼けしまっており、付近から土器が出土した。

出土遺物（図版102、第243図）

土師器(1~3) 1・2は壺身片で、1は器肉が厚く復原口径12.0cm。2は口径16.6cmを測り、口縁端部が外反する。体部に煤付着。3は壺の破片で、支脚に使用されたのか煤が多く付着している。胎土には石英・雲母・細砂粒等を含み、焼成は硬質である。これら全てカマド内から出土した。



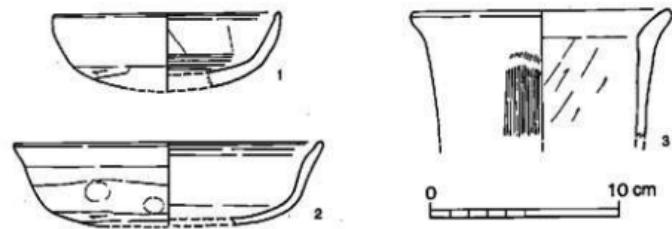
207



208



209



210

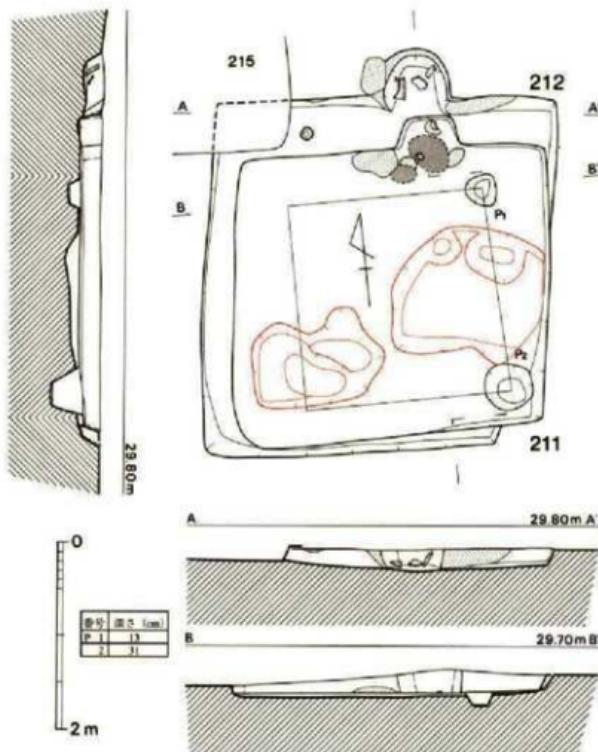
第243図 207~210号住居跡出土土器実測図 (1/3)

211・212号住居跡（図版89、第244図）

調査区の最北域で検出した住居の一群である。切り合い関係は古い順に216-214-213-212-211・215号となる。211号の規模は東西3.38m×南北3.08mで、北壁にカマドを配する方形住居である。主柱穴はP1, P2を検出し、柱間間隔はP1-P2が2.28mを測る。西半部の壁は削平されやっとプランを確認できた。212号は211号より一回り大きく東西3.68m×南北3.08mである。カマドを同じように北壁に設けている。

カマド（図版90、第245図）

211号は北壁中央で検出した突出型のカマドで幅約70cm、奥行き約34cmを測る。カマド左袖



第244図 211・212号住居跡実測図 (1/60)

と火床中央部には粘土の固まりと焼土の残存を見た。212号は突出型のカマドで規模は幅86cm、奥行き50cmである。カマド及び住居の壁に粘土を貼っているのが判る。

211号住居跡出土遺物（第246図）

須恵器（1） 壊身片で復原口径13.6cm。

土師器（2） 壊身片で器肉が薄く復原口径12.4cm。体部に指の圧痕が認められる。

212号住居跡出土遺物（図版102、第246図）

須恵器（1～5） 1～3は壺で、復原口径は1から17.2cm、16.0cm、15.0cmである。4・5は壊身片で、4は復原口径12.0cm。5は浅い高台付である。

土師器（6～9） 6・7は壊身片で、7は口縁部が直立する。復原口径12.9cm、12.7cmである。7の内面に油煙が付着。8・9は壺の破片で口径14.8cm、29.8cmで、9はカマド内出土。

213・214号住居跡（図版89、第247図）

前記住居の一群で、切り合い関係は前述のとおりである。213号は北壁・東壁の一部を検出したのみで、北壁にカマドを配する。残存壁長北壁2.5m、東壁1.0mである。主柱穴は貼床下層の状況と合わせ判断して、P1・P2・P3を検出。柱間寸法はP1-P2が2.04m、P1-P3が2.04mを測る。214号は大きい住居で推定規模は東西5.9m×南北4.84mである。北壁にカマドを配する。

カマド（図版90、第248・249図）

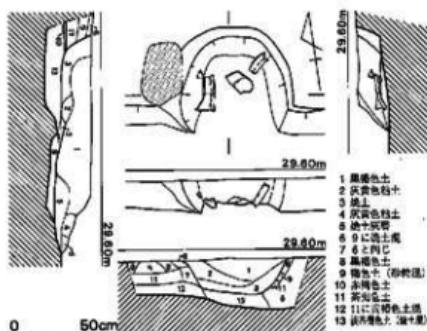
213号は北壁中央で検出した突出型のカマドで幅約76cm、奥行き約35cmで、カマド奥壁から94cmの通道が伸びる。約20cmの両袖が残存。火床中央部には赤褐色の焼土を見る。214号は213号に切られていたものの比較的の残存状態が良い突出型のカマドで、規模は幅64cm、奥行き56cmで、約50cmの通道を設けている。両袖が残る。

213号住居跡出土遺物（第246図）

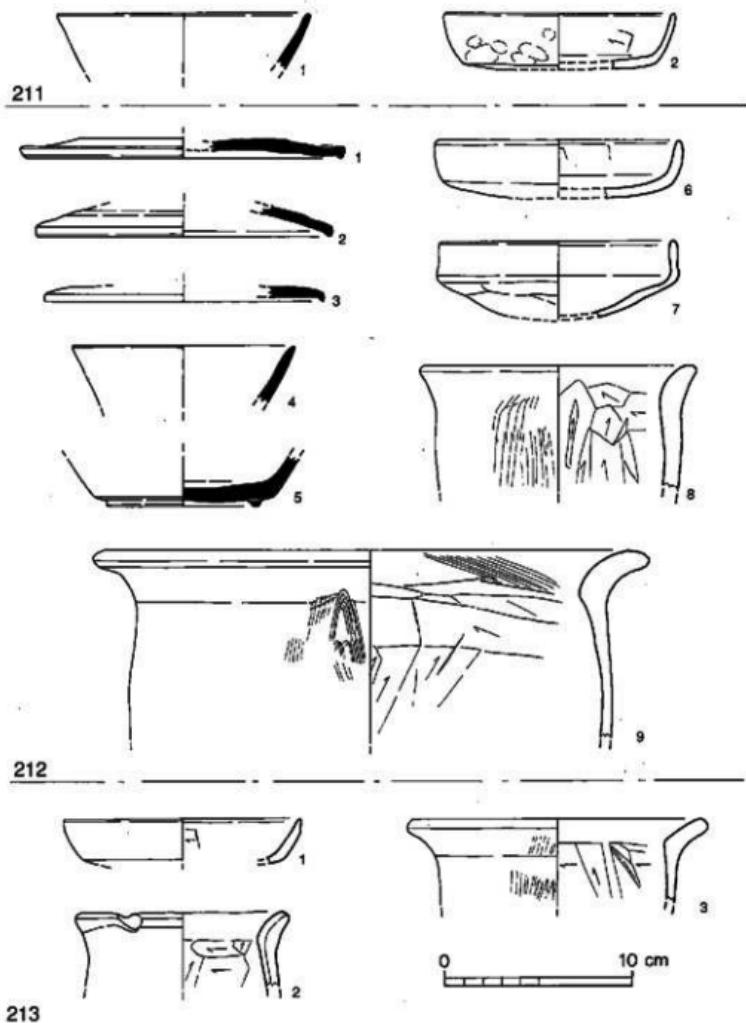
土師器（1～3） 1は壊身片で復原口径12.8cm。2・3は壺片で復原口径11.6cm、16.2cm。

214号住居跡出土遺物（第251図）

土師器（1～5） 1・2は壊身片で順に復原口径12.4cm、12.6cmである。3・4は壺の破片で、4

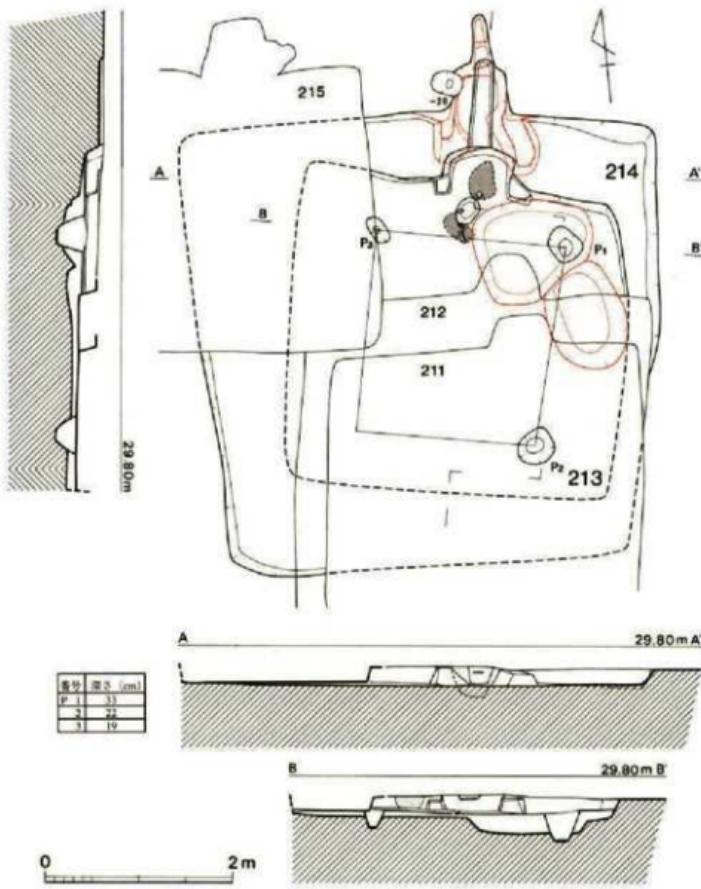


第245図 212号住居跡カマド実測図（1/30）

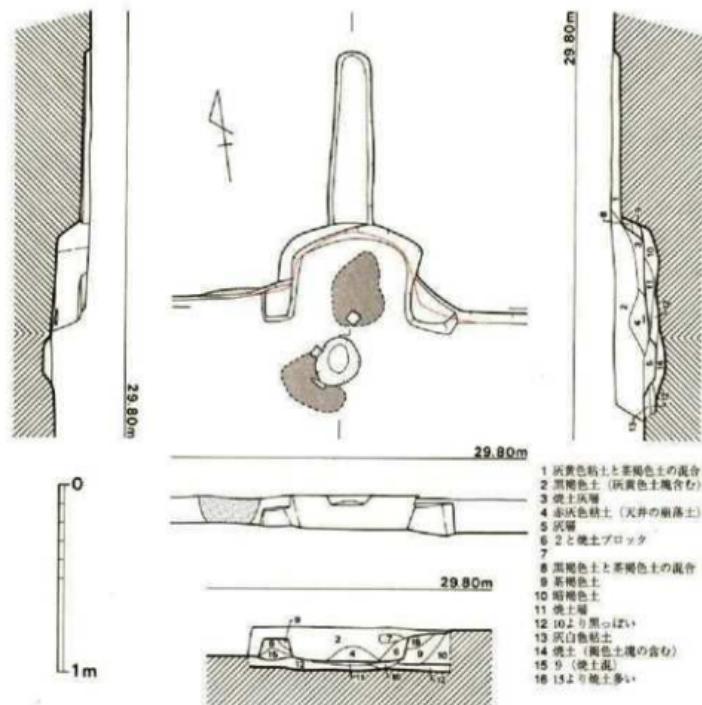


第246図 211～213号住居跡出土土器実測図 (1/3)

は口径22.3cmである。5は口唇部を肥厚した鍋の破片で、復原口径17.4cmである。全てカマド内出土。



第247図 213・214号住跡実測図 (1/60)



第248図 213号住居跡カマド実測図 (1/30)

215号住居跡 (図版89, 第250図)

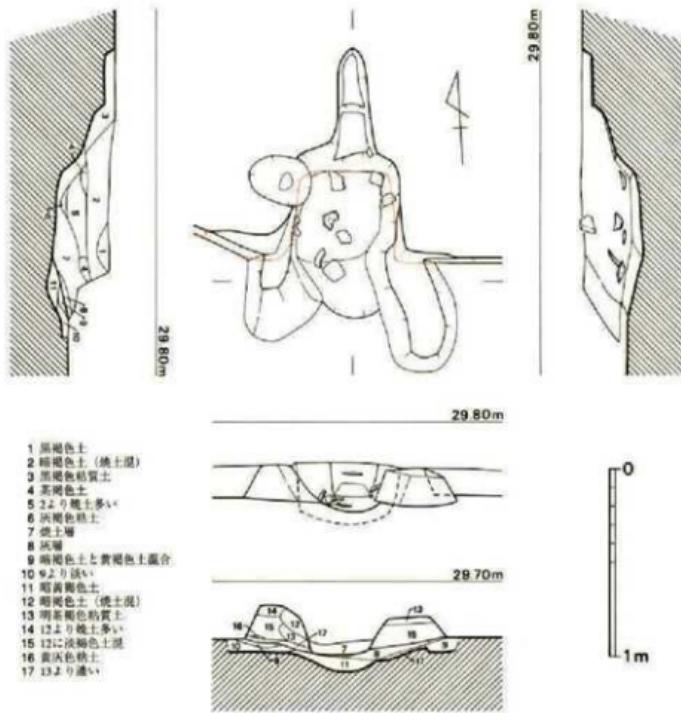
切り合っている住居の中では最も新しい。住居の規模は東西3.2m×南北3.02mを測る。柱穴はP1・P2を検出し、その柱間間隔は2.1mを測る。西壁寄りに排水溝を確認した。北壁にカマドを配している。

カマド

北壁中央で検出した突出型のカマドで幅約74cm、奥行き約62cmを測る。火床は赤褐色に焼け、やや掘り進められている。付近から土器を検出した。

出土遺物 (図版102, 第251図)

須恵器 (1・2) 1は环身片で復原口径14.4cm。2は皿で17.8cmである。



第249図 214号住居跡カマド実測図 (1/30)

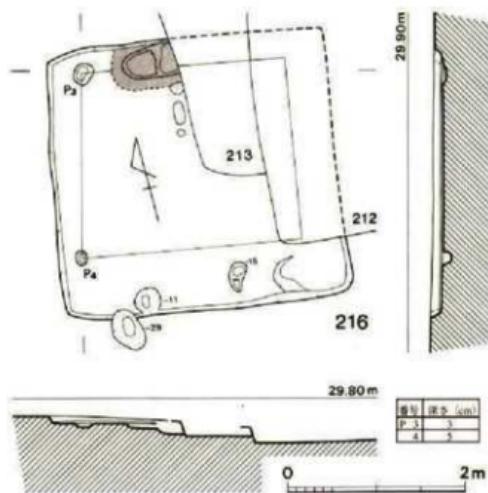
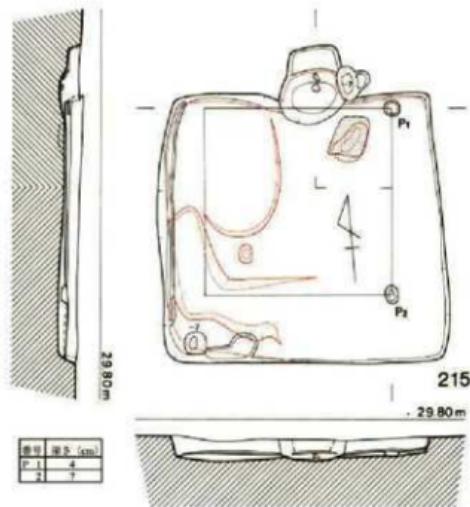
土器器 (3~5) 3・4は壺身片で復原口径14.4cm, 17.8cmを測り, 4の内面は焦がれた痕がある。5は甕片で内面に焦付着。復原口径26.0cm。

216号住居跡 (図版89、第250図)

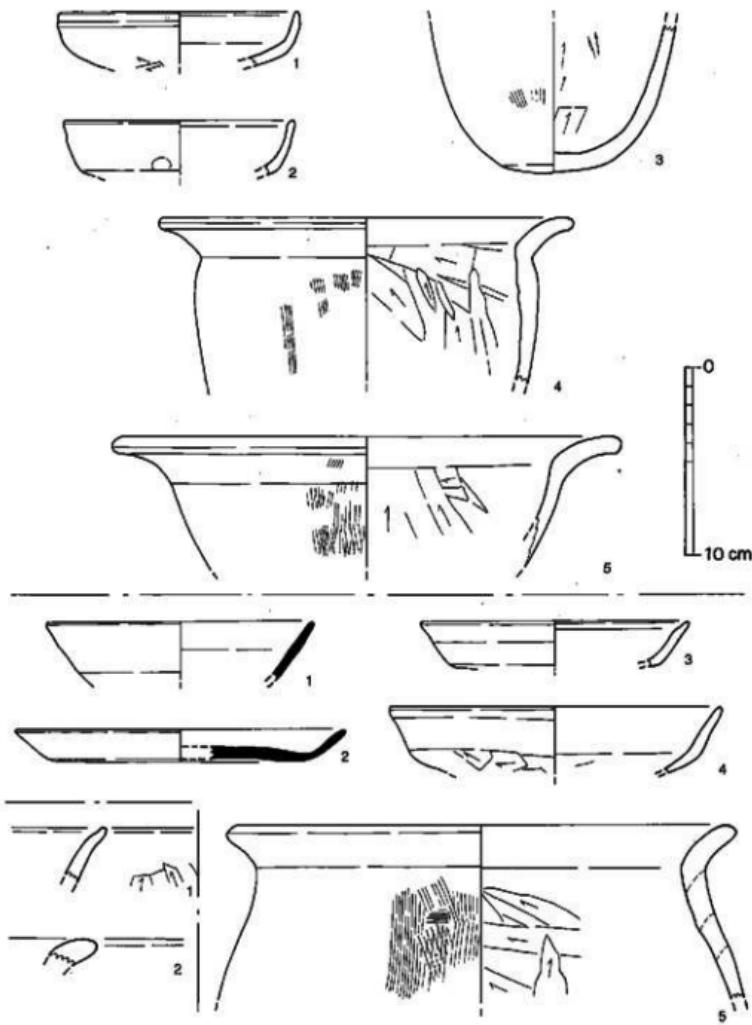
切り合っている住居の中では最も古い。住居の規模は東西3.26m×南北3.08mを測る。柱穴はP3・P4を検出し, その柱間間隔は2.08mを測る。北壁中央部に焼土と粘土の塊を検出した。

出土遺物 (第251図)

土器器 (1・2) 壺身片と甕の口縁部片か。



第250図 215・216号住居跡実測図 (1/60)



第251図 214・216号住居跡出土土器実測図 (1/3)

3. 掘立柱建物跡

30号建物跡（図版91、第252図）

調査区北域で検出した2間×3間の南北棟である。切り合い関係は31号建物跡及び216号住居跡と切り合っており、建物が新しい。柱間寸法は梁間・桁間共に182cm等間である。掘方は径60cm程の不整円形で、深さは20~40cmである。

31号建物跡（図版91、第252図）

切り合い関係は30・32号建物跡と切り合っており、本跡が新しいと考える。規模は梁行2間×桁行3間の南北棟で、柱間寸法は梁間が197cm、桁間が182cmを測る。掘方・深さは30号建物と等しい。

32号建物跡（図版91、第253図）

30号建物跡に接近して検出した。規模は梁行2間×桁行3間の南北棟で、柱間寸法は梁間が182cm、桁間が北から121cm、121cm、182cmを測る。掘方は前記建物に比較してやや小さい。深さは20~50cmである。

33号建物跡（図版91、第253図）

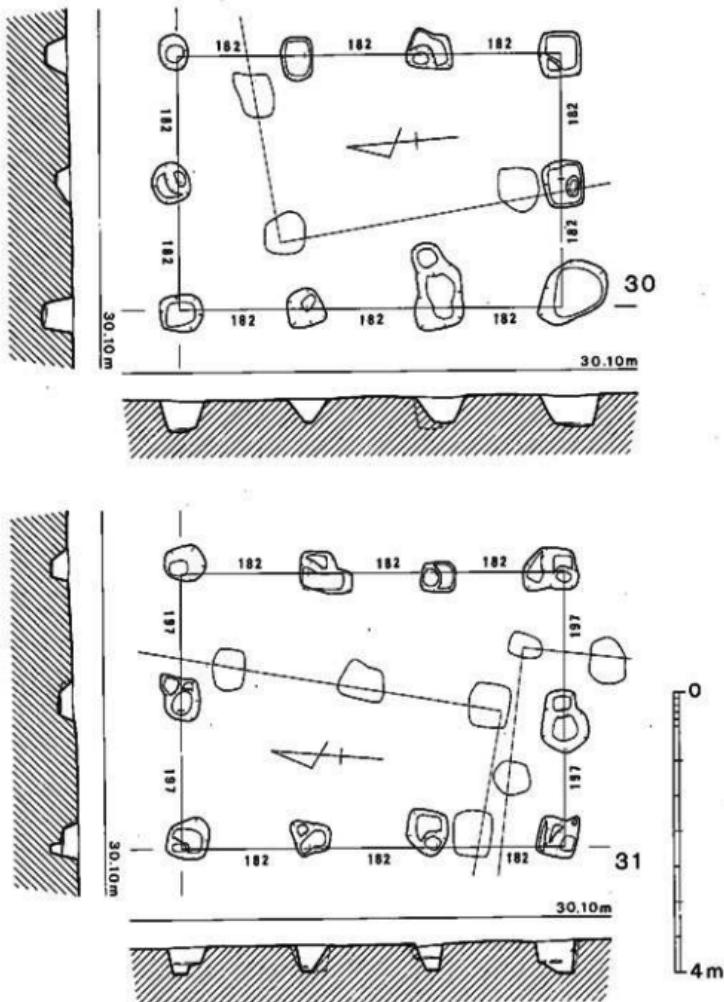
西側の発掘区に接して検出した。規模は梁行1間×桁行2間の東西棟で、柱間寸法は梁間が303cm、桁間が167cm等間である。掘方は比較的大きく径80cm、深さは60cmである。桁行列は幅40~60cm、深さ12cm前後の布堀が施されている。

34号建物跡（図版92、第254図）

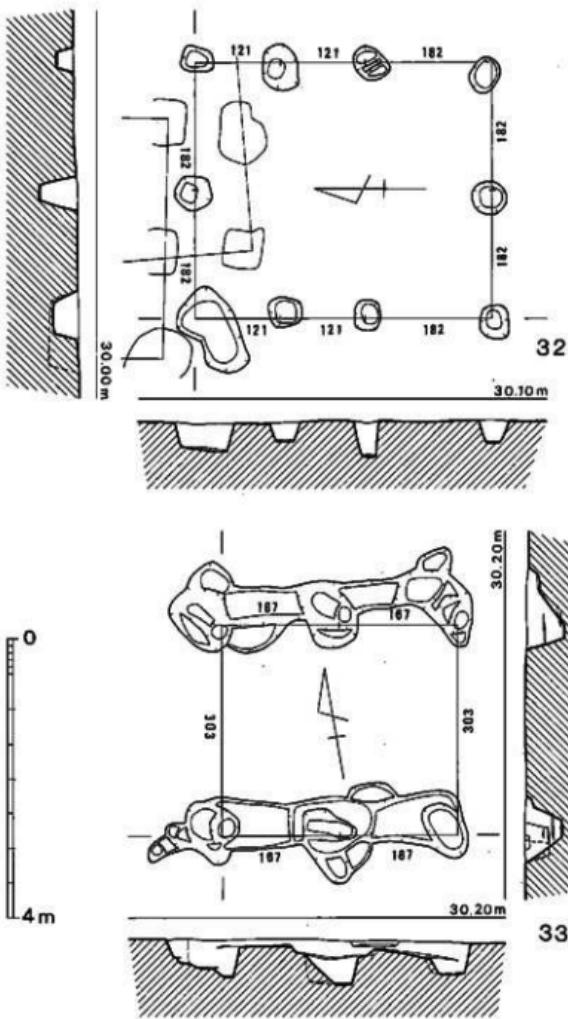
発掘区北側の中央に検出した。規模は梁行2間×桁行2間の柱柱であり、東西に長い建物で、柱間寸法は梁間が166cm、桁間が東から203cm、223cmを測る。掘方は比較的大きく径80~100cmあり、深さは60~80cmある。梁行列は幅60~80cm、深さ40cm前後の布堀が掘られている。

35・36号建物跡（第254図）

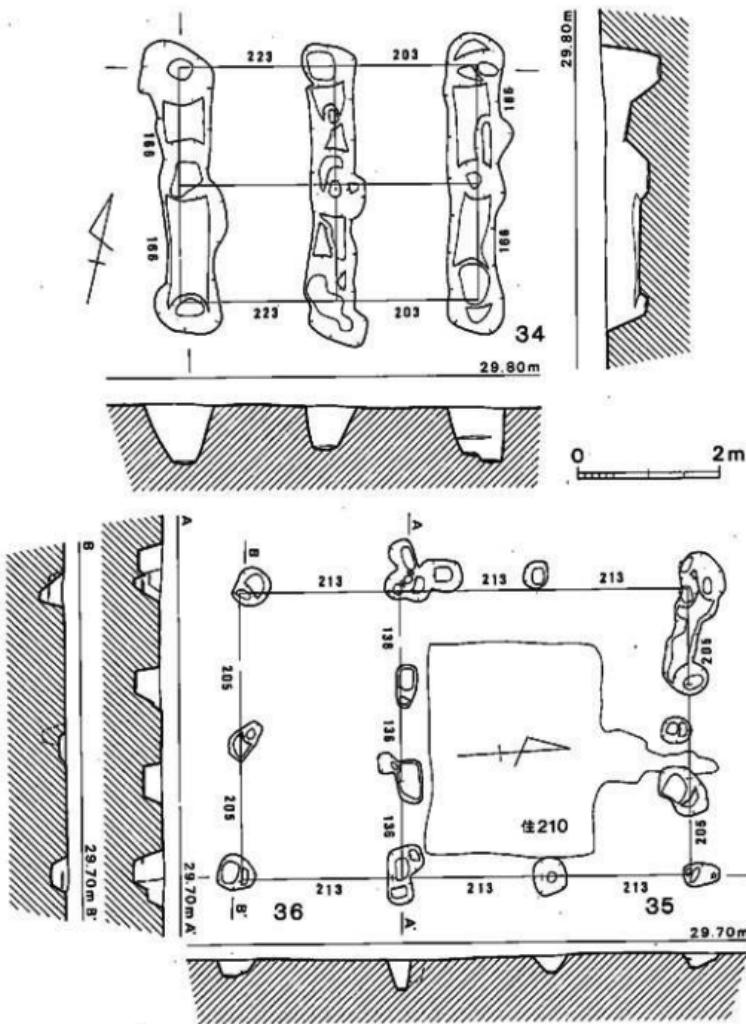
発掘区北側のはば中央で検出した。切り合い関係は堅穴住居210-36-35-48号と考えられる。35号と36号は建替えを行っており、同じ柱掘方を使用している。35号の規模は梁行2間×桁行3間の正方形に近い建物で、柱間寸法は梁間が南から200cm、210cm、桁間が136cm等間を測る。この建物は210号住居を取り囲むように検出された。36号の規模は梁行2間×桁行3間の南



第252図 30・31号遺物跡実測図 (1/80)



第253図 32・33号建物跡実測図 (1/80)



第254図 34・36号建物跡実測図 (1/80)

北棟で、柱間寸法は梁間が205cm、桁間が213cmの等間である。掘方は径30~50cmの円形を呈し、深さ25~40cm前後である。

37号建物跡（図版92、第255図）

発掘区北側の中央で検出した。規模は梁行3間×桁行3間で、南北に僅かに長い建物である。柱間寸法は梁間が152cm等間で、桁間が北側1間のみ184cmと広い他は152cmを測る。209号住居を取り囲む形で検出した。柱穴の掘方は比較的大きく径60~80cmあり、深さは45cm平均である。

38号建物跡（第255図）

発掘区の最も北側で検出した造構である。規模は1間×1間で、ほぼ正方形に近い建物である。柱間寸法は東西が250cm、南北が東側で252cm、西側で236cmを測る。掘方は径50cm前後の円形で、深さは40cm平均である。

39号建物跡（第255図）

発掘区の最も東側で検出し、建物の大半は調査区外である。梁行2間分を検出し、柱間寸法は168cmである。深さは40cm平均である。

40号建物跡（第256図）

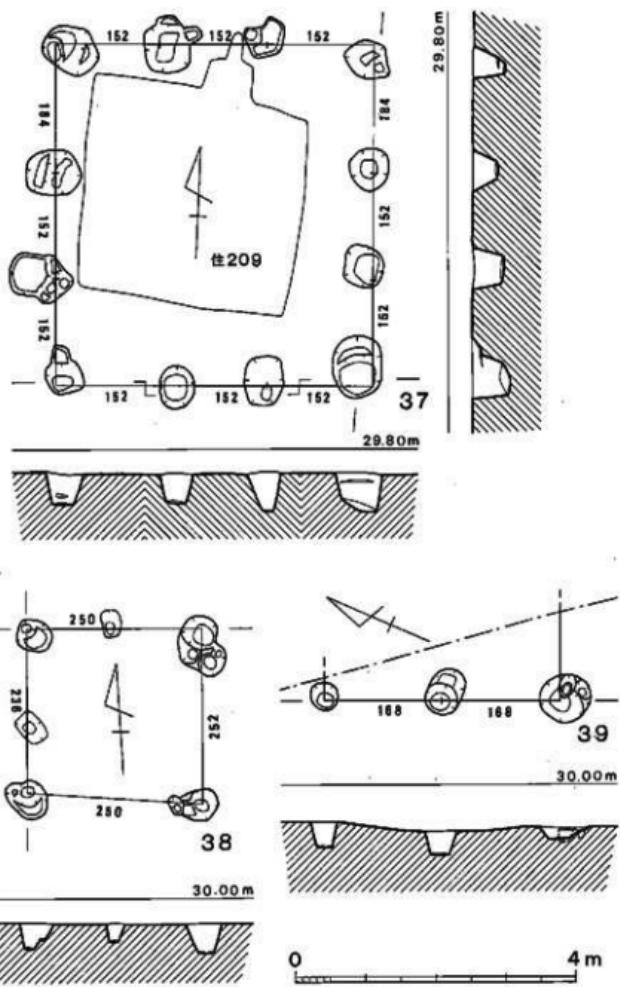
発掘区中央の東側で検出した。規模は梁行1間×桁行2間で、東西に長い建物である。柱間寸法は梁間が245cm、桁間が東から150cm、176cmである。西側梁行中央に柱穴があり、構造上何等意味があるのかもしれない。柱穴の掘方は比較的大きく径50~80cmあり、深さは40~50cmを測る。

41号建物跡（第256図）

40号の南側にあり、規模は梁行1間×桁行2間の東西棟である。柱間寸法は梁間が194cm、桁間が130cm等間である。東側梁行中央に柱穴がある。掘方は径40~60cmの略円形で、深さは30cm平均である。

42号建物跡（第256図）

斐拾墓群の北側で検出。規模は梁行1間×桁行2間の略東西棟である。柱間寸法は梁間が300cm、桁間が北側で180cm、146cm、南側で150cm、176cmと区々である。掘方は径40~60cmの略円形で、深さは15~40cmである。



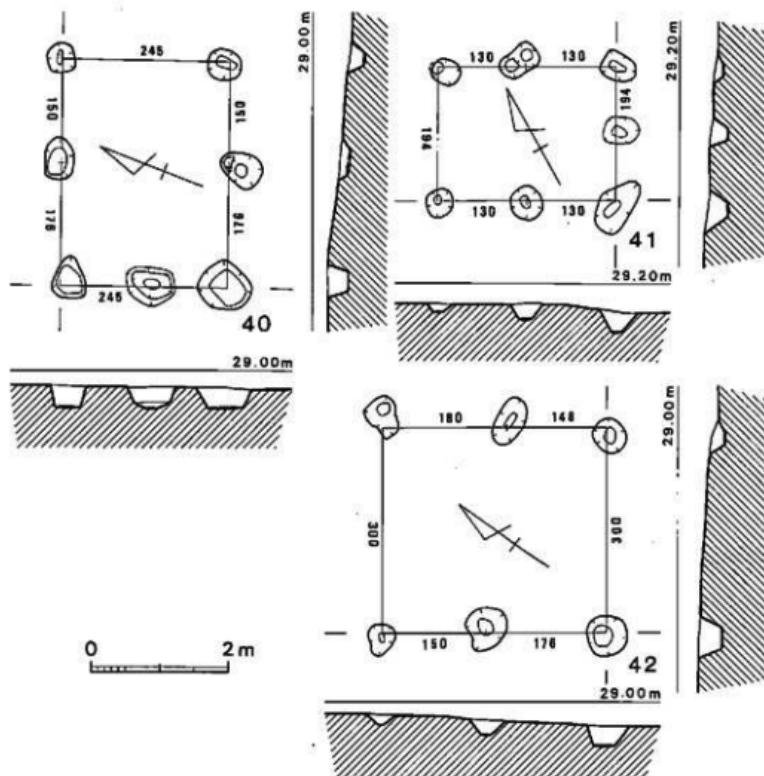
第255図 37~39号建物跡実測図 (1/80)

43号建物跡（第257図）

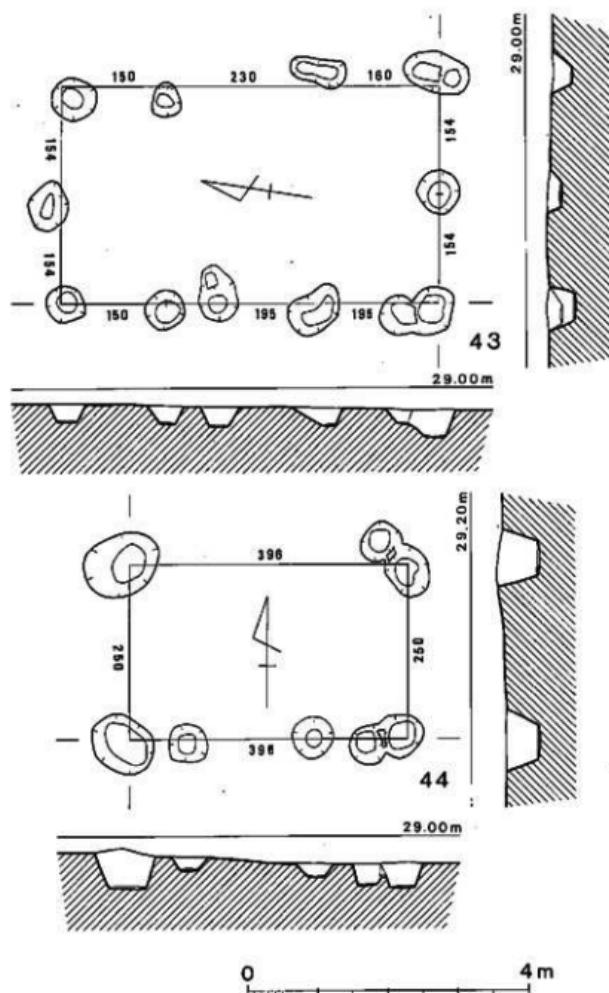
壺棺墓群の北側に検出。規模は梁行2間×桁行3間の南北棟である。柱間寸法は梁間が154cm等間、桁間が東列で北から150cm, 230cm, 160cm、南列で150cmと195cmが2間である。掘方は区々で径40cm～80cmの略円形で、深さは40cm平均である。

44号建物跡（第257図）

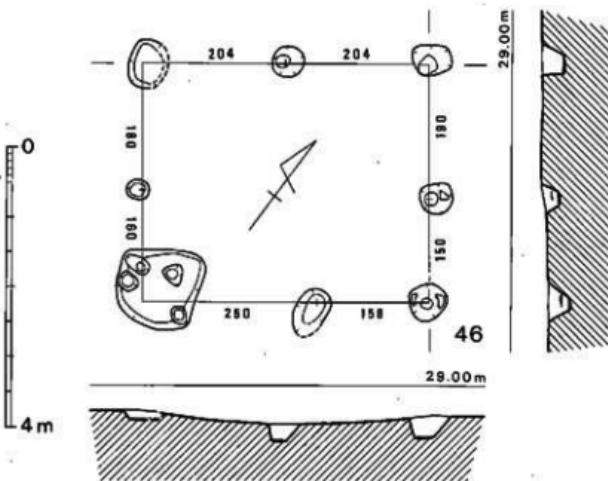
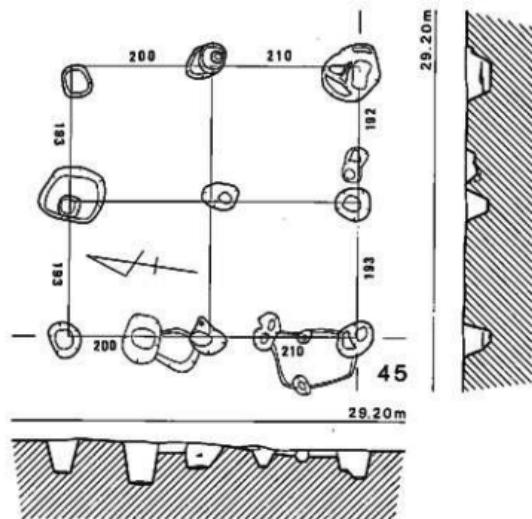
調査区のほぼ中央で検出。規模は梁行1間×桁行1間の東西棟である。柱間寸法は梁間が250



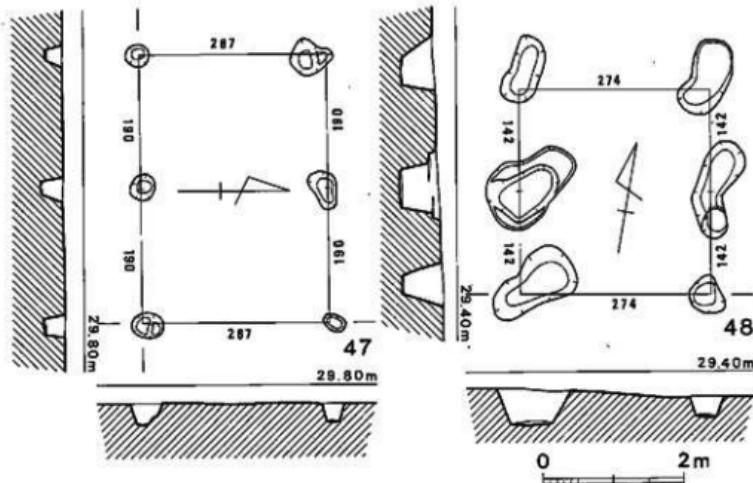
第256図 40～42号建物跡実測図 (1/80)



第257図 43・44号建物跡実測図 (1/80)



第258図 45・46号建物跡実測図 (1/80)



第259図 47・48号建物跡実測図 (1/80)

cm、桁間が396cmとやや長いが、南側桁行に2本の柱穴を確認した。掘方は区々で径50~100cmの略円形で、深さは50cm平均である。

45号建物跡（第258図）

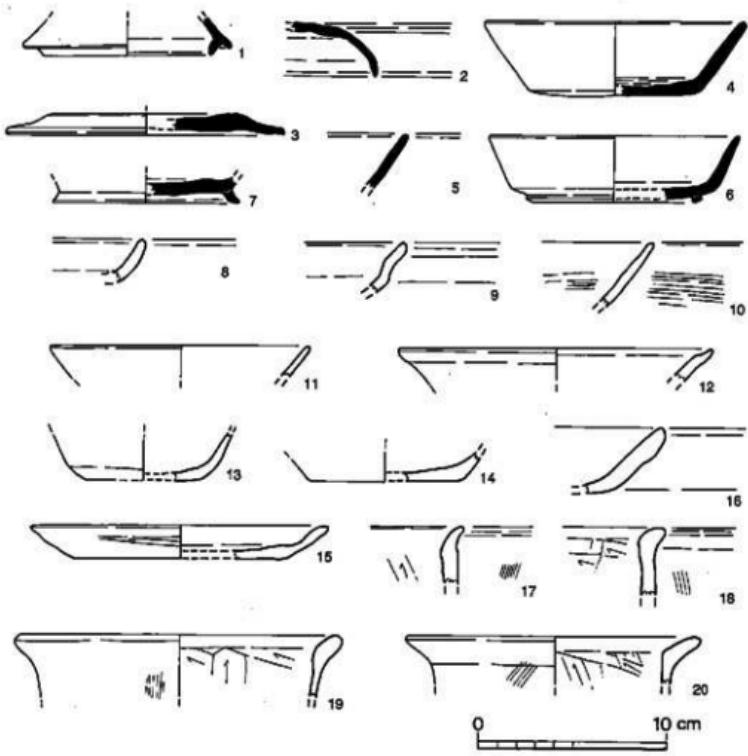
調査区の南域にあって西側区域寄りに検出した。規模は梁行2間×桁行2間の南北にやや長い総柱建物である。柱間寸法は梁間が192cm、桁間が220cmの等間である。掘方は区々で径50~100cmの略円形で、深さは30~50cmである。

46号建物跡（第258図）

調査区の南域にあって西側区域寄りに検出した。規模は梁行2間×桁行2間の東西棟である。柱間寸法は梁間が170cm、桁間が北列で204cm等間、南列で東から158cm、250cmを測る。掘方は区々であるが径50cm前後の略円形で、深さは30~50cmである。

47号建物跡（第259図）

調査区の北域で検出した。規模は梁行1間×桁行2間の東西棟である。柱間寸法は梁間が267cm、桁間が北・南列で190cm等間である。掘方は区々であるが径40cm前後の略円形で、深さは



第260図 墓物跡出土土器実測図 (1/3)

30cm平均である。

48号建物跡（第259図）

調査区の中央にあって、西側区域寄りに検出した。規模は梁行1間×桁行2間の南北にやや長い建物である。柱間寸法は梁間が274cm、桁間が142cm等間である。掘方は大きく区分で、径45～140cm前後の略円形で、深さは50cm平均である。

出土遺物（第260図）

※（建30）と記したものは、出土建物跡遺構番号を表示した。

須恵器（1～7）1～3は蓋で、1は返りを有し復原口径9.2cm、2は無返りの蓋（建32）。3は復原口径15.0cm（建35）。4～7は坏身片で、4は口径14.0cm（建32）。5は口縁部片（建35）、6（建21）・7（建24）は高台付である。

土師器（8～20）8（建34）、9（建31）、10・11・12（建35）は坏身の口縁部片。復原口径11は14.0cm、12は16.8cmを測る。13（建37）、14（建35）は坏身の底部片である。15は皿の破片で復原口径16.2cm（建35）。16は盤の破片か（建31）。17～20は壺の口縁部片で、復原口径の計測できる19は17.6cm、20は15.8cmを測る。17・18は（建28）、19は（建33）、20は（建35）である。

4. 土 壤

土壤が検出されたのは調査区の北半に多く、しかも四重五重に重複していた。したがって互層された中での遺物の混入が著しく、古墳及び奈良時代の土壤と判断しがたいものもあり、遺構の性格等を加味し記載した。特に138号から143号は大部分の土器が古墳時代のものであり、同時代の土壤であると考えたが、奈良時代の須恵器及び土師器と遺構の特徴から、奈良時代の項で記載することとした。

131・132・133・134号土壤（図版93、第261図）

調査区の北側で検出した。切り合い関係は古い順に133・132・134・131号となる。平面プランは不整形で、最大径を131号から順に3.6m、4.25m、3.9m、5.1mを測る。深さはほぼ同一で約45cm平均である。133・134号の底部には粘土及び焼土の塊が認められた。土壤は西から東へ掘り進められている。

出土遺物（第262図）

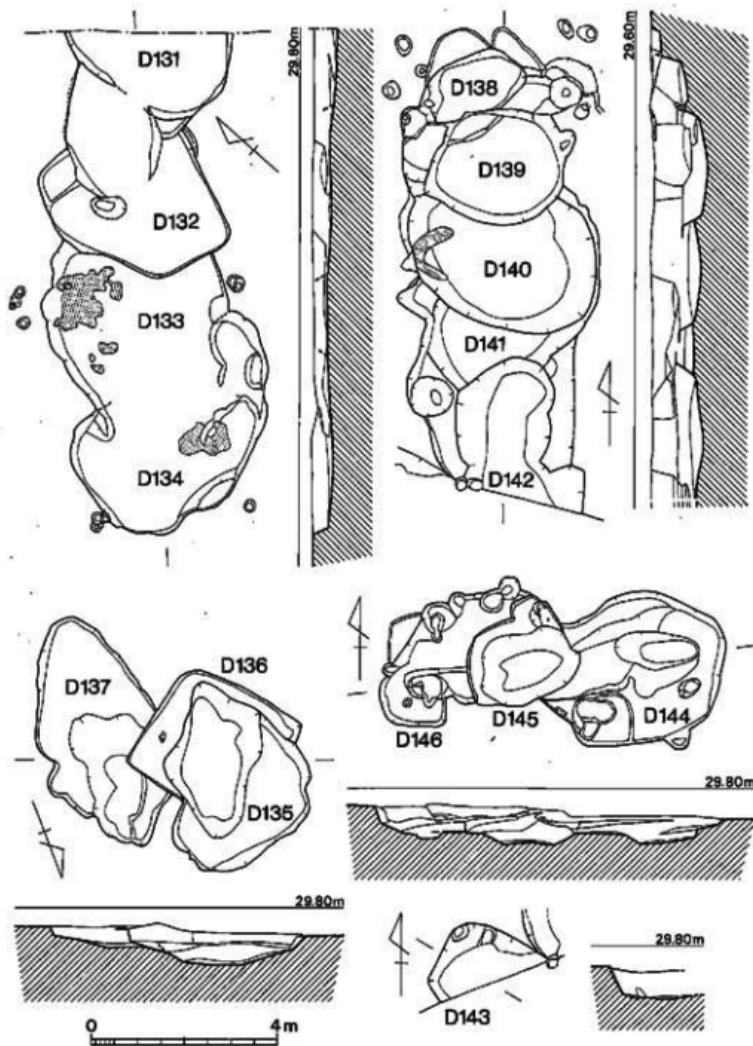
131号（1～3）1・2は須恵器で、1は復原口径12.0cmの蓋、2は坏身底部である。3は土師器坏身の底部片。

133号（4）須恵器坏身の口縁部片。

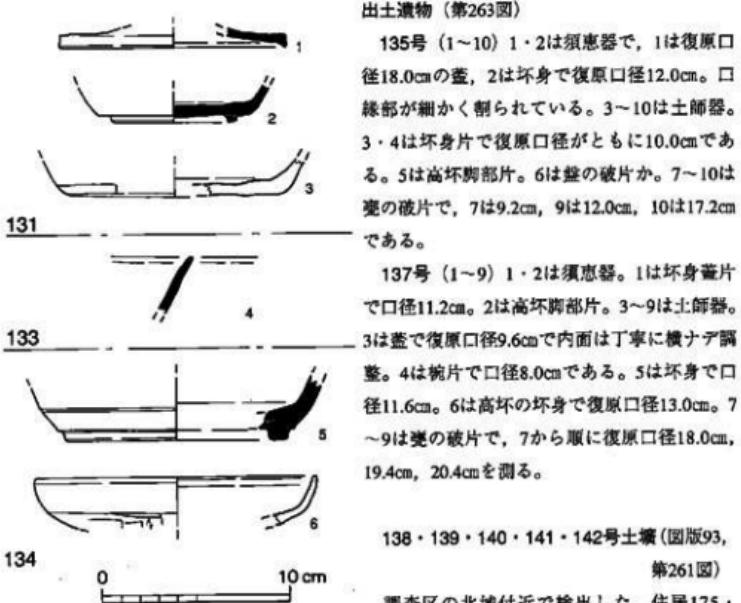
134号（5・6）5は須恵器で高台付の坏身片。6は土師器坏身で復原口径14.9cm。

135・136・137号土壤（第261図）

調査区の北側で検出した。弥生住居60・61号を切っている。土壤の切り合い関係は古い順に137・136・135号となる。135号の平面プランは不整形で2段に掘り進められており、長径4.1m×短径3.2m、深さ65cmを測る。136号は方形プランを呈し長径2.9m×短径2.7mで、そのほとんどは135号によって隠れている。137号の規模は長径5.0m×短径2.68m、深さ45cmである。



第261図 131～146号土壤実測図 (1/120)



第262図 131・133・134号土壙出土土器
実測図(1/3)

い順に141—138・140—139・142号となる。138号の平面プランは不整形で139号に切られている。長径2.35m×短径1.18m、深さ0.6mを測る。139号は円形プランを呈し長径2.9m×短径2.5m、深さ1.14mである。140号の規模は長径4.28m×短径2.3m以上、深さ1.0mである。141号は南・北縁を140・142号によって切られている。検出東西長約3.1m、深さ0.9m。142号は南縁で検出した土壙で、略円形のプランを呈する。長径2.9m以上×短径2.0mで、深さ1.1mを測る。出土遺物は特に138・139・142号で多く出土した。

出土遺物(図版103・104、第264~268図)

138号(1~15) 1~6は須恵器。1は復原口径11.9cmの蓋、2~4は坏身で、2は受け部のない坏身。順に復原口径12.5cm、10.2cm、10.9cmを測り、4は歪んでいる。5は高坏脚部片。6は壺、壺の底部か。7~15は土師器。7は坏身で口径12.3cm、器高3.4cm。8は楕で口径11.5cm、器高5.1cmである。9・10は高坏で9は口径12.5cm、器高10.6cm、底径11.2cmを測る。削り調整が多く見られ、丁寧な作りである。11~14は壺片で、11は復原口径18.0cmの広口壺、12は15.5cm、13・14は小

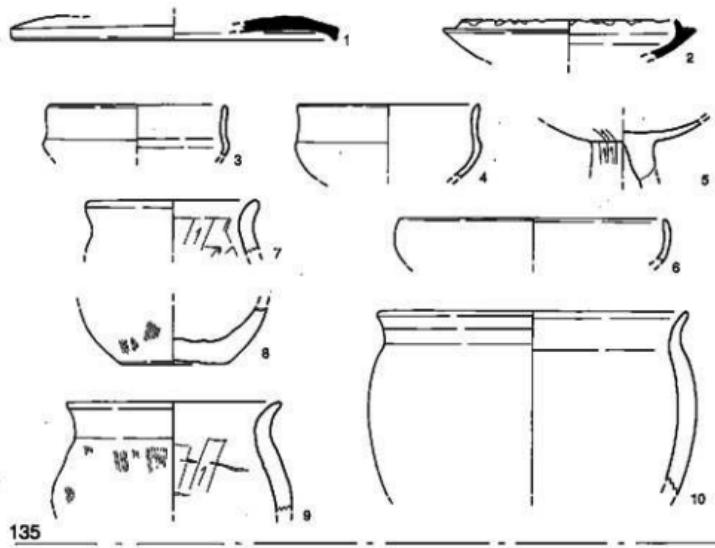
出土遺物(図版263図)

135号(1~10) 1・2は須恵器で、1は復原口径18.0cmの蓋、2は坏身で復原口径12.0cm。口縁部が細かく削られている。3~10は土師器。3・4は坏身片で復原口径がともに10.0cmである。5は高坏脚部片。6は壺の破片か。7~10は壺の破片で、7は9.2cm、9は12.0cm、10は17.2cmである。

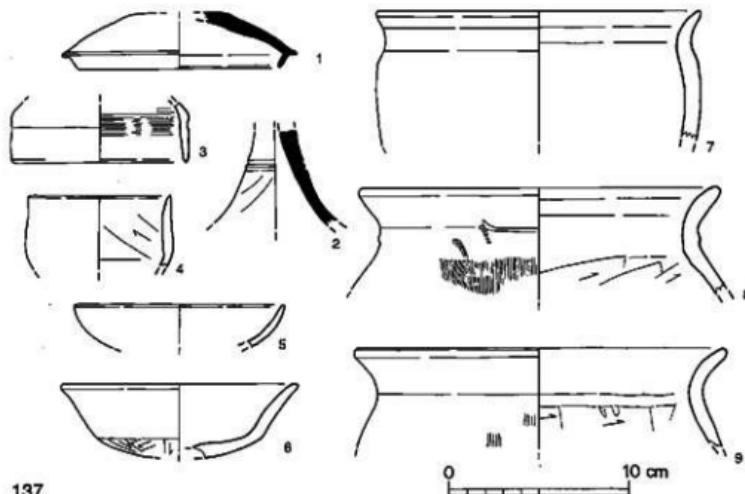
137号(1~9) 1・2は須恵器。1は坏身蓋で口径11.2cm。2は高坏脚部片。3~9は土師器。3は蓋で復原口径9.6cmで内面は丁寧に横ナデ調整。4は楕片で口径8.0cmである。5は坏身で口径11.6cm。6は高坏の坏身で復原口径13.0cm。7~9は壺の破片で、7から順に復原口径18.0cm、19.4cm、20.4cmを測る。

138・139・140・141・142号土壙(図版93、第261図)

調査区の北域付近で検出した。住居175・176号に切られている。土壙は南北方向に重複・疊なって検出し、その切り合ひ関係は古

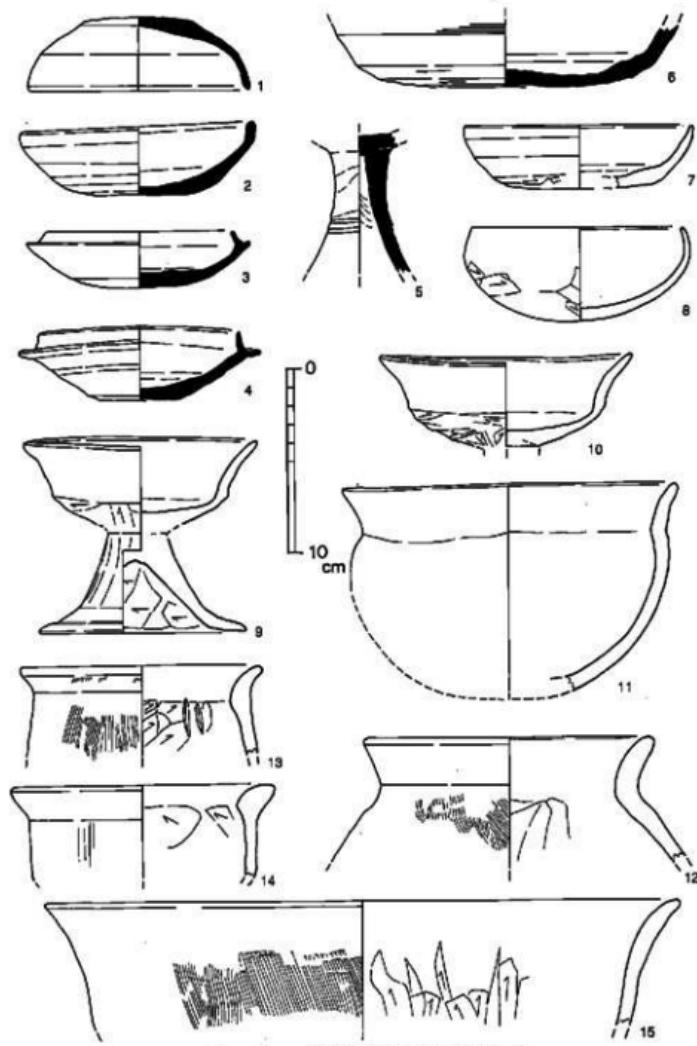


135

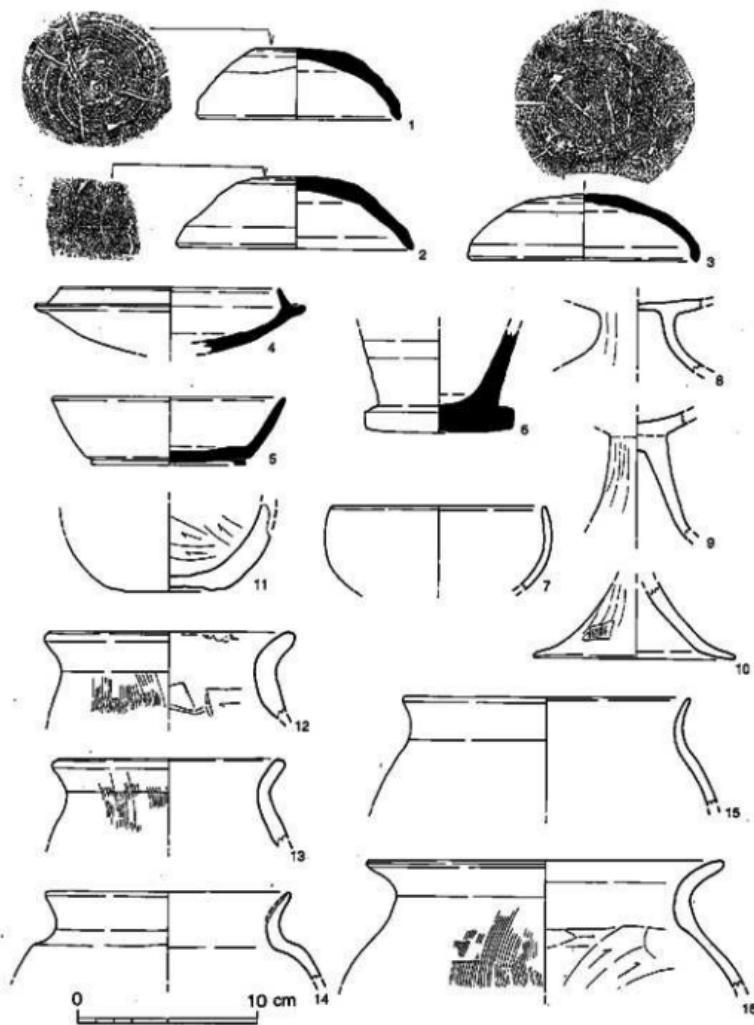


137

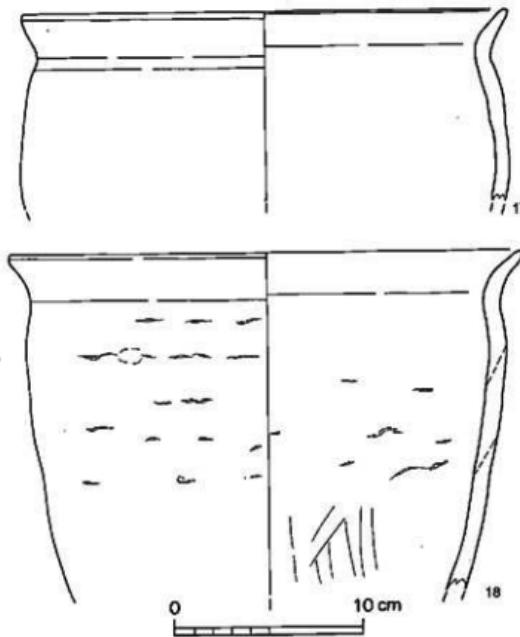
第263図 135～137号土壤出土土器実測図 (1/3)



第264图 138号土壤出土土器实测图 (1/3)



第265圖 139號土壤出土土器実測図① (1/3)

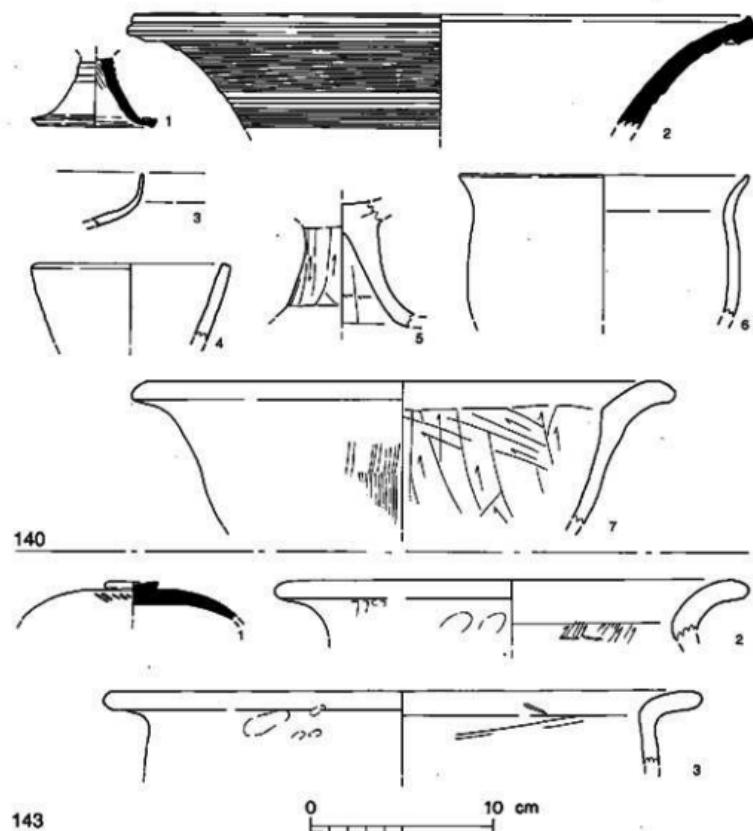


第266図 139号土壤出土土器実測図② (1/3)

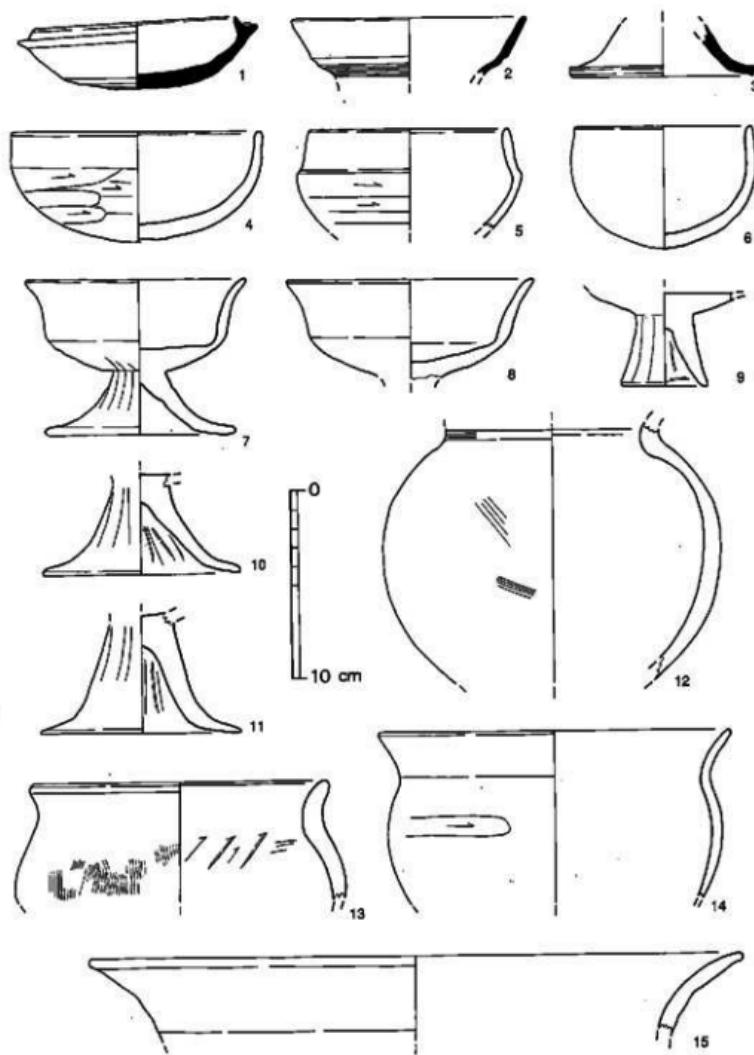
さい壺で復原口径13.0cm, 14.0cmを測る。15は壺の口縁部片か。復原口径34.4cmで、外体部は丁寧に刷毛目調整。

139号(1~18)1~6は須恵器。1~3は返りのない蓋で、順に復原口径11.0cm, 13.0cm, 12.6cmを測る。1~3ともに天井部にヘラ記号を見る。4・5は壺身で、4は受け部を有し復原口径12.2cm。5は浅い高台が付く壺身で、口径12.8cmである。6は指鉢の底部片である。7~18は土節器。7は椀の破片で口径11.7cm。8~10は高壺の肩部片である。11は碗及び壺の底部片か。14は壺の口縁部で復原口径13.5cmを測る。肩部に稜が入りやや磨滅している。12・13・15~18は壺の口縁部片で復原口径は順に13.0cm, 12.3cm, 15.8cm, 19.6cm, 25.6cm, 27.2cmを測る。17・18は広口の壺で、18は体部に粘土紐の痕跡を観察する。土節器の焼成は全て硬質である。

140号 (1~7) 1・2は須恵器。1は高坏の脚部で底径6.4cmを測り、体部に3本の沈線が入る。2は大甕の口縁部で復原口径33.8cm。外体部はカキ目調整である。3~7は土師器。3は坏身片。4は甕の口縁部片か。5は高坏脚部片。6は広口の甕で復原口径15.8cmを測り体部は磨滅。7は口唇部を肥厚する銷の破片で、内外面ともに丁寧に削り及びナデ調整。復原口径28.0cmである。



第267図 140・143号土壤出土土器実測図 (1/3)



第268図 142号土壙出土土器実測図 (1/3)

142号（1～15）1～3は須恵器。1は壺身で口径10.7cm、器高3.5cm。2は蓋の口縁部片か。復原口径12.2cm。3は高壺脚部片。4～15は土師器。4は壺身で口径13.2cm、底部は削り調整。5・6は鉢で、5は口縁部が内弯しつつ直立し、復原口径10.5cm。6は丸底で口径9.3cm、器高7.0cmである。7～11は高壺片で、最も保存状態が良い7は、口径11.5cm、器高8.3cm、底径9.8cmを測る。壺部の器高は高く、脚は外体部を丁寧に縱方向の削り調整を施す。12は壺の体部片で最大径18.1cmを復原する。13～15は壺の破片で復原口径は順に15.5cm、18.5cm、34.8cmを測る。

143号土塙（図版93、第261図）

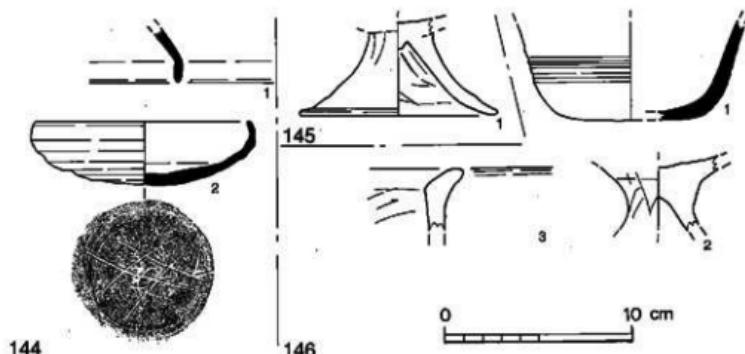
北域で検出した138号から142号の一連の土塙の西側に位置する。142号土塙及び176号住居に切られている。平面プランは不整形で東半部は定かでない。検出長径2.0m×短径1.75m、深さ0.65mである。

出土遺物（第267図）

143号（1～3）1は須恵器の蓋破片で低い握みが付く。2・3は壺片で復原口径24.0cm、32.0cmを測る。ともに焼成は硬質。

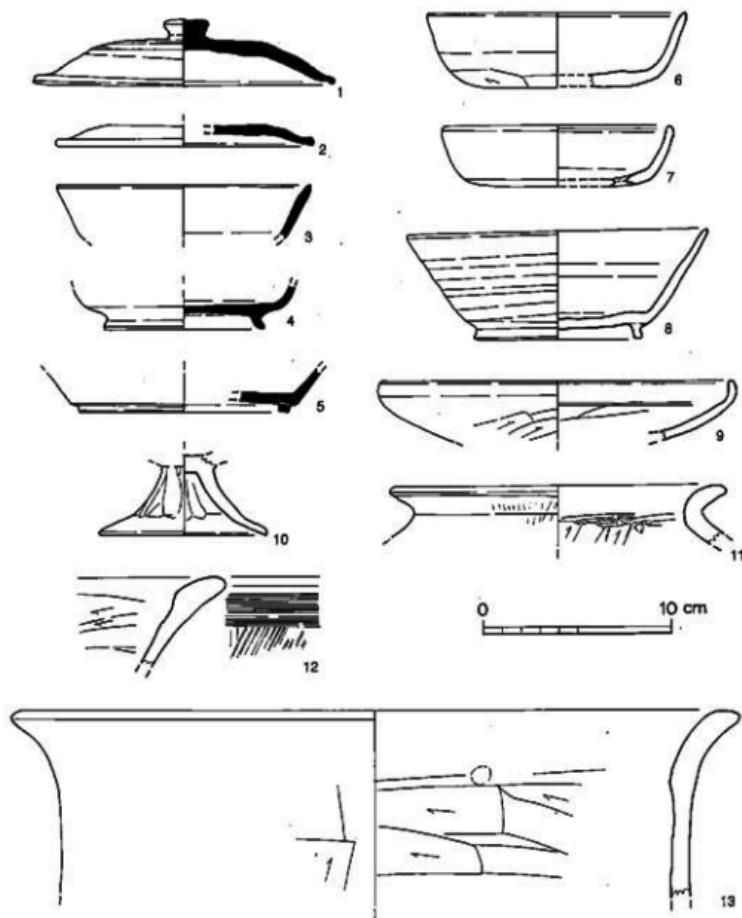
144・145・146号土塙（第261図）

調査区の北域にあり、138号等の土塙の東側に位置する。弥生住居59号及び112号住居を切っている。検出土塙の切り合い関係は古い順に144～146号となる。144号は最も東側で検出し、長径約4.0m×短径3.2m、深さ0.6mを測る。145号は中央にあって、平面プランは不整形



第269図 144～146号土塙出土土器実測図（1/3）

を呈し、長径2.42m×短径1.8m、深さ0.8mである。146号は2段に掘削され、平面は不整形で、検出長径4.0m×短径2.2m、深さ約0.7mである。



第270図 その他の出土土器実測図 (1/3)

出土遺物（第269図）

144号（1・2）須恵器の蓋破片と坏身である。1は口径11.3cm、器高3.4cmで、底部にヘラ記号をみる。

145号（1）高坏の脚部片。底径10.3cmである。

146号（1～3）1は須恵器で、壺及び坏身の底部片か。2・3は土師器で、2は高坏脚部片。3は壺口縁部片である。

5. その他の出土遺物

（1）土器（第270図）

須恵器（1～5）1・2は蓋で、1は口径16.0cm、器高3.5cmで擦みが付く。2は復原口径13.6cmを測る。3～5は高台付坏身で、4は高台がやや開き、5は直に付く。

土師器（6～13）6～8は坏身で、6から復原口径13.7cm、12.0cm。8は高台付坏身で口径16.0cm、器高5.9cm、底径9.0cmを測る。9は皿で口径18.6cm。10は高坏脚部で、体部の削りが明瞭。11・13は壺片で、11は復原口径18.6cm、13は36.0cmである。12は鉢の口縁片か。

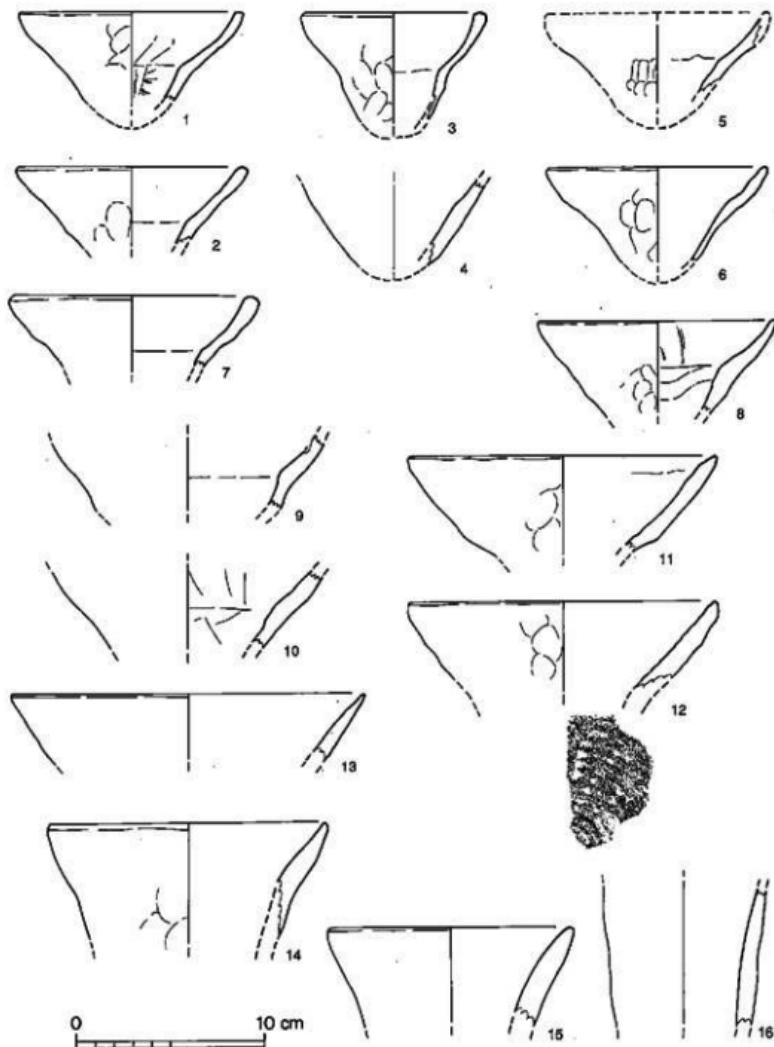
（2）焼塙土器（図版105～108、第271・272図）

実測に耐えた焼塙土器は27個で、その他の土器を含めると30個片を数える。出土した大部分の焼塙土器は小破片で、全形を知り得る資料は少なく、口縁部片のものが多い。従って、掲載した実測図は器形の形態からみて、若干の修正余地があることをお断りしておく。出土した土器を形態から分類すると、大きく3つに分かれる。

I類（1～8） 鉢形で底部が尖底をなし、一見アサガオを連想する器形をなす。体部は中位で屈折し、口縁部は内湾気味に開き、口唇部が肥厚するものとそうでないものとがある。器肉は薄く、外体部は指頭の強いナデ、内面はナデ調整で擦減っている。胎土には砂粒をやや含み、焼成は茶褐色・黄褐色等がみられ、焼成は二次的加熱を受けているため軟質のものが多い。

II類（9～13） 器形的にはI類に類似するが、一回り大きいものである。口径が16.0cm前後のもので、口唇部が擦んだ様にやや尖る。胎土・焼成はI類と同じ。

III類（14～16） 形態的には長胴となる筒型の土器である。口縁部上位でやや外反し、口唇部はII類と同じく擦んだ形をとる。胴部はほぼ真っ直ぐに立ち、底部の器肉は厚い。外体部は指頭のナデ、内面は布目及び横ナデ調整で、それを擦り消しているものもある。胎土には砂粒をやや含み、焼成は茶褐色・黄褐色・黄橙色等がみられ、焼成は軟質のものが多い。



第271図 烧塙土器実測図① (1/3)

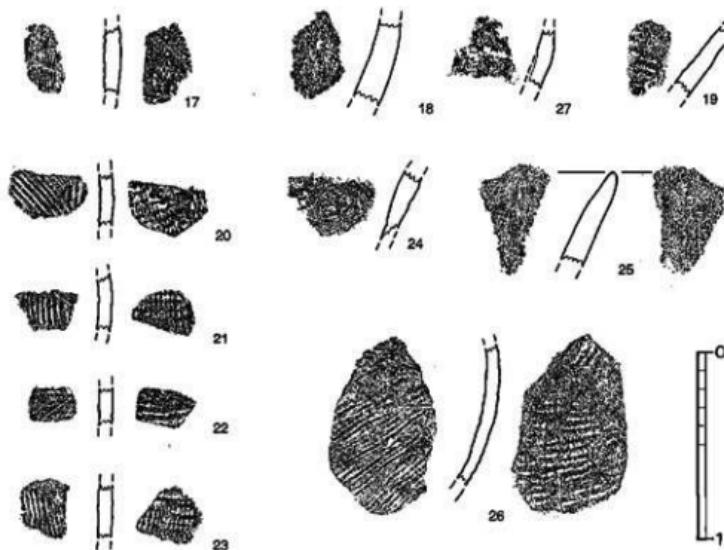
以下、復原口径の計測できるものと出土遺構を列記する。

表4 焼塙土器口径計測表

(単位はcm)

番号	復原口径	出土遺構	番号	復原口径	出土遺構
1	11.8	136号住居	9		134号住居
2	12.0	136号住居	10		198号住居
3	9.5	193号住居	11	16.2	205号住居
4		172号住居	12	16.4	205号住居
5		199号住居	13	18.8	198号住居
6	11.7	P 537	14	14.6	193号住居
7	12.5	176号住居	15	12.8	158号住居
8	12.5		16		51号住居

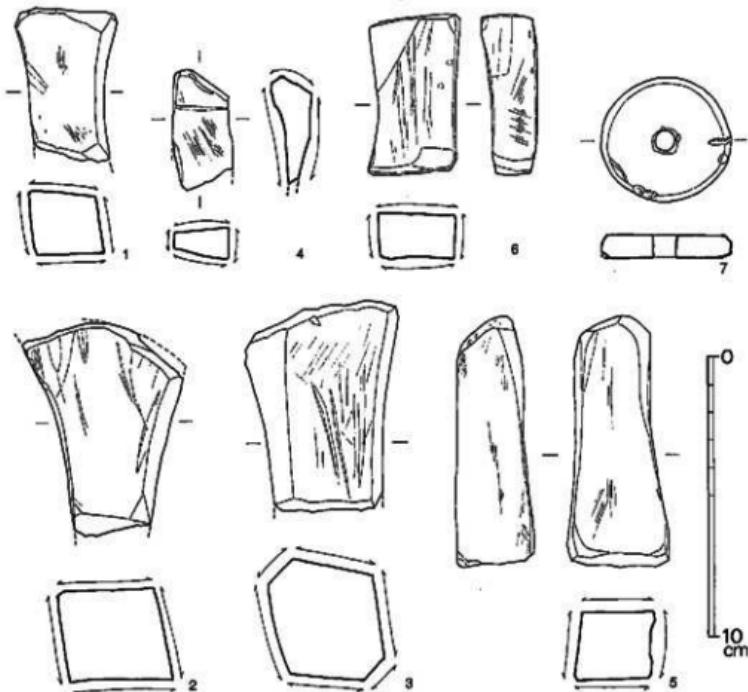
17~27は図上復原に耐えないもので、17は61号、18は46号、19・27は167号、20~23は107号、24は210号、25は156号住居跡、26は51号土壙出土である。



第272図 焼塙土器実測図② (1/3)

(3) 石 器 (図版109, 第273図)

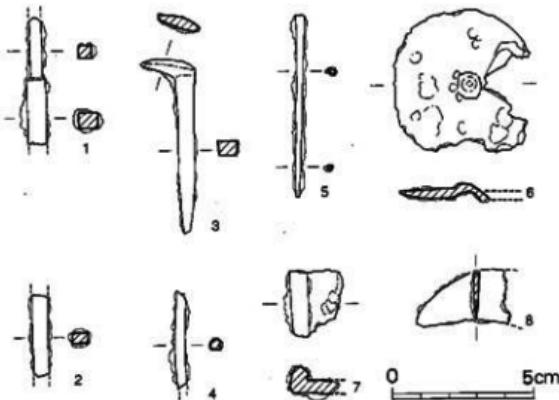
住居跡の検出件数の割には、石器類の出土は少ない。砥石6点と紡錘車1点が出土した。1は残存長5.5cmで、頁岩製の仕上げ砥石である。115号住居出土。2・3は163号住居出土である。3は残存長7.6cmで、砥面は6面を使用しており、かなり擦り減っている。砂岩製である。4は残存長4.3cmを測り、粘板岩製の仕上げ砥石である。201号出土。5は残存長9.0cm、幅3.6cmの砂岩製。P794出土。6は残存長5.7cm、幅3.1cm、厚さ1.6cmを測る。粘板岩製の仕上げ砥石である。P630から出土した。7は径4.5cm、厚さ0.8cmを測る滑石製の紡錘車である。外面は丁寧に仕上げている。152号住居の下層から出土した。



第273図 砥石実測図 (1/2)

(4) 鉄 器 (図版110, 第274図)

数少ない鉄器類である。1・2は鉄錐の柄で、1はP313出土で残存長4.6cm, 2は溝2出土で2.9cmである。3～5は釘片で、3は頭部が梢円形を呈し潰れており、厚さ0.4cm, 全長6.2cmを測る。全体に鉄錐は少ない。4は残存長3.5cm。5は鉄錐が著しく、残存長6.5cmである。3・5は表探。4はP43出土。6は径5.4cmの円盤状のもので、中央部は窪んでいる144号住居付近出土。7は鉄斧片でP594出土。8は鋸先端部で、弥生住居付近から出土した。



第274図 鉄器実測図 (1/2)

(5) 土 製 品 (図版111, 第275図)

合計20点の土錐が出土した。16～20は弥生時代の遺構から検出され、上巻に掲載すべきであったが、出土遺物（土錐）としてまとめたため、一括して載ることとした。

土錐の計測値は下記に示すとおりである。古墳時代住居から4点、奈良時代住居から7点、弥生時代住居から5点出土し、他は溝・ピットからである。土錐の長さは約5cmで、孔径は0.35～0.5cm前後が一般的である。胎土は石英・雲母片及び細砂粒を含有し、茶褐色・黄褐色を呈し、焼成は硬質である。

表 5. 土器計測表

(単位: cm)

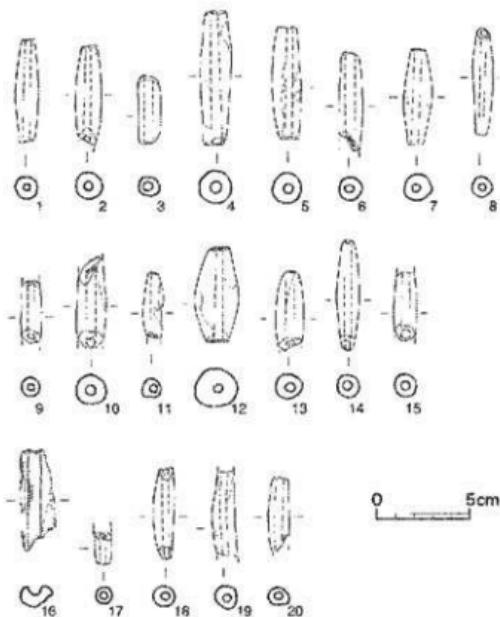
番号	残存長	最大幅	孔径	重さ(g)	出土遺構	その他
1	5.4	1.2	0.35	7.5	107 古墳住	完形
2	5.35	1.45	0.45	10.1	115 *	
3	3.55	1.15	0.45	4.5	119 *	
4	7.1	1.75	0.6	20.2	131 *	完形
5	6.0	1.55	0.47	15.7	142 奈良住	完形
6	5.2	1.32	0.55	6.6	156 *	
7	5.1	1.5	0.42	9.8	156 *	完形
8	5.68	1.15	0.3	6.8	160 *	
9	3.3	1.0	0.33	3.9	177 *	
10	4.68	1.65	0.52	10.1	184 *	
11	3.6	1.2	0.35	3.0	186 *	
12	5.05	2.3	0.48	22.7	溝3	完形
13	4.2	1.45	0.45	6.6	pit350	
14	5.95	1.2	0.45	7.8	*	635
15	3.65	1.22	0.43	4.3	*	379
16	5.35	1.8	0.62	7.4	2號住	
17	1.75	0.9	0.3	1.4	48 *	
18	5.02	1.15	0.4	5.9	48 *	
19	4.55	1.25	0.38	6.6	60 *	完形
20	4.0	1.2	0.38	3.4	61 *	

(6) 墨書き・ヘラ書き土器 (図版109, 第276図)

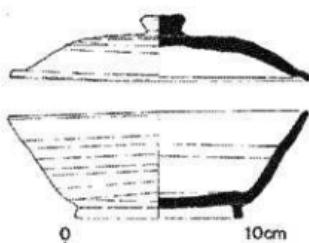
1~3は須恵器の坏身である。1は底部に燕手状の墨書きがあるが、活字とは判断しがたい。落書きであろうか。2・3は須恵器の内面に墨痕が認められる転用硯である。器面はかなり擦り減っており、特に3は墨痕が多く付着していた。1~3ともに暗灰色を呈し、胎土には細砂粒を含み、焼成は堅緻である。2は114号、3は72号住居跡から出土した。4は土師器の皿及び坏身の底部であろう。その内面に細い線でヘラ書きがあるが、残念ながら判読不可能である。土師器は胎土に砂粒が少なく橙褐色を呈し、焼成は硬質である。土壤44から出土した。



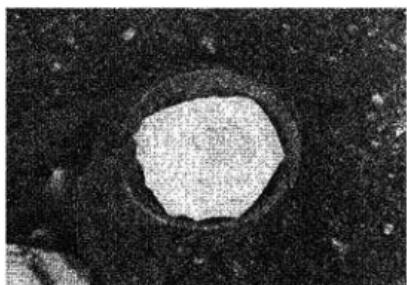
第275図 墨書き・ヘラ書き土器実測図 (1/3)



第276図 十鉢実測図 (1/2)



第277図 祭祀土器実測図 (1/2)



祭祀土器出土状況

表 6 住居跡・土壤新旧番号对照表

(上表：住居跡、下表：土壤)

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
141	45	161	163	181	104	201	98
142	44	162	164	182	105	202	89
143	54	163	165	183	106	203	88
144	55	164	166	184	108	204	87
145	56	165	167	185	112	205	84
146	130	166	169	186	114	206	85
147	134	167	170	187	115	207	81
148	132	168	178	188	117	208	80
149	133	169	177	189	120	209	79
150	131	170	176	190	121	210	78
151	138	171	171	191	122	211	76
152	139	172	172	192	118	212	73
153	140	173		193	193	213	74
154	142	174	175	194	102	214	75
155	146	175	32	195	91	215	72
156	149	176	33	196	92	216	77
157	151	177	31	197	95		
158	152	178	35	198	93		
159	183	179	37	199	94		
160	29	180	59	200			

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
131	56	135	80	139	48	143	53
132	57	136	79	140	50	144	47
133	58	137	81	141	52	145	45
134	59	138	49	142	51	146	46

VII まとめ

—上の原遺跡の集落変遷について—

1. はじめに

上の原遺跡は、三奈木一十文字一中島田台地の東端部で、筑後川の一主流である荷原川の西岸に立地する弥生時代前期から古墳・奈良時代にかけて營まれた集落・墳墓群を主体とする大複合遺跡である。

調査区は九州横断自動車道路線の長さ約210m×幅約60mの調査面積約12,300m²の限られたものであったが、検出された遺構は竪穴住居跡185軒、建物跡34棟、土塙119基、竪穴63基、貯蔵穴140基、溝、及び弥生時代の豪棺墓27基からなる墓地群である。出土遺物の総数はパンコンテナーにして370箱にも上り、多量の弥生土器・須恵器・土師器の他に石器・鉄器・土製品・製塩土器・墨書き土器等が出土している。

以上のような遺跡内容であり、どれだけ史実に忠実に報告したか甚だ疑問ではあるが、今回が上の原遺跡の最終報告で、各時代の遺構と若干の問題点にふれてまとめとしたい。

2. 弥生時代の集落変遷

弥生時代の遺構には、竪穴住居跡73軒、掘立柱建物跡6棟、竪穴63基、土塙93基、貯蔵穴140基、豪棺墓27基、木棺墓2基、土塙墓11基、ピット600個がある。

【前期末】 上の原遺跡では、先ず調査区の南東端部において貯蔵穴が展開する。貯蔵穴個々の内容に関しては、「上の原遺跡Ⅰ」の報告書に譲るが(註1)、造営は前期末に始まり、中期前葉頃に終焉する。しかし、調査区内においては、前期に属する竪穴住居跡は検出されておらず、調査区外の南西部に存在するものと考えられる。

【中期初頭】 当該期の遺構には、竪穴住居跡・竪穴・土塙・貯蔵穴・豪棺墓がある。竪穴住居跡は調査区の北側に9軒、50mの間隔を置いて南側に5軒の円形住居跡が造営され、北側住居跡群と南側住居跡群との二群にグルーピングできる。北側住居群は円形に配されているようである。住居跡は径6~8.6mの円形を呈し、柱穴数は6・8・10個を数える。

今回、住居壁を削平された円形住居跡として8軒を図示したが、ピットの総数からいえばもっと増える可能性を有する。竪穴住居跡個々の内容に関しては、「上の原遺跡Ⅱ」の報告書に譲るが(註2)、造営は中期初頭に始まり、中期後半頃には終焉する。

堅穴は長方形・方形・円形・不整形を呈する。住居群の内側に配される傾向にあり、住居と対をなして存在する。また、49・50・55号は長方形を呈し、床面にピットを有するものの炉跡がみられないことから堅穴とした。

貯蔵穴は前時期に引き続き盛興し、調査区外の南側に拡がる様相をみせる。土壙は当該期からの初出であるが、貯蔵穴よりも浅めであり、相対的に後出傾向にある。

甕棺墓の造営は中期初頭に始まり、北側住居跡群と南側住居跡群との間に列埋葬される。時期的には住居跡と重複して埋葬されているものの総数27基であり、上の原集落に対応する墓地群は、当遺跡の西隣に位置する大庭久保遺跡が該当する。

【中期前半】 当該期の遺構には、堅穴住居跡・堅穴・土壙・貯蔵穴・甕棺墓があり、前時期に引き続き盛興する。堅穴住居跡は円形（12軒）・小判形（19軒）・方形（7軒）を呈し、切合い関係から円形→小判形→方形へと変化するが、主体は小判形の住居跡にある。

小判形住居跡は長軸4m程の小型のものと長軸8.5m程の大型のものがあり、中期初頭の住居群の中間に割り込む様に位置する。また、長軸方位を東西方向にとる32~38・47・51・55号と南北方向にとる31・44・64号及び北西→南東方向にとる28・29・39号の3群がある。

小判形住居跡の床面には、ピットはあるものの柱配置は判然としない。また、短辺が角味を帯びる25・35・36・51号の南壁際床面には屋内土壙が付設されていることから、小判形住居は円形住居から方形住居への過渡的形態を呈するものと考えられる。

堅穴・土壙も前時期に引き続き盛興する。堅穴は住居跡と混在するが、土壙は南東部に集中する傾向にある。貯蔵穴は当該期で終焉し、建物に取って替わられる。

甕棺墓も成人棺2基・小児棺11基が埋葬され、墓地群としての形態を整える。墓地群は北東→南西方向に列をなすK4（時期不詳）・15（中期初頭）・20号成人棺列とK6・16号成人棺列とが3mの間隔をおいて形成され、その間に小児棺が成人棺に寄り添うように配されている。

北東側が調査区外であるため墓域の全容は不明であるが、大庭久保遺跡の墓地群に比して極めてまばらに配されている。しかし、同時期の住居跡と近接して埋葬されていることを考えると副葬品こそ出土していないが、居住エリアに埋葬することが可能な特別な一団—特定家族墓—とみなせないだろうか。

【中期中葉】 当該期の遺構には、堅穴住居跡6軒・堅穴2基・土壙2基・甕棺墓1基があるものの遺構は散在し、前時期に比して格段の差がある。堅穴住居跡は5~7m程の長方形を呈し、柱穴は2本である。柱穴の中心に炉を有し、壁際に屋内土壙を付設する。また、前回の報告で11号堅穴住居跡の時期を中期中葉としたが、同時期の24号甕棺墓と近接する。遺物を再度検討した結果、11号を中期後半に変更しておく。

調査区内においては、後期の遺構は検出されていないが、大庭久保遺跡では後期前半の墳墓も埋葬されていることから後期の住居も南西部に展開するものと考えられる。

2. 古墳時代の集落変遷

古墳時代の遺構には、竪穴住居跡36軒、掘立柱建物跡8棟、土壙10基、溝3条があり、出土遺物には須恵器・土師器の他に砥石・刀子・鉄鏃等が出土した。時期的には6世紀代と7世紀代の二時期に大別できる。

【6世紀後半～末】 竪穴住居跡は調査区の北半部に展開し、一辺3～6mの方・長方形を呈する。北壁中央にカマドを付設するものが大半を占めるが、122号は西壁に付設し、126号は北西壁に付設している。時間差によるものと考えられる。

カマド形態は住居壁に直接袖部を貼付する作り付け型と住居壁を若干掘り込んで袖部を貼付する掘り込み型と握り込みの度合いが強い突出型に分けられる。住居壁の遺存状態が悪いため煙道を留める住居跡はみられない。柱穴は4本であるが、時期が下るにつれ住居壁側に柱が寄る傾向がみられる。それに伴いカマドも作り付け型から突出型へと変化する(註3)。107・122号が6世紀中～後半とやや古く、他は6世紀後半を主体とする。

6世紀代の建物跡も存在すると考えられるが、柱穴からの出土土器が乏しく、時期決定が困難なため7世紀代の方で一括した。

土壙は調査区の全域に点在し、10基検出した。また、135～146号土壙は奈良時代の貢で述べたが、出土土器は圧倒的に6世紀後半のものが多く、112号住居跡と切り合っているものの古墳時代に含めた。

135～137号土壙と138～143号土壙及び144～146号土壙は不整形を呈し、切り合い関係は認めなかった。恐らく、次々に土取りを行った結果、土壙が連続したような形態を呈するに至ったものと思われる。また、採土後は廃棄土壙として再利用している。

【7世紀中～後半】 7世紀後半の竪穴住居跡は、前段階よりも竪穴部が縮小し、一辺2.5～3m程度となる。柱穴は4本であるが、110・118・136号の如く住居コーナー部に配される。カマドは突出型であるが、住居壁の遺存状態が悪いため煙道を留めるものは殆どない。

掘立柱建物跡は8棟の検出で、調査区の北西側に集中する傾向にある。16号建物跡は115号住居跡と重複し、11・12・13号は相互に切り合っている。建物跡の規模は1×1間(14・18号)、2×3間(13・17号)、2×4間(11号)、4×4間(16号)、2×3間柱(15号)である。11～13号建物跡は南北棟で、竪穴住居群と主軸を等しくする。14・16号建物跡は西に10°程振っているが、103・105・107号住居跡と主軸が等しい。15号建物跡は北西～南北方向で、126号住居跡と主軸をほぼ等しくする。

また、1×1間の建物跡とした14・18号は柱間が竪穴住居の柱間と等しく、14号の柱間中央にある不整形の土壙は竪穴住居の下層遺構とも考えられ、両者は住居壁を削平された竪穴住居跡とも考えられる。

3. 奈良時代の集落変遷

奈良時代の遺構には、竪穴住居跡76軒、掘立柱建物跡20棟、土壙16基等があり、調査区の中央部から北半部にかけて展開する。

【8世紀中～後半】 竪穴住居跡は八つ程の小群に分かれて散在するが、各グループでの重複が著しい。平面形は方形を呈し、規模は一辺2~4mと小型である。一辺が4m程の住居跡にあっては、4本の柱穴を有するが、大半の住居跡は竪穴内部に柱穴がみられない。カマドは突出型で、北壁・西壁・東壁に付設されるが、大半は北壁に設けている。煙道の遺存状態は悪いが、竪穴部の縮小とは逆に伸長化傾向にある。

住居跡出土の土器は少ないため個々の時期決定を困難にしているが、161~174号においては18軒の切り合いがあり、住居を新たに構築するスペースは十分あるのに重複して構築せざるを得ない要因—強い規制—が存在した結果と考えられる。157・166・172・199・216号は重複関係において最も下位にないこと及び出土遺物から8世紀中葉に位置付けられる。

建物跡は20棟の検出で、調査区の北西部に位置する。規模は1×1間（38・44号）1×2間（33・40~42・47・48号）、2×2間（45・46号）、2×3間（30~32・35・36・43号）、3×3間（37号）、2×2間（34号）である。大半の建物跡が南北棟で、31・34号建物跡はやや西に振っているが、竪穴住居跡の主軸とほぼ等しい。

出土遺物で特に注目されるのは、土器転用硯・墨書き土器・ヘラ描き土器・製塩土器・管状土錐である。土器転用硯は須恵器の坏盤・高台付坏身・皿を硯として転用したもので、破片ではあるが、141・144・167・180・186・195・215号住居跡及びP599から出土している。墨書き土器は出土遺構不明。ヘラ描き土器は弥生時代の42号土壙からの出土で、文字は判読できない。これらの文字に関する遺物は、識字者の存在を裏付けるものである。

製塩土器は、46・48・51・61・62号住居跡（弥生時代）、107・121・133・134・136号住居跡及び92・140~142号土壙（古墳時代）、141・142・144・156・158・161・165・167・171・172・175・176・181・182・186・188・193~196・198・199・204・205・207・210・212号住居跡（奈良時代）等で出土している。ただ、破片が出土したからといって製塩土器が住居に直接伴うとは言い難い。また、弥生時代の遺構出土品は混入品とみなしても、奈良時代では全体の35%の住居跡から製塩土器の破片が出土している事は注目される。

形態的には森田分類のI・II類型で、それとは別に古墳時代の107号住居跡・142号土壙からは、内外面に二次的加熱を強く受けて黒化している外面格子タタキ目、内面平行タタキ目調整による土師器窓が出土しており、製塩に関するものと考えられる。

従来、製塩土器は生産地を除き、官衙・寺院、官道沿いの遺跡でしか出土しないとされていたが（註4）、横断道関連遺跡の調査だけでも塔ノ上遺跡・宮原遺跡・高原遺跡・長田遺跡・西

法寺遺跡・鎌塚遺跡等でも出土しており(註5), 再検討の必要がでてきた。

管状土錐は48・60・61・107・115・119・156・160・177・184・186号住居跡, 142号土壙, ピット等の出土であり, 荷原川での漁撈の様を彷彿とさせる。

4. おわりに

近年, 甘木朝倉地区では, 横断道・圃場整備・宅地開発等の大規模開発に伴い, 多くの遺跡が調査され, 壁穴住居跡を主体とする一般的な奈良時代の集落跡がかなりの数調査されている。それら奈良時代の集落からは, 墨書き土器・土器転用硯・ヘラ描き土器・製塙土器等の出土がみられる。従来, これらの遺物は特殊品として扱われてきたが, 猫も杓子も状態になってくると特殊品ではなく, 極めてありふれたものとして目に映る。

しかし, これらの遺物が出土する遺跡は,

- ① 集落が大規模であり, 住居跡の重複が著しい。
- ② 大型の建物跡が存在する。
- ③ 割合豊富な鉄製品(農工具・武具), 製塙土器=塙を有する。

等の諸点が共通する。①の集落が大規模であり, 住居跡の重複が著しいという点については, 一時期における集落構成人員が多く, かつ強制的に居住空間を限定された結果と考えられ, 人員が多い分必然的に高い生産性を有することになる。②の大型の建築物は, 高い生産性により生みだされた収穫物(米・野菜etc.)・生産物(塙・布etc.)等を納税するまでの期間貯蔵・保管するための施設, または, 集落管理者ー里長の住居と推定される。③の鉄製品・製塙土器(塙)は, 生産地においては, 通常直接的に入手できる品物ではなく, 余剰生産物との物々交換による入手品と考えられる。これらを要約すると, “豊かなムラ”・“富めるムラ”とすることが可能で, 豊かなムラにあっても余剰生産物量の多少により, ランク分けされよう。

また, 墨書き土器・土器転用硯・ヘラ描き土器は, 文字に関するものであり, 識字者の存在を肯定する。租庸調の納税に荷札は付きもので, 日付・貢納物・名前等の文字を書かねばならない。土器転用硯は硯の代用品として日常容器を転用したものであるが, 砯そのものの存否も集落のランクを位置付ける重要な鍵となろう。石帯・椎の存在についても同様と考えられる。以上のことから, 上の原遺跡の奈良時代の集落跡については, 斑田農民とそれらを管理・統括していた識字者ー里長が起居していた集落とみなせ, 遺跡の北西に位置する大型建物跡については収穫物・生産物の貯蔵庫に當てたい。

最後に, 上の原遺跡の南東側には, 弥生時代から広大な水田面が拓がっていたと推定され, また, 荷原川によってもたらされる豊富な川の幸を十分享受した人々の生活ぶりが偲ばれる。

上の原遺跡遺構変遷一覧

	弥生時代				古墳時代				奈良時代		
	前末	中初	中前	中中	6C中後	7C前中	後	8C前中	中	後	
住居跡											
建物跡			-	-							
土塙			-	-							
壁穴			-	-							
貯藏穴	-										
発掘墓		-	-	-							
主要遺跡	・吉野ヶ里遺跡 ・大庭久保遺跡 ・塩跡			*仏教伝来 ・岩戸山古墳 ・鬼の枕古墳 ・柿原古墳群			*大宰府政序第Ⅱ期建立 ・大庭火葬墓群				

註1 井上裕弘編 九州横断自動車関係埋文化財調査報告-18- 1990 福岡県教育委員会

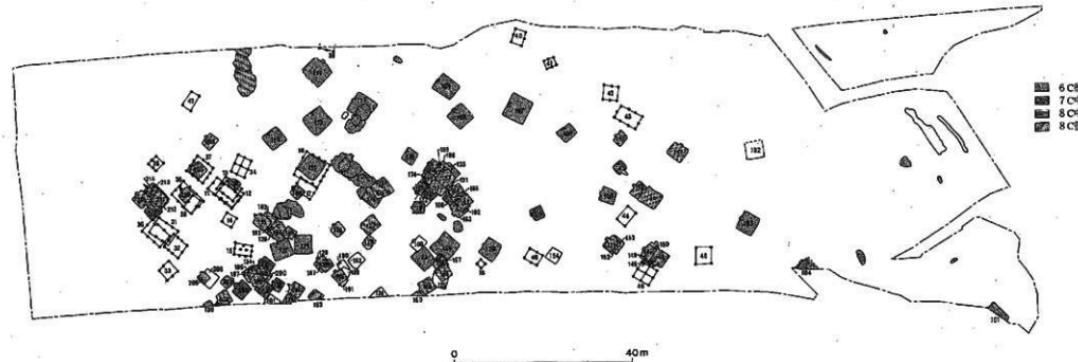
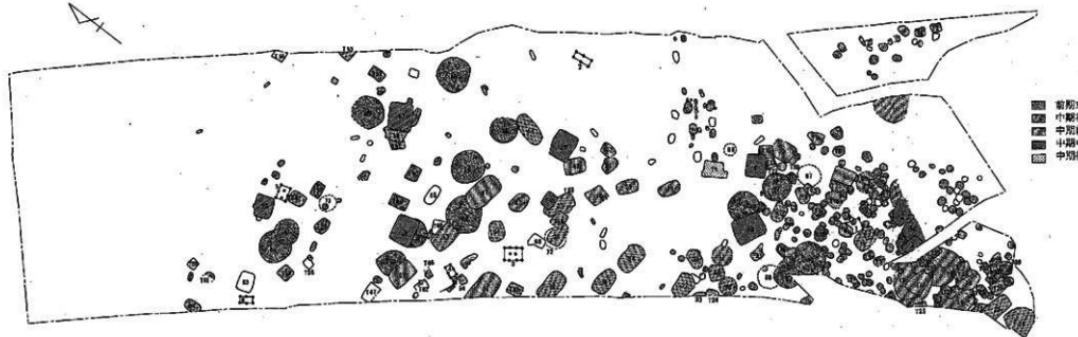
註2 小田和利編 九州横断自動車関係埋文化財調査報告-27- 1993 福岡県教育委員会

註3 小田和利 「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』 1994

註4 森田 勉 「焼垣臺考」「大宰府古文化論叢」 吉川弘文館 1983

註5 製塙土器を出土した甘木朝倉地域の奈良時代集落遺跡として、塔ノ上遺跡（住居跡他－総数630点）

高原遺跡（住居跡他－総数417点）、宮原遺跡（住居跡他－4点、土器・埴輪が出土）、西法寺遺跡（1点－未報告）、鎌塚遺跡（住居跡－1点）等が報告されている。



第278図 上の原遺跡構造変遷図 (1/900)

図版



西側住居跡群（南上空から）



1 103号住居跡（南東から）



2 105号住居跡（南東から）



1 106号住居跡（南から）



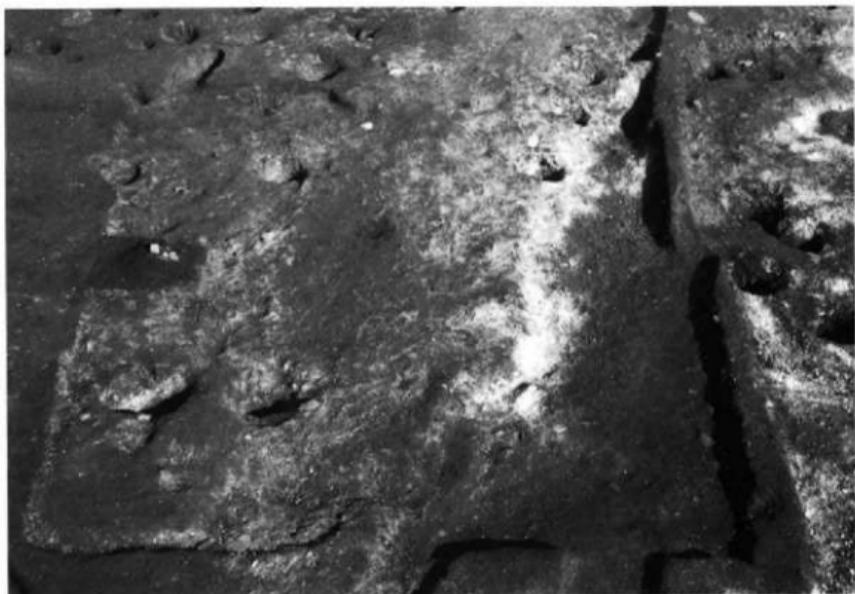
2 106号住居跡カマド（南から）



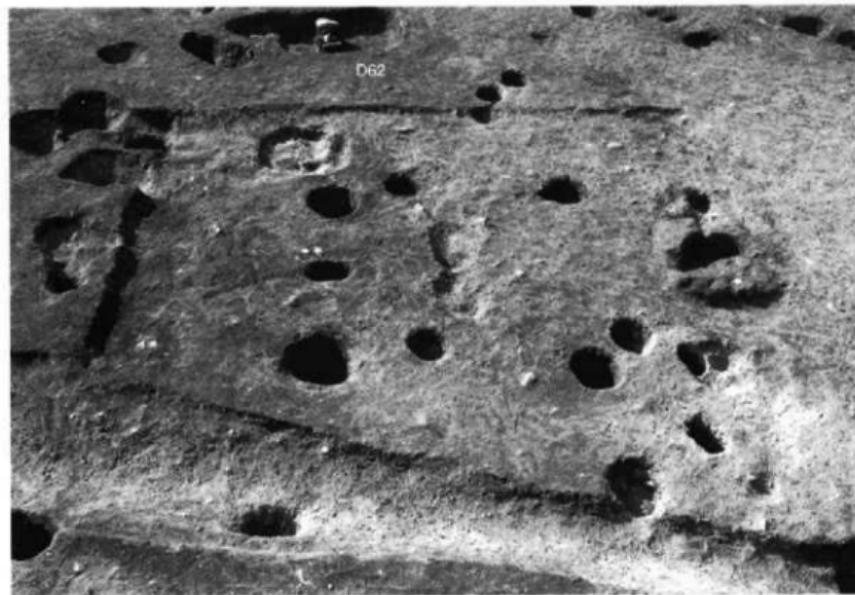
1 107号住居跡（南から）



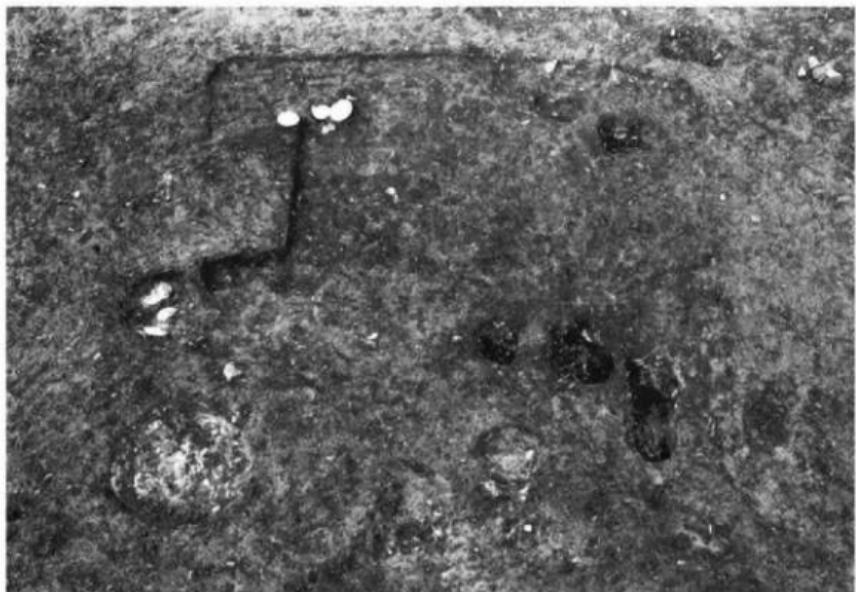
2 107号住居跡カマド（南から）



1 108号住居跡（南から）



2 109号住居跡（東から）



1 110号住居跡（南西から）



2 111号住居跡（南から）



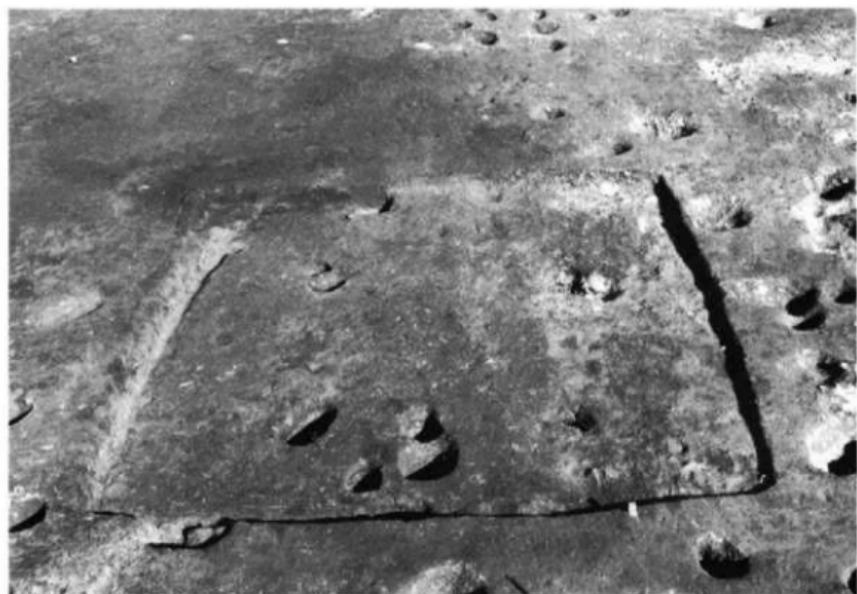
1 112号住居跡（南から）



1 113号住居跡（南から）



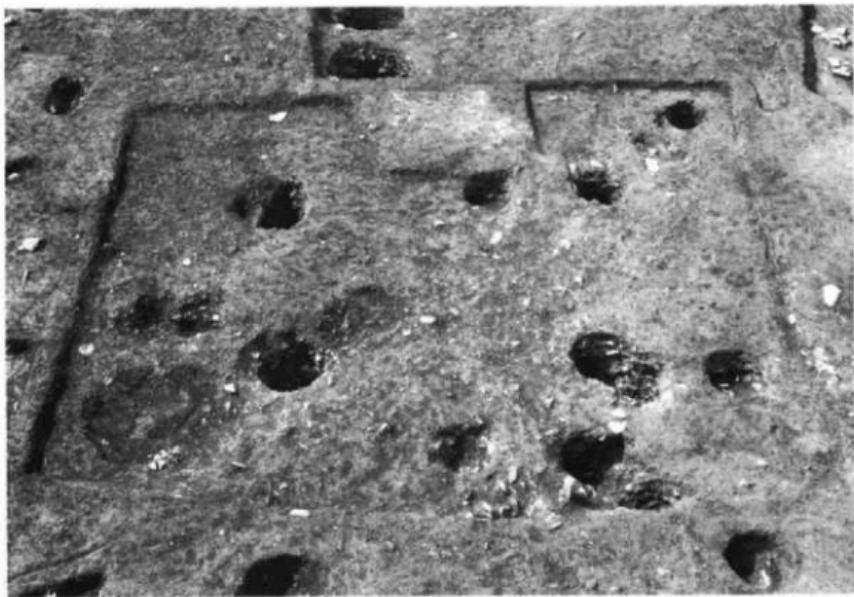
1 114号住居跡（南西から）



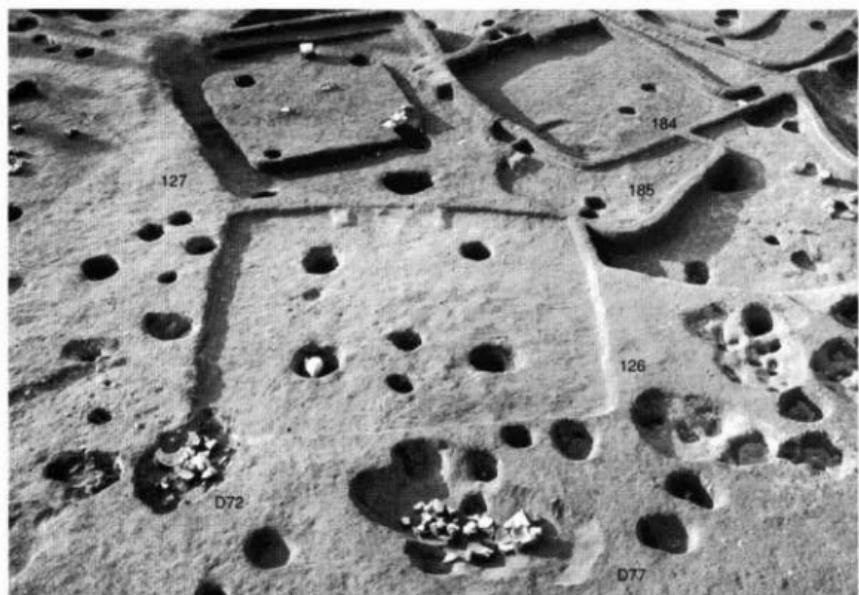
2 115号住居跡（南から）



1 120号住居跡（南から）



2 122号住居跡（東から）



1 126・127号住居跡（南東から）



2 141号住居跡（西から）



1 142号住居跡（南から）



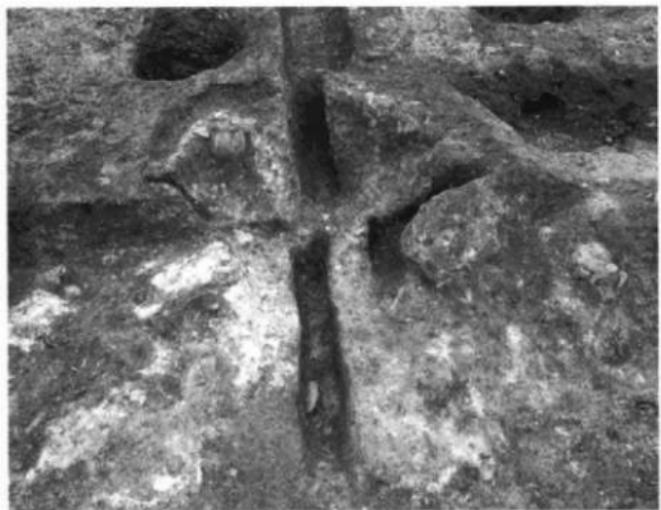
2 143号住居跡（南から）



1 144・145号住居跡（南から）



2 146～150号住居跡（南から）



1 146号住居跡カマド（東から）



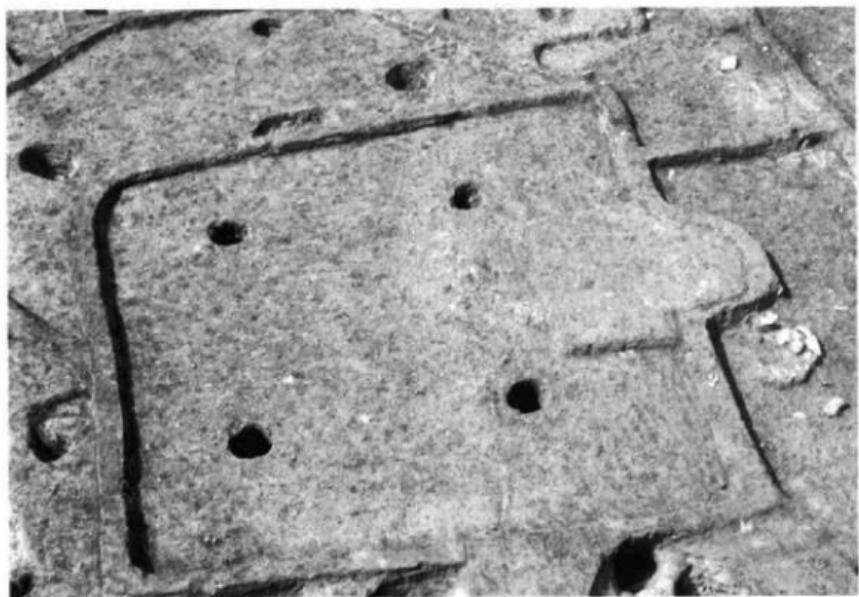
2 148号住居跡カマド（東から）



1 151～153号住居跡（南から）



2 154号住居跡（南東から）



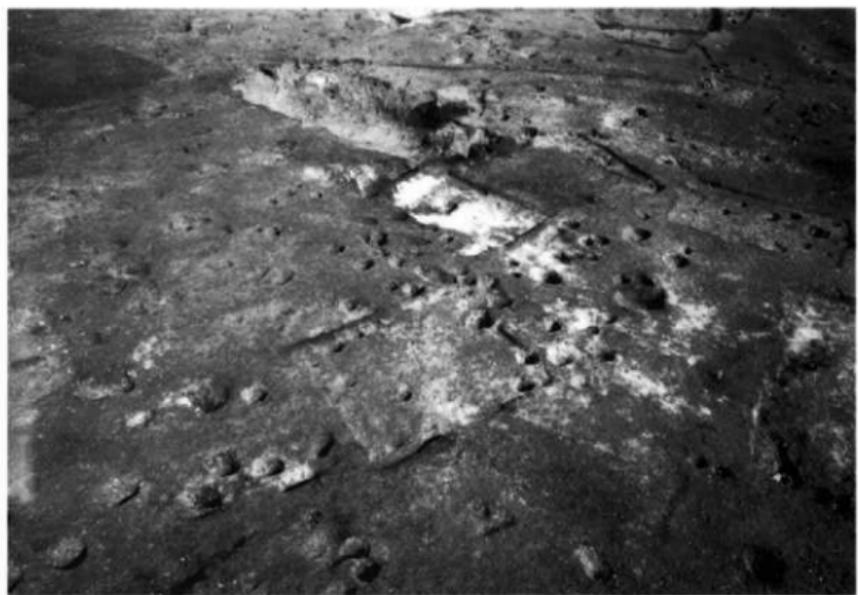
1 155号住居路（東から）



2 158号住居路（南から）



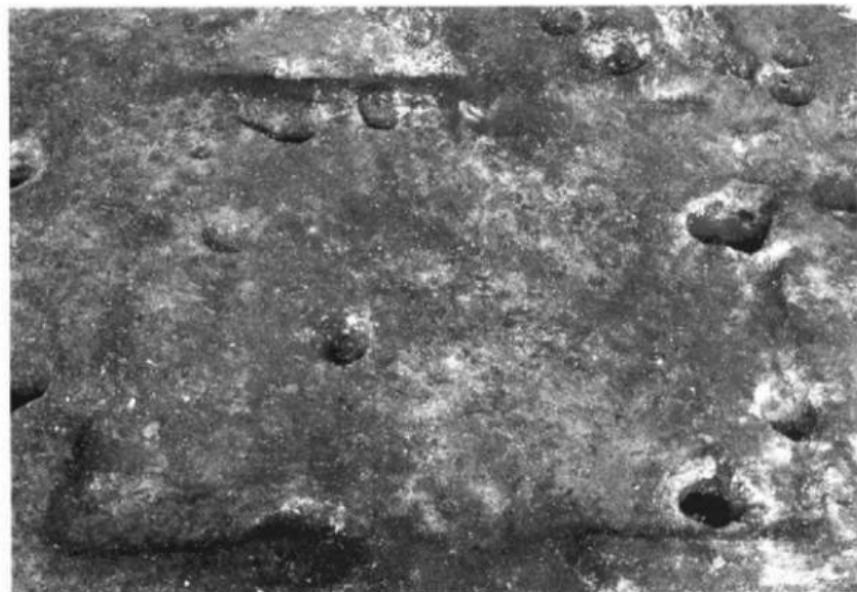
1 161～166号住居跡（南西から）



2 175～178号住居跡（南西から）



1 175・176号住居跡（南から）



2 177号住居跡（南から）



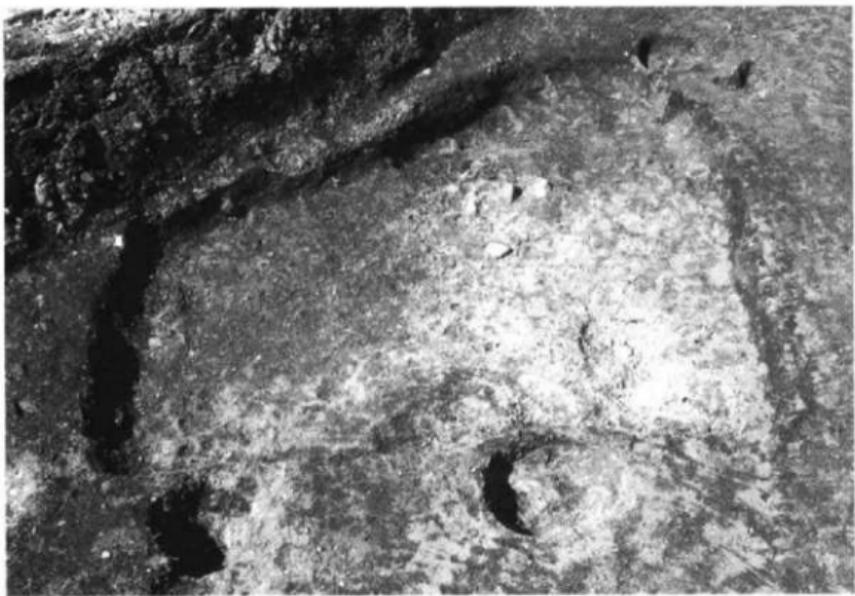
1 180号住居跡, 17号建物跡（南から）



2 181~183号住居跡, 135~137号土壤（南東から）



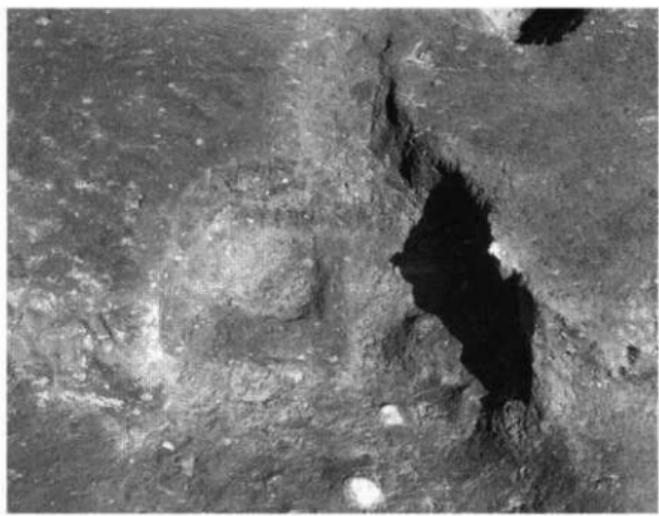
1 186・187号住居跡（東から）



2 193号住居跡（東から）



1 194号住居跡（東から）



2 194号住居跡カマド（南から）



1 195~202号住居跡（東から）



2 195~202号住居跡下層（北東から）



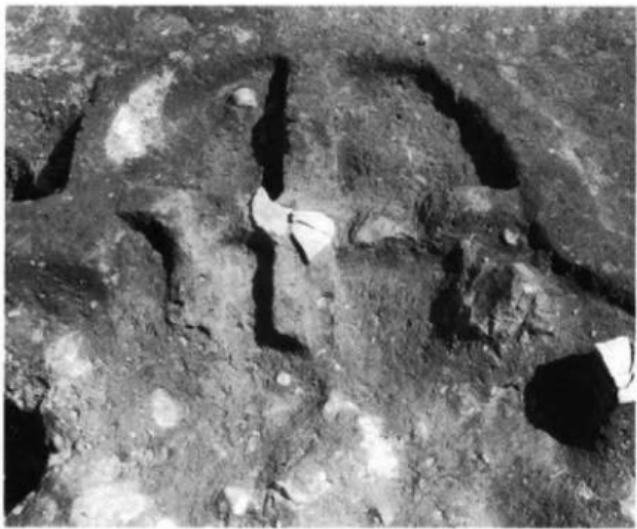
1 196号住居跡（南から）



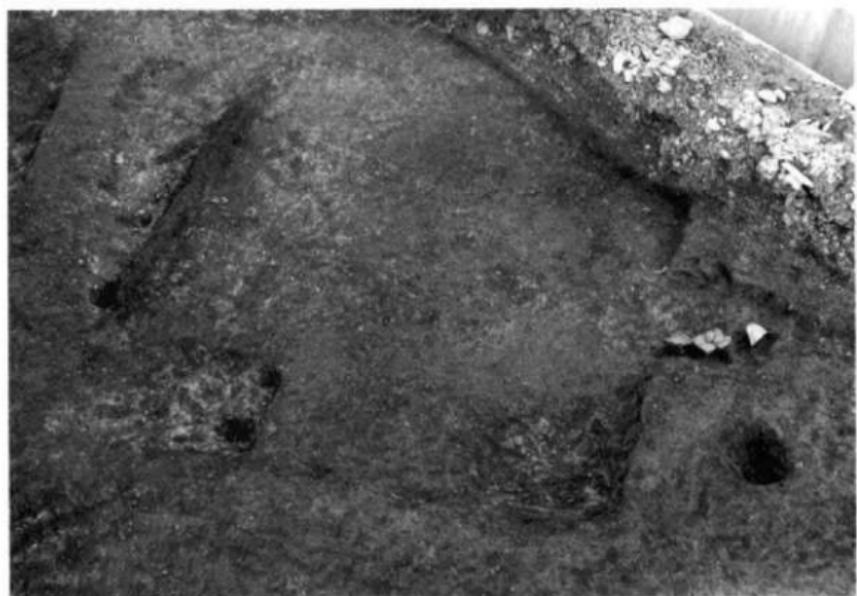
2 199号住居跡カマド（西から）



1 203号住居跡（西から）



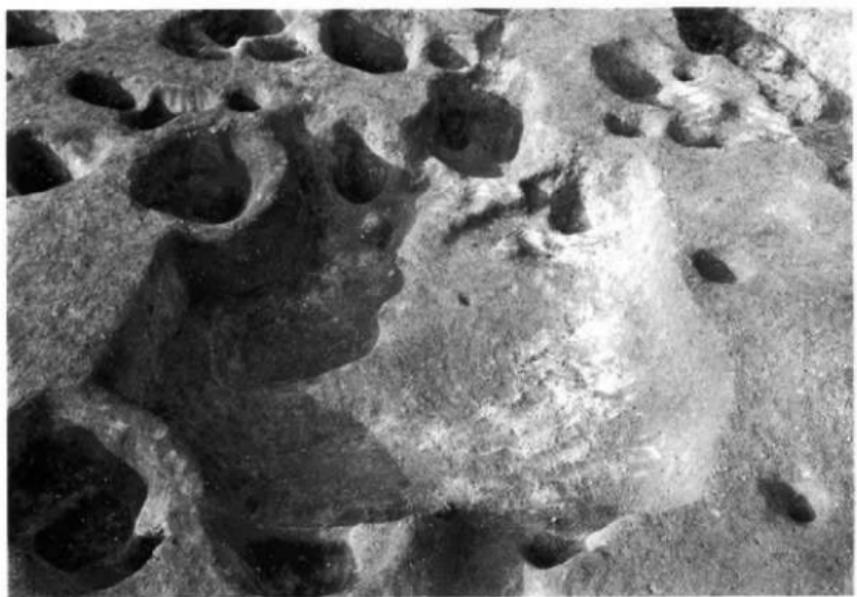
2 203号住居跡カマド（西から）



1 204号住居跡（北から）



2 204号住居跡カマド（東から）



1 207号住居跡（南から）



2 207号住居跡カマド（南から）



1 209号住居跡, 37号建物跡 (南から)



2 209号住居跡カマド (南から)



1 210号住居跡, 35・36号建物跡（南から）



2 210号住居跡カマド（南から）



1 212~216号住居跡（南から）



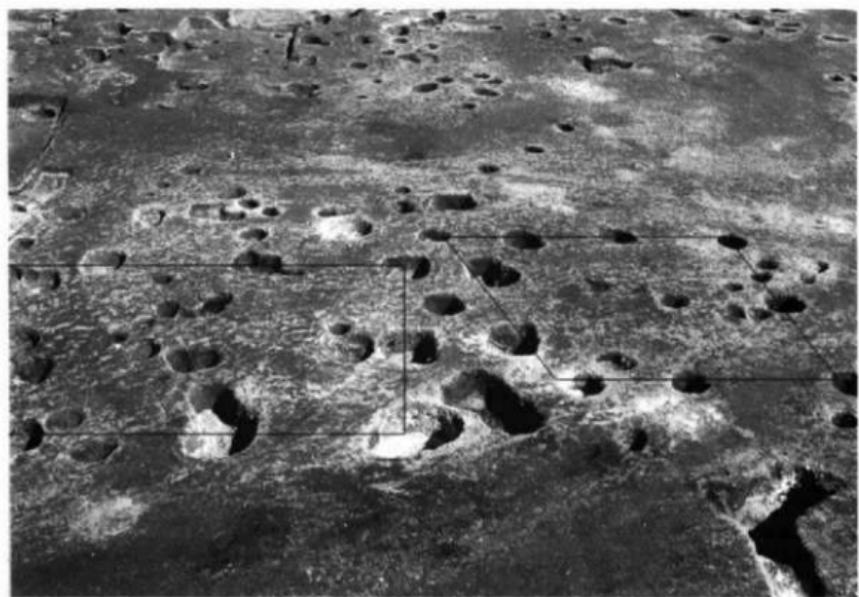
2 同貼床下層（南から）



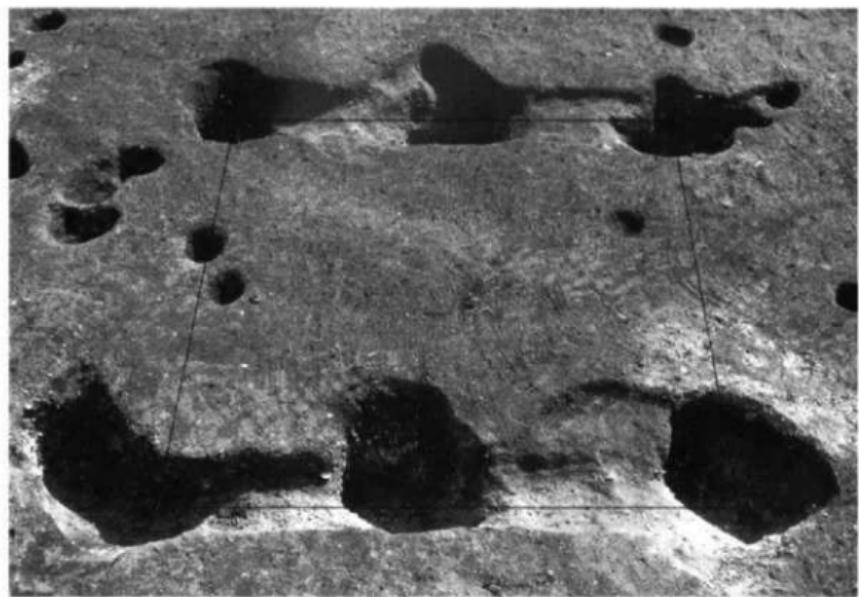
1 212号住居跡カマド（南から）



2 214号住居跡カマド（南から）



1 30~32号建物跡（西から）



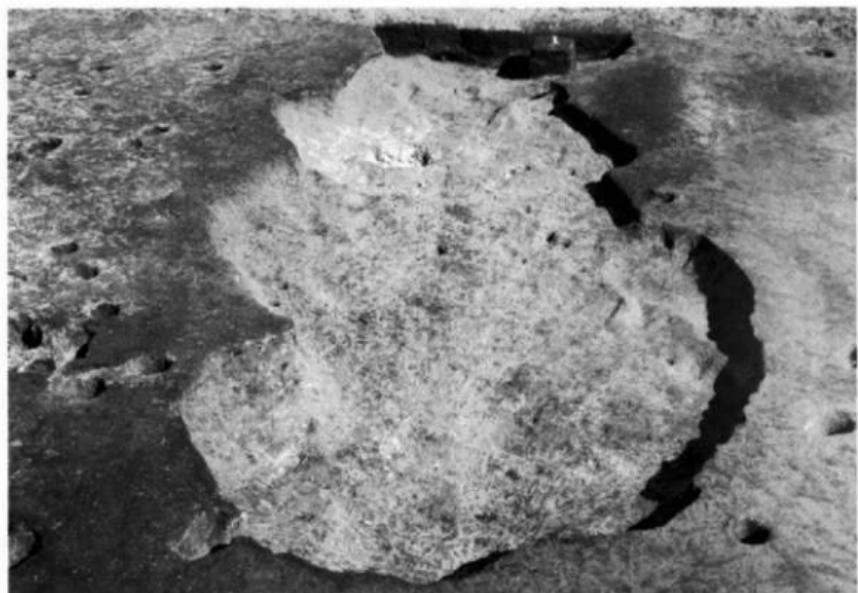
2 33号建物跡（北から）



1 11~13・34・37号建物跡（東から）



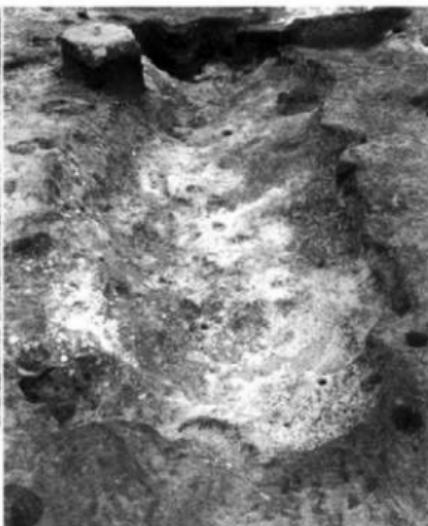
2 11~13号建物跡（北から）



1 131～134号土壤（南西から）



2 104号土壤（南から）



3 138～143号土壤（北から）



105-4



105-8



106-2



106-3



106-8



106



107-44



107

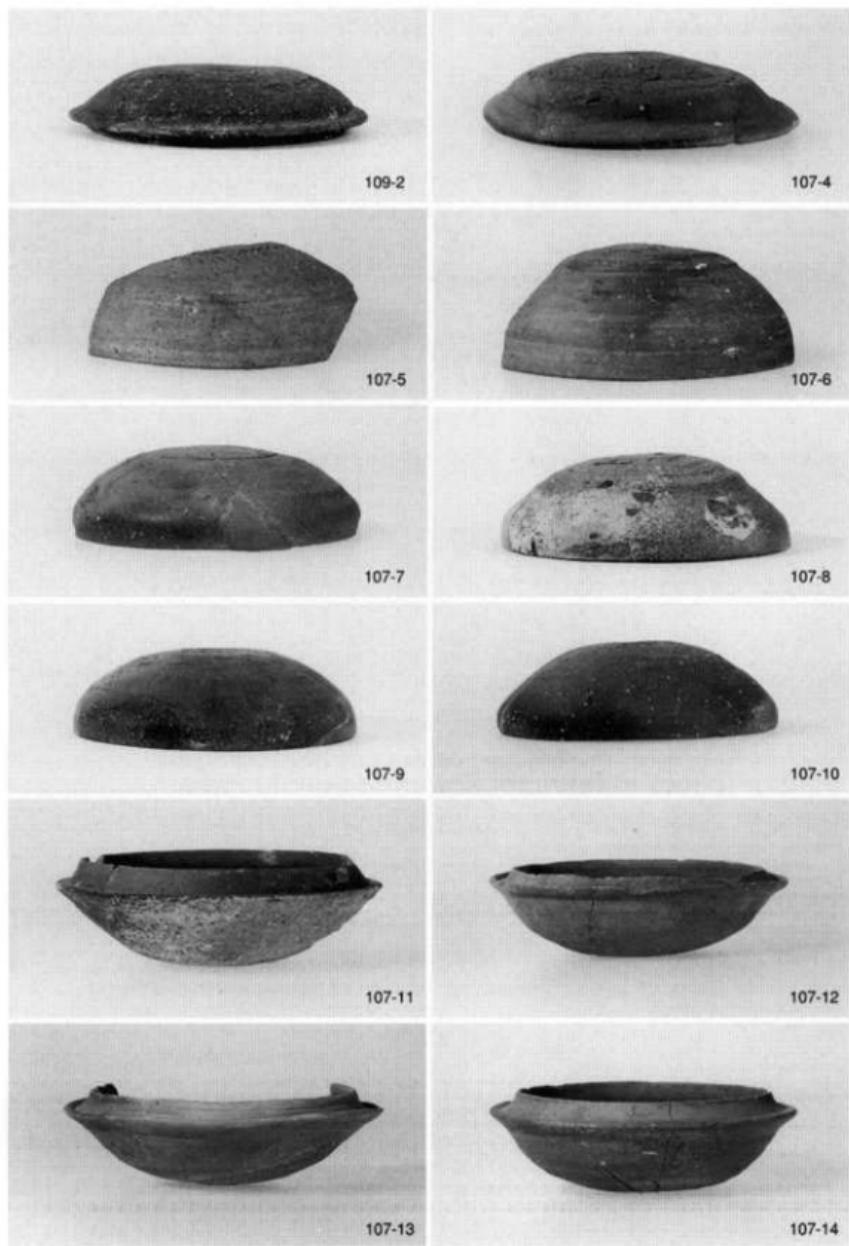


107-50



107-51

105～107号住居跡出土土器



107号住居跡出土土器①



107号住居跡出土土器②



108-1



108-3



108-4



109-1



110-1



110-2



110-3



112-1



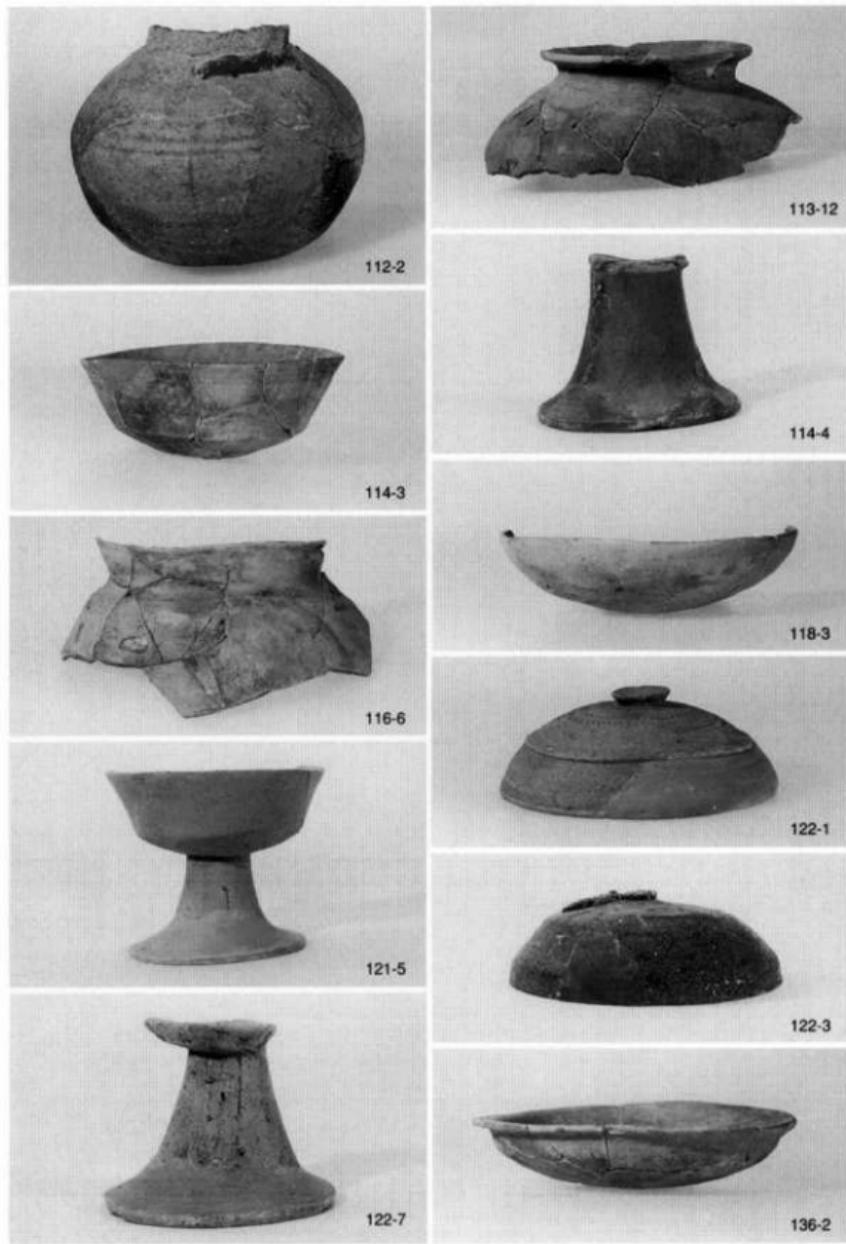
110-4



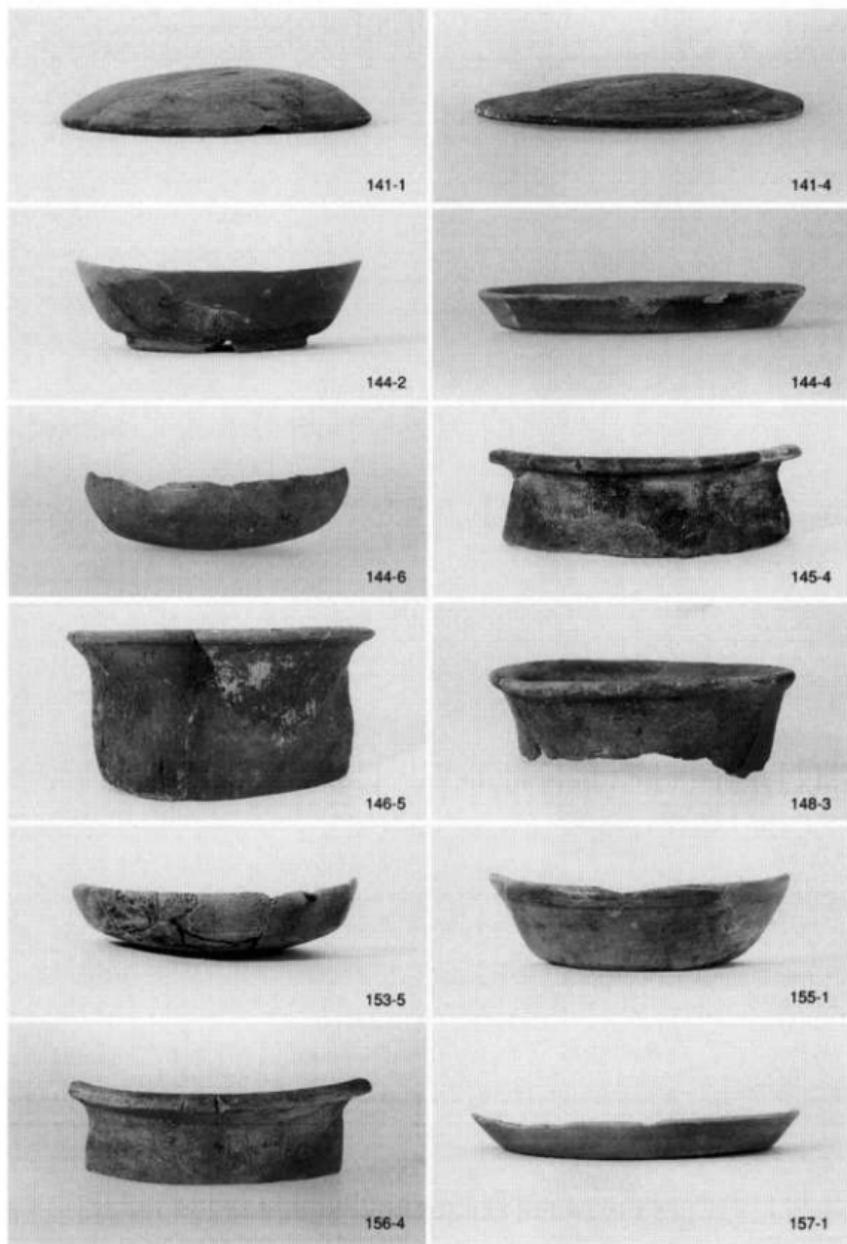
113-1



113-9



112~114・116・118・121・122・136号住居跡出土土器



141・144~146・148・153・155~157号住居跡出土土器



158・160・166・167・170・175・176号住居跡出土土器



177-3



180-3



194-3



194-1



194



195-5



196-3



198-1



199-4



199-3



199-6



201-1



202-5



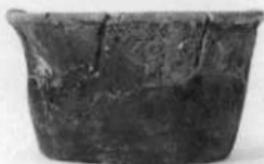
202-3



205-1



204-1



205-3



207-3



210-2



207-4



212-9



207-5



215-4

215-2



104-5



104-8



105-1



105-3



138-1



107-1



138



138-8



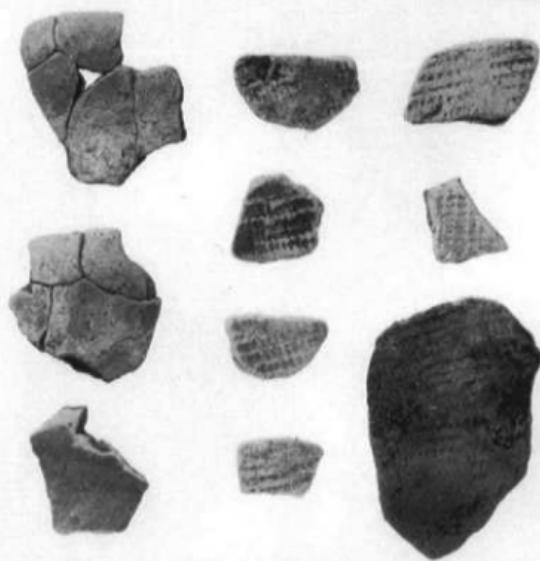
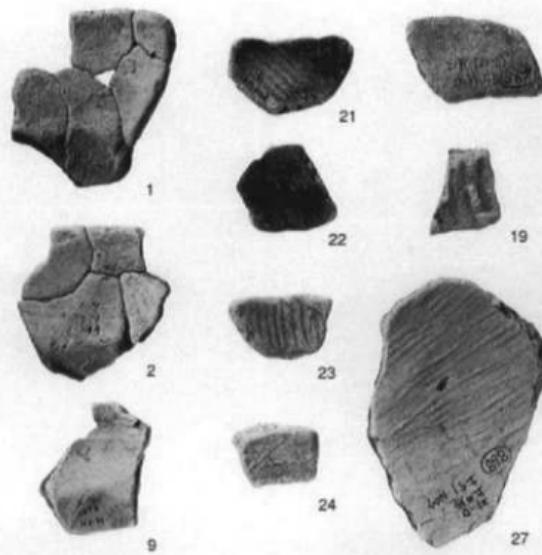
138-9



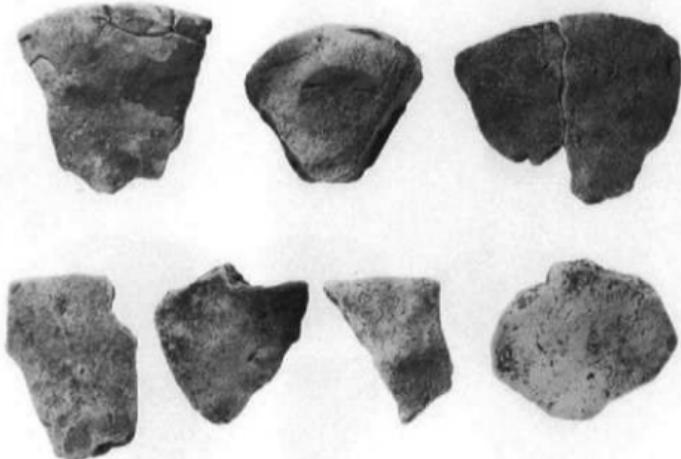
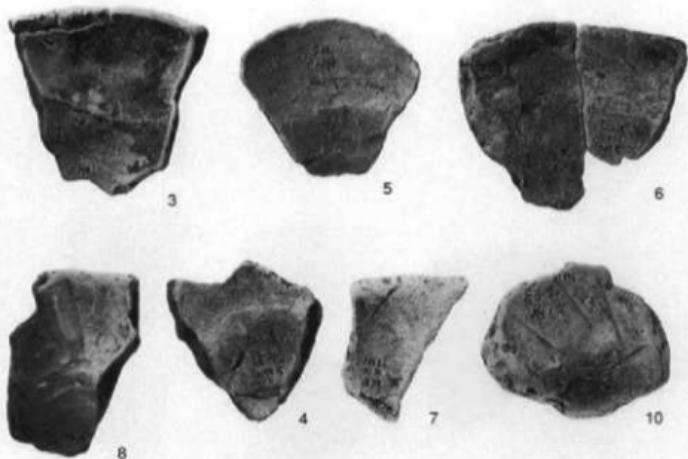
138-11



139 - 142号土塘出土土器



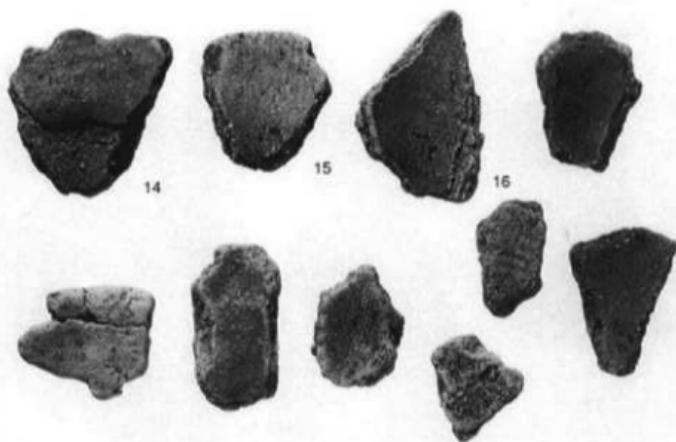
烧塙土器①(上一内面, 下一外面)



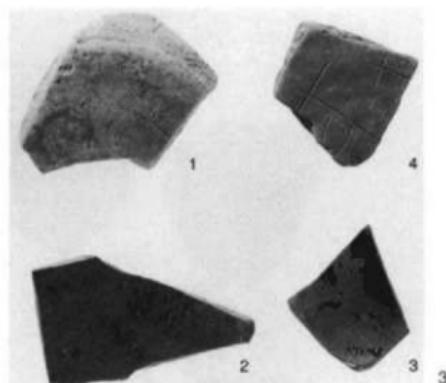
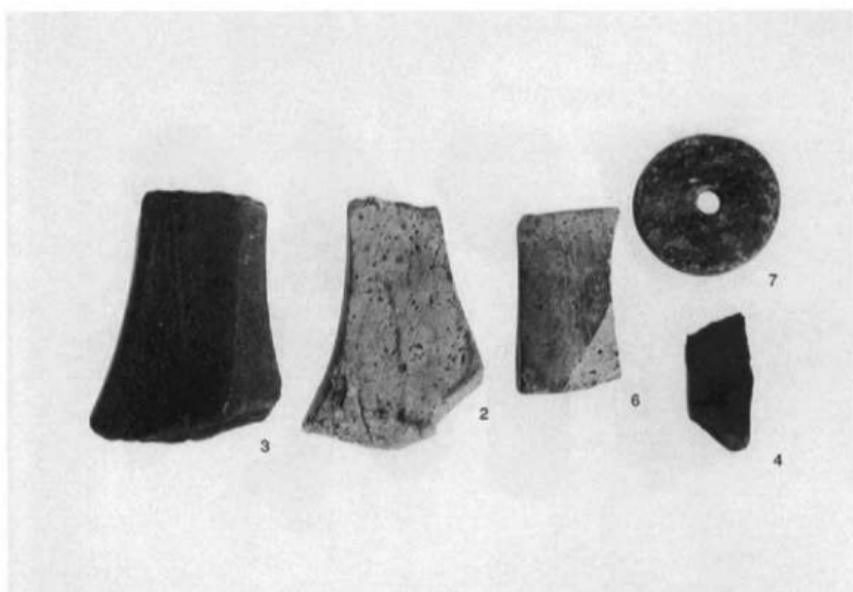
焼塙土器②（上一内面，下一外面）



焼塙土器③ (上一内面, 下一外面)



烧塙土器④（上—内面，下一外面）



1 砥石
2 砥石
3 その他の出土土器



1

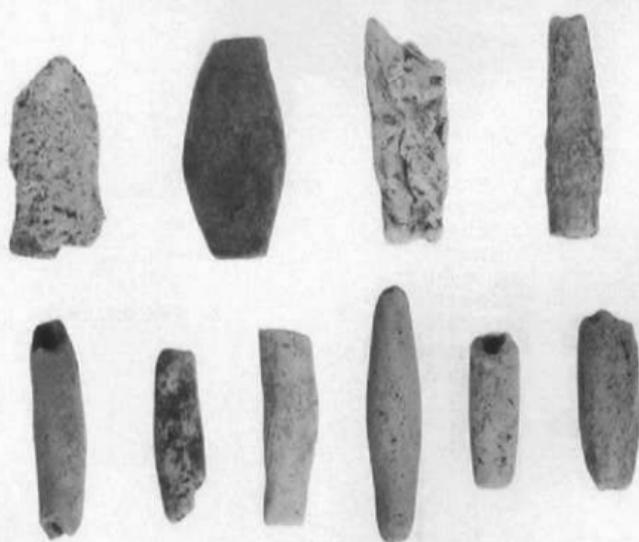
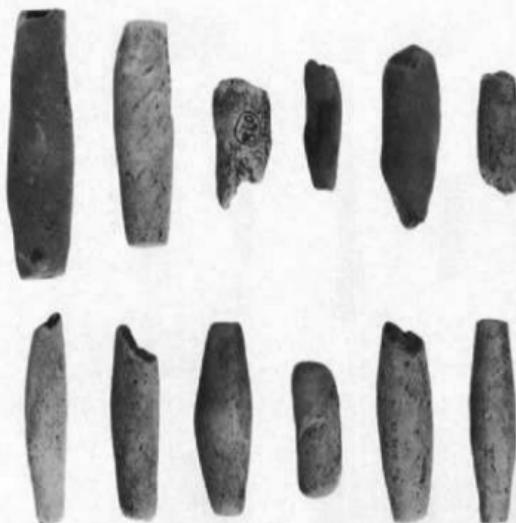


2



3

1~3 住居跡他出土鉄器



1・2 住居跡他出土土鐘

編集後記

「丁度10年が経過した」。もう、そんなになるかな……。と思いつつ報告書作成に取りかかった。

発掘調査は秋から年を越して、桃の花が咲く弥生半ばに終わったものの、遺構の多さに次の實務に心を痛める思いがした。約5ヶ月間に渡る調査は気ぜわしく、正月明けもそぞろに現地に足を運び、「一穴・一片」の遺構と土器に手足が動いた。皆、各持ち場に責任を持ち、頑なに衝突することしばしばであったが、それも古のロマンに対する情熱の現れと思える。寒も和らぎ始めた終盤には、作業員総数96名という前代未聞の調査体制を経験した。

そうして今、がむしゃらに、詳細にまた柔軟性をもって作成してきた報告書締め切り日を迎えたつある。今年度から提出が早くなり、したがって年度当初から神経を尖らせた整理・作成となつた。時を経て汚れた顔をした土器は白く化粧され、そしてラッシュをあびるまで、私たちの努力が続く。その過程の中で互いに目を細めて微笑を浮かべる様は、相手を労う心か。しかし、口は一文字に結ぶことが多く、それぞれがそれぞれの思いを持って事に当たったようだ。これ程までに「味」を気にしたことは未だなく、暮れから年越してまで作成は深夜に及んだ。振り返れば、私たちは発掘調査も報告書作成も「時の無い年」を越したことになる。

報告書作成に共に歩んだ方々に心から謝意を申し上げたい。 1995年3月（高橋・小田）

「報告書作成にあたって」

塙足：線を引き始めて約10年になります。今、私の線は“まっすぐ”です。今の気持ちを大切にして、次からはカーブの線を描きたいと思っています。

高瀬：報告書を作る緊張感は、私にとって新たなチャレンジであり、次のステップでもある。

渡辺：調査から報告書作成までお手伝い出来ることは光栄に思っていますが、毎年の事ながら、最終段階の忙しさはどうにかならぬものかと。單目に取り組んでいるのですが。

大野：「まだですか、まだですか！」O氏の歎息（？）の声に追いつかれて、次報告書作成時も今日のように粉雪降る日だったようだ。月日は流れただのうに一進一退の私。あ～當景色を楽しむこともなく今日もO氏の声がする。

近藤：今回の報告書作成では、皆様に助けていただいてどうにか終わることができました。“皆様の暖かい思いやりどうもありがとうございました！”

宮田：初めて実測図がのって大変光榮です。“自分の図がのる喜びと複雑さ”……御指導してくださいました皆様ありがとうございました。

西田：私にとって2度目の報告書作りで、大がめへの初めての挑戦。古代の生活に触れる事ができ、又この仕事を通して子供達に歴史のすばらしきを伝えていくたらと思います。

岡：私にとって初めての報告書作りで、何もわからないままに実測をさせていただきました。ご指導してくださいました皆様には大変お世話になりました。

秋吉：初めての報告書作成に携われた事で、考古学に対する熱意・努力そして報告書の完成の喜び等、古代の生活様式・文化等を知りえたことは私にとって貴重な経験であった。

報告書抄録

ふりがな	うえのはるいせき							
書名	上の原遺跡							
圖書名								
巻次								
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第33集							
編著者名	高橋 章・小田和利							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL.092-651-1111							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	期間	面積	原因	
上の原遺跡	朝倉郡朝倉町大字大庭 字上の原	404420	570378	33° 23'	130° 41' 30"	1985 10/14 ↓ 1986 3/19	12,300 m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上の原遺跡	集落	弥生	竪穴住居跡73 掘立柱建物6 貯蔵穴140 竪穴63 土壙93	弥生土器 石斧・石包丁 砥石・石劍 鉄器類 投弾・纺錐車				
	墓地	弥生	壺棺墓27 土壙墓11 木棺墓2					
	集落	古墳	竪穴住居跡36 掘立柱建物8 土壙10 溝3	須恵器 土師器 鉄器類 砥石				
	集落	奈良	竪穴住居跡76 掘立柱建物20 土壙16	須恵器 土師器 砥石 鉄器類 土製品				

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 H6	登録番号 3

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 — 33 —

平成 7 年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畠田町1-1

**九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告書**

—33—

付 図

1 9 9 5

福岡県教育委員会

